

横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合会議録	
日 時	令和5年8月28日（月）14時00分～15時30分
開催場所	ホテルメルパルク横浜 エトワール／シェリー
出席者 ※敬称略	石渡 卓 （神奈川県立大学理事長） 今村 俊夫 （株式会社東急総合研究所代表取締役会長） 内田 裕子 （経済ジャーナリスト、イノベディア代表） 河野 真理子 （早稲田大学法学学術院教授） 北山 恒 （建築家、横浜国立大学名誉教授） 隈 研吾 （建築家、東京大学特別教授・名誉教授） ※ウェブ参加 幸田 雅治 （神奈川県立大学法学部教授） ※ウェブ参加 寺島 実郎 （一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長） 平尾 光司 （専修大学社会科学研究所、昭和女子大学名誉理事） 涌井 史郎 （東京都市大学特別教授）
欠席者 ※敬称略	デービッド アトキンソン （株式会社小西美術工藝社代表取締役社長） 村木 美貴 （千葉大学大学院工学研究院教授）
開催形態	公開（傍聴者20人／記者17人）
次第	1 市長挨拶 2 学識者会合委員長の選任 3 (1) 山下ふ頭の概要 (2) 意見交換 (3) 地域関係団体の参加について (4) その他
決定事項	次第2 委員長は寺島委員に決定した。
議 事	別紙
資 料	当日配布資料 (1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 委員一覧 (2) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 座席表 (3) 山下ふ頭の概要 (4) 市民や事業者の皆様からいただいたご意見・ご提案のまとめ

横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 議事**【事務局】**

定刻になりましたので、これより横浜市山下ふ頭再開発検討委員会学識者会合を開催します。私は、横浜市港湾局山下ふ頭再開発調整課長の荻原と申します。どうぞよろしくお願いたします。学識者会合の委員長が選任されるまでの間、進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

お手元に、資料として、次第、名簿、座席表、山下ふ頭の概要、参考資料の市民・事業者のご意見等のまとめ、グリーンエキスポ 2027 のパンフレットを配布しております。ご確認ください。

委員の皆様のご紹介については、名簿及び座席表をお手元に配布しておりますので、それに代えさせていただきます。なお、本日は隈委員、幸田委員はウェブでご参加する予定でございます。アトキンソン委員、村木委員はご欠席でございます。

それでは、学習者会合の開催にあたりまして、主催者を代表いたしまして、横浜市長の山中よりご挨拶申し上げます。よろしくお願いたします。

【山中市長】

皆様こんにちは。横浜市長の山中竹春です。

本日はお忙しいところ山下ふ頭再開発検討委員会学識者会合に、ご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。皆様におかれましては、日頃から本市の発展にお力添えをいただき、また今回の委員もお引き受けいただきましたこと、この場を借りまして改めて御礼を申し上げます。

本日は、様々な分野でご活躍をされている学識者の皆様方にご意見を賜りたいと考えております。山下ふ頭の再開発は、横浜が活力ある都市であり続けるために大変重要なプロジェクトです。そして、このプロジェクトを進めていくにあたっては、市民の皆様のご理解が不可欠です。これが1番基本的なことであり、この山下ふ頭再開発のコンセプトのベースになるものであると考えております。

横浜市では、昨年から今年にかけて、市民の皆様からの、意見募集、意見交換会を重ねてまいりました。その中で、経済波及効果、都市ブランドの向上、将来にわたる街の持続可能性、そういった視点をはじめ、実に一万件を超えるご意見を頂戴いたしました。また、事業者の皆様からは、企業や大学等のイノベーション施設、あるいは大規模集客施設などを中心とした提案をはじめ 18 件のご提案をいただいたところであります。いただいたご意見、ご提案を踏まえまして、市民の皆様からご理解をいただける、そして事業性のある再開発の実現を目指していきたいと考えております。

委員の皆様方におかれましては、山下ふ頭の優れた立地、そして広大な開発空間を生かした、新しい時代の象徴となるまちづくりに向けて、それぞれのお立場から、ぜひご議論をお願いたしたく存じます。

山下ふ頭から、横浜経済をけん引し、都市ブランドを高めるまちづくりを進めていきたい

と考えております。そして、市民の皆様の横浜に暮らす幸せ、そして世界から選ばれる町としての発展、そういったものにつなげられるよう、力を尽くしてまいります。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

【事務局】

ありがとうございました。恐れ入りますが市長は公務のため、ここで退席いたします。

会議に先立ちまして、現場をご視察されました委員の皆様につきましては、ありがとうございました。本日の会議は、学識者の方々に対し、山下ふ頭の現状等をご説明いたします。主に、埠頭の歴史、周辺地区の状況等を紹介し、意見交換等を行っていただきます。また、地域関係団体の参加についてご意見をいただきたいと考えております。

本日は、公開での開催となっており、会議の様子及び説明資料についてはインターネット中継により配信されます。また、会議室内に傍聴席と記者席を設けておりますので、ご承知おきください。その他、会議の様様を記録するため、事務局側で写真を撮らせていただきますので、あらかじめご了承ください。

続きまして、学識者会合の委員長の選任に移ります。条例により、委員長は委員の互選により選出することになっております。どなたかご意見ございますでしょうか。

特にご意見がないようですので、事務局の方からご提案させていただいてよろしいでしょうか。事務局としましては、実績や経験から寺島委員にお願いしてはどうかと考えますが、いかがでございましょうか。

【各委員】

異議なし

【事務局】

ありがとうございます。寺島委員に委員長就任をお願いいたします。それでは、寺島委員長、委員長席の方へお移りください。

ここで報道関係の方に、撮影にあたり、場所を広げて開放しますので撮影できるエリアにご移動をお願いいたします。

それでは、委員長、一言ご挨拶をお願いいたします。

【寺島委員長】

どうも、寺島でございます。この委員長の就任にあたって、私の方から3点ほど、自身のこの委員会に対する思いと、方針といいますか、方向感をお話しさせていただきます。

1点目ですが、今日は有識者の会合となっておりますけど、我々の基本的な役割は付加価値をつけることです。どういう意味かという、この会合自体が意思決定機関ではありません。横浜及び山下ふ頭の将来を、責任を持って決めるのは、行政のラインであり、議会であり、市民そのものです。我々はその選択肢や議論の厚みをつけるために、付加価値

をつけたりするための一定の役割が果たせればというのが、私のこの委員会に対する思いです。

2点目ですが、これは事務局に対する私の要望と言いますか、市民の皆さんが山下ふ頭及び横浜の将来を考える上で、知っておかなければいけない基本的なファクト、ファクトシートと言いますか、事実関係をしっかりと確認することが議論の中身を厚くする上で重要だと思っています。

例えば、私自身そのデータと向き合っているからですが、世界での港湾物流の中における横浜の位置付け、一体、世界の大きな経済構造の変化の中で、横浜という日本を代表する港が今どういう位置付けになっているのか。横浜港というものの中身が、この歴史の中で大きく変化してきています。かつて、日本の主力産業だった生糸の輸出港として大きく存在感を持っていた横浜が、今我々の分析では明らかに輸入港として大きな役割を果たしていると言いますか、港湾としての横浜の意味というものをもっと深く我々自身も認識を深める必要があります。

さらに、後背地産業構造という言葉がありますが、私は北海道の、今度ラピダス株式会社が進出していった苫小牧東の工業団地の経営諮問委員会の委員長をやっているものから、強く思うのですが、この横浜という港が背負っている産業構造、つまり神奈川を睨み、一体どういう産業構造が、横浜という港及び羽田にも繋がることになるのですが、どういう産業構造にしていかなければいけないのか、問題意識も含めて視界に入れておく必要があります。

それから、当然のことながら人口動態と人流です。インバウンドの動き等も含めて、一体どういう形で横浜を活性化しようとしているのかということについて、やはりファクトシートがある、しっかりと踏み固める。それが2点目です。

それから3点目は、固定観念に囚われずに、多様な選択肢を視界に入れてみよう、戦略的な視点で。私自身、世界のベイエリアと言われている所を色々と見てきています。つい先月も、サンフランシスコベイエリアをシリコンバレーとともに見てきたところですが、例えば、非常に気になるのが、シンガポールモデルという言い方はありますが、シンガポールがどうしてあれだけの活力を持つ地域になったのかということなどは、しっかり理解する必要があります。視界に入れるべき世界の様々なプロジェクト、先行している事例等を、しっかり、やはり我々自身学びながら、それがこの有識者会議の皆さんが持っておられる情報のネットワークとか体験を吸収したい思いです。

この山下ふ頭が、IR、インテグレートドリゾートの1つの基点として検討されていた事情もよく知っています。IR＝（イコール）カジノになってしまったことが、私は非常に悲劇だったと思います。統合型リゾートというのは、高付加価値観光というものを目指す1つの切り口で、そのワンオブゼムに過ぎないカジノというところに、いきなり比重がいったしまったことが、たぶん議論が貧困になったことの大きな理由だろうと僕は思っています。そういうことで、多様な選択肢の中で、思いっきり柔らかく、21世紀を睨んで、横浜の未来のために、我々の知見の中で発言できること、方向付けられることについ

て、テーブルの上で議論してみようよということが、多分この会の非常に重要な意味だろうと僕は思っています。

そんなことで、私自身としてはそう思っていますが、様々なご意見があつて結構ですので、吸収しながら少しでも前に進めるための役割を果たせればということで、私の役割を果たしていきたいと思えます。以上です。

【事務局】

ありがとうございました。それでは、撮影を終了させていただきます。記者の方は報道エリアから後方の記者席に移動してください。

これより先の進行は委員長にお願いいたします。では、寺島委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

【寺島委員長】

それでは、まず何よりも第一の議事として、山下ふ頭の概要について理解を深めましょうということで、事務局の方から準備していただいている山下ふ頭についての概要の説明をお聞きしたいと思います。よろしくお願ひします。

【事務局】

山下ふ頭再開発調整担当部長の竹内と申します。着座にて失礼いたします。よろしくお願ひいたします。

では、山下ふ頭の概要について、スライドの1ページをご覧ください。本日は、目次の6項目についてご説明させていただきます。

2ページをご覧ください。まず、横浜港の歴史です。左図は1865年頃です。横浜港は1859年に開港しましたが、この頃はまだ船が波止場に着岸できなかつたため、沖に停泊し、はしけによる荷役が行われていました。右図は1920年頃です。濃い茶色の部分が埋め立てられた場所になります。この頃には船が棧橋や岸壁に直接つけて荷役ができるようになりました。現在の大さん橋はイギリス人技師のパーマーによって作られ、現在の津波、高潮の防護水準にも対応しております。鉄道も整備され、工業地帯としての原型が作られていきました。

3ページをご覧ください。左図は1945年ごろです。瑞穂ふ頭などが埋め立てられています。第2次世界大戦後、1953年に米軍により、瑞穂ふ頭は接収されています。その代替として1953年に山下ふ頭の埋め立てが開始され、右図のとおり、1963年に山下ふ頭の埋め立てが完了しました。

4ページをご覧ください。山下ふ頭の歴史です。左図、円グラフで見ていただけるように、1964年頃は横浜港を支える主力ふ頭として重要な役割を果たしてきました。その後、コンテナ船による物流が主流になりましたが、山下ふ頭はコンテナ船には対応していなかつたため、本牧、大黒ふ頭等のコンテナ埠頭が建設されていき、右図棒グラフ・折れ線グラフにも示すとおり、次第に山下ふ頭の取扱貨物量、着岸隻数は減少していきました。そ

のような中、1997年の港湾計画改定により、機能転換していくエリアとして決定されました。

5ページをご覧ください。こちらは当時の写真です。

6ページをご覧ください。次に、山下ふ頭の再開発検討の経緯を紹介します。2014年に港湾計画において、新たなにぎわい拠点として都市的な土地利用に転換することとしました。2014年から15年にかけて、港湾計画改定及び横浜市都心臨海部再生マスタープランを策定し、都心臨海部の一体的なまちづくりを推進しています。2019年にはIR誘致を表明しましたが、2021年に撤回しました。2021年から22年にかけて、新たな事業計画を策定するべく、市民の皆様からの意見募集、意見交換会や事業者の皆様からの提案をいただきました。結果を取りまとめた概要につきましては、お手元に配布させていただきました。こちらにつきましては、改めて次回ご説明させていただきます。

7ページをご覧ください。山下ふ頭の現状についてです。山下ふ頭は約47ヘクタールという広大な開発空間で、街の中にそのエリアを移動させて当てはめると、中華街から山下公園周辺までが入る広さとなっています。三方を海で囲まれた立地が特徴です。元町・中華街駅や首都高速道路の出入口からも近いなど、優れた立地と広大な開発空間を生かしたまちづくりが求められています。

8ページをご覧ください。再開発に向けて倉庫などが移転したエリアは、動く実物大ガンダムを展示する施設や交通広場とバス待合所を開設するなど、暫定的な利用がされています。

9ページをご覧ください。ここからは、周辺地区における様々な施設についてご説明いたします。まずは、スタジアム・アリーナ施設です。横浜スタジアムに加えて、この9月に約2万人を収容できるKアリーナ横浜が開業。来年4月には新たに約5,000人を収容できる横浜BUNTAIが関内駅周辺地区に開業する予定です。

10ページをご覧ください。次に、大学です。2021年4月に神奈川大学みなとみらいキャンパスが、本年4月に関東学院大学の新たなキャンパスが関内に誕生しました。

11ページをご覧ください。次に、みなとみらい21地区に多く集積する研究開発機能を設置している企業です。

12ページをご覧ください。企業ミュージアムです。

13ページをご覧ください。国際展示場です。2020年にパシフィコ横浜ノースが開業しました。

14ページをご覧ください。テーマパーク等です。

15ページをご覧ください。公園緑地です。海沿いや関内に緑の軸線が形成されています。

16ページをご覧ください。商業施設です。

17ページをご覧ください。文化芸術施設です。

18ページをご覧ください。次に、ホテルです。都心臨海部にはさまざまな施設が集積されています。

19 ページをご覧ください、続いて、既往計画についてです。ここでは、山下ふ頭周辺地区も含めた都心臨海部の将来計画である横浜市都心臨海部再生マスタープランについて説明します。2015年に策定された横浜市都心臨海部再生マスタープランでは、「みなと交流軸」の形成や「地区の結節点」における連携強化により、都心臨海部5地区の一体的なまちづくりを推進することとされています。都心臨海部の将来像の達成に向けて、山下ふ頭は「地区の結節点」のひとつとしての役割が期待されています。

20 ページをご覧ください。最後に、山下ふ頭や横浜市の現状と特徴、取り巻く環境をご説明いたします。まず、現状と特徴としまして、立地特性ですが、三方海に囲まれた優れた立地特性や大規模な開発用地を有しておりますが、山下ふ頭へのアクセスが1か所のため、課題として認識しています。次に歴史・文化です。豊かな水域と港の景観、開港時からの国際性や歴史・文化が集積していることなどが魅力の一つです。次に産業・人材です。オープンイノベーションの進展や学術研究開発機関、人材の集積が進んでいることや、昼夜間人口比率が低いなどといった特徴が挙げられます。次に観光ですが、宿泊客に比べ、日帰り客の割合が高いという特徴があります。次に、取り巻く環境としましては、社会・経済ですが、アジアを中心とした人口・経済状況の変化から、インバウンド需要の増加が見込まれます。しかし、人口動態の変化や、それに伴う税収減少、担い手不足などの課題が挙げられます。

そのような中、都市間競争の対応も求められています。お手元にパンフレットを配布していますが、一都三県で初めての万博、グリーンエキスポ2027の開催や上瀬谷などの大規模開発の動きも視野に入れながら、開発の検討を進める必要があります。また、交通として、広域アクセスの改善環境、技術として、GX、DXの加速といった社会環境の変化も踏まえるとともに、気候変動に伴う環境問題や自然災害についても対応していく必要があります。以上で資料の説明を終わります。ありがとうございます。

【寺島委員長】

どうもありがとうございました。山下ふ頭についてのコンパクトな説明をしていただいたところですが、質問のある方、何かこの点、もう少し聞きたいということがあれば、挙手いただいでご発言いただけますか。いかがでしょうか。

山下ふ頭についての説明、大概のものはこの周りに1つの目玉があるということで、結節点という言葉が1つのキーワードだと思って、受け止めていました。大きくいって、外から引きつける、要するにインバウンドを含むツーリズムに対する問題意識と、ファンダメンタルズというか、この地域を市民や住民により、意味のある形でもって活用するという問題意識が、両輪で必要だと思い聞いていましたが、質問ある方、いかがでしょうか。

なければ、このご説明をベースにして、意見交換という中で、話を深めていただきたいと思います。私はよく、審議会や有識者会議に色々出てきて、うつろな会議に終わらせないためには、総合資源エネルギー調査会や文科省の中央教育審議会にずっと出てきていますが、「1分半で話してください」というような話で、委員の話が終わるとというのが、大変もったいないと思います。私は次回から、委員の方に、少なくとも10分くらいご自身の山

下ふ頭を中心としたこのプロジェクトに関するご意見を、お話を伺って、じっくり聞ききかけにしたいというように思っています。次回からは、各委員に、責任先頭制のようなものですね、当番として、10分ずつぐらいのプレゼンテーションを準備していただいて、事務局の方から順次、順番を決めていただいて、話を聞く方向でいきたいと思えます。まとまった話は、そこで話としてお聞きするとして、今日の段階で皆さんに一言ずつでも、ご意見というかお話を伺いたいと思えます。涌井さんからお願いしますか。何か今日の段階で俺はこう思うよというような、冒頭の話で結構ですので。

【涌井委員】

分かりました。ありがとうございます。

今このところの説明を伺っている中で、様々な疑問が湧いてくる訳です。多分先進的な港湾区域、日本の歴史の中で先進的な港湾区域であればあるほど、実は同じ問題を抱えている可能性がある。ましてや京浜臨海部の港湾、全体にわたって、多分同じ問題を抱えていると思っています。いわば、日本の経済構造の転換や、あるいは国際的物流の転換という観点からいっても、横浜だけがこういう状況になっている訳ではなく、東京湾沿岸の、特に京浜地域の港湾が同じような状況になっている。そういう中で、それぞれの地域がそれぞれの新たな土地利用転換を図ろうとしている。したがって、単に横浜の山下ふ頭だけという観点ではなくて、今この京浜地区なり、あるいは東京湾沿岸の港湾にどのような見直しの機運が高まっているのかというところの情報をきちっと整理しておかないと、結局は、競合する、あるいは特性を持たないということになりはしないか。この点が一番気がかりな点です。

それからもうひとつ敢えて言うならば、これほど、市街地とこの港湾区域が近接している、こういう立地も実は他には見られない訳です。例えば川崎とその川崎の臨港地域、あるいはそういう意味で、ずっと眺めていっても、ようするに都市の中心市街地と港湾が近接している所がない。こういうような流れの中で、例えば先ほど委員長がおっしゃったように、世界の最先端のイノベーション、港湾イノベーションの地域で、どういう事例があるのかというあたりの資料も、ぜひご提供いただけないかと。つまり、もう少し山下ふ頭というところにだけ焦点を絞るのではなくて、全体を俯瞰してる中で、戦略的な位置付けというものに対する理解を深めていく必要があるのではないかという気がします。

たまさか平尾先生と私は今ご一緒しているんですが、寺島先生にも絡んでいただいて、川崎の臨港部についての議論も進んでいるところがございます。そういった観点からも、他との、ようするに整合性なり、あるいは競争力をつけるという意味からも、今の視点をぜひ活用していただきたいというのが、私の意見でもあり、お願いでもあります。

【寺島委員長】

平尾さん。

【平尾委員】

ありがとうございます。平尾でございます。

今の涌井委員のご発言にも関わってきますけれども、やはり山下ふ頭を考える場合に、東京湾全体の都市機能が、どういうふうに分担されていくのか、その中で横浜山下ふ頭が、どういう位置づけになっているのかという少し巨視的な視点も必要ではなかろうかと思っております。

それからもう1つは、山下ふ頭を取り巻く横浜市の資源ですね、今事務局の方からご説明いただきましたように、大変豊かな資源があって、最近発表された日本の都市の特性のランキングで横浜市は2位になっていますが、2位というのはやはり文化的な拠点、交流的な拠点というものが非常に評価されているということだと思わんですけれども、これを更に高めていくためにはどうしたらいいのかということです。具体的には明日、関東大震災の100周年ですが、そういう100周年の中で、首都圏における防災機能で横浜市あるいは山下ふ頭がどういう役割をするのかという観点が非常に大事じゃないかというふうに思っております、例えば港湾機能もそうですけども新しいドローンの基地とか、そういったことが災害・防災対策として必要になってくるだろうし、防災拠点としての機能をどういうふうに持つていくのかということが、検討する必要があると思っております。

それから3番目はイノベーション拠点という形で、みなとみらい地区にかなり企業とか大学のイノベーション拠点の立地が進んでおりますけれども、私が見ると、バラバラに、点的な存在になっていて、それがネットワーク化されていないのではないかと、クラスター化されていないのではないかと気がしましてですね、クラスター化していく仕掛け作りをどうしたらいいのか、せっかくこの山下ふ頭の47ヘクタールという土地を1つのプラットフォームにできないかという、そういう思いがございます。

それから、もう1つは今日もこの横浜駅からこっちに来るときに感じたことですが、この地域へのアクセスが、みなとみらい線と、後はバスということですがけれども、もっと、モビリティを高めるような交通システムを導入できないだろうか、しかもそれが、山下ふ頭と中華街、それからこの地域の隣接するみなとみらいも含めて、そういう交流人口の機能もインフラとして、もう少しそのモビリティというのをどう高めるか「アクセス」「モビリティ」というのがキーワードになるのではという気がしております。

その他色々ありますけれども、とりあえず、第1ラウンドとしてはこんなところでお話させていただきました。ありがとうございました。

【寺島委員長】

北山さん。

【北山委員】

敷地の見学会に、この前に行って見てきたんですけれども、マリンタワーにすごい久しぶりに登ってみると横浜のとても美しい港が見えるんですが、水面に船がほとんどない、水面があるだけで。昔シドニー行ったとき、シドニー湾ってウインドサーフィンやヨットで賑わっているんですよね。ウォーターフロントの都市であるにも関わらず、実は海は誰もアクセ

スしていない状態だなど、上から見て思います。これは 20 年前くらいに横浜のベイエリアを検討したときもそれを感じたがそれが続いている。

それと、港湾施設としては山下ふ頭の港湾施設というのは、実はもう港湾施設にはなくなって、物流のセンターになっているだけだということ、港湾という概念も少し変わってきている。それと、見ているとフランス山のあたりは非常に豊かな緑があるにも関わらず、山下ふ頭はある意味ではタブラ・ラサというか、誰も使わない更地になっている状態という無残な状態になっている気がしました。

それともう一つ見ていて、みなとみらいの辺りは昔、私が大学院のときにみなとみらい計画というのを 50 年くらい前にやったんですけども、そのときに見ていたのとはぜんぜん違ってタワーマンションがいっぱい建ってグレイッシュな 20 世紀後半型の都市風景になっていて、とても残念なみなとみらいに、期待していたものと違うみなとみらいができてきている気がします。横浜というのは都市デザイン室というところがあって、地区ごとにキャラクターが明確な都市を作っていくというのをかなりやってきました。それが横浜の街の面白さであり、街歩きの楽しみであったはずなんですけれども、次第に、割に同じような資本のスプロールが進んで、どこでも同じように短い期間で最大利益を上げるような事業開発があちこちで行われている。

今回も再開発検討委員会という、再開発を検討するのかなということですが、再開発という言葉自体がかなり 20 世紀的な言葉だと思います。おそらく我々は次の世代のために都市を考えているはずなんです。ところが、短期間で最大利益を上げるようなシステムが稼働しているために都市がどんどん食いつぶされているような状態が目前にある。だから、もしここで検討委員会で作るならば、50 年先または次の世代、または 100 年後の都市がどうなっているのかというあたりから話をしていくこと。

それともう一つは、20 世紀型の都市というのは経済開発のために資本活動として都市を作ってきましたが、それではない時代がもう始まっている。これは寺島さんがおっしゃったように人口動態としては大きい変動が始まっていますので、拡張拡大をしていくような、そういう世界ではなくて、どういうふうに着陸させるのか。定常型社会といいます、定常型の豊かな社会をどうやってデザインするのか。

それと、経済の短期的な利益のために、都市を作っていくと、効率のいい都市を作り始めると、機能分化していくんですね。多様性がどんどん無くなっていくと。そうではない、ある意味では現状では効率が悪いけれども、未来のある長期的利益のある都市をどうデザインできるのかというのを考えていくのかなと思います。そういう意味で平尾さんがおっしゃった交通インフラというのは水上交通なんかどうなんだろうと。僕もこの前ベネチアに行ってきたが、ベネチアというのは車がなくて船だけなんですけども、船に乗るとすごい時間がかかるので、本当は街の中歩いたほうが早いんですが、街の中は迷路のようになっているので、よく知っていないと街の中を歩けない。だけど、だから地域的な人がそこに集まっている。そこに文化がある。不便だからこそ文化が高くなるような、そんなまちづくりもある。そういうことを考えながら、この委員会に参加できればと思っています。

【寺島委員長】

ありがとうございます。今日ウェブで参加していただいている、隈さんと幸田さんが最後までおられるのかどうかというのをちょっと確認できていないので、先にお二人にご発言いただくということで進めたいと思います。じゃあ、隈さん、ご発言いただけますか。

【隈委員】

中国の高速鉄道の中なので、音が途切れるかもしれませんが、まず、個人的な思い出から話しますと、私は横浜で生まれて育って、山下ふ頭はブラックボックスというか、何にもない良い場所なのに、行くことのできない不思議な場所でした。この山下ふ頭がなかった横浜もあったと思うのですが、あの場所は不思議な場所だと子供ながらに感じていたわけですが、今、寺島さんはじめ、みなさんが言う、繋がるということが今回重要だというのは実感として思っています。

山下ふ頭のせいで、本牧の方とみなとみらいが切断されてしまっているわけです。山下ふ頭の計画というのは、山下ふ頭だけをどうするかという話ではなくて、横浜をどう繋げ直すかという全体に係る話で、そのための会議だろうなと思っていまして。そういうことを色々な意味で恵まれている、面白い場所であるにもかかわらず、それを生かしきっていない、繋ぎきれていないという感じがいたします。

世界中のウォーターフロントが産業社会、工業社会的な用途から、その先の社会のための用途へと変わってきつつあるなかで、山下ふ頭が取り残されたということは色々な事情があって、取り残されていたという利点をどう生かすかというのが重要だと思っています。取り残されたということは、逆に次の100年を見据えたような計画をすることもできるわけで、そういう意味で、単に、今の先進のウォーターフロントを追いかけるのは全然ダメで、逆に取り残されたことでトップランナーになれる可能性を持っているなと思っています。

色々なアイデアがあって、色々な議論ができると思うのですが、例えば、ニューヨークのセントラルパークは19世紀半ばにあのような形で大きな緑として計画されたことによって、その後の、1世紀半、2世紀くらい経つわけですが、200年間にわたってニューヨークという場所にそのエネルギーを送り続けたみたいなことが、もしかしたら山下ふ頭でできるかもしれないということも夢見て、そういうような夢のあることが横浜でできたらいい。要するに世界のウォーターフロントに迫っていくという意識ではなくて、先に行く夢のような話ができればいいなと思っています。

僕自身、世界のウォーターフロントでいくつかの場所、釜山、スコットランド、シンガポールの計画に携わっているのですが、やっぱり、先進のウォーターフロントは既に拘束がたくさんあって、その拘束の縛りのなかでやらなくてはならず、凄くある意味大変なのですが、この山下ふ頭はある意味で自由なので、その自由を生かしてほしい。そこが今回の計画で非常にわくわくするような点だと感じています。以上です。

【寺島委員長】

ありがとうございました。それじゃあ幸田さん、お願いします。

【幸田委員】

どうも、ありがとうございます。

私自身、今先ほどお話がございましたように、結節点ということと、それからやはり 47ヘクタールという広大な土地が残されている、大変市民にとっても大変貴重な場所だということで、横浜市民の思いも大変強い、自分たちにとって宝のような場所だ、というような声もよく聞くところであります。

そういう意味では、どういう機能を重視していくのか、どういう計画にしていくのか、両方繋がっていくかと思うんですけど、それを是非、市民とともにですね、煮詰めていく。そういうことが是非この委員会、その後の事業計画の策定に向けて取り組むことが、非常に重要ではないかなと。

地域全体、地域というのはかなり、先ほどからお話がありますように、ある意味広いエリアも含めて考える必要があるかと思えますけれども、それとやはり横浜市民の為になる計画ということにしていく必要があるんじゃないかなと思えます。そういう意味では、周辺に公園、山下公園もあるんですけども、公園などを含む公共空間をどの程度、どのように確保していくのかということも、ぜひ議論していただきたいなと思っているところです。

それから、2点目としては、住民自治、市民自治という観点から、市の資料では、答申後に市が事業計画案を策定し、改めて市民意見募集、意見交換を実施したうえで事業計画を策定するとなっている訳で、これは適切な手順であると思っておりますけれども、答申後のそういった手順を含めて、委員会でどのような手順を進めていったらいいのか、ということもぜひ答申に盛り込んで欲しいと思えます。計画内容というハード面だけではなくて、事業者の募集の方法などのソフト面を含めても検討してはどうかと思っているところであります。

やはりですね、こういった事業計画、アメリカ等では、都市計画というのは必ず複数案示すというふうな、日本では一案しか示さなくて、それを行政が説得するみたいなことが各地で行われている訳ですけども、実際に市民が適切に判断するためには、選択肢は1つでは、人間というのは1つではそれが適切かどうか判断することができない、と言われている訳ですね。2つ以上のまともな選択肢があつてこそ、きちんと市民は考えることができる。十分差違のある選択肢を複数案以上出して、それを市民が比較した上で、市民が意見を出して、それを集約して、計画につながっていく。そういうふうには是非していただきたいと思っております。

やはり、情報公開、それから応答性、透析性というかですね、市民の疑問にもきちんと応答することが果たされる必要があると思えます。IRの誘致では、非常にこの面では不透明であったし、市民の疑問への応答性は欠如していたと考えているところです。

最後に、経済効果・財政効果について、やはり地域への経済効果については、雇用面はもちろんですけども、雇用以外の面でも、できるだけ経済効果が域外には流出しないで、地場の産業にも利益が及ぶようにすることも重要ではないかと思えます。また、こういった面の分析についても、しっかりとエビデンスに基づいて、分析をされることを、ぜひ期待したいと思います。

後は、財政削減については、財政削減を優先して、この本件についていうと、市民の利便性や市民の為の開発という点がおろそかになることはあってはならないと思っています。市が多額の予算をかけて整備することはもちろん避けるべきですが、だからといって、財政削減が目的の最初に来るとするのは本末転倒だと思っています。

港湾については、私自身もヨーロッパのハンブルグ、ハンブルグはヨーロッパでも若者の住みたい街ナンバーワンというふうに何回もなっているところですけど、あるいはマルセイユなども視察をさせていただいたことがあります。そういう意味で、将来に向けて、本当にこの開発が、先を見越した、そういう日本の中でも非常に素晴らしい開発計画になるように、いろんな、様々な機能については先ほどから有識者の方々からご発言がありましたけれども、そういった機能を十分、しっかりと踏まえて、専門の方が多く揃っておられますので、議論ができればなと思っていますところであります。簡単ですが以上とさせていただきます。

【寺島委員長】

はい、ありがとうございました。では、河野委員。

【河野委員】

まず、今日視察をさせていただきまして、あれだけの広い場所がすぐ港の傍にあるということ、これを本当に生かせるような計画を考えなければいけないということ、しみじみ感じた次第でございます。

特に先ほど伺いましたら、東日本大震災の時にもあまり液状化ということもなかったと、それだけの強固な地盤があって、それだけの広さがあるということ、これは何よりも大きな資産であって、それをいかに効率的に意味のある利用方法をするか、ということ考えなければいけないというふうに、まずは今日見せていただいて、しみじみ感じました。

その上で、今色々な方々のご意見を伺っておりまして、そもそもこの場所をどういう目的で利用するのかというときに、港湾の利用の仕方というときに、港湾本来の使い方である、例えば横浜港あるいは東京港の東京湾全体の港の国際競争力を、どういうふうに付けるかということを考える一環として捉えるということも必要でしょうし、でも例えばIRとか観光ということからいけば、いわゆる賑わい空間としての港の利用という利用方法もありうるのかな、と思いました。

ただ、今年に入りまして、例えば戦略コンテナ港湾の利用の会議に出ておりましたけれども、少なくとも日本にこれから先、将来どれだけ基幹航路の船舶を入れることができるかということを見ると、やはりこれだけのポテンシャルがある土地をですね、横浜港あるいは東京湾全体として見たときの港湾の魅力、それから国際競争力を付けるための場所として使うという発想はあっても良いのではないかというふうを感じる次第です。

それからもう一つは、同じ時期に検討会ございましたけれども、港湾のCNP（カーボンニュートラルポート）ですね。CNPを考えると、CNPの実現のためにも、実はこれは色々な論点がありますけれども、場所が必要な計画がほとんどですので、そうすると横浜港がどれだけCNPとしての魅力を世界に発信できるか、という場所としても使う可能性があ

るのではないかと、というふう感じた次第です。

それからもう一つ、これは私のかかなり個人的な感想でございますけれども。実は私、横浜港でベイブリッジから横浜港に船で帰ってくる時の景色がとても好きなんです。特にみなとみらいの近未来的な景色と、それから遠くに見える富士山の景色がとても美しいと思っ
ていまして、そうすると大さん橋に船を、特に観光向けのクルーズ船とかをつけるとき、それから横浜港の湾の中を周遊する船舶から見たときでもそうかもしれませんけど、みなとみ
らいの景色が少なくとも横浜港、大さん橋に入ってくる時ですと、右側にみなとみらいの
景色が見えて、左側に今この山下ふ頭がある訳で、ここの景色のバランスがいかにとれるか
とか、それからみなとみらいとの、どういうデザインでその美しさを更に磨くかということ
も考えても良いのだろうと考えた次第です。

ですので、少なくとも今日の時点で私が申し上げられるとすれば、横浜港あるいは東京湾
全体の港の国際競争力を付けるための魅力を持たせるために土地を使うこと、それからグリー
ンイノベーションとか、それからCNPの強化のために場所を使うこと、そして横浜港全
体として、いかに美しい景色を使えるようなデザインにするか、この3つを考えていただき
たいと思いますし、そういう意味では、やはり港本来の機能としての国際競争力を付けるこ
とと、それから市民の方々がいかにアクセスができる、楽しい空間にするか、この2つの側
面も、ぜひ検討していただければと思います。以上です。

【寺島委員長】

はい、ありがとうございました。内田さん。

【内田委員】

内田です。よろしくお願ひいたします。

私は、3年前に「横浜イノベーション」という単行本を書いて、その時に、横浜をあらゆる
視点から取材をさせていただいたものです。そのようなところからのコメントをさせてい
ただきたいと思っています。

今、河野先生が言ったように、私、今日出張先、羽田空港から高速のバスに乗ってきたん
ですが、ベイブリッジから眺める横浜の姿、みなとみらいの景色、都心臨海部ですね。本当
に素晴らしいな、としみじみ感じてきたばかりです。特に山下ふ頭を意識して見てきました
が、こんなにも目立つ場所にあるんだな、というのは改めて実感しまして、ここは本当に羽
田空港から入ってくる人たちにとってみたら、入口そのものだと思ひまして、かなり景観で
あるとか、そういうものも作り方によっては大変素晴らしいものになるなと思ひましたし、
ならなければいけないと思ひたばかりです。

そういったことも含めて、山下ふ頭は横浜市の未来を考えたときに、とても重要な場所に
なる。市民の方が思っている以上に、山下ふ頭の持っている可能性というのは、とても大き
いものであると私は感じておひまして。ですので、先ほど寺島先生が言ったように過去の議
論で、山下ふ頭がカジノという議論になってしまったのは悲劇だったというお言葉を使われ
ましたけれども、まさに私は同意見でして、議論が貧困になってしまったというところ、I

R = (イコール) カジノではなく、色んな可能性があった訳で、そうした誤解やインフォメーション不足であったとか、そういったことが何となく市民の意見になってしまったということがですね、本当にそれが市民の意見だったかということは分かりませんが、残念だったというのが率直な私の感想です。

また、ファクトが大事であるという寺島先生の意見も重要な観点であると思ひまして、どうしても山下ふ頭の議論になると、いろいろな方がいろいろな意見を持ち、どうしても各それぞれがポジショントークになりがちだな、というのは客観的に引いた目線で私は感じておりました。

なので、やはりその中で、ファクト、大義、サステナビリティ、今は何を語るにも持続可能であるかどうかということが重要になっていきますので、そうした観点から議論を積み上げていくというのも非常に大事になってくるであろうと思ひました。

例えば、横浜市の産業構造をどうするのか、ということですよ。どういう街にしていくのか、どういう市にしていくのか、ビジョンがすごく大事で、例えば、横浜市のGDPや、この先の横浜市の財政は厳しくなっていくという予想というのはあるわけです。そういった予想の中で、この山下ふ頭という重要な都心臨海部のランドマークになる、ここが横浜経済をいかに生み出して、動かし、そして市民の生活を維持していくために、どのような場所にしていくのか、ということ。

後は、短的な経済活動効果だけでなく、30年後50年後という長い視野を見据えて、あのときの議論していた人たちは、とんでもない負の遺産を残してしまったな、と将来の人たちに言われぬように、そういった長い視野、時間軸で、考えていく必要があると思ひています。

これから世の中が、世界、インバウンドというもの、日本だけの人口動態を見ていると、どうしてもシュリンクしていくということは仕方がないです。これは分かり切っていることです。だけれども、世界を見渡すと人口は100億に向かっているわけです。そういう意味では、もう経済をどんどん盛り上げていくためには、インバウンドというところを視野に入れなければいけないと思ひています。

ですので、そういったところを呼び込むために、世界の港湾イノベーションというキーワードが先ほど出ましたけれども、それをいかに参考にしていくか。また、世界、海外に出ていくと、日本は素晴らしいよねって言われます。昔はプロダクトだったんです。トヨタすごいね、ソニーすごいね、というようなことで、皆メイドインジャパンを大喜びでもって評価してくれた。でも今は、世界に出て行って、日本すごいね、日本語上手だね、どうしたのと言ったときに、皆日本のアニメ、漫画、ゲーム、そういうクリエイションで小さいときから育って、それがまあ日本である、日本に対する憧れである。そういうソフトの部分に取って代わっているなというのが、私が海外に取材するときの印象です。ですので、そういう視点もとても大事である。

後は、先ほど申し上げた、世界の人口が100億に向かっている中で、デジタルネイティブですね。もう生まれた時に、既にもう世の中が全てデジタルである。インターネットの環境が当たり前の、何も説明書を見なくても手が勝手に動くようなデジタルネイティブ世代。こ

れがもう過半数を占めてきて、世界の人口の中のマジョリティになっていくということが分かっている訳ですね。ですので、そういったデジタルネイティブ世代がマジョリティになっていく、そういったインバウンドをいかに、楽しませるかという近未来の価値観に耐えうる、そういう施設にもしていかなければいけないというふうに思っています。ですので、この委員会の中でも、タイミングを見て若い世代の方たちの意見を聞くような、そういうようなタイミングもあると、とてもいいのかな、と感じています。

言いたいことはいっぱいあるんですけど、今日はこんなところにおきまして、徐々にこの委員会の中で、イノベーション、経済の観点から発言をさせていただきたいと思しますので、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

【寺島委員長】

今村さん。

【今村委員】

今村でございます。私共は都市開発をグループで行っておりまして、総合的に研究するものとして意見を言いたいと思います。

山下ふ頭の再開発は2030年以降という感じであります。そのころ日本はどんな感じになっているのか、首都圏とくに東京ではどういう感じなのか、そういう中で横浜地域はどうすればいいのかという全体的な形の俯瞰的な目線がまず重要であるかなと思っております。

よく言われておりますけども、日本経済の実態は、GDP（世界全体に占める割合）においては、1994年は17.7%、2000年が14%、2022年は4.2%とかなり実は落ち込んでおります。

ご存じのとおり、総人口も2008年がピークで1億2808万人、生産年齢人口は1995年がピークでグーっと下がっています。65歳人口ですけど2030年がそのうち31.2%、2065年が38.4%という形で4割弱でずっと維持する形になっています。2053年頃には1億人を割るんじゃないかという予想もされてます。

実は、そういうところで東京はどうするのだろうという話で、今わかるなかで話をさせていただきますと、今の再開発は、2050年くらいまで大手中小含めたデベロッパーが再開発の予定があります。

また、都内にはですね、オフィスビルが結構ありまして、特に東京オリンピック、1964年あの頃に立ったビルが結構あるんです。バブル期にそのあと結構できています。一万棟くらいあるんですよ。そうするとぼちぼち建て替えの時期にかなりきていて、当然耐震基準になっていないところもありますから、そうすると都心においては建て替えるんだろうなど。地価とやっぱり、市場がまだいいですから。そういうことになってくると、やはり都心、東京六区といえますけれども、徐々にやはり人口は増えるんじゃないかと思っています。

それから、ちょっと遅れると思うんですが、リニアが2027年予定ですから、当然そのころには羽田空港も多分拡張の余地がまだあります。ですから東京においては、今言ったよう

に、人口は激減とかではなく微増じゃないかと思っています。

一方横浜におきましては、経済成長率は大体全国と同じくらいの感じで来ているんです。特にコロナの時は、実質3%程度マイナスということになっておりまして。財政状態も今は何とかなんですけども、2029年とか30年くらいになるとやはり減収が起きてきます。2065年には2022年頃と比較すると570億~710億の減収になっています。

特に法人税(R元年度)、東京においては9,700億円という多額の法人税があるんですよ。横浜市は580億円ということで一桁全く違う。人口も出生率が減少する中、18歳人口も徐々に減っているというのが、これが今の実態であります。

こうした中で、山下ふ頭の再開発をやるということになって、そのときにどういう方向感かというものをまず出して、じゃあ山下ふ頭がこんなことをやるんだよね、ということがあったら、やっぱり、特に東京に繋がるようなベイエリアから、もうちょっと山の方についてはですね、じゃあおれたちはこういうことをやろうという全体的に連鎖的なものを起こす必要があるじゃないかなと思っています。

当然横浜市だけの財政ではかなり困難ですから、民間とか東京とか、いろんな人がそこに投資を促すような、そういうような発信力も必要じゃないかと実は思っています。

それから、日本におきまして、対外直接投資というのは非常に結構低いんですよ。テレビでやっていますけど、かなり低い位置です。これを増加するには、どうしたらいいのかと。当然、企業とか学校とか病院、こういった誘致も、世界中の一流の人材とか企業を受け入れるためにはどうしたら具体的にいいのかと。こういうことをやっていかないと。どうしても人口というのはなかなか簡単にはとまりませんから、そういった必要もあるかなと実は思っています。

それから先ほど羽田空港の拡張ですけども、このエリアは私が見た上でも、日本で一番いい場所というか、最先端のメガリージョン地域であるかなと実は思っています。羽田空港から築地、それから勝鬨とか、当然千葉エリアもあります。また、こちらの方でみなとみらいとか大黒ふ頭とか当然山下ふ頭というものがあり、やはりどういう形になるにしても、リゾートなのか24時間化するのか、いろんなことがあるにしても、非常に可能性を秘めている場所であるのは間違いないです。

こういったことを踏まえて、先ほど委員の方もおっしゃっていましたが、当然我々、皆さん方のお子さんお孫さんにもつながるような、将来的にも永続的になるような再開発、さっき言った経済的な事も当然考える、それから楽しいとか色々な事があると思います。ということ踏まえて、こういった中で議論をして、発信のやり方についてもデリケートな問題があるにしても、やはり他を巻き込むようなスタイルが一番いいのではないかと考えております。

私からは以上であります。

【寺島委員長】

はい、ありがとうございました。それでは石渡さんお願いいたします。

【石渡委員】

もう皆さんから色々ご意見が出て、重複する部分もありますが、今日私は感想としてまず、先ほど、他の委員からもありましたが、今まで私たちは丘から海を見て、海が見える何とかと言って。丘から、または陸から海をみて、横浜の一面を美化してきましたし、誇りにも感じてきました。今日、洋上からではありませんでしたが、埋立地の一番突先から振り返ってみると、海の面が見えたその先に、横浜の街が見える。で、山手が見える。そして高速が走り、そしてビル街が見えて、で右側の方へ行くと横浜の駅とか東神奈川が見えると。このロケーションはおいしいロケーションだなと。とても美しい絵になるものだなというふうに感じました。

したがって、海から見た景観を、というよりも、逆に自分の位置を、または海外から来る人も含めて、私たちは一度海から見た横浜を考えてみるべきではないかと感じました。これは、先ほど現場の見学をしてから感じたことです。

私が今日申し上げたいことはいくつかありまして、具体的なものでありませんが、横浜の港は開港 164 年目になりますよね。そして私見ではありますけども、私は横浜の歴史というものをやはりよく、まあファクトとして、いろんな数値も必要ですが、まず横浜市民または横浜のこの事を語るに横浜のやっぱり歴史というのを振り返る必要があるだろうと。

そして、横浜は日本初とか発祥の物が色々ありますよね。そしてそれには歴史の問題、技術とか事業であるとか文化とか芸術、まあ遺産も入っていますけども、要は過去から私たちの今の現在と、そして未来というところで、まさに「みなとみらい」という名称に等しく、未来を見据えた、この再開発という部分に視点を置かなければいけない。そこに根底にあるものは横浜の歴史だと思っています。

横浜の歴史を振り返る中で、私は例えば横浜の三名士と言われた高島嘉右衛門さんとか、それから原三溪さん、そして浅野総一郎さんなどが築いてきた横浜のそのものを、ただものを作るのではなくて街を作ってきた。つまり、横浜の港の埋め立てであるとか、ガス灯とかですね。財政立て直しをしたり、それから貿易であり、文化であり、それに基づく色んなものが出来てきて、そして横浜港そのものの構築でイギリス波止場、フランス波止場って、今象の鼻とかありますけれども、こういったまちづくりをずっと過去の先人たちがその時代その時代に合わせて、そして未来を見据えて作ってきてくれた。この紡いできた歴史みたいなものに、私たちが今これからの横浜の未来を縦糸、横糸にして紡いでいかなければいけないという責任を感じます。

そして、やはり横浜、地元横浜のためというものは必須ですけども、あまりそれに拘っていくと狭あいのなですね、利権であったり色んなことが出てくるので、それはそれで事実でしょうけども、現実と少し乖離して、世界に誇れる横浜みたいなものを作るために未来を描き、若い人に私たちが今やろうとしていることが、それこそ 50 年 100 年経った時に、振り返った時に横浜、今の横浜、そのときの横浜があるのは、あのときのおかげと言ってもらえるようなことにしたいと思っています。

そして、やはり横浜の歴史の中で、東神奈川のエリアとか横浜の駅周辺であるとか、それからみなとみらい 2 1、そして関内・関外とありますけど、横浜の、やはりここはインナー

ハーバーと称される最後のエリアとして、ここが総仕上げになるような形で、先ほどもご意見がありました。点在してきたそういったもの、文化とか技術とか歴史を織りなしてきたもの、ここでネットワーク化してみんなが、すべてがつながる形で集大成的なものがこの山下ふ頭に、再開発をすることによって、完成されるというふうに出来たらいいなと思っています。

そして、やっぱり美しい街でなければいけないし、先ほど防災の話もありましたが、強くなければいけないと思います。水深は10m~15m程とお話を伺いました。でも海面から地面の表面は1~2m程ですよ。これでたまたま液状化がなくて、今の現状を守ってますが、一方、ちょっと目を離れた大黒ふ頭は、数10cm、下手すると1m位な液状化で沈みました。たまたまかもしれません。ですから、本当に頑丈な土地なのかということも含めなければいけないし、つまり、美しくなければいけないし、強くなければいけない。そして生き残れるというのは、いわゆる持続、そこにできたものとかそこにある機能は生き残りながら、未来に向けて持続性とか永続性がでる、そういったものを作らなければいけないのであろうと思っています。

やはり、私も経済人でもありますし、大学関係やっておりますけれども、まずは市民の声を聴くというのは、もう基本中の基本で、ただし、市民のためのというところに最重要点を置くと小さなものになりますので、もっと大きなものにしなければいけない。しかしながら今までのものやことではなくて新しい始まりの拠点、または今まで出来たものを集大成する一つの終着点。終着点は始発点でもありますので、そういったものにしてきたいと思っています。

やはり、横浜の誇りとか、歴史、そして足元では景観とか集客の問題、それから事業採算の問題、就労の問題、税収の問題など、色々あると思います。それら相反するものをどこで折り合いをつけるかということの議論になっていくのかと思いますが、私は先進的なものを取り込み、そして、いにしえとは言いませんけども、古き良き、匠の技みたいな、または伝統みたいなものも、あいまった所の拠点にしていけたらいいのかなと思っています。

いずれにしても委員長から先ほどお話があったとおり、あまり固定概念に拘らずやっていかなければいけないと思っていますので、今後の皆さんとの意見交換をしていきたいと思っています。

もう一つは、これらを描くと莫大な金がかかると思います。そのお金の、いわゆるイニシャルコストみたいなものを、それからそれを続けていく、民営でやっていくとすると、どの企業がどういった中で収支をつけながら、雇用を守りながら経済効果を出していくのかという、そういった面での持続性ということを考えると非常に、それを現場でやるところの行政の方々、頭痛いと思いますよ。絵面だけでは済まない現実がありますので。この辺をやはり丁々発止やらなければいけないと思いますけども。いずれにしても民間でやっていかなければいけないということですから。そこをコンセプトに置くとすると、かなり綺麗事だけは済まない。

ただし、先ほどもあったようにIR＝(イコール)カジノではありませんのでね。これはもう市民がそれを結論付けたわけですから。本当に色々な相反する意見を合意形成していき

ながら、新しい未来に向けた若者のための、そして伝統とかいろんな守らなければいけないものを混在させながら、新しい、世界に誇れる横浜のまちづくりになっていけばいいかなと思います。

以上です。

【寺島委員長】

ありがとうございました。僕の方から若干、皆さんに意見を伺っていて、入り口のところで、こういうことなんだろうと受け止めたのが、まず、そのファンダメンタルズとして港湾競争力という言葉が登場してきましたが、やはり経済とか産業とか物流だとか、その港湾の競争力ということについて、僕が港湾局の方からのファクトシートでもってしっかり確認したいと言おうとしたことに繋がるんですけども。

私が色々調べてきていて、私自身が三井物産という総合商社の新入社員として入社した1970年代、横浜、神戸というのはいわゆるコンテナ取扱量で世界一、世界二を競っていたんです。しかし、直近の状況では、一番直近の数字は確認したいと思いますが、横浜は73位まで落ちてきています。今、アジアダイナミズムの力学の中で、日本列島全体の物流軸が太平洋側から日本海側の港湾へと移ってきているというのが大きな流れなわけですけども。そういう状況下で、港湾競争力というものをどうしていくのか。

一方で、横浜がすごいなと思うところは、荷役の効率ということにおいては、世界でもトップクラスの効率を誇っているんですね。システムとして。

そういう状況を前提として、ファンダメンタルズの議論です。つまり経済・産業・物流の視点から、横浜港という港湾をどうしていくんだということに対する知見が必要だと、まずベースですね。

もう一点ですけども、これはより長期的な未来圏をにらんだ議論をしようよ、ということが多くの人たちの方向感かなと。明治維新から戦争に負けるまでが77年と。戦争に負けてから去年までが77年と。たぶん我々が、僕盛んに今こういう発言してるんですけども、責任をもって議論しなければいけないのは、2023年、今年を劈頭とする77年、77足すと2100年ですから、翌年から22世紀というやつなんですけど。

この77年に対する大きな視界と構想力が我々に試されているんだろうと思います。そういう長期的な未来圏を睨んで、夢があって、わくわく感のあるような、世界に誇れるような、ようするに構想・プロジェクトみたいなものが、どういうふうに見えてくるんだろうかと。もう1つが、広域連動という言葉が出てきましたけど、横浜が独立して頑張ってるという部分もちろんあるけれど、やはり東京湾全体を睨んでとか、日本全体を睨んだ広域の中で、どうしていくんだいというポイントが必要になってくると。

もう1つは参画という言葉がやはり非常に重要だと思ってまして、市民参画ですね。ようするに、市民が、その参画というのは、僕は意見を述べるだけじゃないだろうと思います。参画して、山下ふ頭を支えていくというのかな。山下ふ頭のプロジェクトに市民が参画するということは、意見を言うだけの話では済まない。そのメンテナンスと方向付けの中に、市民がどういう責任を担いながら参画していくのかという視点を、どう加えるのか。

私は今、医療防災産業の創生協議会の会長というのをやって、国会議員連盟 80 人近くの人たちがバックアップしてくれて、超党派のですね。例えば医療防災なんていうのが、3. 11、そしてコロナの教訓ということで、日本人なら誰もが震え上がったですね、どうしていきんだいってという防災っていうところに、やはりこのプロジェクトの可能性に埋め込まなきゃいけない言葉があるんだろうと、僕は、直感的に思っています。

それからもう1つは、ものすごいダイナミズムで引きつける力です、外から。要するにインバウンドも含めて、人だけじゃなくて投資も含めて、横浜がすごいこと始めたなと思うような、外からの引きつける関心、それから人流、投資、あらゆる面で引きつける力がどこまで持っていけるのか、そういう中で議論を深めていかなきゃいけないと思います。

冒頭申し上げたように、この会は決定機関ではないんです。決定機関は責任あるラインをもって決定していただきたいわけです。それに対して、真っ当な選択肢と、付加価値をつけて意見を出しておくということが、この会の役割であり、まとめるところでの責任だと思っていますので。その方向感で進みたいってということで、今日の皆さんの意見を、集約しておきます。

次の議事として、地域団体の参画についての話を事務局の方からしていただきたいと思います。

【事務局】

はい。それでは地域関係団体の参加について、スクリーンに提示しました資料でご説明をさせていただきます。

今回の検討委員会は、事業予定者を審査・決定するものではなく、傍聴に加えて、インターネット配信、視聴した皆様からご意見をいただくなど、透明性の高い運営を行います。

また、今後の事業予定者の選定において、委員会に参加した委員が属する事業者等に有利・不利に働くことはありません。

検討委員会では、学識者の皆様方の専門的なご意見に加え、都心臨海部の一体的なまちづくりに向けて、周辺地区との連携、再開発の経済効果を周辺へ波及、地域で事業を行っている方々の思いなど、地域の皆様からのご意見を伺うことが必要です。

そうしたことを踏まえ、各地域関係団体へ委員の推薦を依頼したいと考えております。

地域関係団体の案としては、まちの活性化等を推進している団体から、地元のまちづくりを行っている団体の代表として「関内・関外地区活性化協議会」、横浜港の振興策を担っている団体の代表として「一般社団法人横浜港振興協会」。地域の経済活動を担っている団体から、商工業の振興等のために活動している経済団体の代表として「横浜商工会議所」、地元の商店街の代表として「協同組合元町エスエス会」。埠頭で事業を営む方々の団体から、港湾運送事業の団体の代表として「横浜港運協会」、物流の拠点である倉庫業を営む団体の代表として「神奈川倉庫協会」。以上6つの地域関係団体からそれぞれ1名をご推薦いただき、今後の検討委員会にご参加いただきたいと考えております。

委員会の目的である、まちづくりの方向性、導入機能等の検討に向け、様々なまちづくりや開発等の委員会等にご参加され、議論されてきた皆様方に地域関係団体の参加について、

ご意見を伺い、本市が任命する際の参考とさせていただきたいと考えております。

説明は以上となります。どうぞ、よろしくお願い致します。

【寺島委員長】

ただいまの説明に関して委員の皆様からのご意見があれば、ご発言いただきたいと思いません。

【北山委員】

僕は、巨大再開発とかをやるときに連絡協議会とかそういう会議が開かれて、利権を持っている利益団体が参加して入ってくるということになると、大きい将来の夢とか、さらに100年とか次世代のことまで考えた新しい都市のイメージを作ろうとするときに、利益調整組織のようになってしまおうとですね、本来の目的と違ってくるんじゃないかなと思うので、それは僕の勘違いかもしれませんが、できればこの委員会とは自立していた方がいいんじゃないかなと思います。

先ほどももっと大きいエリアで考えた方が良くという話もありましたけども、その小さい、特に山下ふ頭と関係するようなその空間の中だけの話ではなくて、もっとさらに大きい空間の中で話をしようと思うと、特定の団体、これは決まっているわけなんですか、まだ決まってない案なんですか。

【事務局】

一応、今、我々としての案ということでございまして、今日のご議論なども踏まえましてですね、決定してきたいというふうに考えております。

【涌井委員】

地域関係団体っていうのは行政上の立場から言えばですね、こういった方々が入ってくれることは非常に結構なことだと思いますが、我々自身が今スタディをしている最中であり、ある種の方向性みたいなものがなんとなく見えてきた段階で、地域の意見としてどうなんだと、地区の意見としてどうなんだと、こういう問いかけをしていくのであればですね、合理性があると思うんですけども、例えばこの次の、次回からこういう方々に参加していただく必然性とか必要性というのがですね、本当にあるのかなというのを考えてみますと、いつの段階から参加していただくのかっていう論点は非常に大事だと思いますが、いかがでしょうか。

【事務局】

我々の方もですね、今日案としてこういう形で出させていただいて、今みたいなご意見をいただきましたので、我々としては次回から入っていただきたいと思っておりますけども、その辺含めて検討させていただきたいというふうに思います。

【寺島委員長】

これは僕が委員長として決めつける気持ちは一切ないですけども、いろんな各種委員会や審議会出てきてですね、まったく意見を聞かないというのもまた、おかしな話だと思うんですね。そこで、例えば総合エネルギー調査会だったらですね、例えばエネルギー研究機関とか、経済団体とかにですね、ご意見があればまとまった形でもって意見を聞きますよということで意見書をね、ぴちっと準備してもらってですね、それである段階でまとまった形でもって、仮に10分ずつとかですね、この方向付けについてきちっと意見を言うてもらってという機会を設けるっていうのもですね、一つの案かもしれないと思いますね。

一切、地域のもですね、実際問題として責任もって地域に関わっている方たちの意見を聞かないというのも変です。そういう意味合いにおいて、我々は付加価値をつける役割なんですね、行政の方でもって、今日の意見を踏まえてですね、調整していただければ、だいたい見えてくるんじゃないかなと思いますけど、いかがでしょう。

【事務局】

私どもとしてはやはり、山下ふ頭の開発には地元の方の声、これはやっぱり大事だと思いますので、そのやり方についてはですね、今委員長からも発言ありましたけども、やり方はすいません、考えさえていただきながら進めていければというふうに思いますので、よろしくをお願いします。

【寺島委員長】

じゃあ、今日のところはそういうことでもって、ご意見を伺ったということで。それではですね、事務局からの連絡事項等あればお願いいたします。

【事務局】

はい。それでは、先程、議事の2の意見交換会におきまして、委員長から提案のあった学識者委員からのプレゼンを次回以降に行っていきたいというふうに思っております。次回、プレゼンいただく委員の方々につきましては、後日、個別に調整をさせていただきます。また、本日、インターネットにより視聴されている方々からご意見をいただいております。いただいたご意見につきましては、次回までに取りまとめ、委員会の冒頭でご報告させていただきます。では、以上でございます。

【寺島委員長】

それではですね、その他、何かご意見が、委員の方で、言っておきたいというのがあればですね、お聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、今日の議事はですね、こういう形でもって締めくくっておきたいと思いますので、事務局の方に進行をお渡ししたいと思います。

【事務局】

はい。寺島委員長、どうもありがとうございました。

学識者委員の皆様においては、お忙しい中、長時間にわたり熱心にご意見交換いただきまして、どうもありがとうございました。

次回の日程等についてはですね、後日お知らせしたいと思います。

以上をもちまして、横浜市、山下ふ頭再開検討委員会学識者会合を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

【各委員】

ありがとうございました。

第2回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 会議録	
日 時	令和5年11月30日(木) 13時15分～15時10分
開 催 場 所	ロイヤルホール横浜 ユインザーの間
出 席 者 ※敬称略	<p>今村 俊夫 (株式会社東急総合研究所代表取締役会長)</p> <p>内田 裕子 (経済ジャーナリスト、イノベディア代表)</p> <p>河野 真理子 (早稲田大学法学学術院教授) ※ウェブ参加</p> <p>北山 恒 (建築家、横浜国立大学名誉教授)</p> <p>隈 研吾 (建築家、東京大学特別教授・名誉教授) ※ウェブ参加</p> <p>幸田 雅治 (神奈川大学法学部教授) ※ウェブ参加</p> <p>寺島 実郎 (一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長)</p> <p>デービッド アトキンソン (株式会社小西美術工芸社代表取締役社長) ※ウェブ参加</p> <p>村木 美貴 (千葉大学大学院工学研究院教授)</p> <p>平尾 光司 (専修大学社会科学研究所、昭和女子大学名誉理事)</p> <p>涌井 史郎 (東京都市大学特別教授)</p>
欠 席 者 ※敬称略	石渡 卓 (神奈川大学理事長)
開 催 形 態	公開 (傍聴者 18 人 / 記者 16 人)
次 第	<p>1 議 事</p> <p>(1) 前回学識者会合後の市民意見等</p> <p>(2) ファクトシートの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「横浜港の国際競争力強化に向けた取組」について ・委員長からの報告 <p>(3) 委員からのプレゼンテーション</p> <p>(4) 意見交換</p> <p>2 その他</p>
議 事	別紙
資 料	<p>当日配布資料</p> <p>(1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 名簿</p> <p>(2) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 座席表</p> <p>(3) 前回学識者会合後の市民意見等</p> <p>(4) ファクトシート【横浜港取組編】</p> <p>(5) 委員長報告資料</p> <p>(6) 日本インフラの体力診断</p>

第2回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合 議事

【事務局】

定刻になりましたので、これより、「第2回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 学識者会合」を開催します。私は、事務局を務めます、横浜市港湾局山下ふ頭再開発調整課長の荻原と申します。よろしくお願いいたします。

お手元に資料として、次第、名簿、座席表、前回学識者会合後の市民意見等、ファクトシート横浜港取組編、委員長報告資料、参考資料として土木学会発行の日本インフラの体力診断を配付しています。ご確認ください。

本日の委員の皆様の出席状況についてご報告させていただきます。学識者委員12名の内、11名が出席予定でございます。河野委員、隈委員、幸田委員、アトキンソン委員はWEBでご参加でございます、石渡委員はご欠席でございます。隈委員は途中からの参加と連絡がきております。よろしくお願いいたします。それでは、開催にあたりまして、横浜市港湾局山下ふ頭再開発調整室長の新保よりご挨拶申し上げます。

【事務局】

皆様、こんにちは。横浜市港湾局山下ふ頭再開発調整室長の新保と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日は、大変お忙しい中、第2回学識者会合にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、次第にございますように、前回の学識者会合後に私共事務局にいただいた市民の皆様からのご意見の説明、次に、事務局からのファクトシートの説明や委員長からの報告、そして本日は4名の委員の方にお問い合わせさせていただきましたが、プレゼンテーションを行っていただいて、そののちに意見交換という形で予定をしております。皆さまの豊富な知見や広い視野から、新たな事業計画の策定に向けて、限られた時間ではございますが、ご議論いただければ、幸いです。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】

委員の方々のプレゼンテーションにつきましては、涌井委員、北山委員、今村委員、村木委員に10分程度行っていただきまして、各々の質疑時間を5分程度設けております。終了後、最後に意見交換を15分程度行っていただきたいと思いますと思っております。

本日は公開での開催となっております、インターネット中継により配信されます。また、会議室内に傍聴席と記者席を設けております。ご承知おきください。なお、会議の様態を記録するため、事務局側で写真を撮らせていただきますので、ご了承ください。ここで撮影を終了させていただきますので、記者の方、お戻りください。

これより先の進行は寺島委員長にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

いたします。

【寺島委員長】

はい。皆さんご苦勞様です。それでは、議事に入りたいと思います。

まず、議事の1つ目ですね。前回のこの会合以降の市民の意見等につきまして、事務局からですね、ご説明していただきたいと、こう思います。

【事務局】

はい、山下ふ頭再開発調整担当部長の竹内と申します。よろしくお願いたします。

では、前回学識者会合後にインターネットフォームに寄せられました市民意見等についてご説明させていただきます。お手元の資料3をご覧ください。

委員の皆様には事前に本資料をお送りさせていただいておりますが、1から2ページは市民の皆様のご投稿をまとめたものになります。3ページ以降は、市民の皆様のご投稿をそのまま綴った資料となっております。

資料の1ページをご覧ください。第1回学識者会合開催日の8月28日から11月27日まで、ご意見、ご感想をインターネットフォームで受け付け、39名の方から78件のご投稿いただきました。なお、山下ふ頭再開発に関連しないご意見等は投稿数から除外させていただきました。

3ご意見の内訳をご覧ください。ご意見78件のうち、(1)まちづくりの方向性、導入機能に関するご意見は27件あり、このうち、まちづくりの方向性については17件で、広域的な視点で山下ふ頭の位置付けを考えるべき、先人の精神と経験に学ぶべき、社会情勢に合わせてフレキシブルに対応する、などのご意見をいただきました。

2ページをご覧ください。導入機能についてのご意見は10件、研究開発拠点、教育拠点、スタジアム、テーマパークなどのご意見をいただきました。

(2) 地域関係団体の参画に関するご意見は10件。地元の意見代表として必ず参加すべき、地元の人々の意見を取り入れるべきなどのご意見をいただきました。

(3) 市民の参加に関するご意見は8件。まちづくりに市民が主体的に参画する。市民グループの声こそ新しいまちづくりに必要、などのご意見をいただきました。

(4) その他のご意見、ご感想は33件、今後の議論が楽しみ、この学識者会合はなかなか良いと思った、などのご意見をいただきました。説明は以上となります。よろしくお願いたします。

【寺島委員長】

はい、どうもありがとうございました。ただいまの事務局からの説明に関連して、質問、ご意見があれば挙手をしてご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。なければ、議事を進めさせていただきます。

2番目の議事として、ファクトシートの説明ということで、私はこの委員会において、ものすごく重要なのは、我々が客観的な事実をどこまで正確に認識するかが、これからど

ういう構想だとか戦略だとかが浮かび上がってくるかの基本的な要件だと思っています。その意味で、前回お話したように、事務局にも、横浜市としてこの案件についての、我々が知っておくべきファクトシートをしっかりと準備していただきたいということで、いくつかの設問も含めて、課題を提起しています。

それに関連して、まずご説明いただいて、そのあと、我々が共有しておくべき情報に関して、僕の方からフォローアップする説明をしたいと、こう思っています。それでは、まず、事務局からの説明をお願いしたいと思います。

【事務局】

横浜市港湾局長の中野でございます。

先ほど、委員長からもご説明ありましたとおり、ファクトシートは、この検討委員会の議論のための参考資料集のことでございまして、横浜市の人口動向、財政状況などの基礎資料編や、国内外の再開発事例編などを用意させていただいているところでございます。

私からは、横浜港取組編として、横浜港の国際競争力強化に向けた取り組みについて、ご報告させていただきます。こちらが項目でございまして、この順にご説明をさせていただきます。

まず、横浜港の概要です。横浜港は、総合港湾であることが大きな特徴です。外交船の寄港数は約60年間にわたり国内第1位、クルーズ船も昨年に続き第1位となる見込みです。コンテナでは東京港に次いで第2位。完成自動車はトヨタのお膝元、名古屋港、三河港に次いで第3位です。1つの港で様々な種類の船舶に多く寄港いただいております。

横浜港の地理的条件ですが、北米航路のファーストポート、ラストポートであり、東京湾の湾港に近く静穏な海域と自然推進が深い天然の良港です。

これは、横浜港主要エリアの航空写真です。1859年に開港した場所が大さん橋と書いてある付近で本日の会場の少し海の方に行ったところですが、この大さん橋を中心に山下ふ頭から新港ふ頭に至る一帯の、緑の点線、ベイブリッジの内側・インナーハーバーがかつての横浜港でございました。

世界中の歴史のある港に共通しているところですが、物流のコンテナ化と船舶の大型化により、港は沖合に展開をしまっていました。このインナーハーバーでは、みなとみらい21事業など、ウォーターフロント開発が行われ、観光やクルーズ船受入の機能を担っております。

黄色の本牧ふ頭・南本牧ふ頭は、主にコンテナ船の受入、青の大黒ふ頭は、主に自動車専用船の受入機能を担っています。

次に、港湾を取り巻く状況についてでございます。我が国の輸出入貨物の割合のうち海上輸送が99.5%でございまして、港湾はなくてはならない都市インフラでございます。そして、定期航路のコンテナ化率は90.8%となっております。自動車、産業機械等の生産は、世界中でパーツごとに、分業体制がとられており、コンテナ物流は、グローバルサプライチェーンの基礎となって、これらを支えています。

我が国がコンテナ船の基幹航路から外れ、上海港、釜山港で積替えとなってしまいます

と、貨物の輸送に時間を要する、貨物が痛む、国際情勢によりまして、貨物が停滞してしまうなど、我が国経済に甚大な支障が生ずる恐れがあります。そのため、国を挙げて、基幹航路の維持・拡大に向けて、国際コンテナ戦略港湾の取組を推進しているところです。

現在、横浜港の定期コンテナ航路は95航路と、世界中にネットワークが広がっています。そして、基幹航路は15航路と国内最多となっています。物流の効率性から、コンテナ船の大型化の進展が著しく、今では水深18mの岸壁が必要な全長約400mの船が入港しております。超大型船は世界中で増加しておりまして、現実に横浜港においても入港隻数が増加の一途を辿っております。

それでは、国際コンテナ戦略港湾の推進について、ご説明をさせていただきます。基幹航路の維持・拡大に向けまして、コンテナターミナルの整備、DX導入など、左の赤い文字で書いてありますが、競争力強化。ロジスティクス施設で流通加工を行い、貨物を創る、真ん中の青色の創貨。戦略港湾に貨物を集める右側緑の集貨の取組を進めています。

まず、競争力強化の取組で、白線で困っている南本牧ふ頭の整備についてです。我が国最大唯一の水深18m岸壁を持ち、世界最大の超大型コンテナ船の受入が可能となっています。コンテナターミナルはターミナル毎の運用が通常ですが、2021年から4つのターミナルが一体運用されており、多方面の航路の船舶が船型やスケジュールなどに応じ、施設全体を柔軟に利用できる画期的な運営が実現できています。内航コンテナ船も沖待ちの必要がなく、ハブポートとして着岸・積替えがしやすくなっております。

次は、本牧ふ頭D突堤です。船舶の大型化に対応するため、D4・D5コンテナターミナルの一体運用が可能となるよう、ヤードの拡張・荷役方式の変更など再整備を進めています。

そして、新本牧ふ頭です。水深18m以上、延長1,000mの岸壁を持つコンテナターミナルと高度な流通加工機能を有するロジスティクス施設からなる最新鋭の物流拠点の形成を目指し、2021年度から埋立を進めております。コンテナターミナルのゲートや荷役機械、ロジスティクス施設等には、DX・AI等の機能が導入され、競争力強化が進められております。

次に、創貨の取組で、本牧ふ頭A突堤の再整備です。本牧ふ頭A突堤では、船舶の大型化により、水深が不足しヤードが手狭となったコンテナターミナルから転換をした跡地を活用いたしまして、ロジスティクス拠点の整備を進めております。臨海部の物流拠点は、輸送の効率化、雇用の確保などの点で注目されておりまして、横浜港の増加する輸入貨物の取扱強化策としても重要です。2025年までに新たな施設が合計10棟稼働する予定でございます。

集貨の取組としましては、地方自治体同士のお付き合いを活用しまして、東日本の各港湾と協定を締結し、連携をしながら進めております。内航航路も日本各地から週約38便、横浜港に寄港していただいております。2022年の横浜港のコンテナ取扱量は298万個で、コロナ前の水準に戻ってまいりました。そのうち内貿は35万個と過去最高を記録しました。東日本の各港湾と内航航路の機能強化に取り組んだことも、その要因と考えております。本質的には、背後圏の製造業の工場などの生産、経済活動が活性化しまして、輸出入する

貨物そのものが増えなければ、取扱量を増加させることが難しいわけですが、港湾管理者としましても、いまご紹介しました集貨・創貨・競争力強化の取組により、少しでも貨物を増加させ、基幹航路の維持・拡大に努めているところでございます。

前回の会合では、コンテナ取扱量の世界ランキングについて、ご発言をいただきました。ご指摘のとおり、真ん中にありますように、95年には横浜港が世界第7位であったところ、2022年では70位となっております。コンテナ取扱個数としては増加しているものの、中国をはじめとする経済発展が著しい新興国の港湾が台頭している状況であります。

その下になりますが、中国と日本のGDPを比較しておりますが、95年までは中国の8倍でしたが、22年では1/4程度となっております。人口が多く、経済活動が活発な、つまり、GDPが高い地域は、貨物の取扱も多くなります。

横浜港の競争力についてです。世界銀行は2020年のコンテナ港湾生産性指数において横浜港が世界第1位と発表をいたしました。効率的なコンテナターミナルの運営や高品質な港湾サービスが総合的に評価をされました。

31ページでございます。横浜港は、かつては輸出の港と言われ、自動車や産業機械の取扱が主力でございました。左のグラフですが、現在では、輸入が輸出を上回り、冷凍食品などの製造食品、野菜・果物が輸入貨物の取扱の主力となっております。右のグラフにありますとおり、この輸入超過の傾向は日本全体でも共通しており、2022年の貿易赤字は過去最大を記録しております。

37ページです。続いて、クルーズ船の誘致と、観光による市内経済の活性化についてです。インバウンドによる観光消費は輸出と同じ効果があるわけですが、コロナ前の2019年は、半導体や自動車部品の輸出を上回りました。今や観光立国として、インバウンドの受入は日本経済にとって不可欠な状況と言えます。そこで、インナーハーバーを中心にクルーズ船誘致に向けた競争力強化に取り組んでおりまして、そのことについてご説明をいたします。

横浜港では、総合港湾である特徴を活かし、物流埠頭との兼用を含め、国の支援や民間事業者の皆様との連携により、岸壁・客船ターミナルの整備を進めてまいりました。その結果、世界でも最大レベルの7隻同時着岸が可能となっております。

大黒ふ頭客船ターミナルは、ベイブリッジを通過できない超大型クルーズ船が着岸いたします。荷さばき地を活用して、クルーズの間に車をお預かりするドライブ&クルーズが好評をいただいております。新港ふ頭客船ターミナルは、日本初の商業・ホテル一体型の複合客船ターミナルでございます。大さん橋国際客船ターミナルは、横浜港の主力ターミナルでウッドデッキの屋上広場が特徴であります。

クルーズ船の経済効果ですが、クルーズ船が寄港するたびに、給油・給水や食材、アメニティグッズ等の各種船用品の需要が発生するとともに、乗客や船を見に来られる観光客の方々のお土産や飲食等の支出が加わり、ご覧のとおり、大きな経済波及効果をもたらします。また、クルーズ船の寄港は、一時寄港と発着寄港の2つのパターンがございます。上の、一時寄港は、朝着岸し、乗船客が観光などに出掛け、夕方に同じクルーズ船に戻り出港するというものです。発着寄港は、着岸すると乗客が全て下船をし、新たなツアーを

開始するもので、クルーズ前後の市内での観光や宿泊が望め、より多くの経済効果が見込めます。横浜港は9割以上がこの発着寄港で、圧倒的に多いのが特徴です。

コロナ前の2019年の発着寄港回数は、もちろん日本で第1位、アジアでも4位となっております。下に書類のコピーがありますけれども、2019年シートレード・クルーズ・アワードというのがありまして、ポート・オブ・ザ・イヤーのファイナリスト、準優勝にも横浜港が、世界の中で選定をされております。2023年の寄港回数は、過去最多を記録した2019年の188回を上回る200回となる見込みでございます。

49ページです。横浜市では、関係機関や民間事業者の皆様と連携し、クルーズのお客様を都心臨海部で観光していただく様々な取組を行っております。51ページです。街を上げて、クルーズのお客様やクルーの皆様のおもてなしを行おうと、都心臨海部の80店舗以上にクルーズ・フレンドリー・プログラムに加盟していただいております。割引、英語対応等のサービスをしていただいております。

また、旅行会社等と連携し、クルーズのお得意様を対象に市内ホテルの紹介を行うサロン・ド・ヨコハマ、夜間の水際線でのイベント開催など、横浜市内での宿泊を促進するための取組を行っております。

脱炭素化・防災力向上の取組についても、力を入れて行っているところですが、後ほどご覧いただければと思います。

67ページです。最後になりますが、山下ふ頭再開発検討の経緯についてです。高度経済成長期では横浜港の貨物の1/3以上を取り扱う主要埠頭でございましたが、コンテナ物流が主体となり取扱量が減少してまいりました。山下ふ頭にコンテナターミナルを整備してはどうかのご意見もときどき伺うところでございます。しかし、最近のコンテナ船ではベイブリッジを高さの関係で通過できないこと、岸壁の水深が不足することなどから困難な状況でございます。そこで、2014年の港湾計画の改訂により、山下ふ頭を「都心臨海部の新たな賑わい拠点」として、港湾から都市的な土地利用への転換を位置付けました。2021年には、山中市長が就任し、カジノを含む統合型リゾート、IRに頼ることなく、山下ふ頭の持つ優れた立地と広大な開発空間を活かして、横浜経済をけん引する開発を推進することを表明いたしました。そして、市民意見募集等を行ったうえで、山下ふ頭再開発の新たな事業計画を策定するため、検討委員会の開催に至ったものでございます。横浜港の国際競争力強化に向けた取組についての説明は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

【寺島委員長】

はい、どうもありがとうございました。資料4の説明に関する質疑もですね、私の話を終えた後、一括して進めたいというふうに思っています。

ここからが私のレポートというか、話なんですけど。まず、横浜市が準備してくれているファクトシートというのは大変重要でして、我々の基本認識に据えておかないといけないポイントです。今後も、世界の港湾の状況等について、このあたりをもう少し調べてもらいたいよねっていう希望があれば、僕自身もいくつか論点があるんですけど、さらにこ

のレポートを深めていってもらいたいと思います。

そこで私のレポートなんですけど、いくつか我々が本当のことを知らなきゃいけないという問題意識で私は、そのことを横浜市、あのですね

まずその土木学会のレポートいうものをちょっと手元に見ていただきたいと思います。

土木学会というのは、土木というと建設土木というイメージが非常に大きいんですけど、シビルエンジニアリングなんですね。ようするにシビルエンジニアリングを土木と訳してしまったことにちょっと疑問を感じるんですけど。いずれにしても、2万人の会員を要する、この分野の専門家を集結している日本の、ある知のインフラです

そこが今、港湾について、日本の港湾インフラの体力診断ということで、VOL 1、2、3と3つインフラを分析している、最近出たレポートなんですけど、VOL 1は道路と河川と港湾のですね、日本のインフラについて今土木学会がどう思っているのか。とりわけ37ページ以降に、港湾ワーキンググループが出してきたインフラ体力診断というページがあります。これは本当は、率いているキーパーソンの一人である東大の家田先生に直接説明していただきたいというふうに思ったんですけども。

これは皆さんがまず手元において、僕はこれを踏まえた上で、自分自身のレポートに触れていきたいと思いますので。これも非常に我々にとっては考えさせられる、日本のインフラの現状に関する、特に港湾インフラの現状に関する認識なんだっていうことをしっかりと読み込んで共有していただきたいと思います。

そこでなんですが、資料5というのが、私が話をしようと思っている資料ですね。僕のいわゆる出している資料集から抜粋して、関連のところをコンパクトにお話するのが、今日のまず入り口の議論だなと思っているものですから。

まず1ページ目に、10月版のIMFの世界経済見通しの直近の数字が載っています。これ解説するだけでも大変なんですけれども、今年の世界GDPの見通しが、10月版、もう11月ですから、ほぼいわゆる実績見込みに近い数字ですけど、3月頃懸念されていた金融不安というものをですね、なんとかソフトランディングに持って行って実質3%、これは地球全体の実質GDPの動きですけども、3%くらいの成長と。で来年に向けてはさらに減速してくる、つまり金利を引き上げてますので。

先進国ブロックとブリックスに分かれています。注目したいこのページの一番重要なのは、後での話に繋がるからなんですけれども、インドとアセアン5ってところをよく見てもらいたいんですが、アセアン5というのは、アセアンは10か国から成り立ってますけど、その中心にいる5つの国って意味なんですけれども。

インドが6%成長軌道を走っていると。アセアン5がですね、4から5%台の成長軌道を走っているというのが。わかりやすく言うと、除く中国のアジアがものすごい牽引力となっているんだというのが、世界経済の一つの大きなポイントだということを確認したいと思います。

そこでなんですが、その下の、日本の埋没という言葉を使ってますけど、これは世界動いてみて、まさにこの言葉をかみしめなければいけない状況になっていると思うんですが。

1950年、戦後のつまりサンフランシスコ講和会議の前の年ですね、日本の世界GDPに占める比重は3%だったと。で1994年という年にピークを迎えるんです。18%までいっていたんですね。工業生産力モデルの優等生として、横浜港湾もここを支えたんですね。世界GDPの18%を占める国になっていたわけです。除く日本のアジアは全部足しても、中国インドアセアン全部足しても5%ですから、日本はアジアダントツの経済国家だったんですね。

2000年、21世紀に入る前の年です。日本はまだ15%で持ちこたえていた。除く日本のアジアを全部かき集めて7%の比重ですから、日本の半分にもなっていなかった。

ところがこのわずか22年のパラダイム転換ですね。私経団連研修率いてますけれど、経団連トップクラスの、ようするに経営企画部長クラスの間でも、この頭についていないです。わずか22年の間にこうなったっていう、日本の世界GDPに占める比重はわずか4%に落ちてきた。除く日本のアジアは25%を占めてますから。6倍を超えてたんです。2分の1に満たなかった、除く日本のアジアが、日本の6倍を超えてたっていうパラダイム転換に、なぜこうなったかですね、本質的な問題意識がないと、乗り切っていけない状況の中に今、日本はあるんだといってもいいだろうということです。

特に一人当たりGDPというのは豊かさのシンボルなんですけれども、右にブレイクダウンした2ページに書いてありますけど。日本はですね、シンガポールにダブルスコア以上でおいでいかれていると。でここが僕はインバウンドの話も含めて頭に入れておくべきなんですけども。

去年僕は台湾に追い越されるんじゃないかと思ってたんですけど、一人当たりGDPがですね。めでたく追い越されなかったんですけど、日本3万4000ドル、台湾3万3000ドル、韓国3万2000ドルってことですね、東アジアの3か国が並んだってことなんです。ですから今インバウンドでやってきているのが、中国本土よりも、圧倒的に台湾香港シンガポールの華人華僑と韓国です。

つまり、これらの人たちは、コロナ前のインバウンドと違うんです。つまり二泊三日で3万円のツアー客をかき集めた中国人中心のツアーじゃないんです。ようするに個人旅行で、さらにはレンタカーを借りて、自分たちでファミリーで主体的に動くっていうレベルの、ハイエンドのインバウンドに変わって来てるっていう問題意識をですね、強く持たなければいけないと。

ここからが一番重要な今日の僕の話に入っていくんですけども、我々はこのことをよく知らなければいけないと。今日の横浜のレポートでも、土木学会のレポートでも、このあたりがまだ視界に入っていないのが僕の申し上げたいポイントなんですけども。

3ページです。じーっとにらんでいただいたら僕の言おうとしてる意味が分かります。我々が基本認識にしなければいけないことのイロハのイです。アジアダイナミズムと日本海物流っていうページがあります。つまり我々は埋没っていうけど、アジアのダイナミズムに突き上げられるような形で埋没感を深めている訳です。

今、メディア等が投げつけてくる世界認識の中で、簡単にそういう認識に踏み込んではいけないのがですね、世界は分断されてきていると。2極分断だと。米中対立極まれり。あるいは権威主義陣営である中国ロシア対自由主義陣営の戦いだなんてですね、2極

で世界を分けるっていう視界が流布しているんですけども、実は根本的に違います。世界は多次的に、世界を分断するなんていう、グローバルサウスの人たちの力がぐんぐん高まってきている。本当の意味で、グローバル化という局面に入ってきているんだという視界を取らないといけない。

まずそこに、米国と中国の貿易の数字をよく見ていただきたいんですけども、米中対立が進行しているというのは表面的には事実なんです。選別的対立なんです。ハイテクをめぐる激しく戦いあっています。DXをめぐる。安全保障をめぐるですね。

だけど、ファンダメンタルズにおける米中貿易は増え続けているんです。日米貿易の3倍を超したんですね。日米貿易の3倍を超したなんて話を聞かされると、多くの日本人は、鹿児島と上海の緯度がほぼ一緒ですから、鹿児島の南の太平洋を米中物流が動いているんだと考えがちですけど、ここなんです、横浜にとって真剣に目に入れておかないといけないのは、日本海物流と言うキーワードがものすごく重くなってきているんです。つまり日本海を抜けているんです、米中貿易は。どうしてかというと、その方が2日早いからです。メルカトル図法で考える視界からですね、地球儀で考える視界に転じたならば、日本海を抜けた方が2日早いってことにピンとくるはずですよ。圧倒的な物流が日本海、そして津軽海峡を抜けているんです今。でこのことによって、太平洋側の港湾に大きなインパクトが起こっているんです。

でまず一番上の段ですね。先ほど横浜のレポートにもありましたように、横浜の、世界の外貿におけるコンテナの取り扱い量の地位は驚くべき勢いでもって落ちてきているんですね。私が新入社員で三井物産という会社に入った時代があるんですけど、そのころ横浜神戸は世界1位、世界2位の港だったんです。

ところがですね、この直近の数字21年まで入れていますが、横浜世界72位、神戸は73位まで落ちてきましたと。日本の港で一番外貿貿易のコンテナの取扱いが多いのは東京港の46位だってわけです。

トップ10をよく見ていただいたら僕の言おうとしてることがわかります。上海をトップにして、華人華僑圏の中国、英語で言うとグレーターチャイナっていうんですけど。ようするに、連結の中国、本土の中国だけじゃないですね、その港湾がこう名を連ねてますと。

で日本にとってものすごく注目すべきなのが実は7位に浮上してきている釜山なんです。釜山トランスシップという言葉がありまして、ようするに先ほどから紹介している土木学会のレポートでも、あるいは横浜のレポートでも、トランスシップという言葉を目しているキーワードにしてきてますが、釜山で積み替えているんです。

例えば神戸がかくも無残なまでに後退している理由というのはですね、四国の物流分析をやるとすぐわかります。今までは内港船で神戸に繋いで太平洋航路にのせるという物流だったんです。ところが今、ようするに釜山に繋いで日本海物流に乗せて、世界最大のマーケットであるアメリカと、世界最大のマーケットに迫りつつある中国アジアの物流に繋げるのは釜山で積み替えた方がいいって、これがプサントランスシップなんですよ。その方が時間もかからないし、金もかからないっていう流れが、まるでパラダイムを変えてし

まったんですね。

そこで見ていただきたいのは、日本海物流に突き上げられるように、日本海沿海の港がものすごい勢いで、外貿コンテナを増やしてきているという数字をそこで確認することができると思いますけども。例えばですよ。仙台・酒田に点が打ってあると。どうしてだっというんですね、特に3.11後、加速度的にこの傾向が出てきたんですけれども、宮城の物流を山形の酒田が取り込んでいるんですね。どうしてっという、日本列島は本州北にいくほど狭いからですね。ようするにわずか高速道路で2時間で繋がりますから。沖合にアメリカと中国を結ぶ物流が動いているわけですから。一番戦略的に金をかけずにそれに繋げるとしたら、酒田の港を活用した方がいいって流れがどんどんどんどん多くなっているんですね。

でこれ皆さん、去年今年と日本にとって、これがこれからの攻め筋だったという勢いでもって話題になっている、千歳にラピダスっていう半導体の5兆円のプロジェクトが立地しましたと。なぜだっという、私、政投銀に頼まれて、苫東開発、苫小牧東って意味ですけど、日本最後の大型工業団地と言われている、千歳空港から苫小牧港にいたるまでの大型工業団地の経営委員長ってのをやってですね、このプラットフォームの上に様々な立地ですね、例えばカネカの医療機器だとか、日本最大のメガソーラーだとかを立地させるってことを積み上げてきたんですけど、いきなり隣の、まさに隣接している千歳にラピダスが来た。なぜラピダスがここに立地したのかという最大の理由は、苫小牧の沖に米中物流が動いているってことなんです。

あとでもその言葉は拘りますけど、後背地産業構造っということがすごく重要なんです。背中に背負っている産業構造が、ぴしっと港湾物流とリンクすれば、世界最大のマーケットに効率的にアクセスするところに立地するってのはもう、理の当然なんですね。ですからなぜラピダスがここに来たのか。

さらにいうなら、横浜にもっとも関係のある関東ブロックの物流なんですけども、実はですね、日本海側と太平洋側をつなぐっというのが、これからのアジアダイナミズムと向き合うときにはものすごく重要になっていまして。東京を取り巻くように圏央道という高速道路が整備されています。鶴ヶ島インターチェンジのところで、関越自動車道に繋がるんですけども、ようするにこれがすごく意味があるんですね。関越自動車道を使って日本海側の港湾に繋ぐっというのが。つまり首都圏の産業立地にとってもすごく大きな意味を持ってきてしまっている訳です。実は名古屋港、つまり愛知東海ブロックにおいても、北陸東海自動車道の意味がどんどん重くなっているんですね。北陸側からの港湾から、ようするに日本海物流に載せるっというのがですね。しかもこれ、あとでこの資料をよくご覧になってる訳ですけど、いま2ページに日本の貿易相手国のシェアの推移という細かい数字が載っていますけど、今アジアとの貿易が日本の貿易の約半分です。これ10年後に間違いなく6割を超えます。この流れが日本海物流とリンクするんですね。

ですから、これ国土交通省の国土形成計画のその言葉、僕自身が参画してきましたからなんですけど、使ってますけど、対流。対流っというのはお風呂をかき混ぜるときに使う対流っというのはですね。日本海側と太平洋側を戦略的に対流させるっというのが、日本

の財布事情にとって大変重要だという論点が、僕は大変大切だというふうに思っています。

いずれにしても、このアジアダイナミズム、日本海物流の時代というのに、じゃあ横浜がどう向き合うのかということが、ものすごく戦略的に問われてくるっていう問題意識を、僕はここで今日一つの大きな柱として提起しておきたいわけです。

で実はその次のページに、これで僕の今日のレポートは止めておきますけど、5ページ6ページにアタッチしてるのがなんだったっていうと、私が率いている日本総合研究所が県民幸福度ランキングの分析というのを5回に渡って、一年おきに積み上げて来ています。これは、鉛筆なめて県民の幸福度、幸福なんていうのは相対的な概念ですから、定性的な分析だと思われるかもしれませんが違うんですね。

ここに書いてあるようにビッグデータ解析なんです。つまり基本指標、さらにですね、健康・文化・仕事・生活・教育に関する指標を選び出して、客観的に対比できる数字で分析できるものだけを積み上げてですね、県民幸福度ランキングというやつをビッグデータ解析でやってきているんです。で、色々な意見を受けて改定の度ごとに地方公共団体と向き合って、例えば2014年度版から出ているんですけど、指標を付け加えていっています。

そこでまず横浜港が背負っている神奈川県県民幸福度ランキングなんですけど、これ基本指標においては、きわめて恵まれた地域にある訳で、第3位なんですね。たとえばあらゆる面で、人口だとか財政の健全だということをとって、基本指標だけでいうと第3位なんですけど、神奈川県はこのトレンド見ていただいたらわかりますけど、じわりじわりとランクを下げてきています。都道府県の中で今24位というのは客観的な位置付けだと言っていいだろうと思います。

何が一番、ようするに例えばその全国トップクラスの指標であり、取り組むべき課題はどういうところにあるのかというのを抽出していますので、あくまでも参考値として、背中に背負っている、横浜港が背負っている神奈川県というテリトリーがどういう経済産業構造を持っているのか、で県民にとってどういう意味合いを持っているのかということを考える指標として、これをじーっと眺めていただいたら、なぜ神奈川が全国の都道府県ランキングで24位なのかということについて多分腑に落ちていただけるだろうと思います。

今度は右の横浜市なんですけど。これは政令指定都市におけるランキングなんですけど、政令指定都市は日本に20あります。その中で横浜は8位だってことなんですね。どうして8位なのか。例えば基本指標1人あたり市民所得においては全国1位だと。それから様々な意味で全国をリードしているような指標というのものもある訳なんですけど、今後考えなければいけないポイントがどこに横浜というのは抱えているのか。私が言いたいのは、港湾のことだけ視界に入れていちゃダメだということなんですね。背中に背負っている産業構造、背中に背負っている経済構造、そしてここに生きてる生身の人間としての市民とかですね、県民の、ようするに、あえていうならば幸福度というんですか、そういうものも視界に入れながらですね。さて、港としての横浜、どういうふうにしていくという大きな問題意識がないと、我々のようするに方向感が見えないだろうと思うから、あえてこういう資料を付け加えてみましたと。

今日はこれを踏まえる必要もないんですけど、各委員の意見をしっかり聞いてみようというのを積み上げようと思ってますので、議論を進めていきたいわけですけど。まず、横浜のプレゼンテーションと私のレポートを踏まえてですね、質問ないし意見のある方はぜひご発言いただきたいというふうに思います。いかがでしょうか。

どうでしょうか。はい、平尾さん。

【平尾委員】

横浜市の方から、横浜港についての基本的な状況の分析と、今、寺島さんから、グローバルな視点から見た横浜のお話がありましたけど、まず、横浜港について、港の競争力っていうか、強化からいくと、よく3Cっていうのは言われますね。3CのCというのは、あのCargoですね、貨物とその背景地からどこまで港に集まってくるかっていう、そのCargoのCargoVolumeっていうのは、1番目のCです。で、2番目は、そのポートチャージ等も全部入れた、コスト、港の港湾機能のコストが。それからあとは、その3番目のCはConvenienceっていうんでしょうか、やはりその港湾機能の、レベルの高さ、使い勝手が良いこととかですね、そういうことだと思っんですけども。

そういう点からいきますと、今日お話いただいた港湾機能の全体的なことはよくこれで分かったんですけども、こういったその3つの指標から見て、どうなんだろうかと。将来ですね、そういう点が1つ知りたいなというふうに思ったところであります。

それから、寺島座長からのご報告については全くそのとおりで思っんですけども、ただですね、その日本海と太平洋の物流が繋がっていくということは、貨物の種類とかですね、貨物の内容とかによって、かなり色んなあれがあるんじゃないかと。したがって、全部がこう日本海の方にくるんでなくて、やはり日本海と太平洋の港湾の、機能分化、あるいはその背景にある産業構造の違いとかですね、そういったことと、それからそのアクセスコスト、流通コストですかね、そういったものをもう少し詳しく知りたいなっていうことを、ちょっとお話を伺って感じました。以上です。ありがとうございます。

【寺島委員長】

質問、ご意見伺いたいと思いますけど、いかがでしょうか。

今の点についてですね、僕の方から、まとめる意味じゃないんですけども、僕の説明の1つの流れとして、我々が確認しておきたいのは、この京浜の港湾っていうのは、横浜も含めてなんですけども、急速に輸出港湾から輸入港湾化してきてるってことなんです。1つのキーワードが、市のレポートにもありましたけれど、で、それが1つ重要なポイントです。

それからもう1つは、そのトランスシップっていうですね、さっき横浜が、その内港貨物ですね、他の国内港湾との連携を重要にしてるっていうことなんですけど、トランスシップっていうやつをですね、やはりこれから1つのキーワードにした戦略っていうのがいるだろうなってのが、僕の申し上げたいポイントです。

平尾さんが言うように、産業別あるいは業態別でもって物流っていうのは大きく変わり

ますから、日本海と太平洋側をどういう風に戦略的に繋ぐのかっていうのは、より、きめ細かい戦略が必要になってくるっていうことも確かだろうと思います。

幸田さんが手挙げておられるんですね、はい。

【幸田委員】

ありがとうございます。今お聞きした話、全くそのとおりで、委員長のお話、よく分かりました。そのとおりだと思っております。ただ、1つこの点はどうなのかなと思ったのは、今おっしゃるように、輸出港から輸入港の方にシフトしてるっていうことですが、日本の経済を考えた場合には、やはり輸出というものが果たす、貿易が果たす役割、大変大きいと思うんですね。

そういう意味で、日本の底力、経済を底上げするには、輸出港として、横浜が本当に、中心的な輸出港だと思いますので、輸出港としての機能をどう、こう向上させていくかという観点が必要ではないかなということが1点。もう1つは、やはり、東京湾の方は大消費地を抱えていますので、これは輸入港であって、大きな振り分けとすればですね、で、横浜の方は、輸出という。東京と比較すると、そういうことが言えるのと。

最近の統計を見てますと、輸出については、東京湾から、横浜湾の方に、ややシフトして、コロナ後ですけどね、シフトしてるっていう傾向も見えるんじゃないかっていうふうに思うところで。やはり輸出港としての役割を強化するにはどうしたらいいのかということをややはり検討すべき、ことがあるんじゃないかなと。で、前回、河野先生がおっしゃられたように、私も港湾機能について、この山下ふ頭という立地条件、それからその臨港地区であり、また、あの保税地域であるということを生かす、そのためにはどういう、この山下ふ頭の開発計画を検討したらいいのか、港湾機能の強化をどうしたらいいのかということもしっかりと議論する必要があるんじゃないかな、というふうに考えてるところであります。以上です。

【寺島委員長】

河野さんが先に手を挙げておられるので、じゃ、河野さん、お願いします。

【河野委員】

ありがとうございます。今のその横浜港のその強化というお話なんですけれども、かつて日本の国内で産業がたくさん物を生み出していた時代は、日本国内の荷物で十分に横浜港から積み出すものがあったと思うんですね。

ところが、なかなか日本の産業構造はそういう風にその物を作るものではなくなり始めて、ただ、最近それがまた戻ってきているというお話もございますから、そこをどれだけ日本、少なくとも18メートル水深の岸壁を持っているのは、太平洋側というか、日本全国で横浜港だけな訳ですから、そこをやはり活用する方策を日本全国として考えないといけないのだろうと思います。

で、釜山港がなぜ強いかというと、それは背後にあのヒンターランドとしての中国があ

り、それから日本の日本海側の港からも、実は釜山でトランシップをしているという現実があって。そうすると、日本国内の荷物をいかに横浜港に集めてくるかという、これはもう政策上の支援をしないとイケないと思います。最近、内港の船舶が少しずつ、特にコンテナ船が大きくなって、かつ、それが日本海側と太平洋側を結び始めていますので、こういう荷物をできるだけやはり日本の荷物として日本から出すという認識を持たないといけません。そのための政策誘導が必要だろうと思います。

もう1点は、日本だけの荷物では、おそらくやはりボリュームとしてかなわないわけですから、いかに、あとは東南アジアからのトランシップを促すか。その時に、例えば、日本に持ってきて、付加価値をつけて日本から出すというような方策を考えないといけないのではないかというふうに考えております。そうすると、東南アジアから例えば北米、ヨーロッパに出る荷物というのは必ずしも決まった港を経由しているわけではないようですので、これを日本に引きつけるためには、日本の港が魅力を持たないといけません。で、選ばれる港に横浜港をしていかないといけないと思うんですね。私は、ですので、山下ふ頭のこれだけ大きな跡地も、そのような目的に資する計画であるべきであろうというのが個人的な意見でございます。

ありがとうございました。

【寺島委員長】

ありがとうございました。どうぞ。

【北山委員】

このファクトシートは港湾局の方で作られているので、最初に、港湾機能の説明があったと思いますけども。この中、28ページを見ているんですけども、世界港湾別コンテナ取扱個数ランキングっていうのが、90年、95年、22年と、こうありますけども、この90年、95年の上位にあるロッテルダム、ハンブルグ、ロサンゼルスっていうのが、都市機能に変換して、港湾のところ、港湾のエリアがですね、ウォーターフロントが大きく都市機能に変換されていくという、港湾機能から都市機能に変換するというような動きをしている都市が港湾ランキングからは下がっていつていると。こういう大きい流れが20世紀後半から21世紀頭にあったということだと思います。

それで、横浜も、今見てると、本牧ふ頭の方に、ほぼほとんど物流は移ってますので、インナーハーバーを港湾機能として考えるというよりは、都市機能としてどうなるのかっていうのを考えるのが、大事なんじゃないかなと思います。ですから、この会議自体が港湾局が仕切ってらっしゃるので、都市整備という概念からいくと、もう少し違う見方が出てくるだろうと思います。

港湾の機能の話だと、私自身はですね、学生時代に山下ふ頭で沖仲仕のバイトやったことあるんですけども、市内からミニバスに乗せられて、ふ頭で荷物の上げ下ろしなんてやっていましたけども、その頃から比べると、もう全然そういうふ頭の機能も変わりましたし、業務も変わっていると。そうすると、インナーハーバーをどうするかっていう、新し

い横浜の都市のあり方を考えると、当然、港湾の都市から始まってますけども、背後にある大きい横浜市という、都市全体、全域の問題として考えていく必要があるんじゃないかなと思います。

それは寺島委員長から、日本海物流って話を聞いて、すごく、あ、なるほどと思ったんですけども、ある意味では、太平洋側っていうのは、違う、港湾に特化するのではない、違う方向にどうもいく可能性がある。もう当然、港湾機能も持ってますけど、それで世界で競争していくというものではなくて、違う機能を持っていくんだろなというふうに思いました。

【寺島委員長】

ありがとうございます。いかがでしょうか。どうぞ。

【内田委員】

いいでしょうか。ありがとうございます。寺島先生のお話は、非常にこう、横浜市はもう少し危機感を持つ側面も大事だよねっていうお話だったかなというふうに受け止めまして、横浜市の今のプレゼンテーションで、横浜港これだけ整備してきてですね、素晴らしい機能を持っている、確かにそうだと思うんですけども。一方で、その世界引いてグローバル経済を見たときに、それが意味横浜港がスルー、日本海物流が盛んになってスルーされていく可能性も将来的にはなくはないんだよっていうような、お話をいただいたと思って。じゃあ、その時に横浜はどうするんですか、っていうようなことも一方で考えていくべきでしょうというご提案というか、あのお話だったと受け止めました。

また、その幸福度ランキングっていうお話をしていただいた時に、多分皆さんがこう思っている、イメージしている、横浜豊かだね、なんか街としていいねっていうものですね、実際、じゃあデータで見たときに、あれ意外と低いねと、そういうようなところのギャップっていうのをお示しいただいたんだと思うんですね。

じゃあ、その中でなぜ数値が低いのかと。もっとこれをこう上げていって、市民の幸せというのはどんなふうにあげていくんであろうかということも、都市整備というところを考える時に必要なんじゃないかっていうようなことをおっしゃっていただいたというふうに思います。

私、港湾の方の審議員もやっておりますので、ほんとにベイブリッジから向こう側、こっち側はもうなかなか巨大コンテナはもう入れないという現実があつてですね、その本牧ふ頭と南本牧ふ頭の方で、整備されている、どんどんね、その港湾機能は整備されているっていうところでご尽力されてきたっていうのは知っておりますので。そこをさらに、合理化していくとか機能化していくっていうことはあつて、でも、こっちのインナーハーバーの部分は、この2014年の時の決定でも位置付けとしてもありますように、臨海都心部の新たなにぎわいの拠点として都市的な土地利用を転換していくんだというように明記されていますので、やはり、そういうようなところで、いかに横浜港というものの新しい産業創出ですよ、そういうものを考えていく場であるんだと。そういうようなことな

んだらうというふうを受け止めさせていただきました。以上です。

【寺島委員長】

ありがとうございました。大体そこで次のプレゼンテーションに移りたいんですが、僕の方から事務局にですね、もう1点、これは実はこの会の趣旨とか狙いとはちょっと違うけどですね、すごく重要な気になる点なんです。

ニューヨークニュージャージーポートオーソリティっていう機関があるんですね。要するに、空港も港湾も一括管理してるんです。要するに、ニューヨーク側の海の港も、空の港も、ニュージャージー側の海の港も空の港も、一括管理してると。

貨物ってのはですね、日本の産業構造の高度化もあって、どんどん、どんどん、要するに、ロットの大きなものを港からダウンと大きな船で運ぶっていうだけじゃなくて、航空貨物で対応していくようなハイテク型の物流ってのも、ものすごく重要になってくるわけで。

本当のこと言えば、この京浜港湾という、海の港だけじゃなくて、空の港としての羽田とも含めてですね、そういった視界でほんとは議論しなきゃいけない部分もあるんですけど、これはより大きな視界でのですね、その国土交通戦略の大きなポイントになってくるからですね。我々としてはこういう方向がありうるんじゃないかっていうことを意見として言う、可能性はですね。その報告書の中であるかと思えますけれども。このポートオーソリティの現状についてですね、ぜひ、みんなで問題意識を共有すべきだと思うんで、調べてもらいたいなというふうに思います。

幸田委員が手挙げてるわけですね。どうぞ。

【幸田委員】

今ちょっとご発言があった、委員のご発言については、ちょっとどうしても申し上げなければいけないので、発言させてください。

2014年の方向性とおっしゃいまして、港湾機能から都市機能へ、それから平成27年、これ同じですけど、山下ふ頭再開発基本計画、これについては、この委員だった方4人に私は直接ヒアリングをしましたけれども。

この時の計画の検討については、IR、カジノを誘致するための前捌きをするものであったというふうに、市の当局自身が言っていたというふうに聞いています。今回は、今の市長になりまして、こういった、山下ふ頭再開発基本計画っていうのは、最初のパンフレット、市民アンケートを取った時には入ってて、これは非常に違和感があったんですけども、前回の資料、今回の資料にも出てませんので、特に言わないでおこうと思ったんですが、今ちょっとご発言がありましたように、この平成26年、27年の計画は、カジノの前捌きをするという、そういうことで進めていたということで、大変不透明であり、かつ市民に対して不誠実なものであったというふうに認識しております。

そして、これは、今の市長になって、これをリセットして、この検討会で1から検討するということですので、そういうこともあってかなと思ってましたが。前回のこの委員会の

資料から落ちてましたけれども。したがって、前、こういうふうに港湾機能から都市機能へということになっているっていうことについては、これはもう前提とすべきではないということをまず申し上げたいと思います。

したがって、港湾機能、都市機能、いずれにしても、しっかりと検討して、どのような方向性を出すかということをこの検討委員会で議論すべきであると。あの1つ、やはりどうしてもですね、市のほうが、例えば国際展示場っていうのも賑わい拠点というところにかつ分類されていたりするんですけど、国際展示場っていうのを複数の法人が提案してますが、これは国際貿易展示場であって、いわば臨港地区保全地域を活用して、そこで商売ができる、入管手続きもしなくてできる、こういうものとして提案されているもので、やはりこれは港湾地区、それから保全地域ということを活用して、この山下ふ頭をどのように活用するかという提案ですので、しっかりと港湾機能の強化についてやはり検討した上で、どのように方向を目指すかというのを、この検討委員会でやっていただきたいと思いますので、先ほどご発言があったような、以前そういう計画があって都市機能へとなっているということについては、ちょっと私としては聞き逃すことができないので、コメントさせていただきました。以上です。

【寺島委員長】

聞き逃せるかどうか別にしてですね。僕はやはりそのインナーハーバーとしての都市機能っていうものを見つめないで我々の議論にはならないと思います。

【幸田委員】

それはもちろんです。

【寺島委員長】

なぜならば、我々がやろうとしてる、今日の説明の中ですごく重要なポイントの1つがですね、あの山下ふ頭と、つまり横浜港の港湾機能を強化していくっていう努力がものすごく重要です。だから18メートルだとか、要するに先端的な競争力のある港湾にするっていう方向感を出していくっていうのは最もな議論なんだけど、じゃあ山下ふ頭がですね、それじゃあその18メートル化するかって言ったら、そんな話じゃありませんよねっていうのはさっきのポイントなんでですね、それは我々としてバランスよく認識しとかなきゃですね。話が進まないで、こう思います。

【幸田委員】

はい、おっしゃるとおりだと思います。

【寺島委員長】

じゃあ、まあそういうことで、いよいよ、あの、今日の委員のですね、皆さんの意見もしっかり聞きたいんで、プレゼンテーションをお願いしたいと思います。じゃあ、涌井委員

からお願いいたします。

【涌井委員】

それでは、私の方からプレゼンテーションということなのですが、その前に、せめて今日のファクトシートなり、あるいは寺島座長のお話というものを、我々の耳に入れていただきたかったなというふうに思うところであります。

私はですね、この山下ふ頭の取り組みをどういうふうに位置付けていくのか、これはそう簡単には答えが出るものではないというふうに考えておまして、一番重要なことは今委員長の方からもファクトシートで、非常に厳しい現実というものを見据えろというお話があったように、巨視的に考えて、それで段階的に整備していくという、こういう計画論をどのように持つのかと。一挙に何かを作り上げていくという一つの考え方というのは馴染まないというふうに思っているわけでありまして。それはおそらく委員長もご同意いただけると思いますが、世界の動きというのは急速な動きがございました。今確かにそのアジアダイナミックに対して日本はどうするんだという話であります。じゃあ10年後、同じシチュエーションであるのかというと、必ずしもそうではない可能性もある。そういう様々な観点からですね、我々はどんなふうに戦略的にこれを誘導していくのかということが非常に大事なんじゃないだろうか。

私は今の時代というのはトランスフォーマティブチェンジと言いますか、文明の転換を促すほどの大きな時代の流れの渦中にあると。そこで横浜の持っている不易と、それからくるであろう流行というものをどのように組み合わせたらいいのかということが、非常に重要な戦略なんではないかなという論点から、今日の話をしていただきたいと思えます。

もうこれはですね、私が説明するまでもございませぬ。先ほど寺島委員長の方からも、それから横浜市からもあったわけですが、広域で戦略を考えて地域で差別化などの構想を練るということでありますけれども、実は日本のですね、特に京浜地域の臨海部というのは、大変な立場に置かれていると。かつて今から、私が若い頃でしたから、40年ほど前に飯島先生が、いわゆる臨海工業地帯の立地案というのを作って、日本全国に埋め立てが進められました。

それはいったい何かというと、原料をそのまま工場の脇に船でつけて、そして加工したものをまたすぐにその工場の脇から輸出をするというようなことで、いわば臨海工業地帯というものがどんどん整備されていった。しかし、今のそのアジアダイナミズムの話も含めて環境問題もあって、原産地で原料を供給する場所で工場を立地させる、あるいは加工の工場を立地させる方が合理的ではないかとか、ロジスティックコストからみたらどうなのか、という形でどんどん実は生産の拠点が移り、同時に製鉄業を含めて、どこに集約していったら最も合理的なのか、つまり非常に非効率な昔の炉を使っているよりは、最先端の炉を作った方が環境負荷も少ないし、非常に生産性も高いというような形で工場移転というものが起き始めて、今お隣の川崎市では、もう相当規模の、300ha近い、あるいは周辺も入れると400ha近い土地が空いてしまうと、こういうような状況が出てるわけですね。

これは実は京浜工業地帯全体にそういう傾向というものが起こりうる可能性が強いと、そういう中で山下ふ頭の問題はどう取り組むの、という課題があるという位置付けをしながら、この山下ふ頭を臨海部再開発のモデルというような自負を持って取り組むということが非常に重要なのかなど。港湾という機能と、そしてまちづくりという機能と、これを両用一体にしてどのような解を導き出すのかということが非常に重要な手順じゃないかというふうに私は考えています。

その時に、どうしても私は今GreenExpo2027というところで色々、国際園芸博覧会のことも手掛けているわけでありますので、港湾地域だけを見ていくという目線ではなくて、内陸とこの港湾をどう一体的に考えていくのかという。先ほど日本海と太平洋のリンクというのがありましたが、そういう考え方を見ていきますと、実は横浜は、実に巧みに首都高やその他高規格道路との連携というものを図ってきたな、というふうに見ることができるんじゃないかと思えます。

皆さんから見て左側は土地利用で、右側が一つのコンセプト図でありますけれども、とにかく横浜北西線というものが首都高で繋がって以来、極めて内陸部、最奥部とそれからこの地域がリンクしているということは言い得るのではないだろうか。仮に山下ふ頭のことをちょっと置いて、上瀬谷の辺りに何が可能性があるのかと言いますと、ご存じのとおり、あそこにはズーラシアがあります。

そして今度の博覧会では、植物という、生物多様性条約の中で最も重視しなければいけない、種や生物多様性を保全していくという過程の中で植物に焦点を絞った博覧会になりますので、そういたしますと、この動物と植物が相並んでですね、言ってみると世界の中で言うところのイギリスのですね、ご存じのとおり非常に片田舎でものすごい観光客を集めているという場所が英国にはあるわけですが、それと同じような機能を持ったバイオスフェアと言いますか、地球の生物圏、生命圏の尊さというものを知らしめる拠点にもなるかもしれない、それがここに（仮称）YOKOHAMAバイオスフェアキャンパスという名前がつけられた、博覧会後のレガシー、ズーラシアと組んでですね、都市農業も交えたレガシーというものがこの辺に作られて、同時にそこをずっと都市農業の地域が包んでいる。そういう場所をヒンターランドに持ちながらですね、今度は外交港湾と言いますか、ロジスティック港湾として本牧、南本牧、新本牧という形で整備が進んでいながら、ベイブリッジによってインナーハーバーはですね、別の性格を持たざるを得ないと。

こういう中のまちづくりとですね、こういうヒンターランド、ヒンターとの対比の中でどのようなまちづくりを進めていくべきなのかということもしっかり考えていく必要があるのではないかとということが二番目の提案になります。

それから3番目の提案は、既往の概念に無い柔らかかで有機的な空間の創出をしよう。これ何かと言いますと、実は我々が今議論をしているんですが、おそらくこの山下ふ頭で整備された何物かを一番メインに利用する世代というのは、我々がどれほど急いでも実は完成には10年かかる。で、熟していくのに約20年くらいかかるだろう。

すると20年先の人たちがどういう市場行動をとるのか、購買行動をとるのか、あるいはライフスタイルを持つのか、もうこういう話になるわけですね。それは例えば今ここにも

ございますように、ミレニアム世代とか、Z世代とか、我々の既往の概念ではとても計り知れないような価値観、そうしたものを持った若者がここのメインのユーザーになっていく。そういうものをターゲットにして何を描き出すのか、その頃に世界はどんなふうに変わっていくのか。これは寺島委員長が今日ファクトシートで示していただいた、ご提案の中で示していただいたところとも共通するわけですが。その頃の要するに世界の状況はどうなのかということと、日本の若者、ミレニアム世代、Z世代がですね、何を重視していくのかということをしっかり考えていく必要があるのではないかと。

その時に先ほど申し上げました、古のものは大事にしてですね、新しいものをそれに添えていくんだと。その時に私ふっと考えたのがですね、実はハマっ子というブランドのことなんです。非常にポピュラーな、さっきの高尚な話から非常にポピュラーな話になって恐縮なんですけど、ハマっ子ブランドというのはですね、我々は昔、非常に横浜を考える時に尊重してきました。私の世代ではないんですが、私より遥かに若い世代はハマトラなんていう、そういうファッションすら生み出されたと。つまり、横浜というのは、ある種の地域的な特性みたいなものをファッションというものに象徴させながら、いわばアイコンとして、横浜のカルチャーや、あるいはこの品格というものを表現していったという時代があったことを忘れてはいけないんじゃないかと思います。改めてどうやって我々が、しかし残念なことにこのハマっ子ブランド、あるいはそのハマトラなんていうのは、どんどんどんどん過去の歴史の彼方になってしまっていて、それを改めてイノベーションしようという状況になってない。これをもう一度横浜ブランドを、シティのブランドと言いますか、まちのブランドをもう一回磨きあげるという作業を、どれだけするのかということは、実はこの山下の再開発の性格や構造というものと非常に密接不可分なのではないかという気がします。

これからの若者はですね、おそらく二つの価値で動いていくんだらうと。一つは環境価値、もう一つは感性価値。この環境と感性というのが非常に重要でですね、こういうようなものが結果としては大きなマーケットを作っていくことに我々は目を向けなきゃいけないのではないかと、こんなような気がいたします。つまり、価格を決定するものは何かということ、従来の機能的な価値だけではないんだと、情緒的な価値と自己実現価値というものが合わせ持って、いわば市場価格が決定していくというマーケットができる中で、じゃあ今我々は何をしなきゃいけないのかと。国内外の新たなサービス価値を求める世代の訴求効果に応えられる土地利用、これをどうやって考えていくのかということ考えた時に、今申し上げたように、環境価値と感性価値が非常に優れていて、しかもこの横浜ならではの横浜ブランドというものが三位一体になったような、そうした事業というものをどう創出できるかということに全てがかかっているというふうに思います。もう一度このミレニアム世代とZ世代のいわば特徴というものを少し大きくして見ていただくと分かるかもしれませんが、全然我々とは違う価値観を持った市場が出現するというにはしっかり着目しておく必要があるんじゃないだろうか。X世代なり、あるいは我々の世代でものを考えて、こうした世代からそっぽは向かれないような、そういうことをどういうふうに考えていったらいいのか。例えば、ミレニアム世代ではですね、自分らしさや平

等、リベラル、真正性、利便性、個性、自分のスタイルというものがある。それからミレニウム世代になるともっと絞られてきてですね、その関心事が明確でカスタマイズされたものであって、人に自慢をしたり、特別感を持つこと、自身がですね、自分の差別化に繋がるというようなところにも繋がっています反面、非常に孤独な個性を楽しむ、一人旅行とか。それからコスパ、コストパフォーマンスというものに非常に敏感であって、環境への影響とか地域との関係というのは意外と重視すると、こういうような人たち、こういう人たちの個性をどのように我々が誘因していくのかということが非常に大事なんじゃないだろうかなと。繰り返して申し上げますけど、少し小さいところで見えないものを大きくしたわけではありますが、こういうような方向をどのように考えていくのかということなんだろうと思います。

私は今のところ頭に浮かぶことはですね、高度海陸物流ゾーンと、それから先ほどの、ちょっとここに本牧の方のことは書いてないですが、高度高速物流港湾機能と、それからシースケープ再創造エリアというのがあってですね、これはいわば港というものをランドスケープの背景にして考えていって、新たな他では生み出すことができないライフスタイルなり、あるいはランドスケープのシーンをこしらえて、これに支えられたエキゾチックゾーンと洒落町ゾーンのようなものを考えながら、その背景にはDXとGXがミックスしたような新業務核みたいなものを作る。それをくるむような形で、先ほど申し上げた内郭としてのグリーンインフラ再整備ゾーン、これを海岸段丘のところにもそうした緑がついてます。それに加えて先ほどの横浜市全体の、上瀬谷を含めたいわば都市農業のグリーンゾーンというものを一体的にして、いわばデジタルとそれからリアルというものが非常に上手くミックスユースした土地利用というものの中で、ここにどういう象徴的な施設を持つてくのか。その内容というものをこれから皆さんと一緒に議論していくわけですが、私はいくつかのキーワードがあると思っています。一つは、固定的なものを作っているのか。必ずしもそうではないんじゃないか。自由で可変性のあるもの、あるいは施設ですね。それからそこに行けばエシカルライフスタイルというものが、しっかり実感できる。で、そういうものに自らが体験し、同時に参加できる、そういう場であって欲しいなど。それからもう一つ忘れてはいけないのは、爆発的なエネルギーですね。これはヨーロッパに行きますと、スペインのバルセロナの沖合にイビサ島というのがあります。このイビサ島というのは何で観光が賄われているかということですね、世界中のビッグスターがみんなそこに行くわけですけども、ひょっこりひょうたん島みたいな恰好をしております、片方の島は、歴史的な世界遺産、片方の島は、5000人収容ぐらいのいわばディスコ、クラブですね。これが6つも8つもあると。このクラブのその爆発的なエネルギーを求めた若い人たちが行く。そして静かな世界遺産の方には成熟した人たちが行く。これが上手くミックスユースになってですね、大変な観光客を集める。こういうような、何か様々な今、我々の頭の中に既往のデータとして残っていないような、新たなクリエイションをどう作っていくのかということが、これからの課題じゃないかというふうに考えているところであります。以上です。

【寺島委員長】

どうもありがとうございます。何かご質問なりご意見あれば。いかがでしょうか。

【全体】

(発言無し)

【寺島委員長】

涌井さん、僕は涌井さんらしい、やわらかいプランというのを感じ取るんですけれども、世代ということを持ち出されているのはすごく重要で、我々を越えた世代の人たちが、ここを評価し、エンjoyできるような場でありたいという気持ちは全く共有なんですけれども、逆に世代を越えてやらねばならないこと、今、例えば僕はその一つのキーワードはレジリエンスだと。市民の安定・安全を図るための、例えば医療とか防災とかっていうものについて意味を持つような場とか。さらに言うならば、市民からの意見の中にもその言葉がものすごく、涌井さんも使ってたけど、「参画」ですよ。つまり何か上から目線でね、こういうプロジェクトをぶち上げるんだというのではなくて、市民が参画できるようなものを意図するということがすごく問われていると思うんですよ。それともう一つは、もうとにかく時代を越えて、おっしゃっていた生物多様性とか、生命圏というような視界を持ったものと、どうリンクさせるか。このあたりが世代論を越えたプロジェクトになっていくんじゃないかという、別のアングルからの、僕自身の見方があるんだけど、そのあたりの噛み合いじゃないかなと僕は思っているんですけどね。

【涌井委員】

おっしゃるとおりだと思います。いわば防災の問題というのは実は深刻でありまして、横浜やあるいは国も今、上瀬谷の公園の地域に広域防災の拠点を作ろうと。それと言うのはどういうことかという、もし首都圏に大規模な災害があった場合に、どうしても東名から首都高に乗れないんですよ。なんとなれば、車が上に全部びっしりになっちゃって、日本中、西方から来た自衛隊や警察は、どこかでそういう条件を開削しなきゃいけない。そのために待機する場所が必要だと。ということで、東名からインターができる、それで物流センターも計画されているですね、この上瀬谷こそ、チヌークのような大型ヘリも着陸の可能性があるし、ここに大きくいわば滞留するという拠点として、上瀬谷について位置づけようという議論も今でてるわけですね。仰せのとおり、横浜は関東大震災のことを振り返ってみてもそのとおりでありまして、実は山下公園もその残材を全部海に入れて、その結果出来上がった公園であるということを我々忘れてはいけないということですね。横浜はおそらく相当の問題があるだろうと、そうしたときに先ほどの北線なり、北西線という首都高の路線が、あれ高架になってますんで、下が燃えていても十分に救援活動ができる可能性もあると、そういったものを一体化しながら非常に安全で安心できる地域なんだよという一つのブランドも非常に重要。レジリエンスな、リダンダンシー性の高いブランド、まちづくりとしても考えていくというふうにし続けるということも重要な論点だと思います。

ます。ありがとうございました。

【寺島委員長】

それじゃあ次、時間の関係もありますので、北山先生お願いいたします。

【涌井委員】

じゃあどうもありがとうございました。

【北山委員】

北山です。今日はパワポですが、大学のレクチャーで使ったパワポを少し編集して持ってきたので、冗長な部分があります。それと昨日ですね、発表の時間を間違えたのに気が付いてですね、すこしスライドを飛ばしますので見苦しいですが我慢してください。

私は横浜国大で建築を学び、その後、2016年まで横浜国大で教鞭をとっていました。横浜には長い付き合いがあります。今日は横浜の都市デザインについて報告したいと思います。これは人口動態です。明治維新から、社会は拡張・拡大してきました。明治は殖産興業を目指してヨーロッパ文明の社会システム、あの、ヨーロッパであることが大事なんですけれどもヨーロッパの社会システムに置き換えられました。戦後はアメリカの社会システム、その中でも民主主義に伴った資本主義が導入されました。そして現在は縮減または定常型社会を迎える文明の変換点、涌井先生もおっしゃっていましたが、文明の変換点にある、そういうときだと思います。世界では過半の人間が都市に住むようになりました。都市社会学によると、都市型社会では人口が減少することが報告されています。アフリカを除く世界では人口減少が実は始まっています。人口の減少は定常型社会に着地させる新しい文明の入り口であるという見方もできます。ヨーロッパ文明圏での近代都市は、パリのオスマンによる大改造が1853年から17年間で行われ、現在の形を作っています。アメリカ大陸では1871年のシカゴ大火の復興計画で、現代都市の原型が作られ、20世紀初頭から恐慌までの約30年ほどで現代都市モデルとしてニューヨークが生まれています。20世紀はこの現代都市類型といいますけれども、この類型で世界のほとんどの都市が覆われています。シカゴ学派という都市社会学の学問領域があります。資本主義が作る都市、シカゴを中心とした資本主義が作る都市を観察しています。完全な土地の私有制度と高度に自由な市場経済という前提条件で、その社会制度が作る現代都市の形を調べています。資本の自由な振る舞いに任せると、都市の中心部にオフィスビルが立ち並び、郊外に専用の住宅地が貼りつくというものです。この都市構造の中で職場と住宅が分離し人々は切り分けられ、共同体が弱くなり、ジェンダー差別が拡大するということが報告されています。横浜は165年前開港を受け入れ港が作られたことから始まります。日本で初めての都市計画街路が関内に作られました。1923年の関東大震災で市内の80%を壊滅しています。1945年の横浜大空襲でまた再び壊滅します。そして、東京に近い港湾だったので、1960年まで都心部は米軍に接収されていました。今でも接収されている瑞穂ふ頭が残っています。横浜は本土の中で最も戦後復興が遅れた都市でした。現在の横浜はここからスタート

しています。

50年前、ベイブリッジもみなとみらいもありませんけれども、この時私は大学で横浜で学んでいました。現在の横浜の都市の形をつくる試みは1963年から始まる飛鳥田市長の時に始まっています。横浜市には地方自治体の最上位の全体計画として、横浜市基本構想、長期ビジョンが設けられています。最初につくられたのは、高度経成長期を終え、経済大国になった1973年、そして次につくられたのは33年後、人口がピークを打つ2006年です。1965年に横浜市は街づくり構想、都市と書いてまちづくりと読ませます、という50年後の未来をつくることを目指したプロジェクトを始めます。この構想の中心人物は後に横浜市の企画調整局長になった田村明さんです。強い自治意識をもって市民の政府としての自治体を目指します。1973年の長期ビジョンには、都市の運営を短期的な視座ではなく、中長期的な総覧が必要とします。短期的な計画ではなくて、都市というものは人間の生命スパンを超えた視座が必要であるということが書かれています。街づくり構想は6大事業という6つのプロジェクトによって拡張・拡大する都市を構造化しようとするものでした。急激に住宅地開発が行われる郊外を含めた、横浜市全域を対象としていました。横浜の都市アイデンティティをどう作るかということが大きな問題でした。横浜駅周辺と関内地区という二極化した都心部をつなぐみなとみらいプロジェクトがここで示されています。その後2004年に芸術文化を中心とする創造都市横浜という都市構想が、横浜市の都市デザイン室長で、後に横浜市参与になった北沢猛さんを中心に提言されています。2009年には海都横浜構想が北沢さんを中心に提案されています。ここで、人口減少社会の未来ビジョンが提示されています。創造都市構想はこの時代多くの都市の未来モデルとなりましたが、横浜では既存市街地とウォーターフロントを縫い込みながら、創造的産業を、畑を耕すように育てようとするものです。先ほど都市機能を入れるということがIRの前置きだったという風に話がありましたけれどもそうではなくてこの時代から都市機能にどうやって組み込むかということが横浜市の方で検討されていました。

これは飛ばします。

田村さんの街づくり構想という50年構想が形を示した後、次の50年後を目指した海都横浜構想が北沢猛さんから提示されています。1965年に構想された街づくり構想によってつくられた部分は、この中でオレンジ色の部分、みなとみらい地区です。そして新たにブルーの部分海都構想で対象とするインナーハーバーです。海都横浜構想はリング状のインナーハーバーという横浜内港の再生構想と同時に空地・空き家の増えている郊外の住宅地を含む横浜市全体を対象とするものでした。

少しここ飛ばします。

現在の横浜の風景は、1965年の街づくり構想に導かれたもので、今我々が経験する横浜はここにできています。海から見えるシンボルであったキング・クイーン・ジャックという横浜のランドマークですが、これは21世紀に入ってから高度制限が外され、高層タワーマンションが立ち並ぶ風景の中でこのクイーン・キング・ジャックは埋もれてしまっています。

飛ばします。

アジアの各都市は港湾地区、ウォーターフロント開発を進めていますが、どこも同じような風景をもつ都市になっています。これを地理学者のフランセスク・ムニョスは、グローバルな資本市場における再開発によってつくられるウォーターフロントのテーマパーク型都市は、世界中どこでも同じガラスカーテンウォールの超高層ビルになる、という報告をしています。

先ほどの人口動態をちょっと強引に引き延ばしたんですけれども、わたしたちはこういう文明の変換点、人口が急激に増えて急激に減るということが、これは大きい変換点じゃないかというふうに見ると、産業革命以降の近代化の中で、社会が拡張・拡大し、都市型社会となり、この100年ほどで世界の都市は固有の文化が漂白されたジェネリックシティといえますけれども、そういうどこでも同じ都市風景を作っています。定常型に向かう社会では、都市は資本活動だけではなく、自然やコミュニティと共生する文化や生活の豊かさを求める場になると考えられます。横浜はその新しい都市モデルを求めてほしいと考えています。

これは10年ほど前、大学院のスタジオで研究していたヨコハマハーバーリング構想、インナーハーバーの構想ですけれども、広域のコンセプトです。水運を中心とした都市構造を検討していました。羽田とどういう連携とるかというのがかなり重要だと思っていましたし、先ほどの防災の面だと陸内の交通ではなくて海上交通がかなり重要な役割を果たすと考えていました。それからこれは横浜国大YGSAの校長だった山本理顕さんが提案するアウターリングとインナーリングです。インナーハーバーを居住のインナーリング、そして郊外にある横浜市のみ営住宅群をアウターリングとしています。横浜市の持つ市有地、郊外の市営住宅と、港湾地区の市の所有地を関連付けて、居住と生産が混在した新しい居住都市、新しい都市構想をここでは提案されています。

このあとちょっと飛ばします。

都市を構想することは、これから生まれてくる未来の人のための都市を構想することです。そして、山下ふ頭の在り様は、横浜市という都市の行方に関連します。いずれにせよこれは横浜市全域の問題として考えるべきです。山下ふ頭は市の市有地であり、民有地ではありません。小さな空間や時間、短期的利益の為ではなく、未来の市民の為の構想が必要です。未来の横浜は、市民の為の固有の文化を表現したいと私は考えています。以上です。

【寺島委員長】

ありがとうございました。今のご説明に対して、質問・ご意見あればお願いします。

【北山委員】

先ほどIRの種地として都市機能といわれたのはちょっと僕勘違いじゃないかと思うので、これはあの都市機能というのは横浜の都市をどうするのかという試みというのはずっと行われてきたことなので、それを確認していただきたいと思います。

【幸田委員】

すみませんよろしいですか。

【寺島委員長】

はいどうぞ

【幸田委員】

いまおっしゃられた点について勘違いといわれたんですけども、私が申しあげたのは、都市機能について検討するというのも重要なことで、港湾と都市の共生も重要だと思っておりますし、

【北山委員】

私もそう思っています。

【幸田委員】

ただ、すみません、私が申しあげたのは、平成26、27年の計画自身がIRを進めるための、前捌きとしてつくられたということだけをコメントとして申し上げたということだけです。都市機能がIRだということを申し上げたつもりではありませんので、

【北山委員】

はいわかりました。

【幸田委員】

そのところは誤解してないので、すみません、ちょっとだけ補足させていただきました。申し訳ございません。

【寺島委員長】

はい。僕は北山先生のこのプレゼンテーションを、今までの横浜づくりの経緯を理解するうえで大変に重要なステップだというふうに思いますので、これ共有させていただいて、構想にちょっと刺激を与えていきたいというふうに受け止めました。

【北山委員】

ありがとうございます。

【寺島委員長】

どうもありがとうございました。

で、ここで事務局の方なんですけれども、時間、これ予定調和の委員会じゃないんでね、何も無理やりに4人詰め込んで終わらせようとも思わないんですけども、今日のご感覚

どうでしょうか、今村さんまでやっていただきますか。どうしますか。それとも次回に、要するになかなかいい議論だと思うんですね、皆さんに準備していただいて、今日の議論踏まえて次の時に今村さん、村木さんにお話しいただく形にした方がね、余裕のある議論になるんじゃないかと僕は思い始めたんですけども、どうでしょう。

【事務局】

次回ご予定が大丈夫であればそういう形でもかまいません。

【寺島委員長】

それではよろしいですか、次回で。どうですか。

【事務局】

そうですね、ちょっと今後の、日程調整がですね、なかなか皆さんお忙しくて、難しいところもあってですね、もしよろしければ、村木先生にですね、今日お願いさせていただいて、ぜひちょっと。

【寺島委員長】

そうですね。そういうことであれば村木さんまでお願いします。じゃあ今村さんそういうことで、よろしくお願いします。ありがとうございます。

【村木委員】

それでは、短めにお話をさせていただきたいと思います。私専門が都市計画でございまして、必ずしも今日横浜の話をするわけでもなく、学生時代からずっとイギリスに毎年毎年行ってきて、そこで学んだ都市開発・都市計画の在り方というのを日本にどうやって役立てることができるのか、そんな形で研究をしておりましたのでその中で最近気が付いたことということをお話したいと思います。最初がですね、横浜市における排出量の経緯と構造ということを出しているんですが、これはなぜこれを持ってきたかといいますと、もう2005年くらいだったと思いますが、ロンドンに調査に行ったときに、日本はそれだけ開発があるんだったら、その頃は低炭素と言っていましたが、低炭素の目標なんてすぐ達成できるんじゃないか、そういう風に言われました。というのはイギリスは、非常に開発を行う際に排出量の削減を行うための取り組みというのをやっているの、日本が同じようにやったら、かなり都市部門でそれができるのではないのか、ということ言われたわけです。横浜の排出量というのをみると、年々減少してきている。ところが、業務部門っていうのが増えていて、これへの対応というのが求められるかと思います。しかしながら日本は、どうしても再エネの導入というのが限定的なので、どうやって今後、山下ふ頭で開発をする場合には、エネルギーの利用を減らしたような開発を考えていくことが大事ではないかと思います。そこでロンドンの面的開発というのを今度見てみたんですけども、キングスクロスの再開発、ロンドンオリンピックサイト、そしてバタシーのパワースター

ション、こういった面的開発の中では、かなり一般的な開発をするよりもCO₂の排出量削減を求めて、面的エネルギーの導入とか、グリーンビルの建設ということを積極的に行ってきました。バタシーのパワーステーションの開発というのはまだ途中の段階にありますので、下の英語で書いてあるものは細かいんですけど、何が言いたかったかというと、最初のところにサステイナビリティというのが出てくる。これが大事で、面的開発でネットゼロにチャレンジしていくことがとても大事なことであり、そして、このコロナで2年間海外調査をしませんでしたが、昨年行ったときに私が本当に驚いたのが、もう新規開発ではエンボディドカーボン、オペレーションカーボン、こういったことでゼロカーボンを目指すのが当然になっているという事でした。そうなる横濱の都市再生というのを考えた際に、どうやって排出量を下げていくのかということやどのような機能を入れるにしても考えていくということが大事だという風に私は思います。で、ロンドンではですね、新規の開発をする際には必ずネットゼロに向けた協議をしなければいけないということで、まず第一段階で省エネを図る、第二段階で効率的なエネルギーの供給、これは面的なエネルギーにつなぐということ、そして第三段階で再エネを活用する、ここで、敷地で35パーセントの排出量を削減し、これでゼロにするためにはカーボンオフセットを行う、そんな形になっています。

さらに、今では、全ライフサイクルのCO₂を検討するという事になっておりまして、この下のほうに書かれているロンドンの望ましいレベル、大規模開発については、材料・建設段階から、すでにどれほどCO₂が出るか、あと運用段階、そして建物を除却した後まで含めてですね、CO₂の排出量の計算をするということになっています。

そして、こういう枠組みがある中で、私がこの2年間で一番驚いた開発がこちらです。こちらのテムズ川の南側にあるバンクサイドヤードという再開発なんですけれども、イギリスで最初の脱炭素型の再開発事業というふうに言われています。42万㎡の8棟からなるミクストユースの再開発なんですけれども、第5世代の再開発と言われていまして、非常に低温の熱まで使った、エネルギーを使い切るタイプの再開発事業になっています。

ロンドンでは開発自体グリーンでないと投資も集まらないし、入居者も集まらない、そして、ビジネスについては、新しい世代の人たちは、これに対応する企業でないと、会社に入らない、そこまで言われていまして、ここが私は本当に日本は周回遅れではないかというふうに思った次第です。

第5世代のエネルギーネットワークってというのは、このようになっておりまして、日本はだいたい第2世代って言われております。石炭、石油から再エネを導入した地域冷暖房というのを活用して、供給温度を下げて、第5世代では20℃～25℃、日本では捨てているような温度のものも使っています。そして再生可能エネルギーの導入を再開発事業でほとんど多くのものを使うということになっているわけです。

この事業、今開発が進んでいるところなんですけれども、実際ビルを見せていただきますと、脱炭素を求めて、いろいろな取り組みがなされていました。そして、新規のこういったグリーンビルだけではなくて、地元にもともとあった駅舎の活用とか、そういった古いアイコンというものの活用も非常に考えられています。

こちらは再開発になるんですが、再開発以外でも、いろいろな取り組みがされています。こちらは1棟のビルなんですが、ネットゼロビル、ロンドンのこちらにも南側にある、サザクという区に建つ印刷工場なんですが、1959年に建てられたビルを再開発して、大規模なネットゼロカーボンビルをつくっています。オール電化で運用でのCO₂が一般的なオフィスビルの50%以下、そして2棟建ってまして、プリントビルというのの85%の構造体は再利用されています。

これを見ていきますと、非常に多くの開発価値があるということがわかります。左側が建物レベルなんですが、古いビルの再利用をして、そしてエンボディドカーボン50%の削減ということがされています。一方ですね、そのビルを建設する際に、建物の存在する期間の経済効果が非常に高いということも言われていますが、それだけではなくて、この工事に関わる人たちをですね、失業者、この地域の失業者を工事に活用して、人に対する支援というものを行っている、地元の成長のために地元の商業者をここに入れるということで、つまり、脱炭素のビルをつくるということだけではなくて、複数の地域価値、地域向上、地域貢献ということを検討していることが非常に大事だと思います。

そうしますと、今後山下ふ頭を開発する際に考えるべき点としまして、世界は脱炭素型の都市開発が一般的です。日本初の脱炭素型の都市再生プロジェクトということを検討するのも大事ではないのかなと思いました。脱炭素にプライオリティを与えることは非常に大事であり、目に見えないことは二の次になりやすいので、サステナビリティの重要性を高く提示して、脱炭素の見える化、省エネビルとか、再エネ活用の表示をして、市民に広く知らせていくということが、一つ大事なことだと思います。

また二点目に、面だからこそできることを認識していただくということも大事だと思います。エネルギーの需要というのは用途によって異なるので、最適な組み合わせを考えていくことが大切だと思います。

最後に、開発にどん欲に、複数の目的と価値を追求していくことが大事であり、最初に寺島委員長がおっしゃっていた、幸福度の中でのランクの低いもの、こういうものをターゲットに考えていくこともあるかもしれませんし、涌井先生がおっしゃっていたZ世代、これらの望むものをこの中にどうやって入れていくのかということなのかもしれません。

開発の目的の組合せを考えつつ、地域を変えて、そして価値をどうやって導入していくのかということが大事ではないかと思います。以上です。ありがとうございました。

【寺島委員長】

どうもありがとうございました。

論点が非常に重要なことを指摘しておられるというふうに思います。重く受け止めながら議論を進めたいと僕自身は思っています。

いかがでしょうか、これに含めまして、今日の段階で発言しておきたいということがあればですね、質問も含めてお受けしますけどいかがでしょうか。

【涌井委員】

よろしいですか。

【寺島委員長】

どうぞ。

【涌井委員】

大変明快なご説明ありがとうございました。私も村木先生のご説明のようですね、非常に重要なのは、たとえばイーストロンドンとオリンピックパークの関係を考えてみると非常に明確だと思うんですけども、もともとロンドンのごみ溜めと言われた地域ですね、しかもゲッターに近いような低廉な家賃で治安も悪かったイーストロンドンがですね、なんでああいうふうによみがえったのか、ということは、山下ふ頭のことを考える上でも非常に重要な動機になるんじゃないかなというふうに思います。

オリンピックをあそこに戦略的に開催することによってですね、地域の環境浄化が図られて、圧倒的な緑量が増えて、テムズ川の分流としての運河もですね、ごみのような運河がものすごく清麗な運河になって、同時にそのすぐ隣接にある、非常に高密度で貧困の象徴のように言われていた町が、なんとなく空気で洗われていって、そこにはかなりインテリジェンスを持った若者たちが低廉な家賃という魅力で住み込んで、そしてお互いに化学反応しながらですね、いわばケミストリーな環境をつくって、非常に創造的になって今やあそこがある種のヨーロッパ全体のソフトウェアのベースになっているという、こういう事実、つまり連鎖反応を起こしていくという、こういうことがすごく大事だというふうに思うんですが、いかがでしょうか。

【村木委員】

おっしゃる通りだと思います。連鎖反応をどうやってつくっていくかという、タイムラインと図をつくっていくことが大事だというふうに思います。ありがとうございます。

【寺島委員長】

ロンドン、僕も9月に動いたところなんですけれども、コロナでね、英国全体で23万人も死んでてですね、実は議論を深めているとですね、日本は7万5千人なんだけれども、傷付いているというかですね、これはもちろん、脱炭素というところとかこれはものすごく大事にしなきゃいけないんだけど、一方、そのイギリスの誇りだったね、医療システムが破綻したってということについてですね、イギリス社会のこれまでのあり方自体に根源的な問題意識を持ってる人たちが増えているんだなということ僕痛感したんですけども。脱炭素とともに、さっき僕はレジリエンスって言葉使いましたが、レジリエンスは何も地震だとかだけではなくてですね、やがてくるパンデミックもまた含めてね、そういう意味での社会としての耐久力っていうものをね、強めるところに、社会工学の新しい論点を迎えるつつあると思うので、脱炭素と、さっきレジリエンスって言った意味はそこにあったんですけども、この論点、ものすごく大事にしなごうですね、我々の議論に

生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

【村木委員】

ありがとうございました。

【寺島委員長】

ということですね、今日は今村さんが次にまわってくれるということになってですね、とりあえず今日の議事っていうところはですね、大変いい問題提起をしていただいたということで、今日の議論を締めくくりたいと思います。

進行を事務局にお返しします。

【事務局】

寺島委員長どうもありがとうございました。それではですね、次第2、「その他」ということで、事務局よりご報告いたします。

【事務局】

それでは、地域関係団体の参加につきまして、ご報告いたします。

前回、学識者委員のみで山下ふ頭と関係するような空間だけではなくて、もっと広い視点で、広域的な議論をしたほうがよい、といったご意見をいただきました。今回、委員の方々のプレゼンテーションや意見交換、それぞれの質疑、意見交換の中において、非常に大きな視点での議論ができたというふうに思っております。次回以降につきましては、地域との関連性が必要な議論をいただくことも予定しており、各地域関係団体の方々も次回から参加していただきたいというふうに考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】

本日はどうもお忙しい中、長時間にわたりましてご意見いただきましてありがとうございました。

以上を持ちまして、この会を閉会させていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

第3回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 会議録	
日 時	令和6年1月12日(金) 14時15分～16時00分
開 催 場 所	横浜シンポジア (産業貿易センタービル 9階)
出 席 者 ※敬称略	石渡 卓 (神奈川県大学理事長) 今村 俊夫 (株式会社東急総合研究所代表取締役会長) 内田 裕子 (経済ジャーナリスト、イノベディア代表) 河野 真理子 (早稲田大学法学学術院教授) ※ウェブ参加 北山 恒 (建築家、横浜国立大学名誉教授) 隈 研吾 (建築家、東京大学特別教授・名誉教授) ※ウェブ参加 坂倉 徹 (横浜商工会議所 副会頭) 幸田 雅治 (神奈川県大学法学部教授) ※ウェブ参加 高橋 伸昌 (関内・関外地区活性化協議会 会長) 宝田 博士 (協同組合元町エスエス会 理事長) 田留 晏 (神奈川県倉庫協会 会長) デービッド アトキンソン (株式会社小西美術工芸社代表取締役社長) 平尾 光司 (専修大学社会科学研究所研究参与、昭和女子大学名誉理事) 藤木 幸太 (横浜港運協会 会長) 藤木 幸夫 (横浜港振興協会 会長) 涌井 史郎 (東京都市大学特別教授)
欠 席 者 ※敬称略	寺島 実郎 (一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長) 村木 美貴 (千葉大学大学院工学研究院教授)
開 催 形 態	公開 (傍聴者 16人 / 記者 20人)
次 第	1 議 事 (1) 前回委員会後の市民意見等の説明 (2) 地域関係団体委員の挨拶・意見書の説明 (3) 事務局の説明 ・市民意見募集等のとりまとめ結果 ・ファクトシート「横浜市の現状」について (4) 学識者委員プレゼンテーション (5) 意見交換 2 その他
議 事	別紙
資 料	当日配布資料 (1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 名簿 (2) 前回委員会後の市民意見等 (3) 地域関係団体 意見書 (4) 市民意見募集等のとりまとめ結果 (5) ファクトシート【基礎資料編】

第3回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 議事

【事務局】

これより、「山下ふ頭再開発検討委員会」を開催します。

私は、事務局を務めます、山下ふ頭再開発調整課長の荻原と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

お手元の資料を確認させていただきます。次第、名簿、前回委員会後の市民意見等、地域関係団体意見書、市民意見募集等のとりまとめ結果、ファクトシート「基礎資料編」を配付しています。よろしいでしょうか。

開催に当たりまして、山下ふ頭再開発調整室長の新保よりご挨拶申し上げます。

【事務局】

皆様、こんにちは。室長の新保と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は、お忙しい中、山下ふ頭再開発検討委員会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

はじめに、能登半島地震により亡くなられました方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、今回から地域関係団体の6名の方に、ご参加をさせていただいております。本当にありがとうございます。

また、今後の更なる議論の広がりに向けまして、事務局として本市の政策局の職員も参加をさせていただいておりますので、よろしくお願ひします。

本日は、次第にございますように、前回の委員会後にいただきました市民の皆様からのご意見の説明、そして地域関係団体、本日は2団体の委員の方から意見書のご説明、そして委員会の説明といたしまして、市民意見募集等のとりまとめの結果、そしてファクトシートとして「横浜市の現状」についてご説明させていただきます。

その後、学識者委員の皆様からのプレゼンテーションを行っていただき、最後に意見交換を行っていくという予定でございます。

本日も、これまでと同様、闊達なご議論をいただきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

【事務局】

本日の委員の皆様の出席状況についてご報告させていただきます。委員18名の内、Webでご参加の隈委員、河野委員、幸田委員を含め16名の皆様に、ご出席いただいております。なお、河野委員は1時間程度遅れての参加となります。よろしくお願ひします。

寺島委員長は、急遽ご都合によりご欠席との連絡をいただきました。村木委員もご欠席でございます。

委員長の代理につきましては、横浜市山下ふ頭再開発検討委員会条例第4条4項に基づき、委員長が委員の中から指名することとなっております。寺島委員長からは、あらかじめ石渡委員をご指名いただいておりますので、石渡委員に委員長代理をお願ひしようと思ひます。

います。

石渡委員長代理、恐れ入りますが一言お願いします。

【石渡委員長代理】

はい。皆さんこんにちは。今ご説明ありましたとおり、寺島委員長が急遽ご欠席ということでございますので、ご指名によりまして、私が本日の委員長代理を務めさせていただきます。

委員の皆様におかれましては、どうぞ円滑な議事進行につきましてご協力賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【事務局】

ありがとうございました。

本日のタイムスケジュールについては、議事（１）を３分程度、議事（２）地域関係団体委員の方々のご挨拶の後に、藤木幸夫委員、坂倉委員からの意見書のご説明を１０分程度ずつを目安に行っていただきます。

続きまして、議事（３）を１５分程度、議事（４）につきましては、学識者委員プレゼンテーションとして、今村委員、アトキンソン委員から１０分程度ずつ行っていただきます。

終了後、議事（５）意見交換を２０分程度行っていただきたいと思います。

本日も、公開での開催となっており、会議の様子及び説明資料については、インターネット中継により配信されます。

なお、会議の様様を記録するため、事務局側で写真を撮らせていただきますので、予めご了承ください。

これより先の進行は、石渡委員長代理にお願いしたいと思います。

石渡委員長代理、どうぞよろしくお願いいたします。

【石渡委員長代理】

それでは、議事（１）に入ります。議事次第をご覧いただきながら進めてまいりたいと思います。議事（１）につきましては、前回委員会後の市民意見についてでございます。これにつきまして、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

山下ふ頭再開発調整担当部長の竹内と申します。どうぞよろしくお願い致します。

では、前回委員会後にインターネットフォームに寄せられました市民意見について、ご説明させていただきます。

お手元の資料２をご覧ください。

委員の皆様には、事前に本資料をお送りさせていただいておりますが、１から２ページは市民の皆様のご投稿をまとめたものになります。３ページ以降は市民の皆様のご投稿をそのままつづった資料となっております。

１ページをご覧ください。受付期間は前回委員会開催日の１１月３０日から１月８日まで、

意見数は39名の方から105件いただきました。なお、山下ふ頭再開発に関連しないご意見につきましては除外させていただいております。

「3 御意見の主な内容」をご覧ください。

「まちづくりの方向性」につきましては「みなとみらい地区との差別化を図るため、山手・元町・中華街の持つ歴史や文化を活用して、陸側とのつながりを意識すべき」「脱炭素・省エネが必須になるという学識者委員の主張は必要事項として議論すべき」「横浜のまちづくりの歴史を委員会でも共有し、先人の業績に学び、未来の市民にも誇れる都市づくりをすべき」などのご意見をいただきました。

「導入機能」については、「他の観光地との差別化を図るアイデアとして、鹿鳴館時代の衣装等で町ブラができる魅力的な空間」、「市民を増やすため、子ども専用のサッカー場や野球場、屋内競技施設など、子どもたちが繰り返し来たいと思わせる施設」、「みなとみらいの眺望など横浜港が一望できる飲食店や入浴施設、イベント会場などの集客施設」などのご意見をいただきました。

裏面をご覧ください。

「(2) 地域関係団体や市民の参加に関する御意見」については「地域関係団体委員についての6団体は適切な選択」、「経済界に限ることなく、地域住民の代表も含めて、広範な領域からの人選を考えるべき」、「様々な分野から、地元で活動している団体の声や市民団体の提案等の声を聞くべき」などのご意見をいただきました。

「(3) その他の御感想等」については、「自然とコミュニティが共生する都市づくりこそが、横浜の目指すべき都市づくりにという意見に同意」、「新しい価値観を尊重し、未来の世代のために再開発をすることが重要」、「優れた知見に基づくプレゼンテーションは視聴し甲斐があり、委員間のやりとりも面白い」などのご意見をいただきました。

説明は以上となります。

【石渡委員長代理】

今説明がございましたけれど、これにつきまして何かご質問・ご意見ございましたら、挙手の上、ご発言をいただきたいと思います。いかがでございましょうか。

Webの方もどうですか、よろしいですか。

【全体】

(発言無し)

【石渡委員長代理】

特にないようにお見受けいたしますので、これにつきましては、特段のご質問・ご意見がないというふうにさせていただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

【全体】

(発言無し)

【石渡委員長代理】

それでは、議事（２）に入りたいと思います。

議事（２）は、地域関係団体委員のあいさつ、その後に意見書の説明をいただくということになっておりまして。本日新たに参加されました地域関係団体委員６名の皆様から一言ずつごあいさつをいただきたいと思います。どうぞ、着席のままごあいさつをいただきたいと思います。私のほうからご指名をいたしますが、６名の方お願いしたいと思います。

なお、藤木幸夫委員と坂倉委員につきましては、あいさつが終わった後に意見書の説明をそれぞれ順番にさせていただければと思います。

それでは順番にご指名をいたします。まず、横浜商工会議所の坂倉委員をお願いいたします。

【坂倉委員】

横浜商工会議所の副会頭を務めております坂倉でございます。当所では、商工業の発展に寄与することを目的として、明治13年に設立をされました。現在では12,214会員、令和5年11月30日現在でございますが、組織する地域総合経済団体でございます。山下ふ頭の再開発につきましては、当所では、去る令和4年6月20日、山中横浜市長に対して、山下ふ頭再開発の新たな事業計画策定に向け、取組に関する要望を提出しておりますので、本要望内容に基づき山下ふ頭再開発に向けての意見を述べさせていただきます。

続けてよろしいですか。

【石渡委員長代理】

一応紹介だけということで、後ほどご意見は別括りをお願いしたいと思います。

【坂倉委員】

そうですか、よろしくお願いたします。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。坂倉委員からの挨拶でございました。

続きまして、関内・関外地区活性化協議会の高橋委員をお願いいたします。

【高橋委員】

初めまして、関内・関外地区活性化協議会の会長をやっております高橋と申します。これで見ると分野はまちづくり団体ということですので、私は今横浜中華街発展会協同組合の理事長もやっております。この検討委員会に今回参加させていただきます。よろしくお願いたします。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。続きまして、協同組合元町エスエス会の宝田委員、よろしく

お願いいたします。

【高橋委員】

協同組合元町エスエス会の理事長を務めております宝田と申します。近隣の商店街代表ということで推挙いただきましてありがとうございます。今日初めてではございますけれど、どうぞよろしくお願いいたします。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。続きまして、神奈川倉庫協会の田留委員、お願いします。

【田留委員】

神奈川倉庫協会より推薦されました、会長をしております田留でございます。今後ともよろしくお願いいたします。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。続きまして、横浜港運協会の藤木幸太委員、よろしく願いいたします。

【藤木幸太委員】

横浜港運協会の藤木でございます、どうぞよろしくお願いいたします。

山下ふ頭は、我々も山下ふ頭が出来た当時から我々の業界が使わせていただいていた場所です。

それを大事に、市民の意見を聞きながら、我々も今後市に役立つような、港湾だけでなく、市の役に立つようなものになったらいいなというふうに考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。最後になりましたが、横浜港振興協会の藤木幸夫委員、よろしくお願いいたします。

【藤木幸夫委員】

藤木でございます、いつも色々お世話になってありがとうございます。港の関係で多くの先輩たちが、今もう我々のご先祖様になってますけれど、そういう皆様の思いも私の口からなんとか皆様にお訴えして、将来非常に明るい、難しいこと言い出したらキリがないこの時代に、横浜港は別だぞ、というような意気込みで、これから皆さんの力を頂戴したい。細かいことはご質問いただければ何でもお話させていただきます。後ほどよろしくお願いいたします。以上です。

【石渡委員長代理】

ありがとうございます。続きまして、今自己紹介が終わりましたので、これからは地域関係団体委員の皆様から意見書の説明を受けたいと思います。それぞれ10分程度という制限の中ではありますが、どうぞよろしくお願ひします。本日は6名の中から2名の方に意見書の発表をお願いしたいと思ひます。

初めに、この意見書の発表は藤木委員からお願いしたいと思ひます。よろしくお願ひします。

【藤木幸夫委員】

話し出すと長い男なものでして、いつも演壇に立ちますと必ず3枚は「時間です」と紙をいただく男です。何分いただけるのでしたっけ。10分ですね。恐れ入ります。

港の話というのは、まず皆さん方に今、港の仕事というのはどの程度の社会的な貢献度があるんだということの色々と。それぞれの思ひは違ふかと思ひますが。

今から50年ほど前に私が初めて自分の仕事として、社会人として色々方々へ足を運んでいた時代がありましたが、東京の経団連に行つて、私は横浜の港の代表として行かせてもらつて、経団連のお偉いさん方がずらつと並んでいるところで、「港の仕事って実は大変なんですよ、皆さんハマのプー太郎呼ばわりしてるけれども、実はそうじゃないんです。私は港湾経済学会という学会の一員でもあるし、勉強している中でなんとかこの港の実態を知ってもらいたい。また、港の悪いところも知ってもらいたい。それに皆さんにお世話になりたい。」ということをお願いしたら、「あんた今、港湾産業という言葉を使ったけど、港湾は産業じゃありませんよ。」という若い職員の発言がありました。「港湾産業という独立した言い方はちょっと難しいのではないですか。産業という言葉をつけるなら、隷属産業ですよ。いろんなものを行っている、百科百般が日本の国は動いているけど、いずれにしてもただ運ぶだけなんだ。」と、「輸入するだけ、輸出するだけ、それが産業だなんて生意気だ。」というような意味のことを言ったんです。初めて経団連行つて、未だに取っ組み合いをやつたのは、私だけらしいですね。

そんな子供じみたことも経験いたしましたし、また反面、いろんな角度で、港で仕事しててよかったな、これだけ私たちを守ってくれているんだな、これはもうご先祖様の港で働いて、港で血を流し、汗を流し、そして亡くなつた我々の先輩たちが俺を守ってくれたな、というような場面もこれも数知れずございます。でも一番大事なのはやっぱりまとまりでしょうね。横浜市民の皆さんと、あるいは横浜のお役所の皆さんと、あるいはまた我々の生活圏を共にして、あるいは経済圏を一緒に担っている人たちと、一緒にこう何かできた時は嬉しいなど。

ベイブリッジができました。長い話は禁物だと思ひますが、一言で申し上げますと、ベイブリッジができたということは、横浜にはいろいろな新しいことはその都度ございましたけれど、これができた時に私は横浜港というのはイメージがガラツと変わったということになるわけですね。私もおかげさまで、10代の時代から外国の港を独り歩きさせてもらつて、あっちを見たりこっちを見たりしてフラフラしてきたんですけど、横浜港の特色というのはなんだって言うと、とにかく日雇いの人が大勢いる。京浜東北線に乗つかつて、終点は桜木町。桜木町行つてあそこで待ってるのは必ず「さぁ仕事あるぞ、こっちへ来

い、俺の会社へ来い。」という、そういう求人の人たちばかりがあそこに毎朝いた。そこへ私たちの会社が「今日の仕事はもう人が足りないから、もういくらお金払っても連れて来るのだ。」というようなことで、もう相場無しの労働市場がそこにできておりました。ですが、人間を用意して「さあ仕事だ」って時に雨が降る。仕事が当時ですからコンテナなんかありませんので、雨の中で荷役はできない。泣きました。一晩中みんな男泣きに泣くのですよ。苦勞して苦勞してお金を払って、私の先輩の年取った明治生まれの先輩たちが、本当に声を出して泣くのですよ。悔しいって、この雨が。という時代がありまして、報告するような中身とは違いますけども、いろんな苦勞がございました。今は夜中に雨の音がしても平気で荷役業者は寝ていられる、これだけでも幸せな思いをしております。

また、方々から問い合わせがあつて、例えば小学生、あるいは中学生、港の話をしろと。そこへ行ってはお話する。今日議長やっておられる石渡さんが今率いてる大学でも講演させてもらったこともございます。横浜の大学に入って新入生の、港の話を聞いてどんな感想を持ったかというスリッパがたくさん来て、読ませてもらうとこれこそ誠に涙が出る。新入生ですから、横浜のことはあまり知らない、私が下手な話ですけども、いろんな話を面白おかしくいたしますと、横浜来てよかった、この学校入れてよかった、こんな素晴らしい港があるってことを初めて知ったという。想像していたり、今まで自分が理解していた横浜港と、今藤木のしゃべった横浜港と、こんなに違いがあるのかということで、横浜に住むこと、横浜の大学に入ったことを誇りに思うというようなスリッパがありますと嬉しかったですね。

いずれにしても、今日このように中野局長が色々と旗を振っていただいて、横浜市として山中市長を始め、公務員の皆さんが横浜を再認識して、我々を集めてこのような会を持っていただいたことに感謝しております。お礼だけ申し上げてごあいさつを終わります。

【石渡委員長代理】

ありがとうございます。ちょうど10分でございました、ありがとうございます。
続きまして、坂倉委員からお願いいたします。

【坂倉委員】

商工会議所といたしまして、まとめた意見を申し上げたいと思います。山下ふ頭の再開発におきましては、横浜経済の活力をけん引し、将来にわたって持続可能な地域社会を構築するための新たな産業を創出することが不可欠であり、その中でも今後の成長が期待される観光産業の振興に寄与する再開発が重要であると考えているところでございます。

こうした前提を踏まえて、山下ふ頭再開発に関する6項目の意見について説明させていただきます。

まず初めに、横浜経済の核となる活性化拠点の形成であります。山下ふ頭の地区面積は47ヘクタールに及び、都心部に隣接した魅力的な立地環境と横浜経済をけん引する重要な役割を担ってきた歴史性を十分に活かし、観光産業等のリーディングプロジェクトとして、また横浜経済の核となるシンボリックな活性化拠点となるよう推進していただきたいと考えています。

次に、山下ふ頭全体の一体的な再開発の推進であります。埠頭特有の地形を生かした一体的な再開発が重要であり、山下ふ頭全域を統一されたテーマの基に再開発することが不可欠であることから、みなとみらい21地区のように街区ごとに区切って再開発をするのではなく、山下ふ頭全体の一体的な再開発を推進していただきたいと考えております。

この次に、これまでの再開発プロジェクトにより得た知見を活かした魅力的な施設の導入であります。数々の再開発プロジェクトを推進して得てきた多くの卓越した知見を山下ふ頭の再開発事業に活かしていただくとともに、防災拠点、感染症対策拠点としての機能、さらにはカーボンニュートラルなどの新たな社会課題に対応する魅力的な施設を導入していただきたいと考えております。

次に、山下ふ頭周辺地区との相乗効果を発揮した賑わいの創出であります。元町や中華街、山下公園通りなどの特長ある、魅力や個性のある既存の商店街はもとより、関内・関外地区をはじめとした都心臨海部の各地区との相乗効果が発揮され、横浜の更なる賑わいの創出が図られるよう、推進していただきたいと考えております。

その次に、旧上瀬谷通信施設跡地等のまちづくりと連携した、市内全域の活性化であります。2027年に国際園芸博覧会が開催される旧上瀬谷通信施設跡地を含めた横浜西部地区の活性化には、都心臨海部との連携・強化が不可欠であります。山下ふ頭の再開発との連携と機能分担を十分考慮するとともに、都心臨海部と内陸部、さらには周辺地域との交通アクセスを強化して、市内全域の活性化を図っていただきたいと考えております。

最後に、横浜市財政に寄与する税収効果と外国人材を含めた雇用創出の促進であります。新たな産業の創出やインバウンド拠点を開発することによって、観光客やビジネス客の増加による交流人口の増加や雇用創出を図るとともに、顕在化する労働者不足に対応するため、特区制度を活用した外国人材の受入れの強化、さらには横浜市内内陸部には外国人材が居住するコミュニティを形成し、定住人口の増加による人口減少の抑制と税収効果を図り、持続可能な横浜経済を実現していただきたいと考えております。

以上が横浜商工会議所の意見となります。人口減少社会が到来する中、山下ふ頭の再開発は横浜経済の希望であり、持続的な成長・発展に不可欠なものだと考えております。当所といたしましては、ただいまご説明をさせていただきました6つの方向性に基づき検討が進められ、山下ふ頭の再開発が将来の横浜経済の活性化につながり、横浜市の財政基盤の強化に寄与するプロジェクトとなることを心から願っております。

以上でございます、ご清聴ありがとうございました。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。今新たな地区関係団体委員の中からお二方ご意見をいただきました。藤木委員におかれましては、総括的なお話でありまして、私の手元には実は15項目の箇条書きになったものが実はあるんですが、時間を配慮していただいて総括的なお話をいただきました。それから坂倉委員からは6項目、具体的に今意見書が出されましたけども、これにつきまして何か特段ご意見等がございましたら、挙手の上でご発言いただきたいと思います。いかがでございましょうか。

【全体】

(発言無し)

【石渡委員長代理】

今日はいきなり意見書ですから、これですぐにどうこうではないかと思しますので、こういったものが出されたということをもう一度記憶に留めながら、また皆さんで色々巡らせていただきたいと思います。特にWebの方も挙手がございますので、今のお二方の意見を伺ったところで、次に進めたいと思いたしますがよろしいでしょうか。

【全体】

(発言無し)

【石渡委員長代理】

特段無いようでございますので、議事の(2)につきましてはこれとして、次に移りたいと思います。

次の議事(3)に入ります。議事の(3)は事務局から報告をいただきますが、2つありまして、市民意見募集等の取りまとめ結果、そしてもう1つは横浜市の現状についてということで、これはスライドをもって説明していただきますので、それぞれ事務局の方から2つの項目について説明をお願いいたします。

【竹内部長】

はい、市民意見募集等の取りまとめ結果につきましてご説明いたします。前面のスクリーンに写し出す資料でご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも配布しております。

山下ふ頭再開発の新たな事業計画策定に当たりましては、三方を平穏な海で囲まれた広大な開発空間、優れた交通利便性等、山下ふ頭の高いポテンシャルを最大限に生かし、市民の皆様のご意見を反映させた、かつ事業成立性の高い計画とすることが必要と考え、2021年から2023年にかけて2回にわたり、市民意見募集、意見交換会及び事業者提案募集を実施してまいりました。その結果概要を第1回より順にご説明いたします。

はじめに、第1回市民意見募集です。再開発のイメージ、ふさわしい導入機能、再開発に取り入れる視点について、択一式アンケートを行うとともに、自由意見を伺いました。結果、3,700件を超えるご意見を幅広い年代の方からいただきました。択一式アンケートを集計したものが左の棒グラフになります。自由意見を分析したものが右の図で、ご意見が多かった単語ほど文字が大きくなっており、頻出単語を明らかにしております。再開発のイメージでは、海・みなど、国際性などをメインテーマとしつつ、文化や歴史、海と緑の調和などの視点を取り込むことも必要、ふさわしい導入機能では、エンターテインメントや水辺・親水などの機能を複合的に導入していくとともに、観光・交通の充実も必要、再開発に取り入れる視点では、持続可能なまちづくりなどの視点に加え、市民への還元、防災や環境対策の充実などの視点も必要といったご意見の傾向が見られました。

続きまして、意見交換会です。まちづくりのテーマ、ふさわしい導入機能について、ワークショップを行いました。4回開催し、幅広い年代の方に参加いただき、多くのご意見をいただきました。意見交換会において、付箋でいただいたご意見を分類、整理したものが下の図です。まちづくりのテーマでは、シンボリックな空間の創造と横浜の歴史や文化を生かしたまちづくり、子育て・教育にも配慮した市民のための再開発などのご意見、導入機能では、スポーツ・音楽等を中心とするエンターテインメント施設、最先端技術等を扱う企業・大学・研究開発施設などのご意見の傾向が見られました。

次に、事業者提案募集です。企業・大学等のイノベーション施設を中心とした提案として、キャンパス型オフィスなどを導入する案、大規模集客施設を中心とした提案として、国際展示場やマルチアリーナなどを導入する案、緑を中心とした提案として、緑や水素発電・浄化システムなどを導入する案をいただきました。また、開発に関する主なご意見等として、周辺地区の開発促進やアクセス強化などをいただきました。以上が第1回の結果概要となります。

第1回の市民意見募集では、「市民意見を反映し、その結果を踏まえ、広く事業者から提案募集をするべき」とのご意見をいただいたことから、改めて事業者提案募集を行うとともに、より具体的な再開発のイメージや導入機能などを伺うため、市民意見募集や意見交換会を行うこととしました。

第2回の市民意見募集では、第1回よりも具体的な再開発のイメージや導入機能などを自由意見で伺い、1,200件を超えるご意見を幅広い年代の方からいただきました。いただいたご意見を、「海・みなと」といったテーマだけではなく、「海や港の景色を眺められる」「船が停泊する」といった、より具体的なレベルで集計・分析したものがこちらの図です。類型化した意見をテーマごとに集積して色分けしており、意見が多かったものほど、面積が大きく表示されています。具体的な再開発のイメージとしては、「幅広い世代が楽しめる」「市民が利用できる」「自然が豊かである」などのご意見が、具体的な導入機能としては、「公園」「レジャー施設」「ショッピング施設」等のご意見が多くみられました。また、再開発のイメージや導入機能に関するご意見について、それを提案した理由との相関を分析したところ、「市の収益の向上」「人が訪れる」「周辺地域と連携する」などが提案の大きな理由となっていることがわかりました。

続きまして、意見交換会です。市民意見募集と同様に、より具体的な再開発のイメージや導入機能などについてワークショップを行いました。5回開催し、こちらも幅広い年代の方に参加いただき、多くのご意見をいただきました。こちらは再開発のイメージについて、グループから出されたご意見を多かった順に左上から並べています。「市の収益の向上」「横浜ブランドを創る・高める」「市民が楽しめる・利用できる」などのご意見が多くのグループから出されました。導入機能については、先進性やブランド力の向上等を期待して「学術・研究開発機能」、観光や市の収益の向上等を期待して「大規模集客施設」などのご意見が出されました。

事業者提案募集では、スポーツ・コンサート等のエンターテインメント施設を中心とした提案として、アリーナやコンベンションホール、マルチアリーナ、エンターテインメント施設などの提案、体験型テーマパークを中心とした提案として、陸上クルーズ船や文化体験

スタジオ、アミューズメント施設、展示館などの提案、国際展示場等の施設を中心とした提案として、大規模な国際展示場を核とした提案がありました。

最後に、これまでの市民意見募集・意見交換会で市民の皆様からいただいたご意見をまとめたものがこちらになります。まず「市民が主体」を趣旨として、「市の収益をしっかりと確保」、「市民が楽しみ、利用できるように」、「子育て・教育につながるまちに」といったご意見、「港ヨコハマの象徴」を趣旨として、「横浜ブランドを創る・高める」、「いろんな人が訪れるまちに」、「周辺地域との連携を」、「山下ふ頭のもつ特性を活かす」、「交通機能の充実で利便性の向上を」、「港町ヨコハマらしい景観づくり」といったご意見、「持続的なまち」を趣旨として、「持続可能なまちづくりで次世代につなげる」、「海や緑などの自然が感じられるまちに」、「防災や環境対策もしっかり」といったご意見をまとめています。こうした市民意見や先ほどご紹介しました事業者提案の内容を踏まえながら、委員会での議論を深めていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

続きましてファクトシート【横浜市の現状】について、ご説明させていただきます。目次の5項目について、ご説明させていただきます。

まず、人口動態です。世界の人口は、増加傾向にあり、2060年には100億人規模に達する見込みです。アジアの人口も増加傾向で推移しますが、日本の人口は減少が見込まれ、2060年頃には1億人を割り込む見込みです。

横浜市の将来人口推計です。推計では、2021年に約377.9万人でピークを迎え、その後減少傾向にあります。全国と比べて人口の減少カーブは緩やかとなる見込みです。

横浜市の年齢区分別の人口推移です。年少人口と生産年齢人口は、減少が続き、高齢化率は、増加が続くことが見込まれています。これらから経済活力の低下、個人市民税の減少、社会保障費の増加が見込まれます。

地域別に見た横浜市の転入・転出者数です。全体としては、転入超過となっており他の道府県や国外等からの転入が多くなっています。その中で、東京都区部と川崎市は、コロナ禍前の2019年は転出超過となっていますが、2022年は転入超過となっています。

昼夜間人口比率・就従比率の都市間比較です。東京都特別区部、大阪市、名古屋市と比べると、横浜市の昼夜間人口比率・就従比率はともに低く、それぞれ100を下回っております。通勤・通学等で市外への流出が多くなっています。

横浜市の財政状況です。市税における税目別収入額の推移です。人口減少により個人市民税を中心に市税収入の減少が見込まれています。

主な税目別内訳の政令市との比較です。大阪市、名古屋市と比べ、個人市民税の割合が大きく、法人市民税の割合が小さくなっています。

法人市民税の推移と直近の企業誘致の主な実績です。法人市民税は2019年以前では、企業誘致などから収益増傾向となっています。以降、コロナ禍の影響や税制改正により減収となっていますが、現在は回復してきています。

一般会計歳出予算額の推移です。社会保障経費は、高齢化の進展とともに、2045年頃にかけて支出が増加する見込みです。

市民一人当たり一般会計予算額の政令市との比較です。大阪市、名古屋市と比べ、市民

一人当たりの予算額が低くなっています。

将来の収支差の見通しです。社会保障経費の増加や市税収入の減少により、今後、収支差が拡大し続ける見込みです。

横浜市の経済状況です。経済成長率の推移ですが、2020年度まで概ね全国と同様の推移をしています。国は、2021、2022年度とプラスに転じています。

日本の産業構造の変化です。グラフは経済活動別のGDP構成比です。第3次産業の割合は増加傾向で、近年では第1次、第2次産業の合計は3割に満たない構成です。

横浜市の産業構造の変化です。全国と同様に第3次産業の割合は増加傾向で、近年では第1次、第2次産業の合計は2割に満たない構成です。

経済関連指標における都市間比較です。東京都、大阪市と比べると、横浜市では、市内総生産や事業所数、法人市民税収入において、差があります。

観光実績についてです。2019年の横浜市の観光入込客数は約3,634万人でした。コロナ禍で急減した後、回復傾向となり、2022年は約2,922万人に達しました。観光入込客数を内訳で見ますと、日帰り客の比率が高くなっています。また、コロナ禍前の平均消費額では、宿泊客は約27,700円、日帰り客は約6,800円となっています。

神奈川県外国人宿泊者数です。全国、東京都、大阪府と比べ、外国人宿泊者数が少なくなっています。

交通ネットワークについてです。首都圏の広域ネットワークの一つとして圏央道があります。東名高速、中央道等の放射状に延びる高速道路等と一体となって広域的な幹線道路網を構成しています。

生活や経済を支える交通ネットワークです。

横浜経済の更なる発展と国内外からの人・投資を呼び込むため、道路や鉄道、港などの整備を推進しています。

資料の説明は以上となります。

【石渡委員長代理】

今2種類の資料で、資料5では市民の皆様からの意見をデータベースに落とし込んで字の大きいものというのが一番多いという形でイメージ図として表現していただいたものが説明されてきました。かなり幅広にということで、資料として読み切りにはなかなか大変だと思いますが、意見をまとめたものは資料5の市民意見データベースのもの。その後はファクトシートと称して、市の実態、いわゆる人口動態であったり財政状況であったり経済状況であったり観光実績、交通ネットワーク等、まさに実際の数字、実数を基礎データベースにして表現したものであります。この2種類の説明がございましたけれど、これにつきまして何か個別にご質問等がございましたら、いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【北山委員】

いいですか。世界の人口動態なんですけども、アフリカを抜いた世界の人口動態を示して欲しい。世界の人口はまだ拡張していくと書いてありますが、都市化が進んだところで

は人口減少し始めてるはずです。特にヨーロッパ。アメリカは流入人口で増えてますけども、基本的には都市化が進んでいる地域は人口減少が進んでいる。文明がどのように変換してるか見ようと思うとその辺りを示していただいた方が分かりやすいと思います。

【竹内部長】

貴重な意見どうもありがとうございます。次回の委員会に際して、またそういった資料の方をご用意させていただければというふうに思っております。ありがとうございます。

【石渡委員長代理】

今、北山委員から要望がありましたので、また次回反映していただければと思います。今河野委員が入られましたけど、河野委員大丈夫ですか、聞こえますか。はい、よろしく願いいたします。他にいかがでございましょうか。

資料もまた読み込んでいただいて、まだまだ不足の分やら表現の仕方に問題があるとか、いろんなご意見もあろうかと思えます。読み込んでいただいた後、次の委員会等にまた反映させていただければと思いますが、何か。涌井委員どうぞ。

【涌井委員】

財政のところで、もしよろしければふるさと納税による流出額がどのぐらいなのか、それをちょっと教えていただきたいと思えます。

【中野局長】

よろしいでしょうか。

【石渡委員長代理】

お願いします。

【中野局長】

今ちょっと数字は持ち合わせていないんですけど、全国最大で50数億だったというふうに記憶しております。またこのデータも次回お見せさせていただこうと思えますので、よろしく願いします。

【涌井委員】

はい、ありがとうございました。

【石渡委員長代理】

ふるさと納税の支出の部分ですね。この負の部分表現してもらいたいということの要望でございます。他にいかがでございましょうか。Webの方どうですか、よろしいですか。それでは、今、北山委員それから涌井委員からの要望がございましたので、次回までに

反映をしていただきたいと思います。はい、どうぞ平尾委員。

【平尾委員】

人口の話伺いましたけども、もう1つ横浜にとって大事なことはやっぱり企業の数がどういうふうに動いてるのかと。これはアトキンソンさんが色々と発言されてるんですけども、企業数が増えてるのか減ってるのか、あるいはそれが産業別にどうなってるのか、ということ。それからもう1つは其中でベンチャー的な企業が、イノベーションを担うベンチャー的な企業がどういうふうな存在をしてるのか。この辺を少し教えていただきたいと。次回で結構ですけども。

【中野局長】

その辺の数字も次回お示しさせていただきます。先ほど流出額が50億程度というふうに申し上げたんですが、今ちょっと調べましたら230億ということでございまして、かなりの金額でございました。失礼いたしました。

【石渡委員長代理】

はいありがとうございます。今、平尾委員からは企業数の増減とその業種と、それからその中にイノベーション的な、ベンチャー的なものがどういうふうに分布されているのかということも調べて欲しいというようなご要望でございました。他にいかがでございましょうか。

この場においてでなくても、また何か各委員からご要望があれば事務局の方に要請をしていただいて、次回に反映していただければと思います。他に皆さんここに会場にいらっしゃる方それからWebの方でご質問・ご意見ありますか。よろしいでしょうか。それでは今のお三方からのご意見を次に反映させていただきたいと思います。

それでは次の議事、4番目に移りたいと思います。議事4番目につきましては、学識委員のプレゼンテーションということで、始めに前回時間の関係で延期になってしまったということもありますので今村委員からお願いをしたいと思います。その後、アトキンソン委員からお願いするという順番でお願いします。それでは今村委員よろしく申し上げます。

【今村委員】

今村でございます、よろしく申し上げます。今回のプロジェクトに関しまして、具体的なアイデアをこれから皆様と色々と検討してまいるわけですけども、その大前提として私からは都市開発の専門的な立場から近年の東京圏の都市開発の考え方や進め方について、過去と大きく変わった点について、その概略を話してみたいと思っております。

現在も日本の国内各地で土地開発が盛んに計画されております。東京都心部でも戦後高度成長期に急拡大してオリンピックの前後やバブル期に大量のオフィスビルや高層住宅、商業施設など開発されました。現在もこの図のように大規模開発は次々と予定されておまして、さらに今後50年程度まで計画があると言われております。

しかし、東京圏の都市開発は実は過去のもの大きく変わりつつあります。過去の都市開発ではその目的は人口の増加と経済成長の受け皿としてでありましたが、つまり増えた人口が働く場所、住む場所、楽しむ場所を開発し、提供し、その消費需要を含めて経済成長を下支えするものでした。また、都市開発の資金は自治体が市民から集めた税金、すなわち手元資金、自治体が発行した公債、つまり借金、開発に参加する国内企業の自己資金、そして銀行からの借金、それらを複合させることによって成立させるケースが多かったと思います。

しかし、こうした都市開発の目的や資金集めの方法はこれまでの人口増加時代であった頃だからこそ上手くいったものでありました。今から100年前、日本の人口は6000万人ぐらいでした。それからどんどん増えて、横浜市が都市開発6大事業計画を発表した頃には日本の人口は1億人まで急増しました。さらに増えて、現在は1億2000万人ですから、結局この100年でほぼ倍増したことになります。しかし、昨今の少子化に伴って、日本の人口はこの先100年後には4、5000万人程度に縮んでしまうという国の機関からのこうした推計が出ています。つまり、人口急増時代の都市開発と人口急減時代のこれからの都市開発では根本的にその目的や方法も変化していくということになります。

地域の定住人口が減っていくわけですから、これらの都市開発はその目的はビジネスや観光で訪れる国際的な交流人口を吸引し、地域経済の活性化を誘発する、そうした都市開発、まちづくりが主流になってくるということです。都市開発の資金は人口減で市民税の税収がだんだんと減っていきますので、自治体財政の負担を軽減し、法人税などで税収増を補っていくような新たな仕組みづくりが必要です。20年前ほどから日本の不動産を国際的な投資商品として扱うことができるよう、いわゆる不動産の証券化の法的な整備が進み、海外からの投資資金が入ってきやすくなっておりまして、先ほどの東京都都心部の再開発でもこうした資金が積極的に活用されております。国際的な外部の投資資金を吸引していくためには、プロジェクトの事業性において、説得力ある開発ストーリーが最も重要になってまいります。

説得力がある開発ストーリーに向けて、今回の委員の先生方や関係者の皆様から色々とアイデアをご提供していただくこととなりますが、なぜ山下ふ頭再開発が完成すると国内外の人や企業を魅了し、吸引しうるのかを意識するのが大事だと思っております。横浜は東京都心のコピーである必要もありませんし、サブ的な存在ではないと思っております。東京圏1都3県の中で独自の立ち位置を築いて、他の都市と切磋琢磨して吸引力を競う、そういう観点が重要と思っております。

横浜には国際交流都市を先駆けた160年余の歴史がありますし、独自の都市文化、地理特性が備わっております。こうした独自要素のプロモーションはプロジェクトの開始を待たず、今からでも積極的に動き出すべきだと思っております。

こうしたストーリーに向けて、視野を広げていくことも重要です。これは、山下ふ頭は東京ドームの10個分、47ヘクタールありますから、これだけを集中して見ているとどうしても、この広大な面積の有効活用だけに注目しがちですが、もっと人工衛星くらいの目線で見ますと、前回寺島委員長と横浜市港湾局の中野局長のお話に関連しまして、東京湾の6つの港、2つの空港の機能全体を見渡して、物流や人の移動の役割分担の進化を見

たり、先ほど国際的な交流人口、インバウンドの吸引の話をしてきましたが、成田空港や羽田空港に到着された海外からの方々が色々な観光資源を参考にかなり広い範囲に積極的に移動され、様々な拠点を訪れることなども意識すべきでしょう。

羽田空港周辺を眺めますと、川崎市側の殿町というエリアにはライフサイエンスの環境分野の新産業創出する拠点が開発されていますし、西側の天空橋ではコンベンション施設を含む羽田イノベーションシティができています。また、北側の京浜島では大田区が次世代の産業拠点としての新しいまちづくりのビジョンを策定されています。

こうしたことを踏まえて、これまでの横浜港周辺での開発された各拠点や様々な観光の拠点との連携、また大黒ふ頭の近未来の開発、さらに扇島のJFEスチールさんの工業用地の今後の大規模再開発動向などなるべく視野を大きく見ていった形で山下ふ頭のより有効な活用策が見えてくると思っております。

例えば、東京では中央卸売市場が豊洲市場に移転しましたが、場外市場は築地にも残されて観光客で大変賑わっています。一方、場内市場の跡地には野球など多目的のスタジアムを持ってきて、ホテルや住居、オフィスを組み合わせるなどという再開発の案があるようです。そうした事例等もヒントにすると横浜スタジアムや中央卸売市場の場外市場の機能などを山下ふ頭に持ってきて、スポーツとフードの大きな横浜の名所にして市の内外から多くの人を惹きつける、そんな大がかりなアイデアも今後たくさん出てくると思っています。

これらは今回の山下ふ頭周辺の用途地域が示された図で山下ふ頭や大黒ふ頭は商業地域に定められています。横浜市全体の話になりますが、それぞれの地域にはこのようにこれまでの歴史的な経過を踏まえて土地の使い方、制度上の用途地域というものが定められています。しかし、この先の人口減少を迎えて横浜市の各地域ごとの未来の姿を長期的に再考していくことになろうと思っております。横浜市の財政は2029年度をピークに減少してまいります。今のうちにあらゆる対策を実行しなければなりません。特に横浜市自身が保有している市有地は部局をまたいで長い時間軸で考えられ、有効に再開発し、活用していくことで市の財政維持に貢献していくと思っております。その全体として、市全体のランドデザインの再整理を含めて、都市機能用途にあった入れ替えも行っていくべきでしょう。加えて、都市開発の一方で市域の7パーセントにあたる農業地域は2,900ヘクタール、山下ふ頭の約80倍あります。人口減少で農業の担い手が急減する中での横浜市の食料自給率のアップ、例えばDXを活用した収穫量の増大、営農型太陽光発電のソーラーシェアリングによる収支改善などの対策検討も市がしっかりとリーダーシップを持って進めていただきたいと思っております。

今後の都市開発による税収規模の維持については、これはイメージ図ですが、横浜市全体で長期的な都市機能のランドデザインの再整理を含めて市が保有する土地資産を積極的に活用し、国際的な都市資金を誘引する都市開発を実現させることで横浜市内に企業が増加して法人税が増加し、また交流人口も増加してお金を使っただけ。これによって税収規模が維持できて、インフラの劣化なども上手にメンテナンスできる。人口の減少による市民税の減収にも耐えうる。こういったフローを実現していくことがこれからの都市開発のあるべき形と考えている次第であります。

山下ふ頭の再開発をこのような大きな観点で捉えて着実に推進するためには、現在の港湾局さんだけの枠組みではなく、横浜市の各局が横断して連携する仕組みづくり、市の総力を挙げてのプロジェクト化が必要だと思っております。

あわせて、今後のプロジェクトの推進に当たっては市民参加と積極的な情報発信が重要という話を申し上げます。まず、市民の皆さんや関係者の皆さんが横浜市の一員として参加されますよう巻き込んでいく仕組みが重要であります。その上でメディアの皆さんにもご協力いただいて、プロジェクトの検討経過を積極的に対外発信し、社会全体の関心を集めていくことです。その過程で今回のように専門家の方々に多様な角度から最新の知恵を出し合っていただき、市民の関係者の声から前向きなフィードバックを受けていく。ランドデザインに沿って事業の投資額の収入費用の想定シミュレーション精度が高くなったことでプロジェクトの成功確率が向上し、計画どおりの内容実現、スケジュールどおりの竣工と開業に向かっていきます。

全国の政令指定都市は20市あります。そのうち、横浜市が1番人口が多い市ですが、それに続く大阪市、名古屋市、札幌市、福岡市など今後の都市計画のモデルとなるよう、モデルケースとして参考になっていくと思っております。

以上、私からのお話は今後の議論を進める上での考え方をお示ししました。都市開発ではこうした出発点での大きな展望、大きな考え方の枠組みで皆でしっかりと共有することはとても大事です。

まとめですが、今回のプロジェクトの実現に向けて、横浜市全体での各エリアの都市機能を再構築し、山下ふ頭再開発の位置付けを再設定することを起点として、各局が横断したプロジェクトを作り市民の皆様とともに対外的な情報発信と企画精度向上を実現されることでプロジェクトの成功確率が高まり、全国の政令指定都市、多くの自治体のモデルケースになっていくよう期待するところであります。最後になりますが、山下ふ頭の再開発がトリガーとなって今後の人口減少時代における財政運営を中心としてお子さん、お孫さんたちの世代まで続く、あらゆる施策を立案、実行していることを切に希望いたします。私からは以上であります。

【石渡委員長代理】

はい、ありがとうございました。続きまして、アトキンソン委員からプレゼンをお願いしたいと思います。一部資料の差し替えをするようですので、少しお時間をいただけますか。今、データをパソコンに落とし込んでますので、OKですか。はい、ではコントロールキーをお渡ししますのでよろしく申し上げます。はい、お願いします。

【アトキンソン委員】

小西美術のアトキンソンです、よろしく申し上げます。多少話がダブるかと思いますが、お許しくださいませ。

私は観光の観点で今日発言をさせていただきます。国のインバウンドの委員会にたくさん参加させていただいていますが、そもそもそのインバウンド戦略をなぜやっているのかという観点から、まずそこからご説明をしたいと思います。それがここに出ていますよ

うに、人口減少に対応するためにできていると思います。

まず、日本の人口が大きくは減らないですけど、生産年齢人口が、全体の人口より大幅に減ります。すでに1995年のピークから2023年の間に1,402万人も減っています。これ全国の基準です。生産年齢人口は16歳から65歳までの人口を指すのですが、観光客の大半はこの年齢の人ですので、この年齢が大きく減ることによって、横浜市内の問題だけではなくて、実際に観光して来てくれる人たちの影響を受けることとなります。

しかし、この赤い線に書いてありますように、2023年から2060年の間にさらに日本の生産年齢人口が2,896万人減ると予想されています。併せて、4,298万人が減ることになります。消費ということになりますと大半の個人消費はこの人口ですので、40%ピークから減っていくことによって経済を支える最大の個人消費に大打撃を与えることとなります。

先ほどのご説明にありました全体の人口はそこまで減らないってところですけど、なぜかというご覧のように、大体90年辺りから高齢者の人口が倍増していきまして、さらに2020年辺りから高齢者の中で高齢化が進んでいます。ですから75歳以上の人口が2015年当たりから65歳から74歳の人口を上回るようになっていきまして、65歳以上の観光の流入はありますけど、75歳以上になりますと、観光する確率がどんどん下がっていきますので、全体の人口よりはこの現役世代と言われる生産年齢人口に注目するべきものだと思います。

それでなぜ問題なのかというところこの社会保障費の激増が問題になっています。1990年の時に、全国としては47兆円くらいの社会保障費の負担だったのですが、2023年は134.3兆円まで激増しています。これGDPに対して23.5%が経済から吸い上げられていて年金と医療費を中心に社会保障に充てられていますので、現役世代に対して相当の負担になっていることは間違いないです。

これを一人当たりで落としますと、1990年、生産年齢人口1人当たりに対して55.1万円の平均だったのですが、2000年で90.6万円、2010年で128.3万円、2020年で177万円まで増えています。2060年、今の社会保障金額を横ばいとした場合に304万円になりますけど、今までの伸び率からすると、おそらく400万を超えてしまうということになりますので、今の日本人の平均年収が420万くらいですので、ほとんど全部が税金でとられてしまうということに結論としてなります。

この中でどうすればいいのかというと、言うまでもなく人口を大きく増やすことはもう不可能になってしまっている中で、賃金を増やしていったこの負担増に耐えるような形に持っていかなきゃいけないということが一番の問題になります。そうするとインバウンドのところでは日本人の人口が減ってきますので、地方の観光地にとっては日本国内の人口で維持することは不可能になっていって、問題になっていく、潰していくしか方法がないというような結論になることを避けるために、日本以外のところで79億人の外国人がいるわけなので、そのごくごく一部の人達に毎年来てもらふことによって、日本国内の観光客の減少を補填していくことができると同時に、よりその稼働率を高めていけるということで、インバウンド戦略が実行されてきました。

ただ、ご覧のとおり、1990年のインバウンドの外国人観光客は324万人でした。2011年、今現在のインバウンド戦略が始まる前の年までは836万人まで増えてはいます。要するに、

2.6倍に増えていますが、22年間に2.6倍に増えているだけです。で、ご覧のように2012年以降激増していきまして、2012年の836万人から2019年のピークで3,188万人まで増えています。要するに22年間で2.6倍、平均して毎年4.4%の増加だったものが、7年間で3.8倍、年率で21.1%の増加に上がりました。手前味噌ではありますが、当事者の1人としてなぜこうなったのかということはこの再開発に十分参考になるんじゃないかと思うのです。

要するに実際の観光魅力としてはほとんど何も変わっていません。いきなり4倍になることはありえません。何が起きたかということ、観光の考え方を根本的に変えました。その第一が、この時代の前までは観光は世界平和のためであると、光を見るための産業であるということが言われていたのですが、それだと外国人は来ません。歴史・文化を中心としたものではあったのですが、歴史・文化というのはそんな魅力があるわけではないのです。そうするとこれをビジネスに変えまして、観光の魅力はなんなのかと徹底的に分析した結果、インフラ投資と整備を中心としたもので多様なアピールをすることに変わりました。歴史・文化を中心としたものではやっぱりあまりにも多様性がないもので、そんなに惹き付けるような、先ほどの話ありましたような、魅力はありません。その時に、都市の文化、要するにショッピングであって、ナイトライフであったり、あとは和食にとどまらない日本の食文化、それにアクティビティ、日本の国立公園を中心とした素晴らしい大自然、ビーチ、山、スキーとか、ハイキングとか、いろんなアピールをすることによって、たった7年間で4倍にすることができたのです。

もう1つあるのは、その時は例えば文化庁の内部の組織を見れば分かりますように、昔は例えば文化財の保存がメインだったのですが、今組織改革をした後に、今観光資源の保存と活用が資源活用課というところまでできてきて、やっぱり両輪にしないといけないということで、同じことで、保存だけではなくてやっぱり活用することによって、独立かつ持続的な採算がとれるようなやり方に切り替えています。

その1つで、宿泊をどう考えるかという先ほどの話ですが、観光収入の半分は宿泊と飲食です。どうやって宿泊させるのかというのは最大のポイントでありまして、横浜も奈良市もそうですが、別のところに近い、宿泊してもらえない、要するに日帰りだけをするということは、観光客の数は来ますが、経済にはほとんど貢献しません。そうすると、宿泊をどうやってさせるのかという戦略に切り替えなければいけないわけなので、例えば奈良市の場合は交通の便が横浜同様あまりにも良すぎちゃってみんな日帰りをします。それで観光戦略の一つとして何をしたらかということ、1番最初の電車は8時半に着きますので、8時半の前に開催するイベントを作ったりすることで前泊しないと参加することができません。こういうずるいことも考えなきゃいけないことも事実としてあります。観光戦略を考えるに当たって、宿泊施設をどうするのか、あとどうやって宿泊させるのかということを戦略的に考える必要があると思います。

結論から言うと、常に人が集まる施設にしなければならない。魅力を高めることによってどうやって宿泊してもらおうのかということ、最初から徹底的にそれを考える。そしてその次にありますような付加価値の高さを重視する。人が来て日帰りをするだけではゴミだけ落とされて、お札を落としてもらえない戦略はほとんど何の意味もないと思いますので、やっぱり付加価値の高い開発をしなければならない。

その次としては、築地の再開発の委員会もさせていただきましたけど、まとまった土地がなかなか日本国内に出てきませんので、もう何十年に1回しかチャンスがないわけなので、人口減少の話をした理由がそこにありまして。まとまった土地を再開発する時に40年先、50年先のことを考えた上で再開発しなきゃいけないので、短期的な目線でやって、後でまたやればいいっていうことで、そういう考え方はやはり難しいというか、しないことだというふうに思います。

国内外にとって魅力的な施設であるということなのですが、インバウンド戦略をやっているうちに、観光客のために必要なものであって魅力的なものであることを言っていますが、そういうところはインバウンドのためだけということ批判されることがありますが、実は今までインバウンド戦略でやってきたインフラ整備や投資は、それ以上に実際に活用しているのは実は日本人です。ですから外国人に魅力的なものというものは、国内にも魅力的なものなので区別する必要があまりないということで、国内外にとって魅力的なものであるというふうに思います。

先ほどの市のプレゼンにもありましたように、今の時代で人口減少することによって、これ一番ポイントなのですが、人口が減っていく中で経済を維持していくために何が必要なのかというと、地元の賃金を上げるしか方法がないのです。人が減っていったら税収が減って欲しくないということであれば、賃金を上げてもらって、その分だけ税収が増えるわけなのですが、どうやって賃金を上げるということが一番大事なのです。宿泊のこともそうなのですが、先ほど申し上げたように、ゴミだけ落とされて県内の賃金が上がらないような観光戦略というのは私としては無意味なものだと思います。そういうふうに考えると、財政の負担にならないように貢献してもらうことも含めて考えるべきものであって、それどういうものかっていうことはこれからの議論なのでしょうけど、県民の賃金をどうやって上げるのか、そのために何が必要なのかということをもっと最大の焦点にしてこの再開発を進めるべきではないかと私は思います。以上です、ありがとうございます。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。今お二方からプレゼンがございました。お2人共通しているところは、人口減少は避けて通れないという中で、またそれから高齢社会というところ、それをもとに今村委員からは都市に向けての再開発のご意見、それからアトキンソン委員からは観光とそれから賃金を上げるということで具体的な収入についてのものと、それから財政に貢献していかなくちゃいけないとか、まとまった土地をこのように50年先を見据えてというような、幅広ではありますけど、1つの参考になる意見をいただきました。さて、この2人のプレゼンをいただきましたけど、何か皆さんの方からご質問やご意見ございますでしょうか。

それでは北山委員、どうぞ。

【北山委員】

今村さんの方から、問題の枠組みについて非常に大事な話がされたと思います。今、山下ふ頭の検討委員会をやってますけど、山下ふ頭だけの話ではない、もっと広域の問題で

あると。横浜市の問題としては、郊外の農地がかなりあって、特に介在農地になっている、そういうところに都市型農業の可能性があること。それからエネルギーの話もされましたけど、市の財政を考えていく時にこの山下ふ頭に何かを負わせて考えていくというのではなくて、市全体のもっと広域の問題として捉えていこうという、そういう枠組みの話があったと思います。これは非常に大事なところで、山下ふ頭の開発で市の財政が良くなるかそういう話をする場所ではないと思います。

もう1つは建て付けの問題で、検討委員会を今港湾局がやっているわけですけど、港湾局だけでやってもダメだろうという話がありました。これは都市の問題ですから、市全体の問題ですし、広域の問題なのです。かつては横浜市には企画調整局というのがあって、部局を横断して都市の問題を解決していくというような、そんな部局を作っていました。そういう意味では、今回は港湾局が担当部局になっていますけど、そこだけでやっていくとファクトデータも全部港湾関係になりますし、今回地域関係団体の方を呼ばれるというのもこれも港湾局の方で考えられたと思いますが、やはり港湾関係の方がやはり大きい場所を占めてくるような気がします。そういうこの会議自体の建て付けの問題も今村さんからされていたと私は思いました。

それと人数が今回から地域関係団体の方が6名増えて16名に増えてます。人がちゃんと議論できるのって10人以内であるという熟議の民主主義という概念がありますが、人数が増えてくると議論ができなくなる。僕は地域関係団体の方が議論することはとてもいいと思いますが、それは別の委員会であってよい。そういう検討会があると同時に、他にも広域の方の委員会もあってよい。この横浜のインナーハーバーに関しては、いろんな関係を持って横浜のイメージ・アイデンティティを作る場所ですから、重要な場所です。そういう場所をどうするかという問題をもっと広域に話ができるような会議のシステムが必要じゃないかと思いました。

今村さんの話を伺いながらそういうふうに思いました。ただし、今村さんは東急総合研究所なので、渋谷の巨大再開発をやられていますけど、これが人口減少時代の都市の作り方に本当に合致するのは疑問です。容積を異常に増やして巨大なものを作ってますけど、人口減少する時代にあんなことをやっているといいのかなんていうのは個人的には思っています。

【石渡委員長代理】

ありがとうございました。いろんな時代の流れでフェーズがありますけども、時の流れと現実、リアリティの流れがこうマッチングしていない分、錯誤、錯綜する部分もあるかとは思いますが、今北山委員からは今後の進め方、取り組み方についてのフレームワークみたいな話もありましたので、この辺もまたご一考いただければと思います。

他にいかがでございましょうか。

【藤木幸太委員】

いいですか。

【石渡委員長代理】

はい、どうぞ。

【藤木幸太委員】

今、北山委員のお話の中で、やはり地元ですね、これがあまりこう委員会の中に多く入るのはけしからんというようなお話を伺ったんですけど、例えば我々港湾が多いのは当然今まであそこを使ってた人間として、出させていただいているわけですけど、決してそこで利権を主張したりそういうことは北山さんございませんので。むしろ今、今村委員とかデービッドアトキンソン委員に伺ったようなよりグローバルな、それと新しい社会に合致した、こういう開発を我々望んでますので、ぜひその辺は誤解のないように思うんです。

【北山委員】

僕、別にけしからんと言ってるわけではございませんので。

【藤木幸太委員】

それともう1つ、とてもこれはポイントなんですけど、どうも今まであそこカジノってことで注目を浴びた場所なんですよ。そのカジノをどうするかっていうんで8人も市長候補が出て、横浜市を二分するようなことになりまして。本来そんなことじゃなくて、むしろ飛鳥田市長が昔おやりになったような6大計画とか、そういうものをしっかり歴代の市長が作るべきだったんですよ。で、歴代市長は飛鳥田市長が出された6大計画、これをしっかり1つずつ消化して、見事に成し遂げたと思うんです。その次、中田市長の時代にランドデザインをもう1回やらなきゃいけなかったんです。その時に港が例の150周年記念というのをやって、これで新たな100年後の横浜港の姿なんていうのを書いたんですけど、これも本当に絵に描いたような餅で、何も実現なんかしないようなものを描いたわけですね。そうじゃなくて、今回はランドデザイン、これは先ほど委員の方、皆さんの口から出てますけど、やはり横浜の、横浜港あるいは横浜市全体のランドデザインをもう一度しっかりこの委員の方たちの知見をお借りして、しっかりと議論していただきたいと私はそう思っております。その中で、特に港湾だけに関して言えば、今あのエリアはインナーハーバーと呼んでおりますけど、このインナーハーバーは例の瑞穂ふ頭なんかもあるわけで、この接続解除の問題、こういうことも横浜市は全然積極的にやってないんですよ今まで。こういうことも含めて、やっぱり市が全体で何を目標にしてやるかっていうことをもう少し一体的にやっていただかないと、特に瑞穂ふ頭があれば、じゃあカジノをやるんだったら瑞穂ふ頭でやってもよかったわけですし、やはりどこで何をすべきかっていうランドデザインがないと、山下ふ頭の話だけでどうしてこんなここにこれも欲しいあれも欲しいってことを言うんでしょうかね。その中で一番気になる言葉は効率化ってやつなんです。効率的なものはあの47ヘクタール、たかが47ヘクタールで効率的にしたいと、ホテル作りたとかいろいろ話出てきますよ。そうじゃなくて横浜全体の、さっきデービッドさんおっしゃったように、横浜全体のブランド価値を上げる、ここで泊まらなきゃいけないぐらいのものにするというためには、例えば山下ふ頭を1つの公園にしちゃって、もう

鎮守の森を作って、それが将来の横浜に全体的に寄与してくるんだというようなものを考えると、そういう話をぜひこの委員の方に意見としてお出しいただきたいと、こういうふうに願っている1人でございます。

【北山委員】

今お話がありましたけれど、ここのテーマが再開発検討委員会になっていますけれど、再開発ではなく、開発をしないという提案もあるはずなんですよね。これはネガティブマスタープランという概念があって、ここに建物を建てさせないというような、そういう計画をするというのがあります。

実は横浜の港の見える丘公園っていうのが、山下ふ頭の前にありますけど、あそこから港が見えなくなったら、港の見える丘公園はどうなるんだっていうことになりますよね。あれはちょうど高さ40mくらいのところにあると思うんですけど、それは横浜市が1970年代に都市デザイン室で視点場、ヴィスタコリドーとヴィスタポイントっていう、どこから何が見えるかっていうことをやってきたんです。

それは何かを作るという計画ではなくて、何かその視線がちゃんと通る、何かが見えてるということが大事だという都市デザイン思想で作られてる不思議な都市なんです。

それを忘れないようにしてほしい。だから特に港の見える丘公園から見た時に、港がちゃんと見えるようにここには作らないようにしようというようなことを決めるってことはあると思います。

【アトキンソン委員】

いいですか。

【石渡委員長代理】

はい、どうぞ。

【アトキンソン委員】

今まさにお話にありましたとおりで、観光の観点から言うと、今、幸太さんがおっしゃったように、前は点として観光が考えられたっていうことと、情報発信だけで考えてるっていう傾向が非常に強かったんです。そうすると、大河ドラマを誘致すればなんかいいことがあるような妄想があったりとか。またはここだけを集中的にそれで開発すればいいっていう考え方があったんですけど。今の話にもありましたように、実はそういうのは何の魅力もなく、宿泊をしてもらうということになると、周りにある施設・設備を全部分析して、近いところにどういうところがあって、もうダブらない、補填していく、そのプラスの考え方でブランドを作っていくっていうことは言うまでもないのです。ですからいろんな東京都心で見ると、またなんか高層ビルでまたなんかいろんな施設やってても全部ダブってるじゃないのっていうことがあるんですけど、都心であればあるほどできるかもしれませんが、それは外の人間をこうやって内部に引っ張ってるだけで、それはやっぱり都心だからこそできるっていう話なのです。

地方の観光地を見てみますと、やっぱりいくつの種類の観光の施設がないといけない。またそういうのは連携をしてないと結局それで誰も来ないっていう問題があります。

簡単に言えば、例えば奈良県で今までやってきたことと、今、京都府を見ると、京都の方が圧倒的に人が来るんですけど、30分しか離れてない奈良にはそこまでは人は来ていなかった。

文化財の専門家からすると文化財的には奈良の方が上なんです。だけど、人が来るのは京都。なぜ京都なのかというと食の文化があって、ナイトライフがあって、買い物があって、1つのところにいろんなものが揃ってるから人が来る。

あと交通の便が意外に悪いという、新幹線が9時半で終わっちゃうとかですね。いろんなことがあって、うまくそこで恵まれてるんですけど、残念ながら戦略的に作られたことではないということを申し上げておきたいです。

ですから今回はそういう意味では、さっきのご指摘にありましたように、周りに何があって、どういう総合関係でどういう相乗関係ができるのかっていうことを十二分に考えた上でやらないと、ただ単に他にもあるようなこと、もう少し北の方にあるようなものをもう1回作っちゃうということになると、私は失敗すると思います。

【北山委員】

横浜の都市デザインは、これまで元町も、地元の商店街と市が共同して独特の街を作る。それから馬車道も馬車道の商店街とその住人と一緒に共同して作っていく。特色のあるものを順番に作っていくと。同じような商店街は作らない。伊勢佐木町も違う、伊勢佐木モールもまた別のアイデアでしかもそこで営んでる人たちが作っていくという作り方をしています。

横浜市の中は今、画一的な都市ではなくて、モザイク状のいろんな興味のある面白い街ができてきている。それをみなとみらいが実は壊したんじゃないか、みなとみらいという新しい都市開発は横浜らしさを壊してる可能性もある。今回はその横浜らしさを壊さないように本当に気をつけて、どこにでもあるようなガラスのカーテンウォールのビルを作っちゃうようなことは絶対やっちゃいけないと私は思っています。

【アトキンソン委員】

もう1ついいですか。

【石渡委員長代理】

はいどうぞ。

【アトキンソン委員】

ただ、観光戦略の深き部分にまで関わらせてもらった中で、もう1つあるのは、財政に悪影響を与えないということを指摘しました。やっぱり多くの今までの観光施設の、要するに経済合理性があまりにも軽視、無視されてきた形でやってきたわけだから、人口減少

って何なのかって、経済合理性をさらにさらに求めなきゃいけないっていうことを意味していることを申し上げておきたかったのです。

その経済合理性を十二分に考えた上で、経済合理性のないもの要するに市の財政に悪影響を与えるようなことだけは避けた方がいいんじゃないかというふうには思います。

例えばなんですけど、私が直接的に今まで関わってきたところで、京都二条城、あと新宿御苑、または赤坂迎賓館とか。いろんなところの今まで整備をやってきたんですけど、そういうところでどうやって、どういう整備をすれば、その施設は独立した形で要するにどういうプライシングでどういうインフラ投資をすれば、自立ができるかっていうことを今まで測ってきたのです。

で、これがやっぱり言われるほどの難しい話ではないんですけど、今まではあんまり考えられてこなかったから結局悪循環になっていて、京都二条城の場合ですと市の負担になっているので、毎年毎年それでその予算が削られていって、どんどんどんどん人が来なくなって、人が来ないからまた予算が削られていって、またシャビーのものになってしまっていて、また悪化するようなことだったんですけど、徹底的に整備をする代わりに、入場料をドンとあげていって。その時に委員会で言われたんですけど、人が来なくなるよって言うこと言われたにも関わらず、来る人は実は3倍になったっていうこともあって、日本第2の人気のお城に変わっちゃったっていうことがあります。

やっぱりこの経済合理性を一定に保つような形じゃないといけないと私は思います。

【北山委員】

経済は絶対否定できませんが、都市っていうのは人が住んでる場所ですから。住人のための都市っていうのが1番最初にあるべきです。投資されること、それからインバウンドのために都市があるわけではなくて、プライドのある魅力的な都市であれば、そこに結果として人々も訪れるという、そういう状態になると好ましいと私思います。

【アトキンソン委員】

ただそのインバウンドのためっていうことは、私は申し上げてるわけでもないし、市民のためではないということを申し上げてるわけではありません。

【石渡委員長代理】

はい。予定した時刻はまあ45分で5分経過しておりますが、会場の都合もありますけどあと30分ぐらい使えると思いますので、もう少し延長して議論をさせていただきたいと思えます。

藤木幸夫委員。

【藤木幸夫委員】

はい。議論がいい方向に入ってきましたね。アトキンソンさんと会うたびに話をするのですよ。しかし今この会合があって、もう本当に山下ふ頭のための会合なんですね。これは林さんの2回目の選挙の時に、林さんが、ある神奈川県下の市長選挙で、カジノが賛成

か反対かになって、調べたらカジノ持ってきたら落とすというような団体まで生まれて。これ横浜じゃありません。

で、林さんが顔色を変えて、横浜で私はどうしようかというお話、まあ私にも相談がありました。反対しなきゃだめですよ、と。でも反対ということはまた、色々差し障りがあるから、白紙ということにしたらどうだと。選挙は白紙で通ったのですよ。それで林さんが当選したのです。で、その白紙という言葉を選挙では使ったけども、本当の公約の中には入れてなかったの。これはある時はっきり言おうと、8月の22日に、たまたま3年後の投票日だったのですが、記者会見で、横浜港でカジノ反対という市民運動が起きてる、密かにこれが、だんだん日に日にでかくなっている、これは放っておくと大きな運動になりそうだと、ここではっきり横浜市長選挙で私は態度を表したいと。そこで使った言葉が白紙なのです。だから白紙以外にあの時使う言葉がなかった。それで選挙に臨んだ。で、勝った。そしたら横浜市民の皆さんはもう署名・捺印。捺印ですよ。捺印までして、もう20万人の人が反対を発表して、それを新聞が書きちゃったから、それから騒ぎが始まって。

ところがその時に密かにアメリカ政府から日本の官邸にどんどん電話が来ていたり、話があって、これはうんと後ほど、ホワイトハウスから私は直に聞いた話です。あの時はそんな辛かったのか。で、私の名前も私の写真も向こうのテレビにじゃんじゃん出たそう。反対派のこれは悪い野郎だと。だから私は遺書を書きましたよ、遺書。まだその遺書あります。あれは書いていて気持ちいいものじゃないですね。

でもそのぐらいの覚悟でなければ。相手はアメリカ政府だ。条件は何だ、と。徴兵制度が条件なのです。これはもう経済問題ではない。横浜の問題ではないなということ。

今私はここでこんなこと言っているのは、この会議が今日は横浜市民の方に中継されてるそうですね。これをご覧になってる横浜市民の方が大勢いらっしゃる。これはあからさまに言います。8月22日のあの普通の記者会見で林文子が白紙だと言ったことが、これが失敗の始まり。

じゃあその白紙ってどういう白紙なのって、先は分かりません。ただ市民運動の方だけが熱が出て、私はどっちの肩も持っていません。けども、忙しい日々が私は続きました。

そして今横浜は真っ二つですよ。商工会議所の今日は、会頭があれで、というお立場で、今日はありがとうございました。あなたが来てくれて。会議所と口聞かなかったのでもんな俺は、ずっと。横浜の人間関係まで崩れちゃったのですよ。だから元へ戻す大変い会がこの会なのだ。これは今日ここで結論が出るわけではないけど皆さん。この会を長続きさせていただいて、私みたいにこうやって黙ってられないから、全部喋ってしまう男がいますからね。これからも喋りますから。

ぜひ横浜の人間関係、あるいは商店街同士の関係、あるいは業界同士の関係、あるいは経済団体同士の関係、これが今乱れているから、横浜の不幸です。で、幸いカジノは、アメリカは諦めました。今、中国の習近平さんだけは自分のとこの足元だけを修正したけど、あとはみんな潰れていますね、どんどん。情報は毎日のように、私は今でも入っています。

この会はとってもワールドワイドの会ですよ。ここであえて、だから今半分本当のこと言っちゃったけれども、皆さんこれ真剣に、横浜市民の幸せのためにお願いします。私も年が年ですから、すぐ今の世の中をさよならしたら港のご先祖様の方へ今度移ってきますから。よくいい報告するために私はあっちへ行きたい。よろしくお願いいたします。

【石渡委員長代理】

はい、ありがとうございます。

【藤木幸夫委員】

中間報告です。

【石渡委員長代理】

はい。なにか、くしくもまとめのような話に、雰囲気になりましたけど。何かまた皆さんもう少し時間がありますけども。いかがですか。

【藤木幸太委員】

ではもう1つよろしいですか。

【石渡委員長代理】

はいどうぞ。

【藤木幸太委員】

今色々、とにかくあの藤木幸夫委員の方は全くこの開発からだいぶ逸脱した話になっておりましたが、でも大きな意味で言えばこの横浜市のあり方って言いますかね。今まで私も市のいろんな委員会に出していただいて。で、東京からいろんな方が学識経験者の方とかいらして、そういう会に出て話を聞くのですけど。横浜市が、これ市の悪口になったら申し訳ないと思うのだけど、市がきちっとフィードバックしてなかったように思うのですね、港湾のことについても。

そういうのをこう考えてみて、今回のこの案件については、やはり横浜市さんが先ほど皆さんの話伺ってても、やはり縦割、これが良くないと。もっと一括してやりなさいというような…

【藤木幸夫委員】

お話中悪いけど、みなとみらいは、あの開発はすごい失敗作だよ、あれは。その二の舞、それをまたやろうとしているのだ、今。あれは失敗作。携わった役所と携わった人間はみんな立派だけれども、全体から見たあのプロジェクトは、俺は失敗だと思っている。以上。

【藤木幸太委員】

その失敗って、全て100%成功は私ないと思っいて。

【藤木幸夫委員】

いいのは名前だけ。

【藤木幸太委員】

ですから、みなとみらいはそれなりにきちっとできていると思うのですが。とにかく私が申し上げたいのは、どんなに立派な方がどんな発言されたり、どんな立派な市長がいても、やはり市会だとか県会だとか、横浜だと市会ですけど。この先生たちが背後になんかいろんな人がいて、いろんな力がかかって、これを通せと言われると、それが通ってしまうのは本当に不思議なのですよね。

【藤木幸夫委員】

いや、あれ手先だから奴ら全部。

【藤木幸太委員】

とにかくそれを、やはりこの委員の方たちに、せっかくいろんないい意見をいただいたら、やっぱり市の方がそれを、市長始め、今日局長もいらっしゃるけど、やっぱりきちっとした方向でこれをまとめていただきたい。これは強くお願いしたいと思います。

【石渡委員長代理】

はい、ありがとうございます。今日は意見交換の中で、北山委員それからアトキンソン委員、それから両藤木委員からご意見いただきました。これは今後の進め方について大きな示唆があると思いますので、もう一度やはり横浜の独自性を発揮しつつも、経済合理性も発揮しつつも、やはり市としての全体バランスを取らなきゃいけないと。

で、この山下の当該地域だけでどうこうではなくて、やっぱり全体バランスを考えて進めていかないと、後世で振り返った時に、この時の委員会のあれがなんだというふうに言われなように。むしろこの時の委員会こそ、これがあって横浜全体の未来を振り返った時に今日があるなど言ってもらえるようなものにしなきゃいけないのかなという感想を持ちました。

時間も時間なので、まだご意見ございますか。

【全体】

(発言無し)

【石渡委員長代理】

もしよろしければ今日はここの部分で一旦閉じさせていただいて、今貴重なご意見いただきましたので、要請事項も含めて、そして今後活発なご意見をいただきながら、やはり小さな目線でやらずにもっとグローバルで、将来を見据えた形で意見交換ができるよう

に、そして全ての人がやっぱり腹落ちするというか、これなかなか難しいんでしょうけどね。100%は難しいでしょうけど、まあ違った意見が様々あった中で腹落ちするようなものにしていければと思いますので。また次回よろしくお願いします。今日のところはちょうど4時になりましたので、本日はこの議事を閉じたいと思います。進行を務めさせていただきましたけども、今後の方は事務局にお返しをします。ご協力ありがとうございました。

【事務局】

石渡委員長代理ありがとうございました。本日はお忙しい中長時間にわたり意見交換いただきまして、誠にありがとうございました。次回の開催は春頃を予定しておりますが、詳細については後日お知らせいたします。以上を持ちまして閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

第4回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 会議録	
日 時	令和6年7月12日（金）10時00分～12時00分
開 催 場 所	横浜シンポジア（産業貿易センタービル 9階）
出 席 者 ※五十音順 ※敬称略	<p>石渡 卓（神奈川県大学理事長） ※ウェブ参加</p> <p>今村 俊夫（株式会社東急総合研究所代表取締役会長）</p> <p>内田 裕子（経済ジャーナリスト、イノベディア代表）</p> <p>河野 真理子（早稲田大学法学学術院教授）</p> <p>坂倉 徹（横浜商工会議所 副会頭）</p> <p>幸田 雅治（神奈川県大学法学部教授） ※ウェブ参加</p> <p>高橋 伸昌（関内・関外地区活性化協議会 会長）</p> <p>宝田 博士（協同組合元町エスエス会 理事長）</p> <p>田留 晏（神奈川県倉庫協会 会長）</p> <p>デービッド アトキンソン（株式会社小西美術工藝社代表取締役社長）</p> <p>平尾 光司（専修大学社会科学研究所研究参与、昭和女子大学名誉理事）</p> <p>藤木 幸太（横浜港運協会 会長）</p> <p>村木 美貴（千葉大学大学院工学研究院教授）</p> <p>涌井 史郎（東京都市大学特別教授）</p>
欠 席 者 ※五十音順 ※敬称略	<p>北山 恒（建築家、横浜国立大学名誉教授）</p> <p>隈 研吾（建築家、東京大学特別教授・名誉教授）</p> <p>藤木 幸夫（横浜港振興協会 会長）</p>
開 催 形 態	公開（傍聴者19人／記者19人）
次 第	<p>1 議 事</p> <p>(1) 前回委員会後の市民意見等の説明</p> <p>(2) 事務局の説明</p> <p>・前回の補足説明</p> <p>・ファクトシート「国内外開発事例編」について</p> <p>(3) 地域関係団体委員の意見書の説明</p> <p>(4) 学識者委員プレゼンテーション</p> <p>(5) 意見交換</p> <p>(6) その他</p>
決 定 事 項	委員長は平尾委員に決定した。
議 事	別紙
資 料	<p>当日配布資料</p> <p>(1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 名簿</p> <p>(2) 前回委員会後の市民意見等</p> <p>(3) 前回の補足説明</p> <p>(4) ファクトシート【国内外開発事例編】</p> <p>(5) 地域関係団体 意見書</p>

第4回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 議事

【事務局】

これより、「山下ふ頭再開発検討委員会」を開催します。

私は、事務局を務めます、山下ふ頭再開発調整課長の周治と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

お手元の資料を確認させていただきます。次第、名簿、前回委員会後の市民意見等、前回の補足説明資料、ファクトシート【国内外開発事例編】、地域関係団体意見書を配付しています。よろしいでしょうか。

開催にあたりまして、横浜市副市長の平原よりご挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

【平原副市長】

皆様、おはようございます。今日はお忙しい中、また足元の悪い中、山下ふ頭再開発検討委員会に、オンラインでのご参加も含めご出席を賜り、誠にありがとうございます。

委員の皆様におかれましては、日頃より横浜市の発展にお力添えいただき、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

昨年8月に初めてこの委員会を開催して以降、3回の委員会を通じまして、学識経験者の皆様からプレゼンテーションをいただいて参りました。また、地域関係団体委員の皆様から、再開発に対するお考えを意見書として頂戴いたしました。これらを元に、様々な視点で活発なご議論をいただいておりますことに改めて感謝申し上げます。

さて、横浜市でございますが、令和3年をピークに人口が減少し、今後は生産年齢人口の減少、少子高齢化が更に進み、市内経済の活力低下も懸念されております。さらには昨今の自然災害の激甚化・頻発化に加え、深刻化する気候変動問題に対し脱炭素をはじめとする地球温暖化への対策が強く求められるなど、時代が大きく転換期を迎えています。こうした中で、山下ふ頭の再開発は、横浜経済をけん引し、都市ブランドを高めるまちづくりの象徴として、今年度も引き続き、皆様方の豊富なご知見をいただきながら取り組んでまいります。そして、市民の皆様からご理解をいただける、事業性のある再開発の実現を目指してまいります。

この山下ふ頭再開発ですが、横浜市全体の発展にも大きくかかわる大変重要なプロジェクトです。令和3年度から、市役所内の横断的な体制として、関係区局による庁内プロジェクトを設置しております。本日は、プロジェクトメンバーである関係区局も参加しております。横浜の活力を未来に繋げていくため、港湾局と関係区局が一丸となって市役所一丸で取り組んでまいります。

本日の委員会では、前回に引き続き、地域関係団体の委員から意見書のご説明、学識者委員からのプレゼンテーションをいただくこととなっております。委員の皆様方におかれましては、横浜を象徴する美しいウォーターフロントを舞台とした再開発により、新たな価値が創造され、世界の人々を惹きつける魅力的なまちづくりとなるよう、それぞれのお立場から、是非、自由なご議論をお願いいたします。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

【事務局】

ありがとうございました。

本日の委員の皆様の出欠状況についてご報告させていただきます。

まず初めに寺島委員についてですが、ご本人からの申し出があり委員を辞任することとなりました。

したがいまして、委員17名の内、WEBでご参加の石渡委員、幸田委員を含め14名の皆様に、ご出席いただいております。

北山委員、隈委員、藤木幸夫委員はご欠席でございます。

条例第4条第4項に基づき、これより先の議事進行は、前回、委員長代理として進行いただいた石渡委員にお願いしたいと思います。石渡委員、よろしく願いします。

【石渡委員】

承知いたしました。おはようございます。

今、事務局からも報告のあったとおり、寺島委員が辞任されました。したがいまして、改めて委員長を選出するに当たり、条例第4条第2項に基づき互選により選任したいと思います。

どなたか委員長のご推薦はございますでしょうか。

【涌井委員】

はい。涌井と申します。

【石渡委員】

涌井委員、どうぞ。

【涌井委員】

まずは事務局にお考えはございませんでしょうか。

【石渡委員】

事務局はいかがでしょうか。

【事務局】

事務局の山下ふ頭再開発調整担当部長の洞澤と申します。どうぞよろしく願いいたします。

ご実績やご経験から学識者の平尾委員にお願いしてはいかがかと考えております。

【涌井委員】

ありがとうございます。

私も平尾委員は金融機関の経営陣でもありましたし、併せて諸外国の事情にも精通されておられて、港湾の再開発についてもご知見をお持ちなので、私個人としては大賛成をいたします。

【石渡委員】

ありがとうございました。

ただいま、事務局並びに涌井委員から推薦のご提案がございました。私としても、今まで臨時でやらせていただきましたが、今のご意見を含みおいて平尾委員に委員長をお願いしたいと思いますが、皆様いかがでしょうか。

【(委員一同)】

異議なし。

【石渡委員】

ありがとうございます。

異議なしのお言葉をいただきました。それをもとに平尾委員に委員長をお願いしたいと思います。これにつきましては、これで平尾委員に承認ということにさせていただきたいと思います。円滑な議事進行にご協力いただきましてありがとうございました。

それでは事務局にお返しいたします。以上です。

【事務局】

石渡委員、ありがとうございました。

ここで、委員長席の移動を行いますので、しばらくお待ちください。

報道関係者の皆様方にお知らせします。報道関係者の皆様方は、報道撮影エリア内での撮影にご協力をお願いします。

傍聴者の皆様方は、撮影や録音等はお控えくださいますようご協力をお願いします。

それでは、平尾委員長、一言ご挨拶をお願いします。

【平尾委員長】

ただいまご指名いただきました平尾でございます。着座のままご挨拶させていただきます。

寺島委員長が諸般の事情から辞任され、残念でございます。

私は寺島さんとはニューヨーク時代、30年前から色々なご懇意をいただいております。寺島さんの横浜市や山下ふ頭に対する思いもより理解しております。そういう意味で、今回寺島委員長の後を引き継ぐことになりましたので、寺島さんの思いも引き継いで参りたいと思います。

山下ふ頭の問題は先ほど平原副市長からお話がありましたように、横浜市にとって、あるいは日本経済にとって非常に大きな、貴重な場所であり、47haの広い場所をどういう風に利活用していくかというわけでこの検討委員会を進めてきたわけです。振り返ってみますと、1970年代に横浜市が人口の急増と環境問題の悪化と、あるいは社会インフラの整備の遅れということで、六大事業という目標を作られました。それによってベイブリッジ、あるいは地下鉄、あるいはみなとみらいという壮大な都市建設が進められて、それが今日の横浜の繁栄を導いているわけでございます。

しかし、今大きな環境が横浜市を取り巻いており、その中で人口の減少、あるいは財政の厳しい環境等があり、また同時に価値観の多様化、それからSDGsに言われるような環境問題が課題になっています。その中で山下ふ頭の利活用をどうするかということが課題になっています。そういう意味では、この委員会におきまして学識経験者、それから地域の関係団体の委員の方々の忌憚りの無いご意見を今まで展開してまいりましたが、さらに踏み込んで議論を今後展開してまいりたいと願っております。

山下ふ頭の47haは、横浜市だけではなく日本にとって非常に大事な戦略的なポイントになっていくということで、イノベーションの実装、あるいは防災拠点の強化、あるいは市民の楽しみの場所という色々な課題をあそこの場所で展開していくことになろうかと思えます。そういう意味で、山下ふ頭の考え方はやはり市民による、市民のための市民の山下ふ頭の再利用ということを考えてまいりたいと思えます。

山下ふ頭に隣接する山下公園につきまして、皆さんご存知かと思いますが、100年前の関東大震災の時に横浜市のカレキを市民が運んで山下公園を作ったということです。今後市民の参加による山下ふ頭の再開発ということはこの場の学識経験者と地域団体委員の皆様方との活発な意見交流をさらに深めていただきまして、最終答申にまとめていきたいと思っています。皆様方のご協力どうぞよろしくお願い申し上げます。以上、私のご挨拶とさせていただきます。

【事務局】

ありがとうございました。

本日も、公開での開催となっており、会議の様子及び説明資料については、インターネット中継により配信されます。

なお、会議の様相を記録するため、事務局側で写真等を撮らせていただきますので、予めご了承いただきたいと思えます。

それでは、これより先の進行は、平尾委員長にお願いしたいと思えます。平尾委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

【平尾委員長】

わかりました。

それではこれから議事進行を担当させていただきます。

まず、本日の会議のタイムスケジュールですが、お手元の議事次第をご確認ください。

議事（1）を3分程度、議事（2）が10分程度、議事（3）が高橋委員からの意見書の

ご説明を、10分程度を目安に行っていただきたいと思います。議事（4）につきましては、学識者委員のプレゼンテーションとして、幸田委員と内田委員から10分程度ずつ行っていただきたいと思います。全体的な議事の終了後、意見交換を十分時間をとっておりますので、皆様の活発なご意見をお願いしたいと思います。

それでは、議事（1）に入ります。事務局からご説明をお願いいたします。

【事務局】

それでは、前回委員会後にインターネットフォームに寄せられました市民意見についてご説明させていただきます。お手元の資料2をご覧ください。

委員の皆様には、事前に本資料をお送りさせていただいておりますが、1から2ページは市民の皆様からのご投稿をまとめたもの、3ページ以降は市民の皆様からのご投稿をそのままつづった資料となっております。本日は、資料の1・2ページをご説明させていただきます。

1ページをご覧ください。受付期間は、前回委員会開催日の1月12日から7月9日までとしています。

意見数は、55名の方から111件いただいております。ご投稿いただいた方の居住地は、市内在住の方が54名、市外在住の方が1名となっております。なお、山下ふ頭再開発に関連しないご意見等は除外させていただいております。

「3 御意見の主な内訳」をご覧ください。

「(1) まちづくりの方向性に関する御意見」については、

- ・今後の横浜のイメージを確定する重要な案件のため、地域活性・観光・防災を考慮したイメージ戦略を基盤として必要な事業を考えるべき
- ・横浜にしかない開港以来の美しい歴史的景観や財産と調和する、100年後も世界に誇れる都市デザインを実現してほしい
- ・「横浜らしさ」の愛着と誇りをもち、市民参画による市民のための、豊かで持続可能な都市づくりを推し進める

などのご意見をいただきました。

資料の2ページをご覧ください。

「(2) 導入機能に関する御意見」については、

- ・山下ふ頭へのアクセスは良くないので、横浜駅から山下ふ頭をつなぐLR Tや自走式ロープウェイなどの利便性向上と脱炭素や省エネにつながる新交通
- ・「インバウンドの来日目的は観光だけでなく日本らしさである」という意見があるので、日本の文化・伝統を見学、体験できる複合施設
- ・交通アクセスの強化を図り、広大な開発空間を活かした、アジア地域の中心を担う世界的な超大型展示場

などのご意見をいただきました。

「(3) その他の御感想等」については、

- ・山下ふ頭に他にないものをつくる、広く横浜に足りないものをつくるという意見に賛同

- ・横浜市の財政も踏まえて、市の収益が確保でき、事業が継続性を持つことは必須
- ・横浜市各局を横断する市内総合調整組織を作り、この計画を横浜市が総力を挙げた一大プロジェクトとして取り組むべき

などのご意見をいただきました。

説明は以上となります。

【平尾委員長】

ありがとうございました。

続きまして、ファクトシートの国内外の開発事例を事務局からスライドでご紹介いただきます。

【事務局】

前回の委員会でご説明させていただいたファクトシートにつきまして、補足説明を今回させていただければと思います。

前面のスクリーンに映し出す資料でご説明させていただきますが、同じものをお手元にも資料3として配付してございます。

まず、「世界、アジアの人口動向」について、増加傾向にあるとご説明させていただきましたが、北山委員から、基本的に都市化が進んでいる地域では人口減少が進んでいると思うので、アフリカ、欧州、北米の人口動態を確認したいとのお話がありました。

こちらが、前回のグラフにアフリカ、欧州、北米を追加したグラフです。

3地域を引き抜いたグラフがこちらになります。

北山委員のご指摘のとおり、アフリカは増加傾向、北米は微増の見込みとなっていますが、欧州は2020年をピークに減少の見込みとなっています。

次に、「横浜経済圏（横浜市）の産業構造の変化」について、平尾委員から、企業の数が産業別にどうなっているのか、その中でイノベーションを担う企業がどの程度存在しているのか、示して欲しいとのお話がありました。

こちらが、産業別の事業所数を1981年から概ね10年ごとにまとめたものです。

左上が横浜市の事業所数です。東京都特別区部、大阪市、名古屋市は、概ね減少傾向にあります。横浜市は概ね横ばいとなっています。

こちらのスライドの左側は、イノベーションを担う学術・研究開発機関の事業所数の推移を、右側は全事業所数に占める割合をお示ししています。

横浜市の学術・研究開発機関の事業所数は、名古屋市、大阪市と比較するとやや多い形となっています。

次に、横浜市の財政状況についてご説明させていただいた際、涌井委員からふるさと納税の流出額を確認したいとのお話がありました。

こちらがふるさと納税の流出入額の推移で、左が流出額を、右が流入額をお示ししています。

横浜市からの流出額は約272億円となっており、全市区町村の中で流出額トップとなっています。

なお、横浜市を含む地方交付税交付団体は、流出額のうち約75%は、国からの交付税により、補われています。

最後に、先日、委員から道路計画として臨港幹線道路について説明をいただきたいとお話がありました。

こちらが、新港ふ頭から山下ふ頭を経て本牧ふ頭を連絡する臨港幹線道路の計画図です。山下ふ頭から本牧ふ頭間は、国直轄事業として既に事業化されており、山下ふ頭の再開発に併せた整備を国に対して要望しているところです。

新港ふ頭から山下ふ頭間は、都心臨海部の一体化と埠頭間のアクセス強化のため、国直轄事業による整備を要望しております。

補足説明は以上となります。

【事務局】

続きまして、ファクトシート【国内外開発事例編】について、ご説明させていただきます。前面のスクリーンに写し出す資料でご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも資料4として配付しております。

まず、国内の事例として、東京湾沿岸部における開発事例を整理いたしました。高度経済成長期では、重化学工業地帯としての工業地化が進みました。安定成長期では、従来の機能からの質的転換が図られました。低成長期では、次の時代につながる産業・ビジネスの創出、国際交流の場を設けた地域が多くなっています。

各地区の都市的開発の内容は、下段に示したとおりです。各地区の都市的開発により配置された、主な導入機能・施設をプロットした図面をお示ししています。主な導入機能・施設については、本市がこれまでに2回行った事業者提案募集にありました中心施設をプロットしてございます。企業・大学イノベーション施設のうち、施設が複数存在する地区を青色でプロット、スポーツ・コンサート等エンターテイメント施設のうち、10,000席以上の施設をオレンジ色でプロット、国際展示場等の施設のうち、展示場面積10,000㎡以上の施設を黄色でプロット、テーマパークのうち、大規模な施設を黒色でプロット、緑は地区で一番大きい施設を緑色でプロット、おおむね、どの地区にも各機能・施設が配置されていることが見て取れます。また、最近の主な大規模開発を赤でプロットしています。こちらは後ほど紹介いたします。

次からは、地区ごとに事例をご紹介します。まずは、横浜都心臨海部における開発の構想や計画を改めてご紹介いたします。まずは、2010年に提言を受けました都心臨海部・インナーハーバー整備構想です。次なる50年を見据えた都市づくりの方向性として、横浜市民と世界から集まる多彩な人が幸福と豊かさを実感できる都市を目指して、①人間中心の都市、②持続可能な環境、③人材・知財を活かす社会、④文化芸術創造都市の更なる展開、⑤市民社会の実現を基本理念とし、インナーハーバー地区内各エリアの用途変換等に合わせ、現在の都心部から段階的に成長し、徐々にリング状の都市構造を形成していくということが、横浜市インナーハーバー検討委員会により提言されてございます。

続きまして、都心臨海部・インナーハーバー整備構想が提言されたのち、2015年には本市が横浜市都心臨海部再生マスタープランを策定いたしました。世界が注目し、横浜が目

的地となる新しい都心、都心臨海部を中心とした新しい横浜のライフの実現を目指して先進、交流、創造、感動、快適、活躍を将来像といたしまして、それぞれの地区の魅力をつなぎ合わせる「みなと交流軸」の形成と、「地区の結節点」における連携強化を重点的に進め、都心臨海部5地区の一体的なまちづくりによりまして、港と共に発展する横浜ならではの都心を形成するというところでございます。

続きまして、臨海部の開発ではございませんが、横浜市内で行われております大規模開発であり、委員からも連携したまちづくりが必要であるとのご意見を頂いております、旧上瀬谷通信施設地区についてご紹介いたします。旧上瀬谷通信施設地区土地区画整理事業では、テーマパークを核とした複合的な集客施設、農体験、ICTなどを活用した「収益性の高い農業」の展開など新たな都市農業モデルとなる拠点、新技術を活用した効率的な国内物流拠点、国際園芸博覧会のレガシーを継承する公園や災害時における広域的な防災拠点を整備する予定です。旧上瀬谷通信施設地区土地区画整理事業の一部の区域で、2027年3月から約半年間、GREEN×EXPO 2027が開催されます。

続きまして、川崎臨海部（扇島地区）の開発です。「カーボンニュートラルを先導」、「首都圏の強靱化を実現」、「新たな価値や革新的技術を創造」、「未来を体験できるフィールドの創出」、「常に進化するスーパーシティを形成」等を土地利用の方向性としています。

こちらは、築地地区の開発となります。「大規模集客・交流機能の導入や屋外広場などによる新しい文化を創出する舞台」、「ゼロエミッションの実現」、「デジタルと先端技術の活用」等に取り組むこととしています。

こちらは、品川駅北周辺地区の開発です。文化・ビジネスの創造に向けた、「育成・交流・発信機能」、「外国人のニーズにも対応した」、「多様な居住滞在機能」、「地域の防災対応力強化とエネルギーネットワーク構築」などを方針としています。以上が国内の開発事例となります。

続きまして、国外の開発事例となります。国外事例については、委員会での議論を参考にしながら市民意見募集や事業者提案で示された主な機能・施設・視点が含まれたウォーターフロント等での開発を選定しています。

まず、本日紹介する事例を一覧でお示しします。複合的に機能を導入した開発や一つの機能に重点を置いて開発した事例をご紹介します。

ここからは各事例の開発テーマや特徴などについて、簡単にご紹介いたします。各事例をスライド2枚で構成し、1枚目は代表的な写真と開発の経緯、特徴、経済効果など、2枚目は主な施設写真としています。

ハーフェンシティでは、高等教育・研究機関の設立、かつての倉庫を基盤として建てられた文化施設が開館するなど、学術研究施設や文化・芸術施設の集積が進んでいます。

ミッションベイでは、カリフォルニア大学サンフランシスコ校において、保育園・幼稚園・小学校との連携により、幼少期から質の高い教育やキャリア体験の機会が提供されるなど、子育て・教育にも注力していることが特徴となっております。

スタンレーパークでは、従来は、単なる市民の自然系リゾート地としての役割を果たしていましたが、娯楽機能の整備がなされ、近年は、ファミリー層や観光客向けに、自然系アクティビティを楽しむ機会が提供されていることが特徴となっております。

マルセイユ旧港地区では、倉庫を劇場に転用するなど、既存施設を活用し、地域の歴史を尊重するとともに、周辺の景観と調和した開発が特徴となっています。

ボルチモアでは、歴史的な船舶の展示や国立水族館、体験型科学博物館などの建設が進められ、現在は観光地としての地位を築いています。

ダブリン・ドックランズでは、周辺の河川や山脈、市内中心部のパノラマの景色を眺められるなど、景観に配慮した施設構成が特徴となっています。

バルセロナ旧港地区では、水族館や博物館等の文化施設に加え、ケーブルカーや遊覧船、ヘリコプターなど、景色を楽しむことができる交通機関が整備されていることが特徴です。

LA ウォーターフロントでは、クルーズ船が寄港することに加え、商業施設や公園、レクリエーション施設が整備され、観光地としての地位も築いています。

釜山北港では、IT やメディアコンテンツ産業の集積を目指した業務施設、水族館等の文化施設やアミューズメント施設、公園の整備など、複合的なまちづくりが行われています。なお釜山北港は事業中のため、主な施設の写真はご紹介できません。

マンハッタンでは、堤防の役割を果たす都市公園や防潮壁を兼ね備えた親水空間等で囲み、洪水や海水面の上昇から守るなど、防災機能の向上を図ることが特徴となっています。

最後に、市民意見や国内外事例を基に、機能や視点を取りまとめたスライドをお示ししています。これまで開発事例をご説明して参りましたが、山下ふ頭にふさわしい事例の紹介という趣旨ではなく、あくまで意見交換の際にご参考にしていただければという風に思います。また、開発事例につきまして、委員の皆様方の知見から補足等いただければ幸いです。

ファクトシート【国内外開発事例編】の説明は以上となります。

【平尾委員長】

ファクトシート【国内外開発事例編】のご説明ありがとうございました。それでは、ただいまのご説明につきまして、皆様方からご質問、ご意見があればお伺いしたいと思いますがいかがでしょうか。

今村委員いかがですか。

【今村委員】

今のは開発の事例ですが、例えば成功したところはこのようなところをうまく変えたとか、あるいは色々な地域のルールだとか、ソフト面でのものをもうちょっと絞っていただいて、ハードだけじゃなくて、うまくいったところの例を、何が具体的にどうなったのか、国を含めて、やっていただくと非常にいいかなというふうに思っております。

【平尾委員長】

はい、貴重なコメントありがとうございました。

【事務局】

ありがとうございます。ちょっとその辺を整理して、また次回お示ししたいと思いません。

【平尾委員長】

村木委員いかがでしょうか、ご感想なり、コメントなり。

【村木委員】

ありがとうございます。今村委員がおっしゃったのと同じようなことを私も思いました。特に、国内外のウォーターフロントの開発事例につきましては、一般的に言われていることだけではなくて、その効果としてどのようなことがあったのかというのを数字で、例えば経済効果とか雇用効果というのが書かれているものもあります。それを目指して開発をしているものもありますが、それによってもたらされた別の効果みたいなものもあるのだと思います。なのでそのようなことを深掘りしないと、参考になるかどうかというのは分からない気がしました。

また、開発は一度すると長い時間それを利用していくことになりますので、今の市民の方々が望むものと将来の横浜市民のために作っていくもの、それと施設の用途転換とか時代の求めるものにどうやって対応していくのか、そのようなことも含めてこういった海外事例等がどんなことをしているのかということも学ばれるといいのではないのかなと思います。以上です。

【平尾委員長】

貴重なコメントありがとうございました。是非事務局の方でまたその辺を。

【事務局】

調べられる範囲で、まずはしっかり事実を確認したいと思います。ありがとうございました。

【平尾委員長】

時間がございますので、次に議事（3）に入ります。地域関係団体委員の高橋委員から意見書を提出いただいておりますので、10分ほどでご趣旨をご説明いただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

【高橋委員】

はい、ただいまご紹介いただきました高橋でございます。関内・関外地区活性化協議会の会長をやっておりまして、今日こういう場で意見を述べさせていただくということで機会をいただきました、ありがとうございます。

お手元の資料5に出ておりますが、関内・関外地区活性化協議会、まずほとんどの方が知らないと思います。今から12年前に設立されてこの関内・関外地区の活性化を持続可能

なものにするため、地域全体の活性化に効果のある重点的な取組について、地域が一体となって議論、情報共有し、様々な主体が実施する具体的事業と適切かつ効果的に関わりを持って支援することで、地域の発展に寄与する、簡単に言うと、地域をいかに発展させていくかを主眼として事業活動を行っている団体でございます。本日意見書にあたりまして、4つの観点からお話をさせていただければと思っています。

まず1つが市民の生活向上、もう1つが横浜経済、そして3つ目が防災、4つ目がこの検討委員会もしくはこれから検討委員会が終わったとしても、それ以降の運営、そういったものについて意見をさせていただければというふうに思います。

まず、1番目の市民の生活向上に貢献できる場所であることということで別紙1を添付しております。先ほどファクトシートということで出ておりますけれど、これの3ページ目をちょっと開けていただければと思います。先ほどちょっと出ておりましたが、横浜市の人口減少社会の到来ということで他の地区に、全国平均に比べますと緩やかなのですけども、いずれにしてもトレンドとしてはもう減少方向に向かっているということです。

次のページを見ていただきますと、ここに一番端的なものが出ておまして、この現象がどういうことをもたらすかということで、経済活力の低下、そして個人市民税の減少、非常に横浜市は市民税に依存しておりますので、あと社会保障費は逆に増加をするということになります。この結果、12ページを見ていただきたいのですが、このように赤字体質というものが継続されていくということになります。これをどういう風に今後対応していくかということは、非常に市民の生活が、例えば市民税が上がるとか、色々な例えばインフラ面で、例えばバスや地下鉄そういったものに、例えば減便だとかそういった形で現れるとか、今まで我々が当たり前のように受けていたそのサービスが受けられなくなったりとか、色々なことが多分弊害として予想されてくると思います。

そういう中でもう一度意見書の1ページに戻っていただきまして、生産年齢人口の減少や、少子高齢化の進展を見据え、横浜市の税収を確保し、市民の福祉や生活の向上に貢献できるよう、再開発事業には税収を生み出す場所、この赤字の部分少しでも補えるような場所としての観点が不可欠であると考えています。また段階的な開発が進むなかでその一部を地域の例えば、賑わい創出、課題解決そういったものにつながる社会実証の場として活用させてもらえればということが第1点目になります。

第2点目に参ります。これは別紙2を開けていただければと思います。ここにも書かせてもらいましたが、山下ふ頭の再開発は今後の横浜経済の要であり、横浜都心臨海部は元より、横浜市全体にとっても横浜の礎を作った横浜市六大事業、先ほどお話が出ておりましたが、それに匹敵するレベルの事業と、今後10年後20年後30年後、もっと言うと50年後、こういった時に、「やっていてよかったね」、そういったような事業になることが一番好ましいと。また、観光の観点も含めまして横浜経済の牽引役となる再開発事業を検討する必要があるというふうに考えています。特にJNTOの訪日外客数の調査、これは単月で見ると初めて300万人を超えています。あと日本は海外から見ると一番行きたい国らしいので、非常に外国からの注目も高いということで、この埠頭の再開発事業はこうした外国からの観光需要をうまく捉えて大規模集客施設、ホテル機能の導入など、旅の目的地、デスティネーションになることによって消費や雇用創出など、横浜の地域経済活性化の起

爆剤になってもらいたいなというふうに思っています。特に、この日本を代表する都市として、発展し続ける横浜にとっては、横浜都心臨海部に位置する山下ふ頭は世界との玄関口になるべき場所であり、横浜の成長を牽引し市民のより豊かな生活に繋がっていく場所となるべきだと。また、大規模開発によって生まれる新たな市場の恩恵を山下ふ頭内に留めず、街へ回遊させ、地域経済へ波及させることが重要だと。先ほど世界の例が出ておりましたが、地域内だけでの経済効果なのか、その周辺を含めた全体的な経済効果が引き上がっているのかというのは、検証すべきことなのかなというふうに思っています。本当にこの六大事業、1965年、今から60年前に飛鳥田、当時の市長が提唱されて市民に提言をされたことですが、これがあるのとないのとでは今のやっば横浜の発展度合って大きく変わっていると思うのです。ですからそういった意味では、この47haの山下ふ頭をどういう風に活用していくかということは本当に横浜市生命線になるのかなというふうに思っています。

3点目、防災拠点ということで、私ちょうどこの中区の消防団の団長をやっておりまして、この防火・防災こういったものには一般の方よりも非常に深く携わっております。特に別紙3を見ていただきたいのですが、市民や来街者の防災拠点となる場所であること、ということで山下ふ頭に隣接する横浜都心臨海部には多くの市民が暮らし、来街者が訪れるエリアであることから、山下ふ頭の開発においても市民及び来街者の安全・安心をより強固なものにするための防災機能の拡充の観点が必要であるということです。具体的には、横浜市全体の災害対応力の向上を目的とした消防団員の訓練機能。中区だけでも500名近い消防団員がおります。そういった場所の確保。あと開発が住む横浜都心臨海部に対応した水上消防署機能の拡充。あと皆さん見られたことないと思いますが、老朽化した中消防署機能の強化などを提案したいというふうに思っております。特にこの中区というのは、人気観光地や商業地が多々あり、住民だけでなく観光客、通勤客、昼夜間人口比率が168%ということでお分かりいただけると思うのですが、特に中区外から観光客が首都圏を中心に全国から訪れます。ということで、また外国籍も多いということで、多種多様な方々がやってくると。一方で、この首都圏直下型地震、こういったものは2050年までの発生確率は70%を超えているということで、首都圏直下が起きれば、山下公園自体がそういったことによってできた公園ですので、そういったことが起きた時にどういうことが起きるかという、この対応は喫緊のやっばり課題だと思っております。

このように「滞在人口」、「土地勘がない人が占める比率」、「多様な国籍」など特徴がある中区で災害が起きた場合、残念ながら現在の中消防署では主となる管轄消防署としてのキャパシティが全く足りない。それだけではなく老朽化による建物被害の懸念があり、災害対策の根幹として消防署の機能に問題が出てこざるを得ないというような状態です。隣の区の南区、立派な消防署があつて中区はもうボロボロというような状態で、これは資料としてつけさせていただきました。次のページに、阪神大震災が起きた時に消防署が壊滅的な影響を受けて、消火活動ができないということになったのですが、現在の神戸市の中央消防署、こういったものは立派な建物が立っていつでもこういったものに少しでも、全てうまくいくとは思いませんけれども、対応できるような整備がこの山下ふ頭では是非できるのではないかなというふうに思っております。

そして4番目、検討委員会の運営という部分について、資料の別紙4を見ていただければと思います。検討委員会を有意義な場とするために横浜市が再開発に関する考え方や議論のポイントを示し、これに対して学識経験者や地元関係者は元より、県や国など関係者全員が建設的な意見交換を行える運営をお願いしたいというふうに思っております。検討にあたっては港湾局だけでなく、先ほど副市長からもお話がありましたけれども、関係部局の関与や委員会への出席が必要と考えております。また、観光立国ということで特区なんていう話になれば内閣府も関係してまいりますし、国や県の関与も不可欠ということで新たな組織体制案ということでここに出させてもらいましたが、横浜市は関係部局、そのリーダー、そして管轄各局の統括、副市長ということになりますけれども、こういった方々が参画いただくことで検討が深まり、実行性も高まっていくというふうに考えています。地域関係団体というどうしても部分最適の方に皆さん目がいきってしまうと思うのですが、そうではなくてこの地域団体もその地域全体が繁栄するという全体最適にもかなり協力的に動くと思いますので、この地域関係団体、あと学識経験者の中には、経済や経営を主観とする経済学者にも是非参画をいただきたいと。あと経済人、現在の学識委員は学術的な方が多く、そこに現在日本経済の最前線でリーダーとなっているような経済人を招くことでより多角的で大胆な議論、実行性を期待できると考えます。あと、先ほど言った国と県、こういったところも参加をいただきたいというふうに思っております。全体を色々、10分ということで早口で話をさせていただきましたが、こういった大規模プロジェクトというのは全体最適と部分最適のバランスだと思うのですね。ただ一番大事なことは部分最適を優先するあまりに全体最適を損なってはいけない。そのように考えています。意見書を参考に、横浜市がきちとしたイニシアチブを持って、利権優先ではなく横浜市民そして横浜経済の発展のために長期的視野に立ち、山下ふ頭という場所を是非とも有効に活用してもらおうこと。これは横浜市民が多分一番望んでいることだと思いますので、是非ともよろしくお願ひしたいと思ひます。以上、10分です。

【平尾委員長】

高橋委員、ありがとうございました。具体的な山下ふ頭のあり方から、さらに防災の観点、さらに今後のこの検討委員会のあり方について広範なご意見をいただきましてありがとうございました。時間の関係がありますので、関連の質疑は後ほどに回させていただきますと思ひますが、ありがとうございました。

次に議事（4）の学識委員の皆さんからのプレゼンテーションをお願いいたします。

始めにWEBからのプレゼンテーションになりますが、幸田委員からプレゼンテーションをお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

【幸田委員】

はい、ありがとうございます。画面共有をして進めさせていただきたいと思ひます。少しお待ちください。はい、神奈川大学の幸田でございます。今日はこういう機会を与えていただきましてありがとうございます。

時間も10分ということですので、3点に絞ってお話をしたいと思います。再開発で重視すべき要素として、1つは港湾機能の活用と強化、それから2番目は先程来話が出ていますけれども港湾と都市の共生。市民の憩いの場の確保。3番目が事業計画の策定等の決定手続きのあり方でございます。

最初の港湾機能の活用と強化については、臨港地区、保税地域になっているということで、港湾機能をどう山下ふ頭で活用するのかということとは是非検討すべきではないかということとは以前も申し上げさせていただきました。これは横浜市の港湾局の図面でございますが、もう少し広くしますと東京湾と横浜湾というものはこういう形で繋がっている。そこをどう連携するのか、結節点ということをよく意識する必要があるのではないかと。そして山下ふ頭、矢印つけていますけれども、この海側の方にはベイブリッジがあるわけですが、横浜市の内陸部との結節点という点についても十分意識をする必要があるのではないかとこのように思っております。

2番目が港湾と都市との共生ということでございます。これは1976年の横浜市の港湾局長の発言を少し抜粋させていただいておりますけれども、「市民と港の交流が重要である」と。また、「積極的に市民に解放していくことは1つの大きな政策である」ということを発言されておられます。下の方の青山学院大学の北見教授は、前ちょっとハンブルクの話をご私申し上げましたけれども、「港の活動は市民の生活都市の発展と直結をしていた。市民との関係が一体化し、都市と港を支える基盤はブルガーとしての団体だった」ということが書かれています。具体的にハンブルクのハーフェンシティ、ここでは実際のパブリックスペースが28haということで全体の25.8%の割合も占めている。そしてこれ後の話にもつながりますけれども、市民の意見を聞きながら時間をかけて進めている。それからロサンゼルス港でございます。ポートマスタープランの3つの柱の中の1つとして「港と隣接する地域との間の土地利用を調和させる」それから「ウォーターフロントのアクセス」、アクセスの話は先ほども出ていましたけれども、強化することと、「地域社会との共生」ということで、アメリカのロサンゼルス港では様々な団体があって、市民の意見を聞きながら時間をかけて行っているということでございます。

そこで、3点目、事業計画の策定の決定手続きをどういうふうに進めるべきかということについて少し時間をかけて説明させていただきます。この山下ふ頭についてIR誘致で大変問題があったということでございます。この反省の上に立って検討すべきであると。1つは市民への発信手法。簡易な議事録しか作らなかった。有識者委員会も大部分が非公開。そして市民への情報提供はかなり偏っていたという問題。2番目として見えづらい政策決定過程。政策方針の決定にかかる情報の発信というのが非常に不十分だった。また、数値あるいは最新の分析も非公表で、第三者は客観的な分析を行えなかった。情報公開請求は黒塗りが多数だった。こういう問題があったということでございます。こういった問題の反省の上に立って、今回の山下ふ頭の再開発計画は検討すべきだと考えております。この下になりますけれども、事業計画の策定手続きは市民参加の手続きとすべきである。事業計画はどのようなコンセプトか、何が変わるのかなどの情報をしっかりと市民に伝える。事業者の選定に当たっては、先ほど委員長の「市民による市民のための市民の山下ふ頭である」というご発言があったところですが、市民がどういうことを考え、どう

いうことを望んでいるのかというコンセプトを十分頭に入れた事業者しか応募させるべきではないということでございます。現在、このスライドですけれども、横浜市の港湾局のリーフレットはこの委員会を設置する前に「有識者委員会設置予定・事業計画案検討」となっていましたけれども、この委員会設置されて、これは横浜市の港湾局にも確認しておりますけれども、横浜市の港湾局の今年の2月の最新の資料では「まちづくりの方向性や導入機能等を検討する」と変わったところでございます。つまり、事業計画案の検討ではないということですね。そして今年の2月の横浜市の資料によりますと、有識者委員会の後は事業計画案を作成し、パブコメあるいは意見交換をやって事業計画を策定するということになってございまして、事業計画案の検討委員会を設置するとはなっていないわけがあります。しかし、これは極めて不適切であると考えています。事業計画の検討の委員会を設置して、市民も入れて検討すべきだというのが今日の私が是非主張したいことでございます。その1つの仕組みを提案させていただきます。

事業計画の検討委員会には市民、学識経験者、横浜市の職員も入っていただいて検討するということが1つですね。それからこの委員会に入らない市民の意見あるいは有識者、地域関係団体等もその委員会に意見を出せるということ。それと先ほど申し上げましたように、事業に応募する事業者は検討委員会を毎回傍聴して、その委員会・市民の声をきちんと自分のものとして理解する。この傍聴を毎回しない事業者は事業に応募できないというふうにすべきだというのが全体の概要でございます。事業計画案に盛り込むべき事項というのは項目をちょっと上げてみましたけれども、この説明は省略させていただきます。そして公聴会を市長によって開催を義務付けるべきである。それから市民からも開催要求を出せる。それから先ほど申し上げたように外部から色々委員会に意見を出せるようにすべきだということでございます。いわゆる説明会と公聴会の違いというのは皆さんご承知のとおりでございますけれども、こういったいろいろな意見聴取の手段がパブコメ含めてあるわけですけれども、公聴会を是非やるべきだろう。しかも10人以上の連署による開催要求によって公聴会を行うというふうにすべきだと考えております。そして先ほど言いました事業計画の検討委員会の過半数は市民の代表を入れるべきであるということでございます。

じゃあ多くの市民が手を上げた場合にどうやって参加する市民を選ぶのだということになるかと思えます。一般的には市民委員の選定方法というのは「互選をする」、それから「全員を委員にする」などありますけれども、全員を委員にするということは多くの人々が手を上げた場合に難しいので、互選によって参加する市民委員を決めるべきだと考えます。皆さんの中には多くの市民がいた時にどうやって互選するのだと疑問を持つ方がいらっしゃるかもしれませんが、これは可能であると。デンマークなどでは、市役所が大きな体育館を用意してそこに市民が集まって、例えば環境系の団体はそこで集まって誰を代表にするかということを議論して最終的に互選で選ぶということは可能だということでございます。それから実質的な合意形成を確保するための手続きについては先ほど申し上げたようにこういったことを確保すべきだということでございます。そしてこの事業計画検討委員会では原則全員一致で決める。しかし全員が一致しない場合もありますので出席委員の過半数の賛成と出席の市民委員の3分の2以上の賛成で決めるべきだという要件を

考えております。合意形成の経過は地方自治法上、この市民の委員会の結果に市が拘束されるということはできませんので、あくまで市長は合意の内容を尊重するという形になるかと思っております。それから「市民の権利」・「情報の保存と開示」についてはここに書いてあるようなことを確保するべきだということでございます。なお、議会との関係については、地方自治体は二元代表制でございますので、議会と独立して当然判断ができるということで。先ほどの図では委員会に対して議会が意見を言えるというのは事前に情報提供、議会にも提供をして、できるだけ反映し、その後の議会審議にも円滑に進めることができるようにするべきじゃないかということでございます。

これは私が5、6年前にチューリッヒを訪問しまして、都市計画ですね、市民の声を本当にしっかり聞いてものすごい分厚い市民の意見に対する応答の冊子ができていましたけれども、都市計画部長のお話聞いたのですが。これは市役所の地下ホールがこうなっていて、奥の方で市民が集まってワークショップで議論する。模型がありまして、ここは模型がパカパカと外れまして、「例えばA案だったらこうなるよ」と「B案だったらこうなるよ」って見ながらみんなで議論するということでございます。

ということで、山下ふ頭の開発計画、カジノの時の非常に問題があったものの反省の上に立って、しっかりと事業計画検討委員会を設けて検討すべきだということを提案したいと思っております。山下ふ頭の再開発を成功させる上ではやはり今まで色々な観点からのご意見が市民あるいは有識者から出ていますけれども、しっかりとそのコンセプト、そして市民による市民のためのというお話ございましたけれども、そういった検討が実質的に実行的に確保されるようにすべきだと考えているということでございます。以上で私のプレゼンを終わらせていただきます。

【平尾委員長】

はい、非常に具体的な提案、ありがとうございました。時間的なことがございますので、討議はまた後にさせていただきます、次のプレゼンテーションに移りたいと思います。

続いて、内田委員からのプレゼンテーションお願いできますでしょうか。

【内田委員】

わかりました。よろしくお願ひいたします。

私は経済ジャーナリストという観点、あと2019年に横浜イノベーションという本を執筆いたしました。あらゆる横浜の経済人の方であるとか、職員の方にインタビューをして、取材をして、理解をしたことというものがまずベースとして私の知識の中としてあります。さらに、今皆さんお手元にある港湾局さんから頂いている市民の方たちのアンケート、ここまで審議をしてきた学識者のメンバーの方たちのプレゼンテーション、そういうものから学んだこと、そういうことと、あとは私の本業であるところからの経済の原理原則というものを考えて、私の考えをまとめてみました。

資料作成におきましては、今流行りの生成AIを活用してみました。そこで使っている画像は、生成AIが出してきたイメージでして、完成予想図ではございませんので、そこは

誤解のないようにいただければという風に思います。こんなイメージをAIが、こんな感じっていう感じを出していただいたものです。そのように楽しんでみていただければと思います。

私は、少し具体的なイメージを持っていただくということをあえてプレゼンテーションしたいなというふうに思っております。では始めていきたいと思いますけど、横浜山下ふ頭再開発、どうあるべきかというところで整理をしてみました。

まずはここですね。賑いを創出し、人々に喜びや楽しみ、感動や癒しを提供する場であること、ということですね。あとは、新しい街を創造すると、人々のウェルビーイングに貢献する場所であるっていうところ、まず1つあると思っております。

次、大事なところ、横浜市地元経済に経済波及効果を大いにもたらすというところが大事ですね。直接再開発に参加する企業や団体、または山下エリアだけではなく横浜全体、もっと言うと日本経済にプラスになる、そういった影響をもたらすという優れた場所として開発されるべきだろうというふうに思っております。

そして行政や税金の依存や負担がない。ここポイントだと思うのです。もう最初から、税金を投入しなければ成立しないというようなプランは、未来の次世代に負担を残すということにもなりますので、民間がメインによる、自立かつ永続的な運営というものが求められるであろうというふうに思っております。

そして港、水際という素晴らしい立地なわけで、ここの地の利を十分に活かすということが大切かなというふうに思います。やはり水際っていうのは、非日常空間なのでよね。そういうようなことを、どんなふうに生かすことによって、山下ふ頭の価値というものをさらに上げられるかというところに工夫があったらいいな、というふうに思っております。

そして他のどこにもないもの、唯一無二のもの。どこかの真似、なんかこれはどっかで見たことがあるなというようなものだと、やはりちょっと残念な感じになってしまいますよね。やはりここはこだわって、唯一無二、オリジナルであること、そこにもものすごい価値が生まれるのだろうというふうに思っております。

そして競争力が持てる、そういうことはつまり経済波及効果も大きくなるというふうに、人々の注目を集めるサプライズを提供することで経済波及効果も生まれるというふうに思っております。

例えば、唯一無二ということであるならば、グローバルの視点で見れば、日本ならではの文化を体験できる。アンケートの中にもありました、こういうようなものは非常に、日本文化っていうのは独自性があります。世界的に見ても、日本文化に対する好感度というものは非常に高い。日本ファンというのがたくさんいるわけです。こういうことは我々よりもむしろ外国人の方の方が、日本の良さを知っているというような傾向が最近感じられるわけで、それを我々が再評価して、日本の文化の価値というものを認めていくと、形にしていくというようなことが求められるのかなということです。

そういうようなことをすることで、インバウンド、これからまた右肩上がりにコロナからV回復を今見せていて、今年度にはまたインバウンド、最高人数を更新していくであろうというふうに言われている。インバウンドっていうのはやはり、これからの観光の強い

味方であり、しっかりとお金を落としていただくっていうところが、都市競争の中で勝っていくというふうに思われます。

その中で、じゃあ日本に来るインバウンドが、目的地が横浜なのだと、山下ふ頭なのだというふうにピンポイントで来日の目的としてくれるっていうこと、今まで残念ながらところなのですよ。そういうものを、横浜が逆転していくことをやってみたいなというふうに思います。グローバルの視点というところでさらに付け加えると、やはり世界基準、老若男女ダイバーシティ、すべてを受け入れる寛容性というものが必要だなというふうに思っております。

そして当然環境に配慮したものです。やっぱり環境に負荷を与えるものというのは、これから新しい設備ではもう全く認められませんし、評価が得られませんので、そういったカーボンニュートラルに貢献するというのは、当然の常識というふうになってくるであろうというふうに思っております。

あとは、やはり単価が今、観光客の単価が低いよ、と。日帰りの観光客、安い観光客というものにやっぱりどうしてもなってしまう。横浜やここで、世界の超富裕層にも支持される完成度、そういうものをやっぱりちょっと挑戦していかなければいけないのではないかと、挑戦する価値があるのではないかとというふうに思っております。

そして、横浜ならではというところ、ここ大事なのですけれど、横浜のパーパスって何だっけっていうところですね。横浜は文明開化の窓口だったわけです。日本の文明開化、開港場である横浜から始まったという、横浜っていうのはそういうどこにもない価値を持っているのです。歴史上、開港場であること、それは新種の気質、世界中から新しいものがどんどん入ってきたという、そういう入り口であったということ。世界中の人たちが、ここにある意味ビジネスチャンス、一攫千金を求めて集まってきたっていう、ものすごいワクワクする、大変皆さんが期待をする賑い、そういうものがある場所だったわけですね。そこが横浜の原点。間違いなくそういうところだったわけですね。そういうようなものを、じゃ今の時代に変化させるとどういう形になるのだろうかというところ。そういうものをもう全て含めて、横浜市民がここは素晴らしいと、プライド・誇りに思えるものを作るっていうことですよ。世間話の中で「ねえねえ、最近横浜にすごいのができたんだよ。1回来てみてね」っていうようなことを、日本中の、世界中の友人知人に自慢できるようなもの。そういうことをこうやっていくっていうのが大事ななというふうに思っています。

成功、どんなふうなことが今の要件、色々総花的になりましたけれど、そういうものを全部満たしていきたいよねという、贅沢なというか、必須なのだろうと思うのですよね。そして見てみると、日本のテーマパーク。テーマパークに限らないのですけれども、今提案しているものは。成功している事例っていうのは圧倒的にディズニーランドなのです。ディズニーランドの成功っていうのはとてもすごい。世界のそういったテーマパークの中でも、第3位なのです、その成功ぶりっていうのが。なんでなんだろうというところを、これを研究する意義はあると思っております。

日本で業界トップ、オリエンタルランド。業績ですね。2024年3月期っていうのは売上高が6,184億。営業利益1,654億円。来園者数2,750万人、コロナの前は3,255万人でし

た。だからこれはもう時間の問題で超えていくと。1人当たりの売上高が16,644円。で、払っている法人税が457億円ということなのですね。で、従業員数が24,400人なのですね。ちょっとここに書いていませんけれども。その従業員、雇用をしていく24,400人。その2割が横浜市民になっているってということなのですね。そういう効果をもたらしている。

じゃあなんで、ディズニーランドは成功しているのか、ということなのですね。皆さん、東京ディズニーランドに行ったことがある方は感じていると思います。お子さんやお孫さんと一緒に行ったら嬉しいとも思いますし、自分自身も行ったと。これ行くたびに新しい発見があるのですね。だからこそ、もう1度行こう、また行こうというリピーター率の高さがある。これウォルト・ディズニーの言葉です。「テーマパークは永遠に完成しない」。もう最初から永遠に新しいものを投入していくのだということが、スタートの時点から決まっているわけです。覚悟が決まっているのですね。

今のオリエンタルランドの社長、吉田社長の言葉ですね。最新の言葉。「創業以来当社は一貫して世代を超えて共感できる価値を提供し続け、心の安らぎや活力を生み出してまいりました。私たちの挑戦に限界や完成形はありません」。これディズニーと合っていますね。で「これからも世界中でここ横浜だけでしか体験できない、そういうことを、夢の世界を創出していく」と。「1つでも多くの笑顔を生み出していけるように挑戦し続けていく」ということで、もうずっと終わらない、変わり続けていくのだという覚悟が、この東京ディズニーランドの成功の要なのですね。

ですので、じゃあ成功の要点、顧客の世代交代が起こってくるわけですよね。どんどん時代が変わって、お客さんのニーズが変わっていく。それに、変化に合わせてコンテンツを変え続けていくのだということ。ディズニーランドで言うとショー、パレード、アトラクション、リニューアルし続けているのですね。毎年500億から1,000億の設備投資をし続けている。東京ディズニーシーの新しいテーマポート「ファンタジースプリングス」って、あのアナ雪なんかのコンテンツが入っているのですけれども、今回ここには3,200億円投入していると。

この投資をし続ける覚悟、挑戦し続ける。もうトライアンドエラーで失敗を恐れず、狙いが外れたら変えていけばいいのだと。そういうことでハードだけではないソフトも最新のものを投入し続けていくっていう、そういうことをやり続けているってということなのですね。飽きられてない、老朽化してない、時代遅れにもなっていない。もう30年、40年ですね。企業価値、時価総額はどんどん上がっている。これだけ投資をし続けているにも関わらず、どんどん成長しているっていう。こういうものにやっぱりヒントがあるのだろうなというふうに思っているわけです。

そして、じゃあ横浜の観光の課題っていうところを見ていきたいと思うのですね。横浜の観光、これは令和6年6月にぎわいスポーツ文化局の資料をいただきました。2023年の観光収入、お客さんですね。3,600万人年間に来ました。観光の消費額3,667億円と。で、日帰り客数ですね。これが3,220万ですね。平均の消費額が6,480円。観光消費額2,087億円ですね。

一方宿泊客の方ですね。これが380万人です。桁が違うのですね。使っているお金が41,558円。平均ということで。観光の消費額が1,580億円ってということなのです。これが今のファクトです。

じゃあこれからどうするのですか、横浜の観光の中期目標は何ですか、ということ掲げられている金額を見ると2030年に5,000億円を目標にしているということなのです。これプラス1400億円が必要だということなのですが、上の数字を見ていただければ分かるのですが、あと1,400億円増やしていくと、日帰り観光客で、となるとです。今現在は観光客の9割が日帰りなのです。このままさらに日帰り観光客だけが増えていくと、もう完全にオーバーツーリズムなっちゃうわけですよ。単価が落ちるのがものすごく安い。でも人だけがもううじゃうじゃいて身動きが取れないね。ああもうあんな混んでいるところには行きたくないね、というふうになっていく可能性がある。です。で、やはり客単価を上げていく、そして宿泊需要も上げていく。ここに注力するというのがこの5,000億というものを達成するという、こうリアリティになっていくということなのです。

じゃそれだけお金を落としてくれる人は誰だということ、インバウンドに注目していくということですね。過去最高の数字3,188万人で、先ほど言ったように今もう半期が終わって、1,500万人近いわけですね。このペースだと過去最高を更新する勢いがありますよということ。で訪日外国人がお金を使っている、どれくらいお金使ってくれているのですか、ということ。5兆3,065億円ということで、宿泊費が一番大きい。買い物をしてくださる。飲食も楽しみだというようなそんな感じで。娯楽サービスっていうのは、5.1%ってということなのですが、ちょっとその部分が、まだまだお金を落としていただけるという器がないのだろうということになっています。

じゃあ誰が、どこの国の方が、どこの地域の方がというところで見ると、台湾・中国・韓国・米国が伸びていますね。で、香港ということで、アジア一帯のところの、色々緊張感があるような状況ですけども、日本に来るともうみんなが楽しんでくれるという、そういう状況になっているわけです。一般客の1人当たりの旅行の支出が21万円ということですね。こうしたもののデータを、ファクトを見ていくと、じゃあこれからの横浜の観光として、経済効果を生んでいくその原動力になっていく鍵というのは何かと言うと、やはり宿泊客を伸ばしていくこと、そしてインバウンド、世界中からのインバウンドを取り込める街になっていくことっていうのが必須かなというふうに見て取れるわけです。

じゃあ、その先ほど言った日本の文化をどう楽しんでいただくかっていうところを最初に紹介していきました。かつて日本は家電製品に、自動車は今もそこは力ありますけれども、それがメイドインジャパンの象徴でした。プロダクトですよ。

でも今は日本のポップカルチャー、それが海外の若い世代中心に、日本の魅力を示す代名詞になっているのです。私なんか海外の取材に行って日本人だというと、日本語で話しかけてくれる外国人の方がたくさんいるのです。で「日本語上手ですね」というふうに言うと、「私は小さい頃から日本の漫画・日本のアニメを見て育ったのですよ。いつか行きたいのです」というような、そういった会話がもうとても多いのです。私の体験として。ああすごいなって、昔はね、古いですけどもソニーのウォークマンがすごいね

とか、そういうようなプロダクトっていうような話だったのですが、今は大体ポップカルチャーと、国際的な理解・信頼を深めている重要なツールになっているのです。だから本当に日本人よりも日本的なことを理解してくれているということです。

漫画・アニメ・ゲームはもう世界中に熱心な愛好者がいて、やはりそこは日本がとてもレベルが高いということもみんな分かってくれている。そこを通じて、ああ日本が好きだな、そんなような思いを持ってくれている。日本語が話せる外国人の多くは、先ほど言ったとおり、こういうようなことなのですね。ここの強みをやはり生かしていく、生かさな理由はない、というふうに私は考えている。ですから世界的なグローバルな視点で見て、今、日本が一番競争力を持っているのは何かっていうようなことの1つが、こうしたポップカルチャーであるっていうことは間違いない。

例えばどういうものか。皆さんおなじみの「ナルト」、世界80か国でテレビ放映されています。「ドラゴンボール」、世界40か国以上で放送されています。「美少女戦士セーラームーン」、40か国以上で。あとは横浜でも、非常に力を入れてポケモンなんかが大行進していますけれど、ピカチュウがね、ポケットモンスターシリーズ。これなんかももう世界中の子供で知らない子供たちはいないのではないかっていうぐらい、そういった認知度です。

そういうようなことを、ちょっと今皆さんにご紹介させていただきましたけれども、じゃあそういったものを加味して、どのようなことができるかなというふうになった時に、山下ふ頭ですね、例えばですよ、日本のポップカルチャーの集積地にしたらどうだということで、アニメの館。非常に夏暑いですから、屋外だけっていうのはかなり命の危険が生じてくるってことで、やっぱり館なのかな、というふうに思っています。

で、コスプレイヤー。アニメの中で今コスプレっていうのがすごいのです。コスプレの、様々なコンテストが世界中で行われていて、そのコスプレのキャラクターは大体日本のアニメのキャラクターに扮しているということです。メイクや衣装のオーダーメイドなんかも、そこでやっていく。ランウェイを歩いて競うショー、展開するというので、コスプレイヤーの聖地は横浜山下ふ頭だということで、世界的に山下に行くぞ、という発信力を持つ。で、当然今ですね、コスプレイヤーも高額賞金を持っていて、コンテストで優勝したコスプレイヤーは何億も報酬を得られているという。そういうことです。

あとはeスポーツですね。これオリンピックにも入ってくるという。ゲームを競うことで、世界トップランクのゲーマーたちの世界選手権っていうものの、最終決戦地が山下ふ頭であったら面白いのだろうなというふうに思っています。ここも、今ゲーマーたちも数億円、もうテニスプレイヤーとかサッカープレイヤーと、そこまでの桁には並ばないにしても、それぐらいの報酬、賞金金額を得られるスポーツに成長してきているということなのですね。

あとは漫画の館。日本と言えば漫画。何十万冊も集めた漫画リゾート。漫画喫茶ってありますね。宿泊、簡易宿泊施設になっていて漫画読み放題とあって、若い人たちにとても人気なのですけども。これの最高級ラグジュアリーホテルを作るのも面白いのではないかなと。そこに人気の作家なんかが来て、トークショーをすればもう世界中の漫画ファン・

アニメファンが、もう本当に喜んでやってくるだろうということは想像に固くないなというふうに思います。

【平尾委員長】

大変申し訳ありません。ちょっと時間が押していますので、まとめていただきますでしょうか。

【内田委員】

はい、急ぎます。もうすぐ終わります。

あとはバーチャルリアリティの館ってということで、あのみなとみらいにR&Dを構えているグローバル企業がたくさんあるのですね。その研究開発をしている最先端のイノベーション。そういうものを是非この山下ふ頭の中で、実証実験の場としてやってもらいたいなというふうに思っているわけです。

最後のページです。私としては、こんなことがあったらワクワクするなっていう意味では、あらゆるトップクラスの企業、先ほど言いました、みなとみらいにあるソニーであるとか、日産、コエーテクモ、任天堂、資生堂そしてDeNAですね。そんなような会社がどんどん関わってくれるような、最先端のテクノロジーがそこで発揮されるというような感じですね。あとは横浜トリエンナーレっていう有名なアートの祭典がありますので、そうしたアートのコラボレーションをしてもいいでしょうし。あとは横浜JCという横浜の若者たちが集まっている、集積して活動して開港祭なんかやっていて、ものすごいパワーを持っているので、そういう横浜JCの若者たちが、こうしたエンターテイメントのところに入ってきて一緒に活動したらすごくいいなというふうに思うのです。

最後に1つだけ申し上げます。やはりどんどんどんどん変わっていくっていうのはソフト力なのですね。やっぱり日本のこれまでのテーマパークの失敗は、箱物を作って終わって、古びていく。それでおしまいっていう、非常に税金の無駄遣いをし続けてきた歴史なのです。じゃあ何が勝つかっていうので、世界的にデジタル革命で勝ったのはマイクロソフトなのです。それは何かというと、ソフトウェアですね。どんどんどんどんアップグレード、更新し続けることによって1回つながったお客さんと、ずっとこうビジネスをし続けるってことなのです。

なので、ポイントは新しいものを更新し続ける。そして投資をし続けるという覚悟が、山下ふ頭を展開していく上で、非常に重要になっていく。あとはデジタルネイティブという世代がこれから世界の過半数の人口を占めてくるのですね。もう生まれた時からデジタルの世の中なのだっていう子たちが世界中の人口の過半数を超えているんです。ここからますます、世界が100億人の人口になっていく時に、もうほとんどがデジタルネイティブになっていくのですね。ですので、もうあと10年もしたらデジタルネイティブがメインになっていくという世の中にしっかりとフィットするようなものに、山下ふ頭はなっていかなければいけないと。そういうようなことがポイントになるかなというふうに思っています。

とにかく世界一のものを目指すという気概、ワクワクするものを横浜から世界に発信していくのだという、そうした大きな目標を持って、山下ふ頭を展開していただければな、というふうに私としては思います。以上です。すみません時間がオーバーしまして、申し訳ございませんでした。

【平尾委員長】

はい、熱の籠った。これAIを使ったのですか。

【内田委員】

はい、これはAIを使って作りました。

【平尾委員長】

へえ、そうですか。

時間がかかなり押してまいりましたので、あの申し訳ありませんけども、意見交換、今日は、ご意見をご用意してきていただいている方がいらっしゃいますので、まず藤木さんからお願いいたします。

【藤木幸太委員】

いや内田さんに僕の尺とられちゃったからもうあんまりしゃべれなくなっちゃったけど。

【内田委員】

ごめんなさい。

【藤木幸太委員】

とてもいい話でした。

【内田委員】

ありがとうございます。

【藤木幸太委員】

私、港運協会代表で出ております藤木でございます。今日私も実は意見書を出してしまして、その説明を高橋さんのようにやる予定だったのですが、急遽ちょっとお断りをしました。それはなぜかと言いますと、自分の話す内容が、山下ふ頭の歴史、あるいは港運協会のメンバーがどれだけここで汗をかいてきたかと。こういうことがほとんどなので、これを皆さん委員の前で話すと、なんか利権と捉えられないかという心配が私自身にありまして。で、今日はやめさせてもらいました。その代わりといっは何ですが、今現状山下ふ頭どうなっているか。山下ふ頭を開発するために、我々、倉庫協会も一緒になって倉

庫を新しくしないで、古くして、みんな潰して更地にしたわけです。そこでいきなり IR の話が出て、これはないだろうというところで、山中市長誕生ということになったわけなのですが。いずれにしましても、我々はそこで生業、ここに出ています地域関係団体委員という方はみんなここで生業のある方なのですね。で、逆に学識者の方たちは失礼ですけどよそ者の方なわけです。そういう中で、私は今日申し上げたいのはもう喋るのではなくてちょっと映像を見ていただきたい。これが私 5 分と 4 分の映像なのですが、5 分の方は今山下ふ頭がどうなっているか、どう使われているか。委員の皆さんあんまり足運んでないと思いますので、それをまずご覧ください。もう一つは、今笹川平和記念財団の予算で日本とパラオの、帆船、これで移動するのに、今笹川記念財団が世界で 5 年をかけて 100 人の海洋人材を育てるというプログラムをはじめまして。それで世界からみんなその参加者を募ったらもう多すぎちゃって。で、みんな論文書かせたりして、ところが論文書くって 12 歳から 24 歳までに限定していますので、その子たちが 3 月にこの前 2 週間かけて、帆船「みらいへ」でパラオまで行った、その 1 人の女の子が報告したのです。それが 4 分ありますので、申し訳ないですけどいいですか。

【平尾委員長】

はい。

【藤木幸太委員】

5 分は現場の話、4 分はその彼女の報告と。これをちょっとご覧いただきたいと思いません。

【平尾委員長】

お願いします。

<動画再生>

【藤木幸太委員】

今こういうイベントで使っていただいているのですね。

これは高橋さんのとこでやっていますね。

これは Harley-Davidson の横浜での最初のイベントです。

これはランバイク練習であり、小学生ですね、低学年の子が足でこぎ漕いでやるレースなのです。このレースから卒業した子が、今サッカーだとか色々な世界で一流選手になっているのですね。運動能力が非常に高い。

<動画停止>

どうもありがとうございました。何が言いたいかって言いますと、今横浜は 5 隻大きい

客船が同時につける港になっているわけです。これはもう横浜市と港湾局も本当によくやってくださって。それはいいのですが、大型の客船がついても、地元には全然お金落ちない。みんな観光バスが並んで、それで鎌倉行ったり箱根行ったり、中には東京に行ってしまうというような状況で。ところが横浜の場合は横浜に着岸してただ人が観光行くだけじゃないのです。横浜で入れ替えるそこで降りた人がいて乗る人が、新しい人が入ると、これで横浜はある程度、お金が落ちているわけなのですね。で、例えば長崎ですとか、他の港は朝着いて夜出てっちゃって昼間はみんなどっか行っちゃうので、もうそれこそ迷惑になっているぐらいの話なのですね。で、そういうことをまず気がつくと、今の女の子の報告を聞いたら、あれは同じクルーズの出発点が横浜であってもそれはもう教育的な見地もあれば彼女たちの人生感とかそういうもの全て変えているのですよ。先週それを、その話を彼女たちと一緒にしたのですが、横浜はやっぱそういう世界の起点っていうのはここへ来て刹那的な快樂を求めるのではなくて、やはりここで教育された横浜が自分の心の故郷というふうに思えるような場所にするというような開発を是非お願いしたいと、こう思います。以上です。

【平尾委員長】

藤木委員どうもありがとうございました。

坂倉委員、なにかご意見ございますか。時間が押ししておりまして恐縮ですけども。

【坂倉委員】

具体的なお提案については今後の委員会の中で発表させていただきたいというふうに思うのですが、少し方向性だけお話しすると、この市民の意見にもたくさん出てきているのですけれども、山下ふ頭の交通アクセスっていうのはあんまりいい場所じゃございません。ましてや入り口からその先端までも歩いても相当な距離があるってこともあります。元町の駅から行くのもかなり困難です。そうやって考えますと、今現在で横浜市がここに対しての交通アクセスをどのように考えているのかっていうのはあまりよく示されていないので、是非、やるということを決定はもちろんしてないと思いますけど、案として考えられることについて次回以降でご提示いただければというふうに思います。

いい悪いはともかく IR の時には元町の地下鉄の駅、横浜高速鉄道は、海の方へ曲がって行って、今実はあそこに車両の基地を作る土木工事を行っているのですが、その先に海の方に入って行って山下ふ頭の先端の方に、駅を作るというような案も実は検討されていきました。で、それが可能であるのであればこの開発に大量輸送機関の1つとしてそういうことも検討した方がいいのではないかなというふうに思います。それと臨海部の道路建設については、この資料の中にもありますけども、横浜港臨港幹線道路というのが、もう相当昔に計画されていて。これについては神奈川区の恵比寿町から中区の本牧ふ頭までというふうに計画をされているのが、ちょうどMMの中をかって下に海の方へ潜ったところで今止まっているのですけれども、その先は本牧ふ頭まで一直線で結んでいくっていうのは計画をされていますので。これは国の計画としてそういうふうになっているので予算

も当然国が出すということですから、これを積極的に利用していただくと都心臨海部と山下ふ頭、そして関内・関外地区のトライアングルをうまく回遊性が取れるような道路になるのではないかなと思いますので。これもここを利用する時に合わせるような形で完成するようにすべきではないかなということだけ申し上げておきたいと思います。以上です。

【平尾委員長】

はい、坂倉委員、貴重なご意見ありがとうございます。時間が大分押してまいりましたけども、まだ、今までの皆さん方のプレゼンテーションあるいは意見交換でまだ足りなかった点あるいは付け加えたい点がございましたら。アトキンソン委員。

【アトキンソン委員】

先ほど生産年齢人口の話が出ましたので、それに対して1つ考えなきゃいけないことがあるのです。

世界の生産年齢人口は、特に先進国を中心に減っていくって話がありました。しかし、規模が全然違うってということも考えてもらいたいと思うのです。例えば、EUを見てみるとピークから今まで3.1%しか減ってなくて、去年は増加しました。それに対して、日本はピークからもう16.5%減っています。生産年齢人口ってというのは先進国を中心に緩やかに増えていって緩やかに減っていく。それに対して日本は極端に増えていって1995年をピークにしてそこから極端に減っていくってことは特徴的なものなので、ここに出ている海外の例は人口動態が全く違う動きをしています。例えば先ほど事務局からの海外事例で、アメリカの小学校の話があったのですが、日本では小学校を増やすというようなことって極めて考えづらいことなので、どこまで海外の比較ができるかっていうことはもう少し考える必要があるのではないかと思います。

もう1つあるのですが、事業計画を立てるに当たって、市としては奪い合いをどう考えるかっていうことを真剣に考える必要があります。別のところの話になりますが、東京都で見えますと、都心部の千代田区とかに対してどんどん再開発が進むような形を認めていって活性化をするっていう政策を進めています。それによって、都心部に人が集まるような形になっていますけど、人口が減っている中で、それは23区の外からどんどん都心部に一極集中する中で、さらに東京駅の周りに一極集中をしているっていう現状があります。片方では「23区の外側に人が奪われるようなことを防ぐように」という明確に矛盾している政策が一緒に進んでいます。何を申し上げたいのかというと、事業者からするとこの開発をするとなると市の中の一極集中を促すようなことになれば事業者としては儲かりますけど、市としてはもうほとんどゼロサムゲームになってしまいますので、やっぱり追加的な需要を促すようなことをやるのは必要だと思います。

先ほど高橋さんだったと思いますが、税収のプラスになるっていう話で、横浜市の一部の税収がここに移るってことになれば何の意味もないわけなので。そういうことも含めて、事業化をしていくに当たって、山下ふ頭の追加的な需要を生み出すようなことだけではなくて、横浜市全体としてプラスなるかどうかという観点も取り入れるべきもので

あって。事業者はそういうことを一切考えませんので、是非考慮していただきたいと思います。以上です。

【平尾委員長】

アトキンソン委員ありがとうございました。WEBでご参加の幸田委員、どうぞご発言ください。

【幸田委員】

はい、どうもありがとうございます。今、坂倉委員がおっしゃられた交通アクセスは大変重要だと思いますので、先ほど私も内陸部との結節点、東京湾との結節点ということで申し上げましたけど、現在、港湾局がどう考えているか、今後どうするか、これは大変重要な論点だと思いますので、是非取り上げていただきたいと思います。

それで私が1つ別の点でお願いしたいことがあります。それは先ほど高橋委員が社会保障費の増大、それから市民の意見からも社会保障費の負担増に耐えられるようにといったような意見が出ているのですけれど、よく自治体の財政当局が説明するのは、税収が減っていくけど、社会保障費が増えていくと。単純にこう説明していることが多いのですけれど、実はその中身をよく分析をする必要があると。と言いますのは、市のそういった財政の制約要因ってというのは一般財源ベースで考えないといけません。で、私もいくつかの横浜以外の政令指定都市でも色々と分析したことがあるのですが、実は一般財源ベースで見ると社会保障費の負担よりも物件費の負担の方が大きいという自治体は結構多いのです。従ってファクトシートの最初の時にも出ていましたけれども、社会保障費、実額でこうなるよってという表がありましたけれども、そうではないと。それから物件費の区分がされてなかったのですけれど、一般財源ベースでどのような推計をしているのか、またその根拠は何か、もう少し詳しく教えていただきたい。次回で結構ですので、市の方をお願いしたいと思います。ややもすると、ああいう数字だけですと横浜市民の方がかなり誤解する可能性がありますので、もう少しそのファクトの部分について詳細なものを提供いただきたいと思います。そのお願いでございます。以上です。

【平尾委員長】

貴重なコメントありがとうございました。

涌井委員、今日は全体を通じて何かご意見やご感想ありましたら。

【涌井委員】

大変参考になりました。取り分け藤木委員と高橋委員からのプレゼンテーションは非常にある種の現実の側面から頭に染み込んだという感じがいたします。

私やっぱり考えますと、我々急いで考えていく必要もあるのですけれど、先ほどお話があったように飛鳥田市政の大きな目標から50年なのですね。従ってこの計画も50年とは申しませんが、かなりロングスパンで考えていかなきゃいけない。一気に呵成に再開発を進めていくということでは必ずしもないと。そういうことを考えた時にシティリザーバ

一って言いますかね。ギチギチに全ての計画を決めていくっていうのではなくて、非常に柔軟で時代に即応できるようなスペースを一定規模確保しておくっていうことは極めて大事だと。それは防災の対応のためにも実は大変重要であって、機能を全てはめ込んでいくという考え方には不賛成だなということも改めて確認をいたしました。それからもう1つ、やっぱり港湾の機能は基本なのですね。この港湾の機能を睨みながらどう土地利用していくのか、この点も非常に重要な戦略的な視点なのではないかなと。この山下ふ頭の計画というのは、海水面の利用計画と、それからいわば陸域の利用計画、これが上手にマッチングしたものでなければならない。ここのところを忘れないでしっかり考えていかなきゃいけないのではないかと。

最後に、市域全体のマスタープランですね。横浜市の有り様とこの山下ふ頭がどういう関係なのか。これをいつもフィードバックしながら考えていかないと、非常に部分最適にはなるのだけど全体の最適にならないということが起こり得ますので、この点も心がけなきゃいけないという感じを持ったと。以上でございます。

【平尾委員長】

はい、涌井委員、どうも貴重なコメントとご意見ありがとうございました。もう時間が迫っておりますので、私の不手際で議事進行が遅れまして、申し訳ありません。

それでは、ここで皆さん方の意見はございませんでしょうか。なければ、次に私の方から1つよろしいでしょうか。今回が4回目の委員会となりますので、意見書の説明や学識者のプレゼンテーションもほぼ一巡いたしましたので、今後どのように進めていくか、事務局の方から何かお考えがあれば、一言お願いしたいと思います。

【事務局】

はい、今後の進め方についての事務局の考えでございますが、今回は今頂いたご意見に対する対応と、併せて委員の皆様から意見書の説明ですとか、あとプレゼンテーション。それをやった後に、一度これまでの委員の皆様のご意見ですとか市民意見などの結果などを振り返りながら意見交換を行っていただき、答申として今後盛り込むべきまちづくりの方向性なんかを少しこの場でご議論いただければと考えてございます。そして、その後の委員会において、引き続きご議論を深めていただきまして、年内を目途に答申を取りまとめたいただけたらと考えてございます。以上でございます。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。確かに、答申策定に向けて、今ご説明があったような進め方がよろしいのではないかと私は思いますので、特にご異議がなければこの方向で進めていきたいと思いますが皆様いかがでしょうか。

【(委員一同)】

異議なし。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。それではこの方向で進めていきたいと思いますので、委員の皆様方、今後ともよろしくどうぞ協力をお願い申し上げます。それでは、本日の議事は全部終了いたしましたので、進行を事務局の方にお返しいたします。

【事務局】

はい、ありがとうございます。本日はお忙しい中、長時間にわたりまして、意見交換等いただきまして誠にありがとうございました。次回の日程等につきましては、後日お知らせいたしたいと思います。以上を持ちまして閉会させていただきます。ありがとうございました。

第5回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 会議録	
日 時	令和6年8月22日(木) 14時00分～16時00分
開 催 場 所	横浜シンポジア (産業貿易センタービル 9階)
出 席 者 ※敬称略	<p>今村 俊夫 (株式会社東急総合研究所取締役会長)</p> <p>内田 裕子 (経済ジャーナリスト、イノベディア代表)</p> <p>河野 真理子 (早稲田大学法学学術院教授)</p> <p>北山 恒 (建築家、横浜国立大学名誉教授)</p> <p>隈 研吾 (建築家、東京大学特別教授・名誉教授) ※ウェブ参加</p> <p>坂倉 徹 (横浜商工会議所 副会頭)</p> <p>幸田 雅治 (神奈川大学法学部教授) ※ウェブ参加</p> <p>高橋 伸昌 (関内・関外地区活性化協議会 会長)</p> <p>宝田 博士 (協同組合元町エスエス会 理事長)</p> <p>田留 晏 (神奈川倉庫協会 会長)</p> <p>デービッド アトキンソン (株式会社小西美術工芸社代表取締役社長)</p> <p>平尾 光司 (専修大学社会科学研究所研究参与、昭和女子大学名誉理事)</p> <p>藤木 幸太 (横浜港運協会 会長)</p>
欠 席 者 ※敬称略	<p>石渡 卓 (神奈川大学理事長)</p> <p>藤木 幸夫 (横浜港振興協会 会長)</p> <p>村木 美貴 (千葉大学大学院工学研究院教授)</p> <p>涌井 史郎 (東京都市大学特別教授)</p>
開 催 形 態	公開 (傍聴者 19 人 / 記者 19 人)
次 第	<p>1 議 事</p> <p>(1) 事務局の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回委員会後の市民意見等の説明 ・ 前回の補足説明 <p>(2) 地域関係団体委員の意見書の説明</p> <p>(3) 学識者委員プレゼンテーション</p> <p>(4) 第1回～第4回の意見のまとめの説明</p> <p>(5) 意見交換</p> <p>(6) その他</p>
議 事	別紙
資 料	<p>当日配付資料</p> <p>(1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 名簿</p> <p>(2) 前回委員会後の市民意見等</p> <p>(3) 前回の補足説明</p> <p>(4) 地域関係団体 意見書</p> <p>(5) 第1回～第4回の意見のまとめ</p>

第5回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 議事

【事務局】

これより、山下ふ頭再開発検討委員会を開催します。私は事務局を務めます山下ふ頭再開発調整課長の周治と申します。どうぞよろしく願いいたします。まずお手元の資料を確認させていただきます。次第、名簿、前回委員会後の市民意見等、前回の補足説明資料、地域関係団体意見書、第1回～第4回の議論をまとめた資料として横向きのものと同縦向きのものを配付させていただいております。よろしいでしょうか。それでは、開催に当たりまして、横浜市副市長の平原よりご挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

【平原副市長】

皆さんこんにちは。横浜市副市長の平原でございます。本日は大変お忙しい中、この山下ふ頭再開発検討委員会に、オンラインでの参加も含めましてご出席を賜わり、誠にありがとうございます。

前回の7月の委員会では、山下ふ頭のまちづくりの方向性あるいは導入する機能に関しまして、地域関係団体委員の皆様、それから学識者委員の皆様からご意見・ご説明・プレゼンテーションをいただいたところでございます。意見交換では多様な視点からのご議論をいただきました。本当にありがとうございます。各委員からは事業推進に向けたご意見・ご提案をいただいておりますし、合わせまして多くの市民の皆様からもご意見をいただいております。この山下ふ頭の再開発事業に対する皆様のご期待の現れであると感じているところでございます。この山下ふ頭の再開発におきまして横浜経済の将来にわたる活力を創出すること・横浜の未来を切り開くこと・持続可能なまちづくりを実現していきたいというふうを考えてございます。引き続き皆様方の豊富なご知見をいただきながら、そして市民の皆様からのご理解をいただける、事業性のある再開発を目指してまいりたいと考えております。

本日の委員会では地域関係団体委員からの意見書のご説明、それから学識者委員からのプレゼンテーションをいただいた後に、これまでの委員の皆様からのご意見等を振り返りながら、答申として盛り込むべきまちづくりの方向性等をご議論いただきたいと考えてございます。是非それぞれの立場から自由な発想でご議論をいただきたいと思っております。また横浜市の検討体制でございますが、前回に引き続きまして庁内プロジェクトメンバーも参画をさせていただいております。港湾局と関係局が一丸となってこの事業の推進に取り組んでまいり所存でございます。さらに本日はオブザーバーとして、神奈川県から文化スポーツ観光局にご出席をいただいているところでございます。各方面からご協力をいただきながら本事業を進めてまいりたいと考えてございます。本日は最後までどうぞよろしくお願い申し上げます。

【事務局】

ありがとうございました。

本日の委員の皆様の出欠状況についてご報告させていただきます。委員17名の内、現在、WEBでご参加の幸田委員を含めまして10名の皆様にご出席いただいております。なお、途中から高橋委員、デービット・アトキンソン委員は会場でのご参加、村木委員・隈委員はWEBでのご参加の予定でございます。石渡委員、藤木幸夫委員、涌井委員はご欠席でございます。

報道関係者の皆様方にお知らせします。報道関係者の皆様方は、報道撮影エリア内での撮影にご協力をお願いします。

傍聴者の皆様方にお知らせします。傍聴者の皆様方は、撮影や録音等はお控えくださいますようご協力をお願いします。

本日も、公開での開催となっており、会議の様子及び説明資料につきましては、インターネット中継により配信されます。なお、会議の様相を記録するため、事務局側で写真を撮らせていただきますので、予めご了承ください。

それでは、これより先の進行は、平尾委員長にお願いしたいと思います。平尾委員長、どうぞよろしくお願ひいたします。

【平尾委員長】

平尾でございます。今日は皆様方、天候が不順の中、お忙しい中、ご参集いただきましてありがとうございます。第5回目の検討委員会になりましたけれども、皆様方の活発な意見交換をお願いしたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは着座によって進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、まずお手元の議事次第をご確認ください。本日のタイムスケジュールについては、議事1を5分程度、・議事2として宝田委員、田留委員から意見書のご説明を、10分程度を目安に行っていただきます。議事3としては、河野委員の方からプレゼンテーションをお願いいたしまして、またオンラインで隈委員からの10分程度のご発言をお願いしたいと思います。最後に私平尾の方からプレゼンテーションを10分程度させていただきます。議事4の終了後、意見交換を40分から50分程度、委員の皆様方をお願いしたいと思っておりますので、どうぞご発言いただきたくお願ひ申し上げます。それでは、よろしくお願ひいたします。

議事1に入ります。事務局の方からご説明をお願いします。

【事務局】

山下ふ頭再開発調整担当部長、洞澤と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。前回委員会後にインターネットフォームに寄せられました市民意見について、ご説明いたします。お手元の資料2をご覧ください。委員の皆様には、事前に本資料をお送りさせていただいておりますが、1から2ページは、市民の皆様からのご投稿をまとめたもの、3ページ以降は、市民の皆様からのご投稿を綴った資料です。本日は、資料の1・2ページをご説明いたします。

1ページをご覧ください。受付期間は、前回委員会開催日から8月19日までとしていま

す。意見数は、33名の方から36件いただいております、居住地は、市内在住の方が30名、市外在住の方が3名となっています。円グラフは外側が、今回投稿の年代別割合です。なお、参考として、内側に市の年代別の人口割合を記載しています。

「3 御意見の主な内容」ですが、「まちづくりの方向性に関する御意見」については、「アクセスの悪さは再開発の大きなネックになるので、交通を意識して山下ふ頭と元町・中華街駅の間にある空間を計画に組み込む視点や大量輸送手段の確保が必要」、「この地区が持つ港というブランドの変遷を正しく理解し、他地域と比べた優位性を導き出した再開発をすすめるべき」、「脱炭素化社会実現のため「ペロブスカイト太陽電池」や「電気運搬船」など、横浜発の先駆的技術の実装の場とすることで全国に脱炭素化都市をアピールできるようなまちづくりを期待」などのご意見をいただきました。

2ページをご覧ください。「(2) 導入機能に関する御意見」については、「横浜港の情景を大切にすべく、山下公園から連続する緑の多い空間」、「緑が多く、港としての機能として「海とのアクセス」を誰もが活用できるインフラ整備」、「夜遅くまで楽しめるエンタメ・商業・飲食施設」などのご意見をいただきました。

「(3) その他の御感想等」については、「市内で競争が起こらないように、山下ふ頭ならではの特色のある再開発計画を実施することが、横浜市としての追加の価値につながる」、「時代の変化に合わせ、用地転換を考慮した柔軟な計画を目指してほしい」、「平日人口・週末人口のバランス、昼間人口・夜間人口のバランスの調整を考慮できると、より有効な活用につながる」などのご意見をいただきました。資料2の説明は以上となります。

続きまして、前回委員会でご説明したファクトシートの補足説明をさせていただきます。スクリーンでご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも資料3として配付しています。前回、「国外開発事例」について、今村委員・村木委員から、具体的な成功内容や、効果の目標と成果、副次的な効果などを示して欲しいとのお話がありました。今回、3地区について、情報が整理できましたのでご説明いたします。

資料の構成として、上から前回お示しした開発の内容、開発初期の目標と成果、想定外の課題と対応策、成功要因として評価された事項、その他の成果をお示ししており、今回は、開発初期の目標と成果、想定外の課題と対応策に絞ってご説明いたします。

まず、「ハーフェンシティ」です。2万人の雇用創出目標に対し、現在1.5万人、今後、最大4.5万人の雇用の創出が予想されています。課題ですが、開発中に周辺にて、地下鉄などの交通網の整備計画が決まり、開発区域と一貫性のある総合的な計画が必要となったため、2010年に周辺を含むマスタープランへと改訂し、周辺地域の役割を新たに設定した総合的な開発を進めています。

次に、「ボルチモア」です。観光施設等を整備し、大規模集客を目指した結果、1,000万人以上が訪れ、23億ドルの経済波及効果をもたらしたと推計されています。課題ですが、オープンスペースの管理が個々の建物所有者にゆだねられ、修繕が適切に実施されないなどにより景観が損なわれましたが、非営利法人が一元管理することで、景観が整えられました。

最後に「マルセイユ旧港地区」です。2015年頃までに1.5万人～2万人程度の雇用を創出

する目標に対し、2万人の雇用が創出されました。また、1ユーロの公共投資が4ユーロの民間投資を生み出す目標に対し、5億ユーロの公共投資が30億ユーロの民間投資を生み出しました。課題ですが、開発により賑わいを創出しましたが、開発区域の周辺は衰退したままの状態でした。周辺地区と一体的な賑わいを創出するため、交通的なつながりを生み出すアクセス機能の強化を図ることとしました。

その他として、北山委員から、海都横浜構想2059において参考にした海外の開発事例のご紹介がありましたので、ご説明いたします。これは、ヴェネチアの事例となります。ヴェネチアのジャルディーニは、都心近くの造船所跡に設けられた都市公園で、低い建ぺい率で各国のパビリオンが建てられ、ビエンナーレの会場として使われ、都市観光のエンジンとなっています。続きまして、シドニーの都心に設けられた美しい水際公園の事例となります。これは、ポートランドで創造都市の拠点として成功している事例です。これは、アムステルダム の都心から近い埋立地の事例です。北山委員、恐れ入りますが、補足等ありましたら、議事（5）の意見交換の際にいただければと思います。

次ページ以降の資料につきましては、議事（4）第1回から第4回までの意見のまとめにも関連しますので、後ほどご説明させていただきます。補足の説明は以上となります。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。次に議事2に入ります。宝田委員から意見書の説明を10分程度でお願いいたします。よろしくどうぞ。

【宝田委員】

はい。協同組合元町エスエス会の理事長をしております宝田と申します。今日は商店街の意見を言わせていただく時間を頂戴しました。ありがとうございます。それでは始めたいと思います。

前回、坂倉さんの方からも元町・中華街からのアクセスっていう話がありましたけれど、こちらの委員会にお声をいただいた時から、我々商店街としては、今の現状の交通アクセスの不便さというものを意見書で出ささせていただきたいという旨の話をさせていただいております。前回の市民意見の一番最初のところにも市民の方からの意見を頂戴しておりますが、まず山下ふ頭の周辺は山下公園がありまして、山下公園通り会、中華街、元町と色々商店街がありまして、また近隣エリアには住居もたくさん存在しております。そこに勤めていらっしゃる方もたくさんいて、多くの方が日々あのエリアを利用しております。山下ふ頭地域、特に車でのアクセスというのは限られたアクセスのみになっておりまして、特に新山下の方から山下公園に向かう通りというのはバスの通りにもなっておりますので、日頃から渋滞が多く発生する場所にもなっております。また歩行者について、元町・中華街から限られた道路にしか歩行者が通れない歩道橋があるのですけれども、足の不自由な方、車椅子の方はなかなか利用しづらい。そういった環境があまり整ってないような状況になっております。高速道路の下の歩道部分は、片側だけは歩けるのですけれども、もう片側は歩行者が通行できないような通りになっておりますので、あの辺も全て含めたもので山下ふ頭再開発の検討の

中に入れさせていただきたいと思っております。

広さを比較した時に、41ヘクタールの新港ふ頭よりも広いエリアがこの山下ふ頭のエリアになっております。これに対して本当に限られた場所でしか中に入れられない・中から出てこれないという状況になっていまして。今現在、新港ふ頭だけでも年間1,770万人の方が訪れているのですが、観光客も働いている方も含んだ数だと思っておりますが、この山下ふ頭のエリアの中にこれからどれだけの人間が日々働きに出るのか。ここにどれだけの方々が観光に訪れるのかということ考えた際に、今の出入り口の広さだけではあまりにも足りないであろうというふうに思っています。万が一災害があった時など、これだけの広さに対してのあられだけのスペースであると、避難するのも迷ってしまうのではないかと。今、イベントなんかがあると山下公園の中から入れるかと思うのですが、そこも限られた広さでしかゲートがオープンしていないという状況もありまして、あそこからなんとか歩行者・車道を含めたアクセスのしやすい交通インフラの整備というものを地元の商店街としてはまずこちらのまちづくりの計画に入れていただきたいと思います。こうやって見ると色々なアクセスがあるように見えるのですが、実は二車線しかなかったり、片側一車線しかなかったり、一方通行であったり、先ほど申し上げたとおり、歩行者が入れないような状況になっている場面、歩道橋をわざわざ使わなければいけないような状況になっている。これが果たしてこれから日々3万人・4万人が訪れるまちづくりをするのに適した道路の数なのかということが非常に疑問に思っているところであります。首都高速へのアクセスがものすごくいいのですが、実はあそこは降りてきてからも渋滞があり、なかなか入る段階では渋滞はそこまで見かけないですが、何かイベントがある際にはあそこでも渋滞が起きる。山下橋を中心に渋滞が起きやすい。交通量が多いということは歩行者もなかなか安心して通ることができないということもありますので、是非そういったところも考慮していただきたい。

また、石川町駅の方に話が変わるのでありますが、今、棧橋が設けられていまして、日ノ出町駅の裏あたりの棧橋から、大岡川、中村川、堀川と回遊ができるような水上交通というのが進められております。今、元町・中華街駅の方に谷戸橋というところがあるのですが、あの辺でもそういった新しい水上交通のインフラ整備という話も上がってきております。そういった水上交通も利用した新しい全体的な交通インフラの整備というものを是非この山下ふ頭再開発検討会議の中に盛り込んでいただきたい。これが元町からの意見となります。

ちょっと短いですが、以上となります。

【平尾委員長】

宝田委員、どうもありがとうございました。山下ふ頭について、アクセス・モビリティ・全体的な交通体系・システムの問題。非常に大きな問題だと思いますので、今日は大変具体的にご説明・ご提案いただきまして、ありがとうございました。

それでは続きまして、田留委員にプレゼンテーションをお願いいたします。どうぞよろしく申し上げます。

【田留委員】

はい、神奈川倉庫協会より推薦されました田留でございます。どうぞよろしくお願いたします。この度、横浜市山下ふ頭再開発検討委員会の地域関係団体委員として発言する機会をいただきましたことに感謝申し上げます。団体概要及び主な事業活動は割愛させていただきます。山下ふ頭には当協会の会員・企業の多くがこれまで関わってまいりました。その総意を踏まえて当協会として提出しました意見書の内容を説明させていただきます。

まず倉庫と山下ふ頭との関わり合いですが、当協会創立76年以上の歴史の中で、1963年、昭和38年に山下ふ頭が供用開始されました。開始以来60年の年月に関わってまいってきたというところがございます。その役割はその時代時代で変遷をたどってまいりましたが、特に我々倉庫事業者はいつの時代も横浜港の中で貿易の結節点であり、活性化や横浜経済の支えに大きく寄与してきた自負と共に、多くの従業員が働いていた場所として、この山下ふ頭に対し強い思い入れを持っております。そのため、この山下ふ頭再開発に当たりまして、今後の展開や将来図に対し、関心とともに注視しているところがございます。

続きまして要望事項に沿いまして要望と意見を申し上げます。

まず1つ目としましては、ただいま宝田委員のご説明の中にありましたように、私どもも交通問題を一番懸念しているところがございます。山下ふ頭の再開発に伴いまして、これまでにない大規模な人流が発生すると思われれます。山下ふ頭は横浜市の中心に位置しておりまして、周辺道路は我々物流事業を営む事業者、特に輸送手段として重要な役割を担う道路が非常に影響を及ぼすものと考えております。物流事業者のみならず、市民生活にとりましても、生活道路として大きな影響と支障を及ぼすことを懸念しております。そのためにも、周辺交通網の整備を山下ふ頭再開発検討の中でも重点課題としてお願いするところがございます。前回の委員会でも説明・掲載がありましたけれども、新港ふ頭から山下ふ頭、本牧ふ頭までをつなぐ国直轄事業であります臨港幹線道路の整備を改めて進めていただくのも1つだと思っております。また、長期計画になるかもしれませんが、輸送能力が格段に高い鉄道、近くまで走っておりますみなとみらい線やブルーラインの延伸についての検討も必要になってくるかと思料しております。さらに山下ふ頭を中心に広域にまたがる海上交通を開通させ、アクセス手段の選択肢を広げ、交通網の整備・拡張を図ることによりまして、観光や新たな事業展開に役立つものと思われれます。

2つ目としましては、山下ふ頭はご承知のとおり、横浜港頭地区にありながら、横浜市街地にも近い好立地にあり、素晴らしいロケーションの中にあります。この優位性を活かし、魅力的な事業開発を願うものでございます。現在関心の高いSDGsの目標を踏まえた環境・経済・社会的課題に対し、持続的で横浜市の成長につなげられる新たな価値や賑いを創出し続ける街づくりも目指す指標にさせていただければと思っております。重なりますけれども、山下ふ頭の再開発は環境問題や経済、社会課題と向き合い、横浜経済の活性化につながる持続可能な事業にさせていただければ幸いです。山下ふ頭におけるこれまでの物流事業は横浜市において経済面だけでなく雇用も促進してまいりました。是非とも、横浜のさらなる経済発展につなげ、活性化に伴う事業展開と共に雇用を創出することを期待しております。

3つ目になります。今年に入り、大きな地震が相次いで起きております。また、最近では台風も多く到来しています。この災害時の対応について、問題・課題を見直す機会が出て

いる中で、横浜港湾エリアにおきましても、防災拠点機能として災害時対応の整備が必要不可欠となってくると思われます。山下ふ頭は船舶が着岸できる岸壁機能の優位性を活用した災害時の海上輸送ルートや保管拠点の機能確保も重要な役割になるのではないのでしょうか。

意見書の内容は以上でございますが、最後に山下の再開発は魅力ある持続的で将来性につながるのある一体的なまちづくりを目指し、横浜経済の起爆剤になることを願って、発言を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【平尾委員長】

田留委員、ありがとうございました。横浜市の発展の起爆剤として、山下ふ頭の再開発という最後の言葉が非常に印象に残りました。ありがとうございました。それでは、ご質問に関しましては学識者委員のプレゼンテーションの後にまとめてお受けしたいと思いますので、それでは学識者委員のプレゼンテーションに移らせていただきます。河野委員、お願いいたします。

【河野委員】

本日は限られたお時間の中でプレゼンテーションの時間をいただきまして誠にありがとうございます。

この最初のスライドでございますけれども、私なぜここに座らせていただいているのかということ若干この肩書きでお分かりいただけるのではないかと思います、あえて公式な所属だけでなく1つ付け加えさせていただいております。

昨年、新しい国際コンテナ戦略港湾政策の進め方検討委員会というものが、国土交通省の方で開催されまして、私その座長を務めさせていただきました。おそらくこの検討会の委員をさせていただいておりますのもそれゆえではないか、それから港湾審議会の方でも委員を務めさせていただいた経緯もございますので、そういうことでここに座らせていただいていることと存じます。それゆえに私としましては、横浜市、それから横浜港というものが今の日本、あるいは日本の国民にとってどれだけ重要な港かということ、皆様方にはもう十分お分かりのことではないかと思うので、改めて今回若干プレゼンをさせていただきたいと思った次第でございます。

本日、3つに分けてお話をさせていただきます。1つ目は何よりも今、横浜港が置かれている状況がどういうものなのかということです。実はコロナ禍の前と後でかなり考え方が違ってきておりまして、検討会が国土交通省で開催されましたのもコロナ禍の状況を踏まえての開催ということでございますので、その点若干ご説明をさせていただきたいと思います。それから二番目にその検討委員会の結果としてどのような取りまとめがなされたのかということについてもお話をさせていただいて、何よりその最終的な取りまとめの中で横浜港が持つ役割の大きさということは、これはもう疑いの余地がないものでございますので、若干そういう期待を込めて3つ目のお話をさせていただきたいと思っております。

まず1つ目の国際コンテナ戦略港湾を取り巻く情勢についてでございます。1つ目の問題は、まず1つは世界全体において国際コンテナの取扱量というのは世界経済の発展に伴いま

して飛躍的に伸びております。これが世界を取り巻く中で日本を中心にして国際航路を、輸送ルートを示させていただいている地図なのです。このアジアと欧州、それからアジアと北米、南米、そしてアフリカをつなぐこの航路というものが国際的にはコンテナの貨物量がどんどんどんどん増えているのが現状でございます。問題はこの世界全体において国際コンテナの取扱量が増加しているにも関わらず、実は日本はこの国際コンテナ戦略港湾がせっかくの商売の機会を逃しているのが今の状況というふうには言わざるを得ません。と申しますのは、これが現状の日本でございます。少なくともアジア主要港と我が国の港湾の国際基幹航路の寄港回数を比較しましても、とにかく劇的に日本の港湾は取扱量が減っている。その結果として、90年代には10位以内に神戸港がございましたし、横浜港も11位でございましたけれども、2022年の速報値でいきますと、もはやもう30位以内にも入れていない。これが今の横浜港の状況というふうに申し上げることができます。これで良いのかというのが今年の検討委員会の何よりの大きな課題でございました。

1つの考え方としては、もはやハブ港である必要はないのではないかと。アジアにおいて例えば釜山港と上海港がハブ港になっているのだから、そこを拠点にすれば良いのではないかという議論も実はあり得るのです。それが実際にコロナの間にもどのような結果をもたらしたかということを見たいと思います。何よりもコロナ禍の中で国際的にはコンテナ輸送のネットワークが非常に需給ひっ迫をし、そして輸送網にかなりの影響がもたらされました。その結果として、何が起こったかと申しますと、少なくともコロナ以前の2020年までの状況と、それから2021年以降のこのグラフの差を見ていただくとお分かりかと思うのですが、コロナウイルスの感染症が蔓延したこの結果として、やはり釜山港を経由することによって、そこで待つという事態が生じます。データによりますと輸送日数の差が最大で50日程度まで伸びたということになります。この状況を見ないではいけません。すなわち荷主等のコメントを検討委員会でもかなり伺ったのですが、50日以上リードタイムが出てくるということそのままで放置すべきではないというのはかなりの荷主の方々のご意見として出てきたところでございます。ということは基幹航路を、ハブ港としての日本の港湾の機能をなんとか維持しなければいけないという課題がございます。これまでの日本の国際戦略港湾の特色というのは少なくとも日本発着貨物が十分にあって、そしてその輸送だけで十分な貨物量が確保できたわけです。ところが現在の日本の港湾の事情というのは、まず日本発着の貨物量が減少していて、これは日本社会の変容で少子化や人口減少、それから製造業が国際的に分業化したこと。これが原因になっているものと思われま

す。それからもう1つの大きな事情としては、コンテナ船が大型化しているのですが、新しく作られた港ほど、例えば大深度の埠頭を作れますのでコンテナ船の大型に対応できると。こういった事情がございます。日本が抱えている状況というのはこういう状況であり、しかもこれに加えて現在国際海運を取り巻く国際情勢が大きく変化しております。1つはアラビア海、紅海を通る船舶がフーシ派に攻撃をされると。それを避けるために、今喜望峰を回っておりますので、こちらでやはり時間がかかっておりますし、それから若干改善の方向に向かっているというふうには伺っていますけれども、パナマ運河が渇水状態になって、通れ

るものに制限が出てきていると。こういった様々な国際情勢にもやはり対応していかなければならない。日本の産業を支える港としてこれらの点というのを考えなければならない。

このスライドを見ていただきますと最も顕著に日本の港湾のこれまで特色が分かるのですが、日本の港湾は先ほど申し上げたように日本発着貨物だけで十分に荷物量が取れたので、今までトランシップにそれほど注力をしてこなかった。ところが、アジアの経済発展を日本の港湾に取り込んでいくためにはトランシップを取り込んでいかざるを得ないというのが現状であろうということをこの表から分かっていただけたと思います。それからもう1つのデータとして見ていただきたいのは、実は日本の発着貨物がかなりの部分釜山港を経由しているということ。この状況もやはり日本発着貨物は日本をハブ港として発着できるようにすべきではないかということ。これらが日本を発着する貨物の量を確保していくために何より必要であると。しかもこれだけコンテナ船が大型化しているという状況もございます。

こういった状況それから国際情勢ということで、コロナ禍以降の日本としても、何もしてこなかったわけではございません。例えば北米東岸向けの直行航路を維持するための努力、一度止まりましたので、これをもう一度維持するための努力。これは横浜港を起点にして行っておりますし、それから国際フィーダー航路による北米航路への集貨、リードタイムの変化ということについても政策を採っている。こういった様々な取組をすることで、何より重要なことは基幹航路を維持すること。これは国際基幹航路を維持するということが日本の産業にとって少なくとも何よりも重要な意味を持つというふうに考えられます。

この結果として、結論として2点申し上げられると思います。まずどうやったら日本で基幹航路を維持できるのかという時に1つは集貨と創貨ということになります。何より港湾に荷物がなければ船は、基幹航路は寄ってくれませんのでやはり集貨、創貨をしなければなりません。集貨は日本国内だけでなく、今後は東南アジアからの集貨を考えなければなりませんし、それから大深度の港湾施設の機能強化も必要になってまいります。こういった点を踏まえて、少なくとも国際コンテナ戦略港湾政策の進め方の検討委員会は集貨と創貨、それから港湾機能の強化ということを打ち出したということになります。

【平尾委員長】

河野委員、そろそろ時間ですのでまとめていただけますでしょうか。

【河野委員】

最後はあと2～3分だけいただきたいです。

中でも横浜港の重要性は、横浜港には現在大水深の、つまり大型のコンテナ船に対応できる埠頭がある、日本で唯一の港です。その横浜港に日本国内からの集貨の必要性がございます。それから東南アジアの地域からの集貨と創貨も必要です。

さらにはデジタル化とグリーン化ということで先進国ならではの港湾であるべきであろうと考えます。横浜港は今そのための取組を随分していただいているというふうに伺っております。

結論として申し上げたいのは、日本にとって横浜港の重要性ということ、それから日本国民にとって横浜港がいかに重要かということを考えて時に、今後世界的に横浜港が選ばれる港湾になっていただきたい。そのためには、日本国全体としての取組も必要ですし、ですけれども市民の方々の理解や協力も必要であろうと思います。それからDX化とGX化による新たな価値に対応して、港湾を機能強化することも必要ですし、そのためにこれだけの立派な港なのだということを横浜市からも是非発信してポートセールスをしていただきたい。それから激動する世界情勢や国際コンテナ戦略港湾政策のあり方について横浜市あるいは横浜市民の皆様にも興味を持っていただきたい。もちろん十分それはもうしていただいているのですけれども、改めて繰り返させていただきたいと思います。山下ふ頭というものは横浜市民にとって重要であることを十分に私この検討会で理解させていただきましたけれども、ただもう1つは日本国民にとっても重要な港であり、そしてその港と市街地を結節する場所として山下ふ頭の土地というのは大きな意味を持つと思っております。そういった観点からこの跡地の利用をご検討いただければ大変ありがたいと思います。すみません、お時間いただきましてありがとうございます。

【平尾委員長】

河野委員どうもありがとうございました。世界的な物流・コンテナ化という船舶輸送の変化の中で横浜港の位置付けあるいはその中でまた山下ふ頭の位置付けということをご提案いただきまして、ありがとうございました。

それでは次にWEBでご参加の隈委員からプレゼンテーションをお願いいたします。隈委員どうぞよろしくをお願いいたします。

【隈委員】

はい、建築家の隈でございます。今日はWEBからで大変失礼いたします。今回横浜の山下ふ頭を、世界のこのようなウォーターフロント、それからアーバンデザインのプロジェクトの中で考えてみたいなというふうに思います。そういう中で、1つ私が重要だと思うのはセントラルパークのプロジェクトでして、実はニューヨークの真ん中に緑が残ったというのがその後のニューヨークにとって非常に大きな価値を与えたというふうに言われています。

今2000年以降の世界の都市開発の流れを見るとあの基本はやはり緑をどういうふうにして復活するかというのが、大きな流れになっていて、その時このセントラルパークのストーリーは非常に重要です。当時いろんな議論があってニューヨークの真ん中、これ実はこの土地空いていたわけではなくて、土地を買収してここに緑を作ったわけですが、それに値するかどうかいろんな議論の中でこれ市長の英断でここに緑を作ろうということで、これがその後のニューヨークに大変に大きな価値を与えたと言われます。これがその内容です。オルムステッドというランドスケープデザイナー、彼自身が、ただ緑のデザイナーというだけではなくて元々政治家志望で非常に強い政治的意志を持って都市の中には絶対グリーンが必要だと、それが人間の生活にとって必要だということで19世紀の半ばにこのような自然に溢れたランドスケープの絵を書いたわけです。

これが今のセントラルパークの中心部です。彼は交通計画にも東西を結ぶものが、セントラルパークの緑を阻害しないで繋がっているという交通計画にも意を配ってこういう理想的な公園ができたわけです。こういう実際に緑がニューヨークの市民にとって大きな価値を与えたわけです。

その後色々な機能がここに入ってきました。最初からそこに複合機能っていうのではないのですが、やはり複合機能が入れるような余地を残したということで、有名なメトロポリタンライブラリーですとか、有名な動物園ですね。最初はこういう動物の小屋から始まって最終的には大きな動物園になるのですが、これが動物園の計画ですね。

結果としてニューヨークにこのような緑が残って、これだけの大都市がやはり緑、自然に近い大都市として大きな価値を未だに発信し続けているということです。オルムステッド、そのランドスケープデザイナーは、その考え方を非常にアメリカで高く評価されて、その後もブルックリン、それからボストン等で同じような計画でニューヨークの都市の、市街地プラスグリーンという1つの典型を作ったわけです。

これ山下ふ頭の原型ですが今ここに緑ができたらどんなにいいかなというふうに私は考えるわけです。

これはニューヨークの南の部分新たに緑と、それから交通問題の処理、それからもっと大きい目的は防災ということで、開発するプロジェクトのビッグユーというプロジェクトのコンペの最優秀案です。このきっかけになりましたのは2012年にハリケーンのサンディっていうので、ニューヨークが壊滅的な被害を受けて、このままではニューヨークやばいということで、この南の地域に、どのような防災機能を持った公園を作るかというコンペが行われました。これがそのビッグユーの全体で、緑を中心にしてこのような複合機能が入っています。もちろん防災というのが一番大事にされています。これが、その予想図の一部です。水際の緑、それからスポーツ等の活動、それからウォーターフロントの部分は一部立体的に利用されていて、こういう部分の活動の下に、これ一番のウォーターフロントですね。このような既存の構造物とも複合して立体的なウォーターフロントの絵ができています。これはその後、2012年のハリケーンの後、コンペが行われて、今少しずつ実現に向かってどんどん動いています。これは、そのビッグユーの今工事中の部分です。

マルセイユのウォーターフロントの開発というのも、これ私の一部絡んだので親しいのですが、マルセイユの一番の港湾の中心部分を、ここは観光をベースにするエリアとして、作り直そうという計画でありました。このような、ちょうどこの赤いフラックマルセイユっていう国の現代アートのセンターを私がやった関係でこの脇での動きをずっと見ていたのですが、この網掛けの部分を中心にしたことによって以前はこの上のような絵だったわけですが、車が排除されて、全く違うマルセイユ、マルセイユというのはどちらかというと移民が多い、それから車が多いということで、評判の悪かったウォーターフロントが全く違う環境になったわけです。これがビフォーアフターですね。これが、私どもが絡んだ現代アートセンターです。

バルセロナもそういう水辺の開発として非常に世界に名高いのは、実はきっかけは意外に新しく、1992年のバルセロナオリンピックでそれをきっかけにしてこの水際を、今まで倉

庫工場だった水際を一掃して緑のウォーターフロントを作ろうという成功事例です。これがその以前のバルセロナのウォーターフロントの工事中の風景ですが、これが今このような緑と、それから人間がビーチに近づける。この前のバルセロナは全くその水際に人がいけないという街だったのですが、全く違う要素の街に変わりました。市民のパブリックスペースも水際にデザインされて、それから新しいデザインファームなどの誘致もありまして、バルセロナのこの長い水際が全く違うものになったと言われていています。それに合わせて、スーパーブロックという開発が街の中に伸びた。これも画期的なことで、ウォーターフロントから始まって、スーパーブロックという街中の緑プロジェクトも始まるわけです。これがブロックを遊歩道と緑の道路に変えていくという計画です。上が下のような緑のバルセロナに変わったということです。

イギリスの北のスコットランドのダンディも、その水際のプロジェクトに我々関わって、このダンディというのはスコットランドではどちらかというとエディンバラ、グラスゴの影に隠れていた街なのですが、水際はかつて港湾として非常に栄えた。それが、港湾工場倉庫が全く必要なくなってきたので、そこを緑とそれから文化の町に、水際に変えようという計画でした。これが緑になったダンディの水際の絵です。これ工事中の様子です。これ前の様子を見ていると、あまりの変わり様にびっくりするのですが、これで街が生き返りました。今これも工事中で、左下の水際の建物が我々のビクトリアアルバートミュージアムっていう初めてイギリスの国立博物館の分館を作るという計画でした。これが水際と分館と公園の様子です。これが我々の建物ですが、公園はエリザベス女王がオープニングに来て、それだけイギリス全体でこのウォーターフロントの開発、緑の公園を作るのに力を入れていることの象徴が、エリザベス女王のオープニングの参加だったわけです。

シンガポールも、実は都市化の中で非常に環境が悪化したので、緑を再生させるという計画を南側で今進めています。シンガポール、超高層の都市に対して絶対緑が必要だという考え方が出てきて、場所的にはこの有名なマリーナベイサンズの向かい側の土地、このちょうど向こうにクレーンが見えていますけど、そこの場所です。この緑で書いた場所です。マリーナベイサンズの下にはカジノがある。そういうシンガポールの象徴の脇に、緑の整備を行ったわけです。ここに機能複合するというコンペで我々がシンガポールの創立者と言いますか、ファウンダーズのリー・クアンユー記念館を我々が作る提案で選ばれてこういう計画をしました。これが実は建築物と緑の複合で、一見緑なのですが、実はその中に様々な機能が複合されています。これが最終的な完成予想図。今工事中なのですが、向こうのマリーナベイサンズ以降の超高層のものと補完し合うような関係を作ろうというのがこのシンガポールの国の大きな方針になっているわけです。これ屋上全体が太陽光パネルになっていて、下にファウンダーズメモリアルの機能が入っています。

このモナコのウォーターフロントでも、今プロジェクトの名前がシンビオーズというプロジェクトです。これは、プロジェクトの概要はまだはっきり示せないのですが、ゴミ処理場をモナコの新しいシンボルとして、人々が来られる、それで環境の問題を学ぶことができるゴミ処理場をウォーターフロントの象徴的なものとして作ろう、というプロジェクトです。世界のこういうウォーターフロントにとって環境というのが大きなテーマになってい

て、それがさらに単に緑があるだけではなくて、人もちゃんと呼べる緑を作ろうという計画として進んでいる、ということが重要だなということを、そういう考え方で山下ふ頭も、こういうものに負けない、あるいはそういうものを超えるような緑のプロジェクトができればいいなということで今日お話をさせていただきました。ありがとうございます。

【平尾委員長】

隈委員ありがとうございました。世界各地の開発計画、それが山下ふ頭に参考になるという、そういうプレゼンテーションをいただきました。隈委員の冒頭にご紹介のありましたセントラルパークは、私は10年近くに住んでおまして、毎朝あそこでジョギングしたり散歩したりしておりましたので、大変懐かしく感じました。またあとの都市も、全部来訪しておりまして今日先生のご紹介によってその街がいかに変わっているかということ、非常に印象を強くいたしました。プレゼンテーションどうもありがとうございました。

それでは、最後になりましたけれども、私の方からプレゼンテーションをさせていただきます。ちょっと時間が押しておりますので、ちょっと一部割愛するかも分かりませんが、よろしく願いいたします。

私のテーマは横浜市の都市課題と山下ふ頭ということで、そしてサブタイトルとしては新たなシビックプライド、新しい市民の誇りを創り出すと。横浜市には色々と誇るべきものがありますけれども、山下ふ頭は今までと違った、新しい市民にとっての誇りを、場所を作り出すのだと。そういうことが基本的なテーマかと思っております。

横浜市の色々な都市課題につきましては、横浜市の長期ビジョンあるいは中期計画によって非常に的確に横浜市の当面する課題を取り上げられて、長期的に取り組んでおられて、非常に成果を上げてこられました。それぞれ長期ビジョン、中期計画とも来年が最終年度になりますので、これまでの計画を振り返りながらどういうふうな新しい横浜市のあり方を模索するのか、その中で山下ふ頭をどういうふうに位置づけるのかということが課題かというふうに思っております。

この問題の切り口は色々ございますけれども、私は3つの切り口でご紹介したいと思えます。まず多文化共生ということですが、横浜市は高度成長の過程、1965年、昭和40年にこの6大事業というプロジェクトを展開されまして、大体今完成に近づいてきたということです。この6大事業は高度成長で横浜市の人口が、あるいは産業がどんどん増えていくという中での計画だったわけですが、今後は違った課題に直面するのではないかと。一番大きな問題は先般アトキンソン委員からもご紹介がありました人口の問題ですね。横浜市の人口は今年去年あたりをピークにして、日本全体の人口減少よりは緩やかでありますけれども、しかし大幅な減少が今後予想されているということはこのグラフの線です。青い線が横浜市の人口、それからイエローの線が日本全体の人口減少の状況です。そういう中で横浜市に海外の外国人の定住人口が非常に増えてきているということで、現在12万人を超える外国人の方がいらっしゃいますけれども、さらに今後私どもは色々と計算してみると2040年には外国人の数は40万人近いということで約9人に1人は外国人になると。まさに多文化

共生の町に横浜市がなっていくのではないかということで。そういう多文化共生の町の実現ということに対してどういうふうに、それから定住人口と同時にインバウンド等の交流人口も増えてくるという形でも、そういう意味で第三の開国っていうのが横浜市に課せられている課題だろうと。これは日本全体の課題でもありますけれども、横浜市には特にそういう傾向が強くなっていくのではないかということです。それで多様な人材が集まることによって新しい街の発展が進められていくと。都市経済理論で、ジェイン・ジェイコブズとかリチャード・フロリダなどの都市経済学者の、町のダイナミズムっていうのは多様な文化の総合によって進められていくという都市理論がございます。まさに多文化共生のプラットフォームを横浜で展開していく、その基盤が山下ふ頭になるのではないかということです。

それともう1つはイノベーションです。人口の増加減少を補っていくための経済の発展というのはイノベーションであって、それは横浜市にとって色々な試みがされておりまして、今回みなとみらいにも新しいスタートアップの拠点ができますし、それからYOXOボックスもそうです。ただまだまだ横浜のポテンシャルに比較すれば、このイノベーションの拠点の形成というのは遅れているのではないかというふうな気がいたします。それでイノベーションが単に発明がされるだけではなくてそれが社会実装をされていかないといけない。それを山下ふ頭で展開していくということで、横浜市の誇るべき新しいイノベーションはペロブスカイトという折り曲げられる太陽発電の、これが今、大さん橋で実証実験が始まっております。これを社会実装として全面的に展開して、ソーラーエナジーの街に山下ふ頭をしていくということ、その他多様なイノベーションの展開をこの山下ふ頭で行っていくということ。

それからもう1つは皆さん方から色々のご発言がありましたモビリティ・アクセス。このイノベーションもしないといけないのではないかと。たまたま川崎市では川崎と羽田を結ぶ自動運転のEVバスを導入されようとしていますけれども、この皆さん委員の方々からご発言がありましたように山下ふ頭と横浜市の従来の街との間のアクセスを強めていくと。そのための新しいモビリティのイノベーションが必要ではないかということでございます。今横浜市もご覧いただいておりますような交通インフラのイノベーションを進めておりますけれども、さらにこれを進めていくということです。

それからこれも防災機能の強化ということで、山下ふ頭の埠頭機能を活かして、災害時における災害支援物資の受入れあるいは広域防災拠点、避難場所等にする。あるいは山下ふ頭の岸壁を強靱化して防災に、あるいはドローンその他の新しい防災の基地にするということも考えられるのではないかとということでございます。

また、この山下ふ頭を作っていくためにやはり市民の参画っていうのが非常に重要であるかと。皆さん方のご意見のとおりですけれども、隣接する山下公園が、関東大震災の瓦礫の中から作られたのです。言い伝えによりますと、伊勢佐木町とか元町の瓦礫を市民がリヤカーとか大八車で運んで、山下公園ができたっていうことも聞いたことがあります。この山下ふ頭の開発にも、市民の参画を進めていく必要があるかということです。

それから山下ふ頭にグリーン強化、先ほど限委員のご説明のありました新しい世界の都市全てで、ウォーターフロントは緑にカバーされているということで、この山下ふ頭につき

ましてグリーンベルトを山下ふ頭と山下公園と繋いで、あるいはその他の地域と繋いで、グリーンベルトを、緑の総量を増やすということですね。

山下ふ頭につきましては、市民のための市民による山下ふ頭のまちづくりということで、先ほど隈委員の方からニューヨークのセントラルパークのお話がありましたけれども、ニューヨークのセントラルパークを、あれだけの大公園を維持しているのはパークコミッティーという市民の組織があつて、それを市が応援して自主的に市民がセントラルパークの緑を守っているということで、山下公園、山下ふ頭の新しい緑地につきましてもそういったような市民がただ楽しむだけではなく、市民がそのメンテナンスにも参加するような仕組みが必要ではないかということをご期待したいと思っております。

以上で私の方のプレゼンテーション、ちょっと時間が押しておりましたのでちょっと簡単になりましたけれどもこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

それではプレゼンテーションを終わらせて、事務局のご説明と意見書の説明、それからあとプレゼンテーションについてご意見がございましたら挙手をお願いいたします。内田さんいかがですか。なにか感想なり、コメントなり。

【内田委員】

はい、ありがとうございます。各国のウォーターフロントの開発は本当にデザイン性も素晴らしくて、写真を見るだけで、ああこんな街を訪れたいな、というふうな、旅に出かけたくなるような、そういう魅力に溢れているな、というふうに感じました。でもそれはそれでその地域の歴史であるとか機能であるとか、そういうものの自然な流れと言いますか、そのなかで、ああいったものがきつとできているのだろうという、単に素敵なものを作って開発してついでということではない、もっと奥深いストーリーがきつときつとあるのだろうなというふうな想像しながら聞かせていただきました。そういうものも参考にしながら本当にそれぞれの都市が抱えている課題感っていうのはそれぞれ違うと思うので、今横浜市、山下ふ頭っていうものが抱えている課題感であるとか、バリューっていうものをどんな形で活かせばいいのかというものも踏まえながら考えていくのだなというふうな改めて感じさせていただきました。ありがとうございました。

【平尾委員長】

コメントありがとうございました。今村委員いかがでございますか。

【今村委員】

後でまとめてお話をさせていただきます。

【平尾委員長】

それでは、ちょっと時間が押しておりますので、議事4に入ります。事務局から、第1回から第4回までの振り返りとしての資料をまとめていただいておりますので、そのご説明を

お願いしてもよろしいでしょうか。

【事務局】

それでは、「第1回から第4回の意見のまとめ」について、ご説明いたします。前面のスクリーンでご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも資料5として配付をしております。この資料は、これまでの「学識者委員の皆様のプレゼンテーション」、「地域関係団体委員の皆様の意見書」、「委員会での議論」の内容を整理し、16のカテゴリーに分類させていただいたものです。分類した16のカテゴリーはお示ししているとおりとなります。カテゴリーにおいて、ポイントごとに、委員の皆様のご意見の抜粋や関連する市民意見等を基に、「意見要旨案」を整理してございます。カテゴリーごとに、一番上のポイントと意見要旨案を順次、ご説明いたします。

まずは、「次世代につなげる持続可能なまちづくり」です。長期的な視点に基づく開発として、「トップランナーとして世界のウォーターフロント開発を先行し、国内外に誇れる横浜を作るために、50年後、100年後を想像しながら、未来に負担を残さない永続的な運営が可能な開発を行うべき」などです。

次に、「市民合意形成、プロジェクト体制」です。市民のための再開発として、「市民が憩い楽しむとともに、自然やコミュニティと共生し、文化や生活の豊かさを求める人々が集う空間を提供するような新たな都市モデルの追求も考えられる」などです。

つづきまして、「観光・インバウンド」です。観光・インバウンドの必要性として、「既存の観光資源の活性化も含めた経済成長に向けて、世界の港湾イノベーションを参考にしながら、インバウンドを呼び込む取組を行い、海外からの関心、人流、投資等を引きつける必要がある」などです

次に、「横浜の魅力・ブランド力の向上」です。横浜の魅力・ブランド力の向上として、「古きを尊重し、新しいものを添えていく、横浜の不易と流行を組み合わせ、横浜ブランドを再度磨き上げるべき」などです。

次に、「周辺地域への波及」です。地元経済への貢献と雇用創出として、「新たな産業を生み出し、雇用創出を図るとともに、その恩恵を可能な限り市域外に流出させず、港湾の機能を残した土地利用により地域内の産業にも波及させるべき」などです。

次に、「国内外から人々が集まる」です。人々を惹きつけ続ける開発の実現として、「山下ふ頭が国内外からの関心、人流、投資等を惹きつける力を醸成するために、プロジェクトの事業性に説得力がある開発ストーリーが必要」などです。

次に、「横浜経済を牽引」です。地域経済の活性化として、「定住人口が減少する時代にあって、ビジネスや観光で訪れる国際的な交流人口を吸引し、経済の活性化を誘発するとともに、山下ふ頭の歴史性を十分に活かし、観光産業等のリーディングプロジェクトとして、横浜経済の核となるシンボリックな拠点とするべき」などです。

次に、「防災・安全」です。市民の安全安心として、「世代を超えて市民や来街者の安全・安心を確保していくため、大規模地震などに対する横浜市全体の災害対応力の向上や、感染症対策などの新たな社会課題に取り組む役割を果たせる機能を導入するべき」などです。

次に、「交通ネットワーク」です。陸海からの交通アクセスの向上として、「山下ふ頭への新たな進入路の確保や臨港幹線道路の整備等により、来街者の利便性向上を図るとともに、客船誘致に向けた整備を更に推進していくべき」などです。

次に、「脱炭素、環境・エネルギー等」です。脱炭素型の再開発として、「カーボンニュートラルに向けてエネルギー利用を最小化した施設の導入や、用途に応じた域内でのエネルギーのベストミックスの取組等により、日本初の脱炭素型の再開発プロジェクトを目指すべき」などです。

次に、「市域全体と連動した賑わい創出」です。都心臨海部、横浜市全体への波及として、「元町や中華街、山下公園通りなどのエリアはもとより、関内・関外地区をはじめとした都心臨海部、更には横浜市全体の魅力や個性との相乗効果や連鎖反応を生み出すような再開発とするべき」などです。

次に、「海に囲まれた立地特性」です。立地特性の活用として、「観光産業等の活性化や、水上交通の充実、水面の賑わい創出に加え、海から山下ふ頭にアクセスする方々からの映り方等、再開発を推進する上では、三方を海に囲まれた地の利を十分に活かしていくべき」などです。

次に、「歴史・文化」です。横浜の歴史を踏まえた開発として、「160余年に及ぶ横浜港発展の歴史をつむぐとともに、独自の都市文化、芸術と合わせてネットワーク化されるような開発を進めるべき」などです。

次に、「緑・水辺」です。緑でつながり市民が憩える空間づくりとして、「みなとみらい21地区の水際線から大さん橋、山下公園までの緑あふれる動線の繋がりを活かしながら、山下ふ頭を連続的に接続させ、回遊性の向上を図るとともに、市民が憩い賑わうオープンスペースを確保していくべき」などです。

次に、「景観形成」です。景観を考慮した開発として、「横浜市がこれまで検討してきた景観に対する考え方を踏まえつつ、海陸両面の視点場からの山下ふ頭の見え方や、周辺地区との景観のバランスを意識した開発とするべき」などです。

次に、「デジタル活用」です。デジタル時代への対応として、「横浜市全体のデジタルとリアルを有効にミックスユースした土地利用を踏まえるとともに、デジタルネイティブ世代が楽しむことのできる、近未来の価値観にもかなう象徴的な施設を整備することも考えられる」です。

最後に、今後とりまとめていただく答申のイメージ案となります。これまでご説明させていただいた16のカテゴリーを「1 まちづくりの方向性」、「2 新たなまちを支える基盤・空間の考え方」、「3 再開発に必要な視点」の3つに分類した構成を答申の骨子としたらどうかと考えております。

第1回から第4回の意見のまとめの説明は、以上となりますが、カテゴリーの交通ネットワークと防災・安全に関連しまして、先ほどお話ししました「資料3前回の補足説明」の9ページ以降の説明をさせていただきます。前面のスクリーンあるいは「資料3前回の補足説明資料」の9ページをご覧ください。

前回委員会において、坂倉委員・幸田委員から、首都圏や都心臨海部の交通ネットワーク、山下ふ頭への交通アクセスの課題と対策を説明して欲しいとのお話がありました。まず、首都圏においては、環状型の圏央道、放射状に延びる東名高速、中央道などの高速道路などにより広域的な幹線道路網を形成しています。次に、都心臨海部の主な交通ネットワークですが、ピンクが鉄道、黄色が高速道路となります。赤色の臨港幹線道路は、実線が整備済み、点線が計画となっております。山下ふ頭から本牧ふ頭間は国直轄事業として既に事業化されており、再開発に併せた整備を国に要望しているところでございます。山下ふ頭への交通アクセスについて、すでに複数の委員の方からご指摘をいただいておりますが、「元町・中華街駅へのアクセス性」、「埠頭への接続道路が1か所のみ」、「広大な埠頭内での移動」が課題と考えています。課題解決に向けまして、赤色の臨港幹線道路と連担して、黄色でお示ししている地区内道路の整備や水色でお示ししている駅出入口と山下ふ頭を連絡する円滑な歩行者動線の確保について、今後検討が必要と考えています。

最後に、山下ふ頭内に計画されている耐震強化岸壁について説明して欲しいとのお話がありました。耐震強化岸壁とは、大規模地震に備えて耐震性を強化した係留施設で、横浜港では、緊急物資輸送用と幹線貨物輸送用の2種類があります。

山下ふ頭では、延長200m・水深12mの耐震強化岸壁の整備を計画しており、災害時には、背後の荷捌きばき地やオープンスペースと一体的に利用することで、水や食料などの緊急物資や復旧資機材などの輸送を確保する海上輸送拠点となります。整備については、国直轄事業による整備を要望しております。説明は以上となります。

【平尾委員長】

はい、どうもありがとうございました。大変多様な意見を整理していただきましてありがとうございました。それでは時間が押しておりますので意見交換に移りたいと思います。プレゼンテーションを含めて、あるいは事務局の説明を含めて、各委員からコメント、ご意見をいただきたいと思います。時間が少ないので皆さん申し訳ございませんけれどもお一人2、3分程度で簡潔にお話しただけのようにご協力をお願いいたします。

それでは今村委員の方から時計の逆回りでお願いいたします。

【今村委員】

検討委員会もそろそろ終盤に入ってきたので、色々な考えがあるにしても、先ほどの平尾先生から話が出た中期計画があるのですがすけれども、ポイントはこれから人口が減る。それから特に生産年齢人口の減少、これが著しくなるわけですよ。ということは財源がかなり厳しくなるというふうに放っておくと予想されるのです。それをやるために財源の確保ということは何が具体的にできるのか。ですから今のままの形でこんなぐらいはできるっていうことを、あるいは違う形をプラスアルファで採らなければいけないと思っているのです。先ほど外国人の人がいらっしゃると言うのですが、当然誘致活動の中で日本の人口が減るわけですから、中の取り合いやってもあまり意味なくて、企業誘致とか、外国人の労働者含めた人の雇用を創出する、雇用が確保できるような状況を作るためにはどうしたらいいかというこ

とを、具体的なものを市が中心になってやられないとかなり厳しくなるだろうと思っています。ですからアクションプラン、行政はこのぐらいやる、でも行政だけでは非常に難しいですから、ではどこを巻き込むかという具体的な策を、大雑把なもののある程度作っていかないと。どうしても後手後手になってしまうと財源がないからできないという話になってきてしまいますので、やはり同時並行にそのことをやったらどうかというのが私の意見であります。以上です。

【平尾委員長】

ありがとうございました。それでは内田委員。

【内田委員】

はい、ありがとうございます。やはり日本は世界的に見ても非常に価値があるものが多くて、テクノロジーにしても、カルチャーにしても、非常に独自性のあるものがあるので、やはりそこを私は活かさない手はないというふうに考えております。そういう日本ならではの魅力というものを横浜というところに集積して、世界中の人を集められる可能性があるの、それに私は挑戦していくことが、横浜の山下ふ頭では非常にふさわしい場所なのではないかという、非常に期待を持ってその場所としての価値を見ているので、是非そういうことに世界一を目指して挑戦していくっていう気概を持ってやっていければいいと思っています。以上です。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。河野委員お願いいたします。

【河野委員】

はいありがとうございます。1点だけでございますけれども、分類した16のカテゴリーの中で横浜経済を牽引っていう、この中に日本の貿易の強化というものを含めていただいているのですけれども、是非横浜経済ひいては日本経済を牽引するぐらいの気概を持っていただけると良いのではないかと思います。すいません以上でございます。

【平尾委員長】

ありがとうございました。北山委員。

【北山委員】

この山下ふ頭再開発委員会ですけれども、都市を構想するというのは、皆さんおっしゃっていますけれども、50年とか100年とか、またはこれから未来の住人のためにどういう贈り物にするか、どういう都市空間を残していくかということを議論するのだと思うのですね。それで今日の隈さんのプレゼンテーション、それから平尾委員長のプレゼンテーションを共感して聞いておりました。こういうアイデアというのは前の北沢猛さんが作られた海都横

浜構想というので同じようなことを検討されていて、その当時も人口が減少していく、経済も縮減する日本の中でどのような横浜を作っていくかという構想がすでに2009年に作られています。その時にナショナルアートパーク構想と大きな港湾地区に大きな緑地を作るアイデアもありますし、それから経済というものが既存の経済ではなくて、創造的産業をどう作るかというようなことをテーマにしておりました。それと検討する内容も山下ふ頭という特定の場所ではなくて、ベイエリア全体の大黒ふ頭、新港ふ頭、それから瑞穂ふ頭をどうするかということも含めた広域の議論をしまして、それから郊外地、横浜全域の問題としてどう考えるかという、経済の問題というのは山下ふ頭だけに押し付けるわけにはいきませんので、横浜の全域の都市を、経済をどう考えるかというようなことも議論しておりました。そういう既に蓄積がありますので、当然そういう蓄積を元に市の方は分かってやっつけていってほしいと思いますけれども、そういう方向でやっつけていけるといいのかなと思います。経済を中心にしてしまいますとどうしても短期的利益の最大化という方向に向かいますので、そうではなくてもっと大きい時間空間の中で考えるということを是非やっていただきたいと思います。

【平尾委員長】

是非横浜の中長期計画そういったものに、今のご意見を反映していただきたいと私も思います。坂倉委員、お願いします。

【坂倉委員】

商工会議所の坂倉でございます。短くお話をさせていただきたいと思いますが、商工会議所としては山下ふ頭を開発するという事は市の大きな財産になっていかなければならない、またここから得られる収益というものが市の各種の政策に利用できるに足る、そういうものであるべきだというふうに思っております。しかしながら、この山下ふ頭大変に脆弱な地盤でございまして、昭和38年に建設を終了して利用されたと言いますが、大変取り急ぎ作った埠頭のために、未だに大きな荷重のかかるものを置くことのできない場所が何箇所もあるようにも聞いておりますし、そうしたものを改善していく地盤改良だとかそういうものにも相当お金がかかるようにも聞いております。この辺も非常に大きな問題だというふうに思っているのですが、隈先生からの色々なお話もお聞きしますと、やはり最近のまちづくりというのは緑と調和した形でまちづくりを進めなければいけないというのが当然のように言われておりますけれども、47ヘクタールっていうのは非常に大きいように見えますけれども、それなりの施設を作ると小さいのです。それで私はもう1つご検討いただきたいのは、周りの基盤を整備すると同時に、15ヘクタールから20ヘクタールぐらい埋め立てたらどうかと思うのです。その埋め立てることによって緑の地域をきちっと確保できて、そして既存のところの地盤の強化をしながら新しい開発を進めるというようなことを同時に進めるようなことがあってもいいのではないかというふうに思いました。いずれにしても市民の財産を増やしていく、そして市の収入を得る、こういうような課題にも対応するためには、そういういい方法を考えていかなければならないというふうに思いますし、今一番問題になっ

ているのは入り口の人が通ったり車が通ったりするところの狭さ、これが将来の開発に色々差し障りが出てくるというふうに思いますので、それを是正するためにも是非その埋め立てを利用した形で新しい基盤整備を行っていくようお願いをしたいというふうに思います。以上です。

【平尾委員長】

坂倉委員どうもありがとうございました。高橋委員お願いいたします。

【高橋委員】

高橋です。よろしくお願いします。もう先ほどの隈委員の話ですとか平尾委員長の話も素晴らしいと思いました。こんなものができるのだったら本当にいいなというふうには思うのですが、私が思うのはこの横浜というのが人口減少、財源の問題も含めて、今置かれている状況が、これから将来置かれていく状況がある程度見えてはいます。これに何らかの新たな形を付加してこの形を変えようということでしたら別なのですが、あれだけの大きなニューヨークですとか色々なところがやっているもの、それぞれの都市の持つ財政基盤というのですかね、その置かれている財政基盤というのは全く多分違うと思うのですね。例えば横浜市、お金がないと言われてはいますが、東京の1つの区を見ても、こども政策1つ取ってみても、あり余るお金を配るのとなけなしのお金を配るのでは全く違う。そういった今回の問題というのは都市、この場合ですと横浜市という都市になるわけですが、都市の持つ財政基盤をどう考えるか、それによって国を入れるのか市でやるのか。要は山下ふ頭が部分最適になるのか全体最適になるのか、国の中での山下ふ頭なのか横浜市の中の山下ふ頭なのか、これをしっかりと決めていかないと、なかなか議論が伯仲はするのでしょうかけれどもなかなか接点が出てこないような気がします。あと今坂倉委員が言われたような、さらに埋め立てると。こんな発想今までなかったのですけど坂倉委員だなというふうに思いました。いずれにしてもこれからこの山下ふ頭というのは非常に横浜市にとって重要なところになりますので、是非1つ焦点を定めて、議論をさらにしていただければなというふうに思います。以上です。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。続いて宝田委員お願いいたします。

【宝田委員】

今日はありがとうございました。私としてはこのまとめにある16のカテゴリー中の横浜経済を牽引というのが一番大きなテーマであったという認識でこちらに参加をさせていただいていると思っています。山下ふ頭単体で考えるといくらでも色々な楽しい意見が出てくるかと思うのですが、山下ふ頭と色々な周りの地域と繋がっておりまして、上から写真を見ると山下公園や中華街、元町、新山下と色々な地域と繋がっております。ちょっと先ほど上からの写真を少し見たのですが、近くには山下公園があって、フランス山があっ

て、丘公園があつて、元町公園もあつて、山手も緑がたくさんあつて、比較的大きい視点で見ると緑もたくさんあるようなエリアのうちの1つなのではないかというふうに思っております。是非そういった既存のものも活用しながら山下ふ頭を横浜の地域の1つの場所として、47ヘクタールはすごく広いのですけれども、47ヘクタールしかないという考え方もあります。他の周りのエリアたくさん緑もあつて自然もあつて、これまでの商店街もあつて色々な地域が広がっているので、そういったところと是非回遊ができるような、違った山下ふ頭、新たなまちづくりというのを目指していただきたいと思いますというふうに思っております。交通の件に関してはまたしつこいようですけれども、入れ込んでいただきたいとは申し上げたのですけれども、実は坂倉委員からもありましたとおり、非常に今すぐ急がなければいけないぐらいの課題だと思っております。再開発をするためには。あそこに大きなトラックが毎日来た時にもうすでに渋滞で観光客の車が動かないというのは想像できるような状況ではある毎日の交通量でありますので、そういった優先順位はどこかというのは色々あるとは思いますが、そういった大きな視点で山下ふ頭再開発を見ていただきたいと思いますというふうに思います。ちょっとごめんなさい生意気だったのですが以上となります。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。続いて田留委員。

【田留委員】

本日はどうもありがとうございました。私としましては、もう皆様方の各委員の方のお話を伺うだけで、山下ふ頭はいかにロケーションのいいところかということをもたまた再認識させていただいているところでございます。ですからせっかくこの素晴らしいロケーションの中で横浜ブランドと言いますか、横浜の特性を活かした素晴らしい魅力的な開発ができることを望んでおります。以上でございます。

【平尾委員長】

ありがとうございました。アトキンソン委員お願いいたします。

【アトキンソン委員】

資料の中で、あと今日のプレゼンテーションの中でも雇用創出の言及は何回もありました。今人口増加時代ではないので雇用の量さえ増やせばいいという考え方は不適切な考え方だと思います。人口減少の中で求められるのはあくまでも労働条件が今よりいい、良質な雇用の創出がここに言及されないといけないと思います。特に社会保障問題を考えれば、1990年に大体47兆円で、今138兆円ぐらいまで増えています。人が減っていき、社会保障が減らない中で1人1人の負担が大きくなっていくことを考えれば、今より質の高い雇用を創出しなければならないというふうに思います。

特にそこで関連してはいますが観光の言及もありました。観光のインバウンドのやり方次第では、観光は非常に労働条件の悪い産業にもなり得るものでもありますし、きちんと

した戦略を立てていけばより労働環境のいいものを作ることでもあります。飲食・宿泊の生産性を見れば、日本の中では今一番悪いものになっていますけれども、国のインバウンド戦略では、観光産業における需要の平準化または労働条件の改善ということを十二分に考えた上で進められているものですので、観光戦略、インバウンドを進めればいいというものではなくて、あくまでも今より労働条件の高い、生産性の高い観光インバウンド戦略という条件付きで考えてやる必要があると思います。

外国人労働者の言及もありました。これも全く同じものだと思います。実習生などを含めたような考え方で、労働条件が極めて悪い、または低賃金、最低賃金に近いまたは最低賃金の外国人労働者を増やせば増やすほど日本の国益・国力が向上することはあり得ません。事実として1990年以降日本では非正規を含めた最低賃金で働く人または不安定な労働条件で働いている人の割合が激増しています。生産性も上がりません、賃金も上がりません。社会保障の負担がかかるだけで貧困してしまう、そういうことを考えると、全面的にこの計画の中でより生産性の高い、より賃金・労働条件のいいものを条件として加えて進めていくべきじゃないかと思います。以上です。

【平尾委員長】

はい、アトキンソン委員ありがとうございました。それでは藤木委員お願いいたします。

【藤木委員】

各委員の方のそれぞれの視点で色々勉強になりました。私は港運協会、横浜の物流の関連の代表として、横浜港は物流をとっても今まで一生懸命やってきて、この土地を長年使わせていただいた立場です。ここへ来て都市機能をここに持つてくるという1つの大きな変化の中で考えますと、先ほどから各委員、特に隈委員の意見もそうですけれども、やはり世界のウォーターフロントの開発を見ると、今現状で全て建物を埋め尽くすっていうことはまかりならんと。その中にまず緑があって、その中に後から建物を置いていくというような順序のものの考え方というのが大変貴重なのではないかと思いました。ですから経済性とか雇用とか色々なことを委員の方おっしゃいますけれども、自然を守ってまず自然を作る、坂倉さんもおっしゃったようにインフラ、これをまずしっかりやって土地を作るということで、そこにまず緑を置いて。要するに横浜港全体で横浜を良くしていくという考え方、山下ふ頭だけで良くするというのではなくて、極端なこと言うと山下ふ頭は公園に全部しちゃったらお金なんか儲からないわけですから、それでもその部分を他の大黒ですとか、あるいは瑞穂の返還でそこにやるとかいう形で他で、利益を出してここはもう1つ緑だけで行こうじゃないかというようなそういう結論が出せるような、そういう大なたを振るえる開発に是非していただきたいと思います。以上です。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。それでは、欠席されている石渡委員と涌井委員からコメントをいただいておりますので、ご紹介いただけますでしょうか。お願いいたします。

【事務局】

はい、欠席されている石渡委員と涌井委員からお預かりしているコメントをご紹介します。まず石渡委員からのコメントですが、

まちづくりの方向性については、「可変性」というキーワードが重要だと思う。例えば、平時の際は人が賑わう用途として供用するが、災害等の有事の際は支援拠点として活用するなど、柔軟に空間を利用する視点が必要。

時代の変化や需要に応じたまちづくりの視点も重要。柔軟に空間を活用できるような整備を検討すべき。

次に、涌井委員からのコメントですが、

土地利用については港湾機能を軽視してはならず、例えば近年高付加価値インバウンド客のプライベートジェットや大型クルーザーの発着機能が用意されていない、などの不評が問題化している。インバウンド振興政策を国是とする以上、こうした需要に応え、かつ滞在時間や消費単価が高いこうした層へのサービス機能を一部に組み込むべきではなかろうか。地域への経済効果も大きい、同時にこうした機能の導入が逆に市民や海外来訪者の魅力向上にもつながると思料する。

防災の観点が重要。有事の際は国で議論されている病院船や自衛隊の船舶が着岸できる岸壁や、ヘリポートの整備が必要だと思う。こうした機能を発揮するためには、平時の際はオープンスペースとして活用するなど、パブリックリザーバー的な後々時の、平時のみならず非常時の新たなニーズが生じても対応可能な計画的なオープンスペースを確保していくことも忘れてはならない。

コメントの紹介は以上となります。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。それではWEBで参加いただいております隈委員、幸田委員から順番にコメントをお願いいたします。隈委員いかがでしょうか。

【隈委員】

はい。大きさの話があって、実はセントラルパークとか色々比較してみたのですね。単独で見ると山下ふ頭は決して大きくないのですね。しかし周りとの連携で見ると、1つの緑のネットワークを作れるような大きさで、それは今日お見せしたような計画と比較しても、決して小さいことはない大きさですから、周りとの連携というのは非常に重要ではないかなというふうに思いました。今日のお話の中でも、この山下ふ頭だけで考えるのではなくて交通のネットワークは、完全に切れているということは僕横浜に住んでいたのでよくわかるのですけれども、すごく切断した感じがあるのを繋げて、そこが繋がるだけでもものすごく大きな横浜のイメージ変換になる。バルセロナなどは、ウォーターフロントから変わってその後、スーパーブロックによって街全体に波及して大きな経済効果を呼んでいったみたいなどころがあるので、先ほど藤木委員からもそういうふうな周りとの連携の経済って話ありましたけ

れども、そのような考え方というのを応用すると、こういう財政の厳しい中でも可能性が開けていくのではないかなと思います。今日お見せした中でも、例えばスコットランドのダンディなどは本当に財政が非常に厳しくて、19世紀の黄金時代からずっと下がっていたものが、そういう中であのような緑の計画、それから文化の計画みたいなものをひねり出しています。セントラルパーク自身も当時ニューヨーク非常に開発について議論があって、開発すべきではないかみたいな議論もあった中で、あのようなまとまったグリーンを作ったことがその後のニューヨークに大きなプラスになったので、横浜もここで思い切って、思い切った世界に誇れる計画というものを打ち出していくということが、やはり将来に本当に後の世代に何かを残せるということになるのではないかなと思いました。以上です。

【平尾委員長】

隈委員どうもありがとうございました。それでは幸田委員よろしくお願ひいたします。

【幸田委員】

はい、大変今日は色々とプレゼンテーションで勉強させていただきまして、ありがとうございました。今日のプレゼンテーションでも隈委員それから委員長から出てきましたように、緑、それからパブリックスペースというのは大変重要ではないかなと。特に海に近いこういった水辺空間におけるパブリックスペースというのは憩いの場にもなりますし、非常に重要ではないかなと思っています。今日出てこなかった地域として4年ぐらい前に上海の浦東地区に行ったのですが、あそこは高速道路が通っているところは全部取っ払われまして、それでそこがまさに車通れないようにして、市民の憩いの場のパブリックスペースが出来たと。前と後とで比較するともう本当に大きく変化していて、そこに市民が本当にいっぱい集っていたというのが印象に残っているところで、もちろんニューヨークなどそういったところについても私も行って見てきましたけれども、非常に重要なキーワードではないかなというふうに思います。そういう意味で緑、それからパブリックスペースというところについては特に重視をしていく必要があるのではないかなというふうに思います。

それからもう1点は、今日も意見がありましたし欠席の方からもありましたけれども、やはり港湾機能、山下ふ頭はやはり臨港地区であり、前の私がプレゼンさせていただいた時も申し上げましたけれども、保税地域でもある、そういったところを活用するという視点は非常に重要だと思いますので、先ほど河野委員からご指摘ありましたけれども横浜経済牽引という全体の大きなあれではなくて、山下ふ頭なりのそういったまさに特色として現在そう指定をされているので、港湾機能ということについての活用というものについては是非これは特出しして明記する必要があるのではないかなというふうに思うところでございます。それからこの答申のイメージについて前ちょっとお話しさせていただきましたけれども、この山下ふ頭、本当に横浜市民の宝のような場所であるということは全員からご発言あるところで、今日委員長からお話ありましたけれども市民のための市民による、そういう市民の合意形成によってこの事業計画を作っていくという仕組みについては是非この委員会の答申の中に盛り込んで、それを市の方で受け止めて進めていくというような道筋ができるように是

非して欲しいというふうに思うところでございます。

最後に、答申のイメージ案というのが今日ちょっと示されていましたが、この「1 まちづくりの方向性」、「2 新たなまちを支える基盤・空間の考え方」、この区分がちょっと分かりにくいかなという気がする、両方が重なり合う部分もありますし、まちづくりの方向性とするのがいいのか山下ふ頭の再開発の方向性とした方がいいかというのは、そちらの方がいいと私は思っていますけれども、それは置くとしても、その方向性というところはやはり大きな理念、考え方を重視する、そういったことを書いて、実際に今後山下ふ頭再開発を進めていく検討体制をどうするかということは先ほど言いましたようにありますけれども、その基盤空間の考え方、この辺は少し整理をして答申にした方がいいのではないかと。現在の事務局の方で出されている「1 まちづくりの方向性」、「2 新たなまちを支える基盤・空間の考え方」というのがちょっとなんでしょうか、重なり合って分かりにくい、そういう整理になっているので再検討した方がいいのではないかと思います。と言いますのは、今パブリックスペースの話も防災機能との関係でもちょっとご指摘があったかと思いますが、そういうパブリックスペースの確保は市民の憩いの場でもありますけれども、防災機能の時のバッファーにもなる、こういう点などもしっかりと位置づけて欲しいというふうに思うところであります。

最後に、今の議論の中で出てきました財源の問題ということですが、前回ちょっと私ご指摘させていただきましたが、実際にその財源というのがどういう状況なのかということについての資料、事務局の方で検討いただいているのかと思いますけれども、それをしっかり見た上で、ではどうしていくのかと、これは山下ふ頭だけの問題ではないわけですので、財源が苦しいから公共の方の役割ってというのは難しいのだ、というふうに短絡的と言いますか一直線で行くって話になるのかどうかということは、十分検討する必要があると思いますので、最後にちょっと一言申し上げたいと思います。以上です。

【平尾委員長】

幸田委員どうもありがとうございました。

それではですね、意見交換のちょっと時間が過ぎておりますけれども、皆様方から非常に熱心な、コメントをいただきまして論点がさらに深掘りされたというふうに思っております。ありがとうございました。皆様から一とおりのご意見を頂きましたけれども、あと特に何か、追加的にご発言、ございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

特になければ、私の方から1つよろしいでしょうか。

次回の会議は、本日の議論を基に答申案を作成し、とりまとめの議論に入りたいと思いますけれども、年内の答申に向けて、引き続き、皆様方のご協力をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

よろしいでしょうか。

【(委員一同)】

(異議無し)

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。それでは次の議論に必要な資料をまた事務局の方で準備したいと思いますけれどもよろしくお願ひいたします。

それでは今日の議事は終了いたしましたのでマイクを事務局の方にお返ししたいと思います。ご協力ありがとうございました。

【事務局】

はい、ありがとうございました。

本日はお忙しい中、長時間にわたりまして意見交換をいただきまして、誠にありがとうございました。次回の日程等につきましては後日お知らせいたしたいと思ひます。以上を持ちまして閉会させていただきます。ありがとうございました。

第6回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 会議録	
日 時	令和6年12月9日(月) 14時00分～16時00分
開催場所	横浜シンポジア(産業貿易センタービル 9階)
出席者 ※敬称略	石渡 卓 (神奈川県大学理事長) 今村 俊夫 (株式会社東急総合研究所取締役会長) 内田 裕子 (経済ジャーナリスト、イノベディア代表) 北山 恒 (建築家、横浜国立大学名誉教授) 坂倉 徹 (横浜商工会議所 副会頭) 幸田 雅治 (神奈川県大学法学部教授) ※ウェブ参加 高橋 伸昌 (関内・関外地区活性化協議会 会長) 宝田 博士 (協同組合元町エスエス会 理事長) 田留 晏 (神奈川県倉庫協会 会長) デービッド アトキンソン (株式会社小西美術工芸社代表取締役社長) ※ウェブ参加 平尾 光司 (専修大学社会科学研究所研究参与、昭和女子大学名誉理事) 藤木 幸太 (横浜港運協会 会長) 涌井 史郎 (東京都市大学特別教授)
欠席者 ※敬称略	河野 真理子 (早稲田大学法学学術院教授) 隈 研吾 (建築家、東京大学特別教授・名誉教授) 藤木 幸夫 (横浜港振興協会 会長) 村木 美貴 (千葉大学大学院工学研究院教授)
開催形態	公開(傍聴者20人/記者25人)
次第	1 議 事 (1) 事務局の説明 ・前回委員会後の市民意見等 ・第1回～第5回の意見のまとめ (2) 答申(案)について (3) 意見交換 (4) その他
決定事項	横浜市山下ふ頭再開発検討委員会答申について、おおむね案のとおりとし、最終的な確認は平尾委員長に一任することです承された。
議 事	別紙
資 料	当日配付資料 (1) 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 名簿 (2) 前回委員会後の市民意見等 (3) 第1回～第5回の意見のまとめ (4) 答申(案)の考え方 (5) 答申(案)

第6回 横浜市山下ふ頭再開発検討委員会 議事

【事務局】

これより、山下ふ頭再開発検討委員会を開催します。私は事務局を務めます山下ふ頭再開発調整課長の周治と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。まずお手元の資料を確認させていただきます。次第、名簿、前回委員会後の市民意見等、第1回～第5回の議論をまとめた資料として横向きと縦向きのもの、答申案の考え方、答申案を配付してございます。よろしいでしょうか。それでは、開催にあたりまして、横浜市副市長の平原よりご挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

【平原副市長】

皆様、こんにちは。横浜市副市長の平原でございます。本日は、大変お忙しい中、山下ふ頭再開発検討委員会に、オンラインでのご参加を含めましてご出席を賜り、誠にありがとうございます。昨年の8月から開催させていただいております本委員会でございますが、皆様のご協力によりまして、本日第6回を迎えることになりました。前回の委員会では、海外事例を用いた緑やウォーターフロントを活かしたまちづくり、あるいは地域の回遊性向上・防災拠点機能の確保などのプレゼンテーションや意見書説明に加えまして、第1回から第4回までの委員会でいただいたご意見を振り返りながら、多岐にわたる分野において議論をいただいたところでございます。

最近の事例を少し紹介させていただきますけれども、旧市庁舎街区活用事業でございますが、街区名称が「BASE(ベース)GATE(ゲート)横浜関内」となりまして、エンターテインメント施設でありますとか新産業創造拠点などを中心とした開発内容が発表されたところでございます。また、イノベーション分野でございますけれども、横浜発の新技术でございますペロブスカイト太陽電池の実証実験が市庁舎とこの横浜港の大さん橋で開始されたところでございます。本委員会でも議論されております賑わいづくり、あるいは持続可能なまちづくりといった内容が始動しているところでございます。

本日は、これらの分野も含めまして、これまでの委員会での議論を踏まえた答申案について議論をいただきたいと考えてございます。今後いただく答申を踏まえまして、この山下ふ頭再開発において、横浜の未来を切り開く、新たなまちづくりに向けて、しっかりと取り組んでまいりたいと考えてございます。検討にあたりましては、庁内で組織しておりますプロジェクトで引き続き、関係区局が一丸となって取り組んでまいります。

それから本日も、神奈川県の方から文化スポーツ観光局にご出席をいただいております。本市からも関係部局が参加しておりますのでどうぞよろしくお願ひいたします。

最後になりますが、本日は、答申案のとりまとめに向けまして、それぞれのお立場から活発なご意見をいただきたいというふうに思います。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

【事務局】

ありがとうございました。ここで本日の委員の皆様の出欠状況についてご報告させていただきます。委員17名の内、現在、WEBでご参加の幸田委員、アトキンソン委員を含めまして13名の皆様にご出席いただいております。河野委員、隈委員、藤木幸夫委員、村木委員はご欠席でございます。

報道関係者の皆様方にお知らせします。報道関係者の皆様方は、報道撮影エリア内での撮影にご協力をお願いします。傍聴者の皆様方にお知らせします。傍聴者の皆様方は、撮影や録音等はお控えくださいますようご協力をお願いします。

本日も、公開での開催となっており、会議の様子及び説明資料については、インターネット中継により配信されます。なお、会議の様態を記録するため、事務局側で写真を撮らせていただきますので、予めご了承願います。

それではこれより先の進行は、平尾委員長にお願いしたいと思っております。平尾委員長、どうぞよろしくお願いたします。

【平尾委員長】

平尾でございます。本日の議事を務めさせていただきますのでよろしくお願いたします。まずお手元の議事次第をご確認ください。本日のタイムスケジュール、時間割につきましては、議事(1)につきましては10分程度、それから議事(2)については20分程度で予定させていただきます。終了後は議事(3)といたしまして委員の皆様方の意見交換のお時間をいただきたいと思いますと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

それでは議事(1)に入ります。事務局から議事についてご説明をお願いたします。

【事務局】

山下ふ頭再開発調整担当部長の洞澤と申します。どうぞよろしくお願いたします。

前回委員会後にインターネットフォームに寄せられました市民意見について、ご説明いたします。お手元の資料2をご覧ください。委員の皆様には、事前に本資料をお送りさせていただいておりますが、1から2ページは、市民の皆様からのご投稿をまとめたもの、3ページ以降は、市民の皆様からのご投稿を綴った資料となります。本日は、資料の1・2ページをご説明いたします。

1ページをご覧ください。受付期間は、前回委員会開催日から12月4日までとじています。意見数は、61名の方から82件いただいております。居住地は、市内の方が59名、市外の方が2名となっております。円グラフは外側が今回投稿の年代別割合となります。なお、参考といたしまして、内側に市の年代別の人口割合を記載してございます。「3 御意見の主な内訳」ですが、「(1) まちづくりの方向性に関する御意見」については、

- ・緑豊かな空間は地域の発展と市民生活の質の向上に重要なので、周辺地域との緑地のつながりを整備して基盤を作り、時代の変化に対応しながら発展させるのが理想的

- ・交通関連の課題は重要なので、中区全体の回遊性を向上させるためにも、山下ふ頭を交通の結節点とし、民間事業者による投資を呼びやすい計画とするべき

・歴史ある港としての景観と最新技術の融和など、将来にわたって陳腐化しない横浜らしいと感じられるコンセプトを検討してもらいたい

などのご意見をいただきました。

2ページをご覧ください。「(2) 導入機能に関する御意見」については、

- ・災害時に近隣住民が避難できる防災拠点機能を兼ね備えた施設やスペースなど
- ・市民がリラックスできるよう、芝生と施設のバランスを考え、山下公園から連続して海沿いを歩ける芝生のオープンスペース

- ・プロ、アマチュア、子供の習い事・試合などが一か所でまとまるような採算性の取れるスポーツ総合施設

などのご意見をいただきました。

「(3) その他の御感想等」については、

- ・再開発された山下ふ頭を実際に利用することとなる若い世代からの意見や夢を中心に計画素案を作るべき

- ・都会の再開発において樹林地を回復することが世界のトレンドであることを知り、大いに喜び力強く思った

- ・再開発で最初に建てられる建築物は未来の景観を左右する重要な要素なので、世界に誇れる「ヨコハマらしい」建築物を最初に建ててほしい

などのご意見をいただきました。資料2の説明は以上となります。

続きまして、「第1回から第5回の意見のまとめ」について、ご説明いたします。前面のスクリーンでご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも資料3として配付してございます。この資料は、前回と同様に、これまでの「学識者委員の皆様のパレゼンテーション」、「地域関係団体委員の皆様の見解書」、「委員会での議論」の内容を整理し、分類したものでございます。

まず4ページをご覧ください。今回は、前回お示したものに、第5回の意見を追加し、右側の意見要旨案を修正しており、追加・修正した部分を赤字にしています。次からは、新たに追加した意見要旨の一部について、順次、ご説明していきます。

8ページの「市民合意形成、プロジェクト体制」をご覧ください。スライド右側の意見要旨ですが、「事業計画策定後には、市民など多様な主体が管理に参加できる仕組みの検討も必要」を追加しています。

次に、16ページの「国内外から人々が集まる」をご覧ください。「人口減少や外国人の定住人口の増加を見据え、多様な人材が集まる多文化共生のプラットフォームを展開し、街の発展に繋げていくべき」を追加しています。

次に、18ページの「横浜経済を牽引」をご覧ください。「横浜港は横浜市民だけでなく日本国民にとって重要な港であり、山下ふ頭が港と市街地を結節する場所だということを十分に意識することが必要」を追加しています。

次に、20ページの「防災・安全」をご覧ください。「海上からの物資や救援部隊の受け入れだけでなく、国で議論されている病院船などが着岸できる耐震強化岸壁や新たな歩車道の整備等により防災機能を強化することが必要」を追加しています。

次に、29ページの「緑・水辺」をご覧ください。「世界の都市開発では緑の再生が主流であり、周辺地域の緑地と連携して緑の総量を増やし、人々を呼び込む計画が必要」「インフラを整備し、緑を確保した上で、その中に建物を整備する発想も考えられる。その際、周辺地域への経済的効果の波及も意識することが必要」を追加しています。

資料3の説明は、以上となります。

【平尾委員長】

ただいま資料3のご説明がありましたけれども、それにつきまして何かご質問があれば伺いたいと思いますがいかがでしょう。

それではご質問がないようですので次の議題に入らせていただきます。議事(2)答申案の説明でございますが、まず事務局からご説明をいただく前に私の方から答申案のまとめにあたっての考え方を説明させていただきます。スライドをご覧ください。

まず委員会の設置の目的でございますけれども、山下ふ頭の再開発に関わる計画の策定に関する事項の議論ということでございます。その議論はまちづくりの大きな方向性を示すことに主眼を置いて答申を作成するということが委員会の設置規定で盛られているところでございます。前回までの議論につきまして色々な観点から分類をさせていただいたわけですが、大きく分けまして、皆様方の議論は3つに分かれるのではないかとというふうにとまとめました。第一はまちづくりの方向性ということで横浜市を山下ふ頭がどのように牽引していくのか、そしてそれがどのようなブランド力、まちの魅力に基づいて作られるのかということ、それから次世代につながるまちづくりと同時に横浜市全体と連動した賑わいを山下ふ頭で創出するというところが方向性の1番目でございます。2番目が新たなまちを支える基盤空間の考え方、海に囲まれた立地特性、交通ネットワーク、緑と水辺という景観の形成ということで、空間の形成の考え方をまとめております。それから再開発に必要な視点としまして、環境対応、環境エネルギー等の新しいイノベーションそれからデジタル活用、防災・安全、それから周辺地域への波及、それから観光インバウンド、それから歴史文化への視点とそして市民の合意形成というものをこの再開発に必要な視点のポイントに置いております。そのために具体的に今後どういうプロジェクト体制を進めていくかということについての提言を行っておりますけれども、答申案の構成としましては、目指すべき方向、世界に誇れる魅力ある海辺と緑の空間創生と、市民と共に歩み豊かな持続性のあるまちづくり、それから横浜らしさの賑わいと広がり、新たな活力を創出する都市モデルを構築するということが目指すべき姿で、考え方としましてはまちをつなぎ一体感を高める交通アクセスの充実と安心・安全、災害に対するレジリエンスの確保ということと、それから横浜らしさを感じる景観作りということでございます。

目指すべき3つの姿としまして、この三角形の形にまとめてみました。ご覧いただきますように目指すべき姿としましては先ほど申しました世界に誇れる、魅せる横浜、緑と海辺の空間の形成ということと、それから市民と共に歩み豊かな未来をつなげる持続可能なまちの実現と、それから横浜らしさと賑わいが広がり、新たな活力を生み出す都市モデルを作って創成するというところでございます。その下にそういうまちを作る目指すべき姿を支える基盤

空間の考え方としまして、まちをつなぎ一体感を高める交通アクセスの充実、それから安心・安全とレジリエンスの確保、それから横浜らしさを感じる景観づくりということを3つのピラミッドとそれを支える考え方としてまとめてみました。

次お願いします。今後のまちづくりに向けましてはこれをベースにしまして委員の皆様方から色々なご意見を頂いておりますけれども、それに加えて次の2点を申し上げたいと思います。再開発の恩恵をその山下ふ頭の47ヘクタールにとどめず、横浜都心の臨海部それから旧上瀬谷通信地区と連動させて横浜市全体のさらなる活性化に向けて相乗効果が最大限発揮されるように取り組む、それから今般ですな2度にわたりまして市民の皆様方から山下ふ頭についてのご意見を募集いたしまして、延べ1万件を超えるご意見を市民の方々から頂いております。そしてまた本委員会の討議につきましてもインターネット等で皆様方ご覧いただいて、それについて先ほど報告しましたように多数のご意見をいただいております。このように市民の参加という形で、積み重ねてまいりましたけれども、引き続き今後多様なご意見を伺うプロセスを作っていくべきじゃないかというふうに考えております。それでは私の方の考え方の整理としましては3つ申し上げましたけれども、答申案についてあるいは私のまとめ方につきまして後ほど皆様方にご議論をいただく予定をしておりますので、続けて事務局の方から答申案のご説明をお願いいたします。

【事務局】

それでは、「答申（案）」について、ご説明いたします。前面のスクリーンでご説明させていただきますが、同じ物をお手元にも資料5として配付しています。

1ページは目次となります。1番下に記載のとおり、付属資料としまして、今ご覧いただいている冊子に加え、これまでの検討委員会で使用した資料と、委員の皆様にご確認いただいた会議録を答申に添付いたします。2ページ目から6ページ目は、「はじめに」として、導入を何点か記載しています。まず、2ページですが、社会情勢や再開発の位置づけ、委員会の設置目的などを記載してございます。3ページをご覧ください。3ページは山下ふ頭の概要をお示ししています。4ページから6ページは、これまでの市民意見募集、市民意見交換会等の取組となります。本委員会においても、各回、インターネットフォームによる意見募集を行い、先ほどのように都度、委員会へ報告させていただいており、5ページにその概要を載せてございます。7ページは、答申の全体像です。先ほど平尾委員長からご説明いただいたとおり、本答申では、山下ふ頭再開発が「目指すべき姿」を明確にしたうえで、その実現に向けた土台となる「基盤・空間の考え方」を整理することとしています。8ページ、9ページをご覧ください。まず、ページの構成についてご説明いたしますので、前面のスクリーンと合わせてご確認ください。先ほどご説明しました、第1回から第5回の意見のまとめの中で、それぞれの目指すべき姿や基盤・空間の考え方に合致する意見要旨を、委員会での主な意見として、9ページのように列挙してございます。そのうえで、8ページのとおり、主な意見を、方向性、導入機能に分かりやすく要約しています。10ページでは、方向性や導入機能以外の関連意見を、持つべき視点として要約しています。また、委員会で使用した資料や、紹介のあった国内外の開発事例等も掲載しています。

それでは、以降の内容を抜粋して、ご説明いたします。もう1度、8ページをご覧ください。目指すべき姿①の「世界に誇れる、魅せる「緑と海辺」空間の創造」では、方向性として、「世界の都市開発でも見られる「緑の再生」を核としながら、臨港パークから山下公園に至る水際線と連続したまとまりのある緑化空間を創出し、人々を呼び込み、デスティネーションとなる魅力的な緑を中心としたまちづくりを推進すべき。」などです。また、導入機能として、「臨港パークから大さん橋、山下公園までの水際線と連続し、市民や来街者が憩い、賑わうオープンスペースの形成」などです。

続きまして、10ページをご覧ください。持つべき視点では、「市民の憩いと共生」として、「市民が緑や海の自然を楽しめる憩いの場の創出や、そこに集う人々がコミュニティと共生し、文化や生活の豊かさを感じられる新しいまちづくりを考える。」などです。

続いて12ページをご覧ください。目指すべき姿②の「市民と共に歩み、豊かなみらいに繋げる持続可能なまちの実現」では、方向性として、「多くの市民が集い、地域の賑わい創出等に取り組める場を創り、様々な人材や技術が交流し新しい価値を常に生み出す、持続的に発展するまちを目指すべき。」などです。また、導入機能として、「カーボンニュートラル、次世代モビリティの導入などを促進する新たな技術の社会実証・実装、体験・体感の場としての活用」などです。

14ページをご覧ください。持つべき視点では、「持続可能なまちづくり」として、「50年後、100年後を見据え、環境面と経済面で未来に負担を残さない持続可能なまちづくり、適切な市民参画、全体最適となる事業の実現を考える。」などです。

16ページをご覧ください。目指すべき姿③の「横浜らしさと賑わいが広がり、新たな活力を創出する都市モデルの構築」では、方向性として、「160年以上にわたる横浜港の発展の歴史や横浜独自の都市文化を活かしたまちづくりを進めるべき。」などです。また、導入機能として、「インバウンドの目的地としての横浜の価値向上」などです。

20ページをご覧ください。持つべき視点では、「人々を呼び込む拠点形成」として、「定住人口が減少する時代において、巨視的な視点を持ち、ビジネスや観光で訪れる国際的な交流人口を吸引し、経済の活性化を図るとともに、山下ふ頭の立地特性を活かし、横浜経済の核となるシンボリックな拠点の形成を考える。」などとなります。

続いて24ページをお開きください。ここからは、「基盤・空間の考え方」となります。構成は、目指すべき姿と概ね同様となっています。こちらも、抜粋してご説明いたします。

基盤・空間の考え方①の「まちをつなぎ一体感を高める交通アクセスの充実」は、「都心臨海部の水際線に連続する緑の快適な歩行者空間の整備による回遊性向上や、郊外部との交通アクセス強化を図るべき。」などとなっています。

次に26ページをご覧ください。基盤・空間の考え方②の「安全・安心とレジリエンスの確保」では、「大規模地震等への災害対応力の向上や感染症対策の強化を図るべき。」などとなります。

28ページをご覧ください。基盤・空間の考え方③の「横浜らしさを感じる景観づくり」は、「海陸両面からの山下ふ頭の見え方や周辺地区との景観のバランスを意識したまちづくりを行うべき。」などです。

30ページをご覧ください。今後のまちづくりに向けて、として、先ほど平尾委員長から概要をご説明いただきましたが、本市が取り組む事業計画の検討等にあたり、留意すべき点やご期待を書き添えていただいています。

最後に31ページをご覧ください。参考として、委員名簿と審議経過を記載しています。資料5の答申案の説明は以上となります。

【平尾委員長】

はい、資料5の説明ありがとうございました。それでは、ただいまから委員の皆様方の意見交換の時間に移りたいと思いますが、皆様方から順番にご意見を賜りたいと思います。私の右の方から時計の反対周りで委員の先生方からお願いしたいと思います。まず石渡委員からお願いいたします。

【石渡委員】

はい、じゃあ反時計周りということで、私から発言させていただきます。私の感想としては、様々なご意見を市民の方々、それから委員の方々からいただきました。もうそれぞれが、なるほどということではありますが、これ寄せてくると膨大な、広範囲の、あまりにも様々すぎてしまうのですが、これをまとめるということになりますと、やはり先ほど委員長からもありましたとおり、答申案の構成ということを考えていくと、私はこの構成のとりまとめ案で賛成であります。ことさら、これ以上にまた広がりをつけても、なかなかまとめるににくいということもありますので、ここまでのご意見をやはりまとめるにはこういった形がよろしいのだろうと思っています。コンセプトとしてもいいと思います。で、ここに書いてあるとおりで重複しますけれども、私は4つの視点は外していただければ困るなと思います。

1つ目はやはり日本の我が国における横浜の港という部分。そして横浜発祥の文化というのは多々ありまして、これが現在に脈々と生きていて、形を変えてブラッシュアップされて、我々の暮らしに役立っているわけで、そういった横浜らしさというところをやはり忘れてはならないと。つまり別の言い方をすると歴史、そして文化、これぞ横浜というこれをまず第一にプライオリティとしておきたいなと思っています。そして、そこにかかる景観、緑の部分も含めて憩いの場であるということも必要だと思います。なぜならばこれは横浜市民のための土地でもありますので、やはり市民の方々の意見の多くに緑ということと海、景観という言葉が散りばめられていますので、このインナーハーバーの中で海と港と緑というところを尊重しなきゃいけないという基盤があると思います。

2つ目が、この場所は横浜にとって、色々な場所がこれから、過去も開発されていますけれども、本当に最後の横浜の象徴する、もしかすると日本を象徴するプロジェクトであろうかと思っています。また、そうなることを期待いたしますが、ここにやはりコミュニティのあるまち、公園とか色々な例もありますけれども、公園もいいのですが、もちろん必要なのですが、やはりコミュニティがあって、人が賑わって、そこでお金が回ると、これは経済効果または税収の問題も含めますけれども、これがないと持続可能にはならないと思います。やはりコミュニティがあってそこに人とお金が集まると、そして世界の人たちが交流できるよう

なポイントにしなければならないのだろうと思っています。これが2番目です。キーワードは、コミュニティとエコノミーと言いますか、それからヒューマンみたいなものがキーワードであります。

3つ目は、やはり機能の充実ということで、交通網の問題も含めて、それから安心・安全という部分も含めて、私は特に防災のことが気になっています。自衛隊と神奈川県と組んで、災害時には横浜の港を使ってここを拠点に物資の搬入をしたり、救済をしたりということもすでにあるようですので、横浜市にとってもこれは有事に関する防災拠点になるだろうと思っています。そして色々な時代時代にそういった要望が変わってくると思いますので、3つ目の私のキーワードは機能の拡充と可変性であります。永久的にこの形で行くのだというよりは、時代時代ニーズに合わせて、しかし、有事が起きた時には、一変してその有事に対応できる迅速性と言いますか、そういったものもないと、この場所もったいなさすぎるなどと思いますので、そういった機能の充実を含めて可変性、これを考えていかなきゃいけないのだろうと思っています。

4つ目は、緑の部分をつないでいくというところで、やはり回遊性という言葉が出ていましたけれども、横浜の港を中心にこの回遊性、もっと広がれば東京千葉にも広がりますけれども、まずは横浜の海辺にあるところの回遊性、これを重視したいと思っています。以前ご意見が出ましたけれども、私はこの埋立地の形状が、もう少し時間をかけていいならば、形状を変えて、ネックのところを広げないとやはり限界感があるのかなとは思っています。

以上、4点だけ申し上げました。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。

では、今村委員お願いします。

【今村委員】

では、簡単なペーパーを作ってまいりましたので、映してください。

本委員会での目的の中で、前委員長から話していた付加価値創出みたいな話があったと思うのです。それについて、私としては交通アクセス、先ほども出てまいりましたけれども、それについて少しお話ししたいなと思っています。

山下ふ頭は物流の拠点でありますので、首都高の出入り口とかアクセスには少し脆弱でありまして、物流には便利ですけれども、元々の人流、一般の人々の流れを引き込むということには、という現況であります。

現在みなとみらい線の終点、元町中華街駅から歩いていく以外には横浜市営バス6系統と、それから横浜駅から直通の二両連結バス、ベイサイドブルーがありますが、これらはほとんどみなとみらい線に沿ったバス路線でありまして、JRで1線、京浜東北線、現在再開発が進んでいる関内駅の方面、古くから人気の元町の起点となっている石川町駅などからアクセスしにくい立地となっております。それで、LRTの導入ということで、考えてみたらどうかということでもあります。次のページをお願いしたいです。これは実は宇都宮のLRTの図な

のですけども、ちょうど私が10年と少し前、当時の市長から相談受けて、LRTを作ったらどうだという話があったのです。それで、宇都宮は、ご存知だと思えるのですけれども、工業団地があるのです。それから橋がありまして、そこに非常に渋滞が発生すると。それから東京から1時間ぐらいの所なのですが、観光はまだ脆弱な状況でありました。それで当初LRTを作ることに、当然かなりお金がかかるということで、市の議会についてはかなり反対だという話がありました。ただ、今の市長も同様なのですけれども、当時の市長も、これはやるのだという方向性がありまして、かなり強い意思で、一昨年完成したわけです。実際開けてみたらどうだったかということでもありますけれども、非常に観光は良くなるし、街の発展にも寄与し、なおかつ、先ほどの通勤である工業団地含めた方々も非常に便利だと。なおかつ渋滞も、これLRTですから専用でありますので、上手くくぐり抜けるということがあって、非常にその時間軸がかなり前からやらなきゃいけない問題なのですが、結果的にはいいまちづくりができたなという形で、現在、いろんな所からお客様が来ているという状況でありまして、今後はさらに延伸も考えているということを知っています。それで、実は宇都宮市のお金は、国の補助と市の負担およそ半分ぐらいずつということでありまして、財源は684億、約700億弱、これを半分ずつということで、当初は、かなり赤字になるのではないかと。それからかなり負担が多いので、先ほど言ったように議会とか市の方も反対される方結構多かったのですけれども、やはり実行したが故にこういうようなプラスアルファが出たということになります。ですからこの横浜の場合については、色々な効果がLRTは出ますので、バス以外にはなかなか、そのフリークエンシーというか、頻度もかなり増やすこともできるし、定時性も確保することができるし、そういった意味では、みなとみらい地区あるいは山下ふ頭地区以外のところも非常に効果があるものだと思うので、是非ここは市の方で少しご検討願いたいなと実は思っております。以上であります。

【平尾委員長】

今村委員ありがとうございました。実は私も今年の春に宇都宮にまいりまして、このライトレールに乗ってまいりましたけれども、非常に成功していました。街の活性化にも大きな役割を果たしていただきましたし、これを横浜にどういう形で持って導入できるか、1つ検討事項かと思っております。ありがとうございました。それでは内田委員お願いいたします。

【内田委員】

はい。色々な意見が、多様な意見を、これまとめるのは大変なことだと思って聞いております。私が1番心配する点を申し上げますと、これまでの日本のあらゆる開発が成功しているところと失敗しているところがあるというところに着目すると、やはりうまくいってない、失敗したところというのは、やはり作ったまま放置されて、全くアップデートされない。いわゆる昔の言い方で言うと箱物行政じゃないのですけれども、建屋作って魂入れずみたいところが、全て税金の無駄遣いのような形になっていったということです。成功しているところという事例を私のプレゼンの時に挙げさせていただきましたが、やはり常にアップデートされていると、そういったソフトウェア的な考え方が今主流になっておりま

すけれども、行くたびに新鮮なものがある、発見がある、そういうような工夫っていうのが必要になってくると思うのです。そして、それをやり続けるためには、知恵も必要ですし、クリエイティビティも必要ですし、何よりもお金が必要になってくると。そういう意味でしっかりとその中で自立してお金を回せるような設備にしていくということが、テーマとなっている経済面で未来に負担を残さないということが大事になってくると思うのです。私は緑が豊かなというのは非常に賛成でございまして、そういうものが求められてくるのは間違いないのですけれども、ヨーロッパやアメリカと違って日本は四季もありますし、台風もありますし、そういうような意味で、公園なりそういった植物たちが常に生き生きと育つためには非常に手間暇・コストがかかってくるというようなことがあるわけです。ですので、その緑豊かになるところは非常にいいのですが、そこにどれぐらいのコスト・維持費がかかるのかということは無視できないポイントだと思っていて、そこもしっかりお見せするところがあるところが市民の方たちの期待を裏切らないところになってくるのかなというふうに思いますので、そこも明確にしていくということが選択肢の1つとなると思います。あともう1つ、横浜らしさという言葉が使われるのですけれども、私も横浜のイノベーションという本を書いた時に、横浜らしさって一体何なのかということで、あらゆる経済人とか、市民の方にインタビューをして聞いたのですけれども、みんなバラバラなのです、横浜らしさのところは。非常に伝統的な港町というのも横浜らしさの間違いない1つですし、進取の気質というありとあらゆるものを、開港から世界中のものをどんどん取り入れていったところも横浜らしさと言えらると思うのです。そういうようなものの横浜らしさというものは一体何なのかという定義づけも改めてしていただいて、ではこういう設備ですねというストーリー、物語というものがすごく大事になってくるのかなというふうに思います。そういうようなことも踏まえながら、経済20年、30年、あまりにも変化が大きいわけですから、今の若い人たちがこれから世の中の主流になってくる、更にはデジタルネイティブの人たちがもう世界中の主流になってくる中で、そういう世界の人たち、日本人の期待にかなう、そういったような設備にいかにしていけるのかということや若い方たちの意見も交えながら、進めていくべきだろうというふうに思っております。すみません、以上でございます。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。ご指摘のとおり、やっぱりグリーンとエコノミクス両立は大きなテーマだと思います。これからの課題だと思います。ありがとうございます。では、北山委員お願いいたします。

【北山委員】

はい、私は都市理論を専門にしていますので、第1回の委員の意見ということで、横浜の都市デザインの歴史のお話をいたしました。私は横浜の都市デザインを、この歴史を、尊重していただきたいと思っています。横浜は日本では優れた都市デザインをされた都市として知られています。2006年にグッドデザイン賞金賞、横浜市の一連の都市デザインというので受賞しております。その前年に土木学会で都市デザインの特別賞を受賞しています。これはも

う本当に都市にデザイン賞が与えられたのは日本では横浜だけです。1960年代半ばから、これ以前話しましたがけれども、70年代に行われた田村明さんによる6大事業というのは、当時都市が拡張していく、その中で国や民間の開発圧力をどのように制御するかということ新しい都市デザインの手法にした、すごく特異な都市デザイン手法です。その時代、都市整備局、また、部局を超える都市デザイン室、最初は企画調整室でしたけれども、都市デザイン室など横浜独特の都市行政が行われ、都市を制御し誘導するという独特な、この都市デザイン手法を継続してきて、その成果が都市デザインの受賞になっているということだと思います。で、都市の定常ないし減衰が明らかになってきた20世紀末には、産業構造の変化で港湾施設が変わってきましたので、北沢猛さん、都市デザイン室長でしたけれども、北沢さんたちによって、インナーハーバー構想というのが行われておりました。私はこの構想に参加しておりました。それは山下ふ頭だけでなく、あのインナーハーバーのリング状にある埠頭群全域に対する新しい都市構想というのをやりました。これは50年100年後の都市構想ということで行われました。その北沢さんがナショナルアートパーク構想というのを立てていますが、ウォーターフロントの開発を抑制した壮大な公園計画が提案されています。市民のための文化施設を中心とする公園です。これは今日の資料の中に入れていましたけれども、シドニーのオペラハウスのある王立公園とか、あとベネチアのジャルディーニ、これはベネチアビエンナーレの会場ですけれども、大きな公園がベネチアの中にあります。これは、北沢さんがこれを随分参考にしていましたけれども、会場になってベネチアビエンナーレをそこで行うことですごい経済効果がベネチアにもたらされておられます。埠頭群の中でも山下ふ頭は関内の都市域に連続しますので、都市に織り込むという構想も行われています。山本理顕さん、横浜市在住のプリツカー賞受賞の建築家ですけれども、この山本さんが提案している横浜市が郊外に持つ老朽化した市営住宅の再生と連動した居住開発というのでも提案されています。これはアムステルダムウォーターフロント開発で有名なボルネオ地区の開発とか、ポートランドのパールディストリクト、これは都市デザインやっている人の中ではみんな有名なのですけれども、そういう都市のウォーターフロントに住区計画をするということが参照されています。

21世紀に入って日本は極端な規制緩和によって、異常な巨大開発が今行われていますけれども、林市長になった時に、横浜市も抑制をかけていた都市開発が解放されて、異なった開発型の都市行政がしばらく行われました。それで山下ふ頭の開発がテーマになったわけですがけれども、山下ふ頭はほとんど市有地なので、市民の共有財産です。本来的には横浜市民のコモンズ、市民に裁量権のある場所だと私は考えます。短期的利益、経済開発のために使うのではなくて、本来の未来の住民のために贈り物のように何を残すのかということが検討すべきものだと思います。もうすぐ終わります。拡張を拡大する20世紀の都市デザインではなくて、21世紀に入って縮減する都市の構想が求められています。これは都市がマーケットメカニズムに対応するだけではなくて、文化や生活を支える、そういう都市をどう作るかというのが大きなテーマになっています。この委員会では、いかに市民参加の方法があるか、そして市民から山下ふ頭に対する意見・提案がありますので、そういう意見提案をどれだけ取り込めるか、そういうことを検討するのはすごく大事だと私は思っています。以上です。

【平尾委員長】

北山委員ありがとうございました。横浜市の都市計画の歴史と、また改めて、とりあえず第1回目は。では、次、お願いいたします。

【坂倉委員】

商工会議所を代表して出席しております坂倉でございます。商工会議所の立場を明確に申し上げますと、この地域に期待する点というのは、前の市長選でIRは中止をするという山中市長が当選をし、IRは計画がなくなったわけでございますけれども、IRから得られる収入というのは、実は市の中期計画で不足すると言われた約1000億円と同規模ということが言われておりました。この中期計画はもちろん市民のための各施策を実行していくための計画でございますから、市民サービスが停滞してしまったり、あるいはなくなってしまったりすることは市民にとっても大きな損失だろうというふうに思います。IR自体はなくなりましたけれども、この山下ふ頭における開発というのはやはり横浜市の収入も伴った形でないと開発の意味がないのではないかなというふうに思います。

また港湾局の説明にもありましたとおり、この地域には市民の憩いの場も求められるということもあります。それに加えて、防災拠点としても利用していく。これも必要だろうというふうに思います。陸上からの物資の輸送は上瀬谷の花博の跡地、ここに拠点を設けるという計画でございますが、海上からの輸送については、やはりこの辺りを利用していくことも当然考えなければいけないと思いますので、そうしたものが収納できるような場所、それも確保していく必要もあるのかなというふうに思います。

しかしながら昭和36年にこの山下ふ頭は作られ、使われてきたわけでございますけれども、その建設過程の中でこの埠頭の中に埋められているのは鉾津という鉄屑と、そしてコンクリートを混ぜたものが基盤として使われています。したがって、その緑豊かなというのは表面上の芝生みたいなものはいいかも分かりませんが、かなり根を張るようなものですと、かなり深く掘って、あるいはそういったものを除去してということがついて回りますので、これは港湾局さんがそれを実現していくためにはそれらの除去工事とかそういったものがどのくらいかかるのかということによって、計画を立てていかなければならないのかなというふうにも思います。

いずれにしても、緑とそして作られるまちが調和するというのは今の流れでございますから、どういう形にせよそれを実現していくためにはもう少し埋め立てをしてその基盤をきちっと強化すると同時に、岸壁もやはり相当な補強をしていく必要性を感じますので、そうしたことを総合的に判断して事業者の参加を促していくということが求められるのではないかなと思います。

しかしながら、いずれにしてもこれを建設して開発していくのに税金をたくさん投入するということは、私は反対でございます。民間の力を借りて実現していく、そのためには民間事業者もある一定の利益を得ないと参画してこないというふうに思いますので、その辺を十分考慮した上で募集をしていくということが望まれるのではないかなというふうに思いま

す。

【平尾委員長】

ありがとうございました。確かにエコノミクスというのが先ほどから出ていますけれども、その辺はこれから具体的な事業計画の中で詰めていく大きな問題かと思って、今の坂倉委員のご意見を伺いました。ありがとうございました。

それでは、高橋委員の方にお問い合わせできますでしょうか。

【高橋委員】

私は関内・関外地区活性化協議会の代表ということで出ております。この関内・関外地区というのは、この協議会自体が横浜の臨海部の関内、関外、みなとみらい、横浜駅周辺という海に連なる都市部の活性化を協議する会でございます、そういう代表で出ております。いずれにしても今回のこの答申案、よく意見をまとめてくれたなというふうには思っております。ただ今後もいろんなステークホルダーが最終的にもっと詰めていく段階で入ってくると、やはり誰かがイニシアチブを取らないと、これはまとまらない。全部の意見を取り入れて、全員が満足する意見というものは全くできないわけで、誰か不満があったとしても方向性がいい方向に向かっているというところで着地していかない限りこれは途中で頓挫する可能性があるなというふうに、ここは一番心配しております。

一番大事なことは市民たちが安定した市民生活を送るためにこの47ヘクタールを活用していかなければいけないと。今後の人口動態、また横浜市の財政状況、こういうものを考えるとここは最後の、逆に見たら防波堤になるような1つの場所になると思います。どんどん経済が活性化されて、例えば法人税収も倍に3倍に4倍にということが増えていけばいいのですが、今そういうような状況でもありませんし、この47ヘクタールを将来の市民生活の安定のために使わなければ、市税が上がれば結局いいと言っている市民も税金が上がればなんだという話になってきますし、将来何十年にもわたって横浜市の財政＝市民の安定的な生活を支えるようなものにしてもらいたいなというふうに思います。

あと特にこの47ヘクタールのある中区と隣接する西区については、昼夜間人口が一般の区と逆転しているような、非常に観光客も多い、外からの来街者が多いようなところですので、どうしてもこの災害対応というのが必要になると思います。今現在消防の方は本局が保土ヶ谷にありますけれども、この海側にも本局に対応するような形できちっとした災害に対応するようなところをこの47ヘクタールの中に作るべきだというふうに思います。

最後になりますが、全体最適と部分最適ということで私言ったのですが、47ヘクタール全体を部分最適にすると、部分最適が全体最適になるようにするにはこの中だけで完結するだけでなく、外に出ていかなければいけない。人が出ていく、流れが出ていく、そういうような考え方は必要なのかなというふうに思います。この47ヘクタールを中心に是非株式会社横浜を経営すると。そこにいる市民、企業、また様々なステークホルダー、こういったものがウィンウィンになるような経営をやっていただきたいなというふうに思っています。以上です。

【平尾委員長】

ありがとうございました。それでは宝田委員お願いできますでしょうか。

【宝田委員】

答申案のとりまとめありがとうございました。私としては近隣の元町商店街からこの委員会に出席をさせていただいておりますので、まちをつなぎ、一体感を高める交通アクセスの充実というところが1つの項目となっているところに非常に嬉しく思っております。先ほど宇都宮の事例も出ておりましたけれど、あのように色々な人が行き交うまちが新たに出来上がってくるということで近隣の居住地区となっているところにも違った開発やこれからの発展というのが必要不可欠になっていくものであるというふうに思っております。そのためにも新しい交通網を充実させるというのは当然のことかもしれませんが、先ほど事例で出ていましたJRや、東急線沿線からつなぐみなとみらい線沿線なども重々生かしたようなまちの発展につながるまちづくりというのを是非こちらの山下ふ頭の開発と一緒に考えていただきたいなというふうに思います。

山下ふ頭の地図が出てくるとどうしても関内、横浜駅方面の方が一緒になって地図が出てくるのですが、実は右側の方の新山下であり、山手であり、元町であり、山下町であり、そちらの居住地区というのもこの範囲の一部に入っていると思いますので、その部分の方がアクセスしやすい、今までそこでまちを作られてきた方がよりアクセスをしやすいような考えで全体のまちづくりという方向性で考えていただければと思います。以上となります。

【平尾委員長】

宝田委員ありがとうございました。次に田留委員お願いいたします。

【田留委員】

私は地域関係団体委員として第3回目のこの委員会から参加させていただいております。今回の答申案を拝見させていただきまして、その方向性としまして、まだこれから落とし込む内容とは思いますが、特に異論はございません。また私ども山下ふ頭で業をつかさどっておりましたことでもありますけれども、横浜とか横浜港という背景に将来にわたる地域経済と言いますか、波及効果を生む再開発を議論、発信するというこの場があることは大変大きなことだと感じております。

また各皆様方からのご発言、ご提言の中にもたくさん問題点がありますよというご提言がありますけれども、これを今後さらに具現化していくということになりますと一段とハードルも高くなるかなという感じはいたします。しかし、横浜にとりましても経済効果が上がりまして、持続可能な事業開発となることを期待しておりますということで私の発言とさせていただきます。ありがとうございます。

【平尾委員長】

藤木委員お願いいたします。

【藤木幸太委員】

冒頭まず今日お集まりの委員の方にお礼を申し上げたいと思います。私は地元で、港運協会でこの47ヘクタールの土地を含め、これを160年間ずっと我々の先輩が使わせていただいて、その中で、今世界で横浜港は物流としてはナンバーワンです。量が多いとか少ないとかいろいろありますけれども、質に関して横浜は世界一です。それを作り上げてきたこの場所を新しい市民のための開発をするということで、仲間に入れていただきましたが、その中で1つ申し上げたいのは、技術的なこととか歴史性のあることは、今日集まっている色々な方から本当に詳しく色々聞かせていただきました。ただ大切なのは、私はここに何かを作る時のその精神、この話が私は中心にならなければいけないと。先ほどIRが新しい市長でなくなったと坂倉さんがあの言っていましたけれども、IRはなくなっても愛はあるということを、私は言っているのです。ですからこの愛を大事にして、やはりその精神的な柱、今日ここにあるこれを見ると30ページにもう全部網羅してあります。今後のまちづくりに向けてと書いてあります。これがこの委員の方の全部の知見を集めた最後の言葉がこの1ページに表されて、これを我々は市長に答申するわけです。今後は市長とそして議会、これがどう考えてどう判断していくかということがとても大事で、逆に横浜市行政はなかなか行政が自分の意見を言うということは大変だと思います。その中で市会議員の方たちがどれだけ勉強するか、そして市長がしっかりとした判断ができるか、それを今日集まっている委員の方は一番期待をされているのではないかと、こういうふうに思うわけです。

長くなると恐縮ですけど、瀬戸内は今アートなんかとかいうのをやっていますけれども、あれを見ると結局里山スタジアムとか、要は緑とスポーツエンターテインメントがどう一緒になって今後50年100年やっていくかとか、やはりそういう議論になっているわけです。それで一番そこで大事なのがやはりお金です。何か計画してもいつも横浜はそうです。港湾でも新しい埠頭が欲しい、倉庫が欲しいと言ってもいつも予算がなくて、それで国に泣きついてなんとか予算くださいと言ってやってきた、この横浜市なのです。これからはそうではなくて、我々の計画に是非出資したい、参画させてくれというような人間を作るような結論をどうか市の方たちに出していただきたいと、こう思っております。

それからもう1つ付け加えますと、昔はその環境問題などはどうでも良くて、金さえあればよかった。京浜工業地帯見ればよく分かります。とにかく垂れ流し、垂れ流しで。そしてある時から急に環境問題を言い出して、今は環境の問題をやるのが金になるのだと。こういう時代になっていますので、もう我々が心配することはないと。もう地球上の民族全てが今環境の重要性に気がついて、これからあのような馬鹿な開発はしないのだということを結論づけているわけです。我々は堂々とここで開発をして、今言った瀬戸内の開発なのですが、ここは外資を入れていません。地元の11行の金融機関、地銀がみんなお金を出し合って計画を支えています。今まで一番仲が悪かった広島銀行と愛媛銀行が急に仲良くなったり、こういう現象が起きている。今までIRの時はもう外資だ、外資だと、口を開けば外資が

来ると言っていたのですけれども、そのようなものはいらないと。国内の金融で十分できるわけですから、是非そういうことを横浜市さんがこれからしっかりと考えて、いい結論を出していただきたい。それが私の希望でございます。本当に色々ありがとうございました。

【平尾委員長】

藤木委員ありがとうございました。IRがなくても愛があるという、愛は何だということを今考えていたところでございますけれども、ありがとうございました。

それでは、次に涌井委員よろしいでしょうか。

【涌井委員】

ありがとうございます。結論から申せば、よくこういうレポートにまとめていただいたというのが私の感想であります。と申しますのは、この中に30ページに書かれている「今後のまちづくりに向けて」というところの「1」というところに「市域全体の波及を見据えたまちづくり」という項目が立てられていることについて、大変これをありがたいなというふうに思っているわけであります。

私は片方ではご案内のとおり2027年の国際GREEN×EXPOのチェアパーソンを務めているというところの立場からある一定の考え方を持っておりまして、これからの横浜というのはこれまでの多文化共生、そして自然環境重視というコンセプトを今度のGREEN×EXPOで世界中に発信する。そういう動きと共に臨海部があるというふうに考えるべきだと考えております。したがって、横浜全体のまちづくり戦略全体構想の中で振り子を大きく振りながらだんだんだんだんだその振れ幅を小さくしながら、山下ふ頭の問題を考えていくべきだというのが私の意見であります。

片方の内陸部は東工大の再開発が今後あるのでございましょうし、それからさらにはそれぞれ私鉄東急田園都市線、それから相鉄線、その他のところ、あるいは高速道路も非常に集積度がどんどんどんどん高まっていくというような状況の中で、実はゾーラシアがあり、今度植物を中心にしたGREEN×EXPOの会場があると。この辺に世界で有数のバイオテクノロジーのセンターが形成される可能性が潜在的に非常に高まっているのではないかというふうに考えております。そうしたことを置きながら、今度は逆に臨海部のことを考えてまいりますと、実は残念なことに従来の歴史の蓄積の中で、次第にその勢いが劣化していつている。中華街もそういう方向でございましょうし、ご関係の方が出てきていただいているのに大変失礼な言い方をしますけれども、元町も私どもが若い頃感じていた勢いというものもどんどん衰退をしていく。非常に残念でたまりません。

とりわけ港湾地区だけではなくて、実は港湾地区に面するこの建物の一体、この街区も非常にうら寂しいものになって、例えばこれがもしバンクーバーであったり、シアトルであったら、あるいはスペインのバルセロナであれば、この辺にジャズバーができたり、カフェがあったり。要するに一本港町の後ろ側の通りというのは、ものすごい活力のある空間があって、多くの人を魅了すると、こういう場所になっているはずであります。そういうようなことを考えていきますと今ここで程よいところに結論を留めて、そこに多様な機能が盛り込ま

れる可能性というものを、横浜市自身の行政の熟度の高まりと、それから財政の問題と、それから現実的な社会変動、これをよく見つめながら、振り子の幅をだんだん小さくしながら内容を詰めていくということが非常に現実的なのではないかとこのように考えております。

ただし基盤の問題は1つございます。それは一体何かというと今村委員がご指摘になっている、ウォークアブルなまちづくりは十分に可能だと思いますが、残念なことに人流の脆弱性と言いますか、これをどう強化するのかという点は急いで検討しなければならない事項だというふうに考えているわけでありまして。そういうような観点の中から極めて程よい委員長のとりまとめによる報告書だということに賛意を表したいと思っております。以上です。

【平尾委員長】

涌井委員ありがとうございました。

これでご出席の方のご意見は伺ったわけでございますけれども、WEBで参加していただいている委員の方に、これからお願いしてご意見を伺ってまいりたいと思っております。それでは幸田委員よろしくお願いたします。

【幸田委員】

はい、どうもありがとうございます。

最初に、委員長がまとめられた再開発の大きな方向性を示すことを主眼においてまとめるということで、その構成についてご説明があって、それに沿った答申案が市の方から示されたということです。この点については前回の委員会でも、分類案で非常に項目も多かったということで、それが大きな方向性に関するまとめがされたということで、大変分かりやすい委員長のまとめになっているということで、委員長の答申案のまとめについては賛成するものでございます。

その上で、市の作成された答申案について、意見を3点、まず大きく申し上げたいと思っております。

1つは、1と2という項目で「目指すべき姿」、それから「基盤・空間の考え方」というのがありますけれども、これは委員長自身が「市民による市民のための市民の山下ふ頭の再利用」だということを強調されておられたところでもあり、今後の事業計画案の検討の進め方という項目は独立して、この答申案に設けていただきたいと思っております。その中身としては市民が実質的に関与する手続きを踏むべきであるということを明記すべきこと。そして、その具体的な手法として、事業計画検討委員会を設置して、市民が委員になるべきだということをこの答申案に明記をすべきだというふうに考えています。

それから第2は、私を含めて何人かの委員が発言していたかと思うのですが、港湾機能の維持及びその港湾機能を踏まえた検討を今後行うべきという点について、この答申には書かれていないということで、これは是非明記すべきだというふうに思います。山下ふ頭が現在法的に位置づけられている港湾機能を活用すべきと私は考えているのですが、どのように活用するかというのは、残念ながらこの委員会では十分な議論がされなかった。それは仕方がないことだと思っております。したがって、港湾機能の活用については今後検討する

ということでいいかと思えますけれども、そこを明記がないというのは、そういった意見が多く出ている、「委員の意見」のところには港湾とか港湾の機能って言葉があるのですけれども、答申の本文には全くないということですので、これは是非明記をしていただきたいというのが2点目です。

それから3点目は「目指すべき姿」についてです。委員の意見を①から③までに大まかに集約されているのですけれども、これらの方向性は両立するものではないと考えます。これらの方向性のどのような方向性に、今まで委員からもいろんな「コモンズ」とかあるいは「収益」とかいろんな意見が出されていましたが、どういう方向性に重点を置くかというのは今後の市民の議論に委ねられるべきであるというふうに考えます。しかしながら、今提示されている市の答申案によりますと、この3つの方向性からいいところ取りをして、それぞれの大きな方向性とは真逆の事業計画案になっても、「いやいや取り入れていますよ」というふうに反論できてしまうということになっています。これは大変まずいことであると思えますので、答申案に是非次の点を明記していただきたいと思えます。「①から③の方向性を同時に実現することは不可能である」ということ。それから「どのような方向性とするかは、今後市民を中心としたしっかりとした議論に委ねられるべきあること」を明記していただきたいと思えます。

時間もあまりオーバーするといけませんので、少しだけ画面に映させていただきます。はい、映っていますでしょうか。今申し上げたような表現として、この1、2について3という「事業計画案の検討の進め方」というのを明記する。それからIR誘致では市民の意見をほとんど無視していたという問題点、この反省の上に立っているということも明記すべきだと考えています。それから「目指すべき姿」というのは、先ほど申し上げたような3つの方向性を全て実現するというのではなく、しっかりと市民が議論する。それから山下ふ頭が有している港湾機能は全く明記がないので、これは是非書いていただきたい。今の港湾機能を維持することを前提とし、これらの機能を活用することを検討することは必要だというふうに明記していただきたいと思えます。その他で、「オープンスペースの形成と緑」、今日ご欠席のお2人も緑と言っていたのですけれども、「建築物と一体となった立体的な緑」というのは意味が分かりませんので、大きな方向性としては、「オープンスペース、緑」というのを明記、明確に分かるようにした方がいい。あと、いくつか表現的なことについても、あそこを大規模開発するというのは不適切だというのがこの「オープンスペース・コモンズ」という考えですので、その1つの方向性。それから③については、私は反対でございます、大規模再開発を目指すことになりますので。ただ、もちろんこういった意見があることは承知していますので、③の考えを書くことはもちろん反対はしません。それから、最後のところに先ほど申し上げた検討の考え方をしっかりと明記をする。それから、今後のまちづくりのところも具体的な方向性というのはこれから市民が中心となった検討委員会で検討すべきだと考えますので、こういった具体的な「どことどう連動する」とかというのを最後に書くのは不適切であるというふうに考えていますので、是非修正をしていただきたいと思えます。

なお、先ほど、市の財政との関係で収益を上げる必要があるということについては、以前私が質問させていただきましたけれども、実際に市の財政がどうかというのは単に税収が減

って、いわゆる福祉財源が増えていく、福祉の支出が増えていくという説明だけなのです。したがって具体的な事業との関連で、ここは市民のための憩いの場、オープンスペースにする、そのためにこういう計画の場合にはこうなる。しっかりシミュレーションをして検討することが必要であって、単純な、一言でいえば一足飛びに収益を上げる施設を作らなきゃいけないというのは全く結びつかないということを最後に申し上げたいと思います。以上です。

【平尾委員長】

幸田委員ありがとうございました。次にアトキンソン委員いらっしゃいますでしょうか。画面出ていらっしゃいますね。それではご意見を伺いたいと思います。

【アトキンソン委員】

はい、ありがとうございます。商工会議所さんの話にありましたように、大きなチャンスを抱え、迎えるものになりますので、国全体、そして横浜市の将来を考える必要があると思います。全体で見れば、生まれる子どもの数が100万人を切ったのは2016年、2019年に90万人を割りました。3年間です。そこから3年間が経って、2022年に80万人を割りました。そこから2年経って今年は68万5千人の子どもが生まれると予想されています。先ほどの話にありましたように、日本全国で誰も使わない箱物を作る、もしくは公園として作って、色々並べて、抽象的などところを作って、誰も行かない、誰も楽しまないようなオープンスペースはいくつもいくつもあります。実際には収入にならないどころか大きな負担になっているところも、全国にいくつもあります。全体の財政を考えて、そういうバブル以降によく作られている、財政のプラスにならずに大きな負担になるようなものを私は作るのはもったいないと思います。後悔のないように、バランスの取れた横浜市全体の財政も含めて考えて経済合理性を考える必要があると私は思います。以上です。

【平尾委員長】

アトキンソン委員ありがとうございました。エコノミクスをしっかり考えろというご意見だというふうに伺いました。それで今日、ご意見をご欠席の隈委員からいただいているようでございますので、事務局の方から隈委員のご意見をご紹介いただきたいと思います。

【事務局】

はい、欠席されている隈委員からお預かりしているコメントをご紹介します。

これまで委員会において、広範な分野に及ぶ有意義な議論が展開される中、示された答申案の構成はよくまとまっており、特に目指すべき姿については議論の要旨と再開発の方向性を適切に捉えていると考えられ、市民にも分かりやすい内容となっている。世界の都市開発の潮流は緑の再生であり、人々が憩うだけでなく、賑わいを生み出すような魅せる緑とした開発コンセプトは、周辺地域のみならず、横浜全体の都市ブランドを高め、世界に誇れる新たなまちの実現が期待できる。

コメントの紹介は以上となります。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。

それでは、ただいまの隈委員のご意見を伺って最後にしまして、一応皆様方のご発言をいただいたわけでございますけれども、今後どのように皆さん方のご意見をまとめて今後の答申に最終的にまとめていくかということにつきまして、今いくつか具体的なご提案がございました。特に幸田委員の方から、市民参加の具体的な形についてございましたけれども、それについてどのように今後答申の中に受け止めていくかにつきましては、まだ議論が熟していないかと思っておりますので、もし市の方でそういうお考えがございましたら、ここでご説明いただきたいと思っております。

まずですね、幸田委員の方から具体的なご提案としまして、この事業計画検討委員会を作る、そこに市民が参加するということを答申に明記すべきだというご意見をいただきました。これにつきまして、私としてはご指摘のとおり、私も度々申し上げておりますように、市民参画が非常に重要なことだと思っております。そしてこれまで市民の方々から1万件を超える意見を寄せられていただいておりますし、またインターネットでこの会議についてのコメントを多数頂戴しておりますので、そういう意味でこの委員会としては、市民の方々の参画ということを進めてまいったつもりでございます。ただ、事業計画の検討委員会の設置、それについて市民が参加するという、この幸田委員の意見につきましては皆様ご意見いかがでございましょうか。

【北山委員】

私は賛成です。今、日本の都市開発っていうのは、市民が参加できないまま事業者が一方的に作っているというような状態ですので、やはり市民が参画していく、すごく大事なアイデアだと思います。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございます。他にございますか。はい、内田委員どうぞ。

【内田委員】

はい、ありがとうございます。もちろん市民の参加というのは大変重要なことかと思っております。ですが、横浜市民って370万人以上いるわけですから。その中で市民の声というものは一体何なのかということのを正しく捉えるのが非常に難しいと考えます。この市民の意見を見ても、おそらく同じ方が何度か言ってらっしゃるようなことも見受けられますし、その部分で偏りのない横浜市民の意見をどうやって集めるのかと。この部分はどうなのでしょう、非常に難しい、あらゆる立場のあらゆる横浜市民の方のご意見をきちっと聞けるということであれば、もちろん横浜市民の皆さんの声っていうのは是非取り入れるべきだと思うのです。

が、そこがかなり課題感はあるのかなというような気がします、いかがでしょうか。

【幸田委員】

よろしいですか。

【平尾委員長】

はい。

【幸田委員】

よろしいですか、今のご意見について。

【平尾委員長】

手短にお願いいたします。

【幸田委員】

すいません。はい、手短に。今の内田委員のご意見は、前に私が発表させていただいたように、色々なやり方があるので、それは固定的に考える必要はないと思います。方向性がないと市民の意見を取り入れたことにならない。だから公聴会の場で質問を言えばさらにちゃんと答えるとか、事業計画検討委員会を作るとオープンに議論ができますので、そういうことは最低限必要ではないかなと思います。先ほど少し申し上げましたように、IRの時にはパブリックコメントをやりました、説明会をやりましたというのが市民参加だというふうに言っていたのですが、私ども研究者の方で詳しく分析しましたが、それは全く市民の声を反映してなかったわけです。したがって、それは一方通行なので、今までのようなやり方で市が事業計画案を作成して、その案に対してパブコメやワークショップを形だけやるというやり方はやらないということは明記していただきたいなというふうに思っております。

【内田委員】

はい。多くの方がサイレントマジョリティなのだろうと思うのです。そういうもので、なかなか難しいのだろうと思うのですが、偏りのない市民のお声というのは是非聞いてみたいと思います。

【幸田委員】

議論する場がないとできないので、検討委員会は必ず作る必要があると思います。

【平尾委員長】

委員会の設置等につきましては、横浜市の方としてはどういうふうにお考えになりますでしょうか。今の幸田委員のご意見について何か。

【事務局】

はい、事務局でございます。幸田委員から先ほどご提案いただきました事業計画検討委員会の設置について、これについては我々も市民の皆様からのご意見を計画に反映していくという視点では非常に重要だというふうに考えてございます。そのやり方については、今委員会の中でご議論をいただいておりますけれども、その答申を踏まえまして、今後の市の具体的な取組を進める中で、しっかり、十分に検討していきたいなというふうに考えているところでございます。

【北山委員】

アメリカでこういうのに参画してあるのですけれども、そういうシステムがありますので、デザインボード委員会を作るとか。少し研究していただきたいと思います。

【今村委員】

よろしいでしょうか。

【平尾委員長】

はい。

【今村委員】

事業計画委員会というのが、少し僕が拡大解釈をしているのですけれども、先ほどアトキンソンさんがおっしゃったように、基本的には今2024年ですけれども、例えば3年後5年後10年後に今の少子化とか高齢化とか、要するに人手不足ですね。それからインフレ、それから物価高。例えばそのレンジが単年度だけじゃなくて10年ぐらいで見えていかないと、非常に難しくなるわけです。いい方向に行くならいいのですけれども、財源を含めたものはやはり厳しくなるのは当たり前だと思うのです。その時に前提となるものをどこかで作っていかないと、何をやるにしても非常に難しくなると思うのです。そのベースがある程度、市の方でじっくりでよいのでなんとなく作っていただいて、そこに基づいてやっていかないと議論が噛み合わないのではないかなという感じがするのです。いくらぐらいまでならいい、あるいはいくらまではダメ、そういう議論があったり。横浜市というのは政令指定都市でありますけれども、色々な意味では徐々に徐々に厳しくなることは間違いのないわけですから、前提条件のベースとなるものだけは、ある程度早めにお作りになっていただいて、それで、事業検討委員会なのか、分かりませんが、その次のステップに行った方が私はよろしいのではなろうかなというふうに思っております。

【平尾委員長】

はい、ありがとうございました。

【幸田委員】

委員会に出すということは当然必要ですので、それは全くそのとおりです。

【平尾委員長】

私の考え方を申し上げます。本委員会は、山下ふ頭の再開発・再利用についての基本的な方向をまとめていくということがその設置条例にもまとめられております。したがって、これを具体的にどうするかということについては、この委員会の権限を超えている問題だと思いますので、私は事業計画検討委員会については、市民の参加の形を認めていくということの表現の中で、事業計画検討委員会の設置については、まとめていくということではいかがかと思えます。つまり事業計画検討委員会の設置というところまで踏み込んだことはこの委員会の答申としては、私としてはそういう意見を尊重しながら進めていくということで。

【涌井委員】

少し質問をさせていただきたいです。

私はこの委員会は、学識者としてここに書いてございますように、山下ふ頭の再開発にかかる計画の策定に関して、学識者の立場でこういう方向性がよろしいのではないかと、方向性の検討の中で参加をさせていただいているつもりなのです。それで、藤木委員ほか皆様方には大変御無礼なことを言ったのですが、最初からいわば地区の代表の方々が、最初の議論の中から参加するというのは、あまりレベル感としてよろしくないのではないかとということから、実は途中からご参加をいただいて、非常に結果としては良かったというふうに思うわけです。つまりそれぞれの計画や構想の段階ではレベル感というものがあまして、このレベルにはもう確実に市民の意見をきちっと反映して、右なのか左なのかを選択しなければいけないという場面がどんどんこれから出てくるのだろうというふうに思います。今、幸田先生からのご指摘というのは、事業計画の検討委員会を設けよと。だけど我々が議論した内容というのは事業計画について踏み込んではいないのです。ある種の方向性をお互いに確認し合って、こういう方向で進めていこうということで合意形成ができたということだろうと思えますし、その合意形成については幸田先生からのご意見の中に、いわば形式論的な市民参加に終わってしまうというご懸念が示されていると。これはそのとおりかもしれません。そういう意味ではなくてきちっとこのアンケートも取られて、ある一定の方向は受けながらそれを反映してこれが出てきたと。それで、事業計画の検討というのは、まだまだ先の話なのではないかと私は思っているわけです。まずこれを受けて、我々は市から諮問を受けて答申をお返しする。答申をした内容について市の方で行政計画としてどのような方向をこういう方向でいかがだろうかということをもう1回打ち返してくると。こういう段階の中でそれぞれの市民意見を徴する、あるいは場合によると利害関係者の方々の意見もそこに投影していくという詰め方というのが、非常に大事なのではないかと。私が冒頭に申し上げたように振り子のように、俯瞰的な大きな振り子から、だんだん具体的な現実的な小さな振り子にしながら精度を上げていくというのが、議論の中身を詰めていくということなのではないかということをおの意見の開陳の時に申し上げさせていただいたのですけれども、そういう考え方ではいけないのでしょうか。どなたかに。どなたにお答えいただければいいのか

わからないので。はい。

【坂倉委員】

意見を言ってよろしいでしょうか。

【涌井委員】

どうぞ。どうぞって、私が言う立場じゃない。委員長どうぞ。

【平尾委員長】

はい。

【坂倉委員】

今の話を聞いていますと、検討委員会で事業の内容まで審議して、こういうような計画ならいいとか悪いとかと言っていますが、それを市民団体を中心にとというのは、一体その事業に対しての責任は誰が取るのですか、ということに対して非常に難しいと思うのです。かつてMM21に開発の時に、区民会議を通じてその計画について横浜市はかなり説明をしたのです。ここに建てる建物についてはこういうもの、そして居住者については1万人という人数を設定して、それで初期の段階では学校は作りませんということも話をし、そういう街を目指すのだということを書いて18区歩いたはずなのです。そこで出た意見は十分取り入れながら進めるという手法をとってきました。仮にこの計画を進めていくと港湾機能を持った土地から商業地域に変えるということは都市計画審議会を経なければならない。その場合は市民代表も入っているのです。ですから決定する時にはきちっとした意見をまとめないと事業が進められないということがあるのです。したがってどういう方がいいのかと言うのはむしろ色々な意見を出し合った中で進めるべきなのですが、作り上げるのは先ほど色々お話が出ていましたように税金で作るのではないのです。民間の事業者が市民の意見や事業者の意見をとりまとめて、調和の取れた形でもって開発を進めるということが望まれるので、そこには当然民間の事業者が投資するお金が回収できるような計画でなければできない。そういうことをも踏まえた上で、市民に意見を求めて、いくつか出てくるような事業計画の公募条件を審議していただく、意見を求める、そういうことをやっていくと幸田先生が求められるようなことが実現していくのではないかというふうに思いますので、もう少しその辺については港湾局がこの後の進め方について慎重にご審議をいただくと同時に、そういった市民の意見をどの時点でどういうふうに取り入れていくのかということも検討材料としてお諮りしていただければいいのではないかというふうに思いますのでよろしくお願ひしたいと思ひます。

【平尾委員長】

他にご意見いただけますでしょうか。

だいぶ予定の時間も迫っておりますので、

【幸田委員】

今おっしゃられた件についてよろしいでしょうか。

方向性が決まっているということはないと思うのです。

通常、委員会というものは、私も政府の委員会とか自治体の委員会に参加していますけれど、議論をしてこういう方向でやりましょうというふうにとまるのであればそれは一つの方向だと思うのですが、先ほど申し上げましたように今回はずっと委員のプレゼンをして聞いてきたというのは、それはそれでいいと思いますけれども、オープンスペースや緑を基本的なベースにするのか、それとも再開発、収益性を重視するのかというのは分かれています。それを1つの方向性にするというのはやはり難しいし、する必要はないだろうと思いますので、そこをやはりしっかり市民と双方向で、つまり市民のアンケートを取ったから聞いているということにはならなくて、よく言われるように市民参加のはしご、シェリー＝アーンスタインが言うように、「聞けば市民参加だ」というのは実質的な市民参加ではないと言われているわけです。したがって実質的に参加するオープンなところで議論する、それは色々なやり方があると思うのです。人数が多いですから無作為抽出と組み合わせてもいいし、そうではなくてそこに色々な地域団体とか市民の声をオープンなところで議論して、それで最終的にはもちろんこれは判断するのは市長ですので、そこで決めるわけではないのですが、大きな方向性を議論するべきじゃないかと申し上げているだけなのです。ただ、今のままですとそれ無しに進められてしまうという恐れがかなりあるというふうに私は考えています。なので是非明記すべきだということです。

【アトキンソン委員】

一ついいですか。

今の話でオープンスペースか再開発か、という話だったのですが、皆さんどうなのか分かりませんが、私はそういうような二者択一ではないというふうに認識しています。オープンスペースの部分も収益性の部分というのはどちらかということではなくて両立する、両輪ができるのではないかとということも探っていくべきものだとすることを私の認識としてコメントをさせていただきたいです。以上です。

【幸田委員】

今アトキンソン委員がおっしゃられたことは否定しません。だからそれをちゃんと議論する必要があるのではないかとということをございます。そういうことですので、お考えを否定しているわけではございません。

【平尾委員長】

あと、幸田委員の方から論点としまして、港湾機能の活用というのが答申の中に入っていないというご指摘がございましたけれども、この点についてご意見はございますでしょうか。

幸田委員のご意見では、港湾機能の維持・活用を明記すべきだというご意見をいただいていますけれども、この点についてはいかがでしょうか。

【坂倉委員】

港湾機能とはどういう意味を指しているのか分からないのですが。ここは物流や港湾の施設をやめようとしているわけで、それは新本牧の方へ全部移そうとしているはずなので、どういふものを残そうとお考えになっているのかが少し理解できません。

【幸田委員】

何をするのかというのはこれから議論することですが、例えば港運協会・ハーバーリゾート協会が提案している国際展示場というのものもあるし、あるいはこの中にも若干意見として出ていますけれども、いわゆるディズニーリゾートの船が岸壁に着いて、そこで楽しむというのもありうると思うのです。

先ほどどなたかおっしゃっておられたように、港湾機能はもうやめて商業地域にするというのはもちろん都市計画審議会にかける必要があるのですけれども、一応私が承知しているのは、臨港地区や保税地域の指定というのは継続するというふうに聞いています。なので、それを明記しないということ、あるいはもうやめるということについてはもちろん議論した上でそれをどうするかというのはあると思うのですけれど、そこはこの委員会で突っ込んで議論はされていないと思います。したがって、現在の機能を維持するという点について、それに反対であれば、そこはしっかり時間を取って議論すべきだというふうに考えます。

【平尾委員長】

港湾機能につきましては、今の幸田委員のご意見を何らかの形でもって反映させて、答申案に盛り込みたいと思います。

それでは、時間が迫っておりますので、事業計画検討委員会につきましては、今回の答申に書き込むかどうかというのは、私はまだその段階ではないのではないかと。先ほど涌井委員がおっしゃったような形で、この委員会の検討事項のレベルではないというふうに思いますので、これは他の形でもって市民参加の形を明示するという形でもって代えさせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【幸田委員】

今の委員長のご意見ですけれども、先ほど申し上げたようにこういった委員会では答申案について示されて意見を出して、事務局がそれはどうかという文案のことがありますので、検討してもう1回この委員会で議論するというのが普通なのです。それで元々11月にこの委員会が設定され、12月の日程も設定されていたわけですが、それはちゃんとこの委員会で委員の間で答申案を議論するためにはもう1回必要じゃないか。だから1月の日程調整もして欲しいというふうに私は4回市の当局に言いました。しかしそれは調整されていないと。今日の委員会の様子を見てということで日程調整する考えかというふうに思っております。

すけれど。それを今日の委員会だけで、今の委員長がお話のようにこういうことに決めるというのは、私は賛成できません。そういった答申のとりまとめには反対します。

【平尾委員長】

ただいま幸田委員の方からこのとりまとめについて事業計画検討委員会を設置するという事まで踏み込んだ答申にすべきだという強いご意見が出ましたけれども、これを議論するためにもう一度委員会を開催すべきだというご提案もございました。

【幸田委員】

元々もう1回やる予定だったのが1回一方的にキャンセルされたわけですよ。

しかも通常の政府の委員会でも自治体のこういった委員会・研究会で1回の答申でそこで全部一任というのは普通ありません。委員会の運営としても不適切であると言わざるを得ません。

これから時間がかかってやっていくことだというご発言もありましたけれど、なぜ今日の委員会で全て打ち切りにするのかという説明をしていただかないといけません。次の予定が決まっているわけではないのです。

【事務局】

事務局でございます。

色々な委員の皆様の大変貴重なご意見・ご議論、ありがとうございます。

今のご議論の内容を踏まえまして、例えば合意形成ではないですけど、こういうふうにしたいというのを決める手段の1つとしまして、本委員会を設置する際に条例で決めているわけですが、条例名「横浜市山下ふ頭再開発検討委員会条例」というものがございまして、その中に第5条第3項というものがございます。その中で、「委員会の議事は出席した委員の過半数をもって決し」というふうな記載がございまして、委員長のご判断にはなりますが、条例に基づき決議をとるということもできますがいかがでしょうか。

【平尾委員長】

それではもう時間もあれですし、ご意見もまだまだ尽きないと思いますけれども、今の市の方からのご提案、もう一度確認したいと思います。

【事務局】

合意形成の手段の一つといたしまして、条例には「委員会の議事は出席をした委員の過半数をもって決し」というふうな記載がございまして、それを使いまして、例えば委員長のご判断によりまして、条例に基づき決議をとるということも可能でございまして。

【平尾委員長】

それでは挙手によって皆様方のご意見をまとめたいと思います。

<傍聴人による不規則発言あり>

【平尾委員長】

どなたですか。
議事進行の妨害はやめてください。

それでは。

【幸田委員】

委員長、よろしいですか。

【平尾委員長】

どなたですか。

【幸田委員】

幸田です。

【平尾委員長】

はいどうぞ。

【幸田委員】

そういうことで、委員長の権限としてあるので多数決をとっていただくのは構わないのですが、その場合にこの答申の中身にこういう意見があったということは必ず明記していただきたいと思うのです。これは色々な政府の審議会とか色々ありますけれども、私が委員として参加した元総務大臣の増田寛也氏が委員長であった所有者不明土地問題研究会というのは、国の経済財政諮問会議、そして骨太方針でも研究会の名称が明記された重要な委員会でした。しかし、この所有者不明土地研究会報告書では、1人の委員の少数意見も必ずこういう意見があったと明記されています。したがって、山下ふ頭のこの答申では、この箇所にはこういう意見が、私の意見が仮に少数意見だった場合には、その発言は明記していただきたいということを申し上げておきたい。

【平尾委員長】

はい。

それでは、横浜市山下ふ頭再開発検討委員会条例の第5条第3項に基づきまして、幸田委員からご提案のあった事業計画検討委員会の設置を答申に記載すべきかどうかにつきまして、皆様の決をとりたいと思います。記載が必要だという方は挙手をお願いいたします。

(挙手1名)

【平尾委員長】

よろしいでしょうか。

皆様ありがとうございます。

それでは当該部分の記載につきましては、委員の皆様方の決を踏まえて、現在の答申案のままとさせていただきます。ご了承お願いいたします。

では、時間がちょうど4時になりましたけれども、意見交換の場をこれで終わらせていただきたいと思います。最後に一言ご挨拶させていただきたいと思います。

本日は、皆様活発なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。また、ご意見をいただけましたことにつきまして感謝申し上げます。私は途中から寺島委員長の後任として就任させていただきましたが、議論のとりまとめや委員会の運営について不慣れな点が多くございまして、ご迷惑をおかけしたことをお詫びしたいと思いますが、同時にこのような答申がまとまったことにつきまして皆様方のご協力とご理解に重ねて御礼申し上げます。

本日ご議論いただきましたとおり、私の方に今後の答申につきましてはまとめさせていただきますので、本日が最終の委員会となり、今後、答申案をとりまとめまして、責任をもって私の方から市の方へ提出させていただきたいと思います。

委員会におきまして、各分野の皆様から貴重なご意見をいただきまして、この答申では、まちづくりの大きな方向性を示すことに主眼を置き、取りまとめをさせていただきました。その役割は果たしたかと思えます。

その再開発のコンセプトも、今日ご説明しました3つの柱を議論に踏まえて、これから市の方で具体的に再開発の実施計画に向かって進めていただきたいと思いますが、市民の山下ふ頭に対する強い関心と高い期待、この思いに市の方で応えていただきまして、市民にとって豊かな山下ふ頭の再開発の計画が進捗することを期待したいと思います。

山下ふ頭は東京湾あるいは日本全体にとりましても、あるいは横浜市にとりましても、クラウンジュエル、クラウンジュエルというのは王冠の輝きを待つ宝石のことですけれども、まさに山下ふ頭は横浜の、日本のクラウンジュエルとして今後、今回まとめていただきました方向で具体的な事業計画が展開されることを期待したいと考えております。

以上、私の挨拶とさせていただきます。本日は大変長時間、ありがとうございました。

【事務局】

本日はお忙しい中、長時間にわたり意見交換いただき誠にありがとうございました。

最後に、閉会にあたりまして港湾局長の新保より、ご挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

【事務局】

港湾局長の新保でございます。

本日は大変長い時間にわたしまして、ご議論いただき誠にありがとうございました。平尾委

員長を始め、学識者委員の皆様、そして地元の関係者の団体の皆様、本当にありがとうございました。答申案の中でもご教示いただきましたが、示すべき3つの柱は、山下ふ頭の優れた立地や広大な開発空間を活かしていく大きな方向性を示していただいております。その実現に向けて今から身の引き締まる思いでございます。

今回の答申に基づきまして、我々港湾局含めて横浜市全庁を挙げて検討をしっかりと進めさせていただきたいというふうに思っております。今日後段での議論、色々ありましたが、この答申の最終ページにも引き続き多様な意見を問うプロセスを得ることが望ましいというご意見、答申の中でもいただきましたので、こういったことを踏まえながらやり方についてはしっかりと考えていきたいと思っております。

また、幸田先生から先ほどありましたご意見をしっかりと残せというようなところもしっかり対応させていただきたいというふうに思っておりますのでよろしくお願ひします。

最後になりますが、昨年の8月から1年以上にかけてご議論いただきまして本当にありがとうございました。しっかりと我々取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は誠にありがとうございました。

【事務局】

ありがとうございました。

なお、答申の提出に関する日程等につきましては、後日お知らせいたします。

以上をもちまして、閉会させていただきます。ありがとうございました。